
魔法少女リリカルなのはStrikerS ～夜天に舞い踊る荒鷲～

えのき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 夜天に舞い踊る荒鷲

【Nコード】

N5118U

【作者名】

えのき

【あらすじ】

自由奔放な魔導士、アルフィリオス・ラーゼンハルグはかつての後輩、八神はやてが設立した機動六課に出向する事となる

彼が巻き起こす（悪）影響はどれほどのものか
それは貴方の目で確かめてください

はじまり（前書き）

どうも、えのきです

処女作ではありませんがよろしく願います

はじまり

彼はかつて言った

「お前がやりたいって決めたならそれで良いじゃないか」

それは一人の少女の夢を後押しする言葉

「いつでも呼べよ、何処へだろうと直ぐに駆けつけるからよ」

その約束は今、果たされる…

「さて行きますか…まあ、なんとかなるっしょ」

新たに設立された部隊《機動六課》

そこに出向する二人の魔導士

「俺はアルフィリオス、アルさんって呼んでくれや」

自由奔放な先輩魔導士：アルフィリオス・ラーゼンハルグ

「貴方の尻拭いはいつも僕がしているんですが…って聞いてんですか！？アルさん！！」

苦勞性の部下：レキ・アーベント

彼らは機動六課とともにどのような日々を送るのか

それはまだこれからのお話し

魔法少女リリカルなのはStrikers～夜天に舞い踊る荒鷲～

EP01：行こうぜ！機動六課！！にテイクオフ

キャラ説明（前書き）

少し修正しました

キャラ説明

名前：アルフィリオス・ラーゼンハルグ

年齢：21歳

身長：179?

体重：69?

性別：男

イメージCV：三木眞一郎

髪の色：赤、毛先のみ白

髪の長さ：背中の中間くらい（首もとで束ねている）

目の色：緑色

性格：自由奔放で意地悪好き、面倒見や人柄が良い

魔力ランク：総合AAランク（リミッター時はBランク）

魔力光：赤

ポジション：フロントアタッカー

階級：一等陸尉

趣味：昼寝、サボり、ハーモニカの演奏

好きな事：自由、安眠、楽器演奏

嫌いな事：束縛、減給、騒音

詳細：陸士108番隊に所属していた魔導士

はやてが捜査官をしていた時に知り合いになり以後、先輩として彼女に接する

その他にも様々な交友関係がある

機動六課、設立時には上司であるゲンヤ・ナカジマの命により出向する事となり直属の部下レキ・アーベントと共に出向

普段はロングアーチ7だが作戦の場合でコールサインが変更される縛られる事が苦手なためデスクワークはほとんどせずにスターズ副隊長ヴィータに追いかけて回されている

サボりに居眠りの常習犯だが戦闘においては愛機「イーグルレイダー」を携えて先陣を切る

その勇ましき姿から管理局では『荒鷲』『昼行灯』『戦闘狂』と呼ばび名が様々にある

過去の経歴が曖昧で本人はあまり語る事が無くまた資料もない

また髪の毛先のみ白いのは遺伝的特徴らしい

デバイス名：イーグルレイダー

種類：インテリジェントデバイス

リミッター：有り

待機状態：ネックレス

戦闘状態：複合機関銃（スーパーロボット大戦OGサーガのナイトファウル）

カートリッジ：リボルバータイプ
電子音声：女性

詳細

多種多様を目的として設計したデバイス
大型のマシガンに銃口の下には杭打ち器^{ステーキ}を搭載、更に仕込み刃^{リッパー}を
搭載している

カートリッジシステムを二つ搭載していると言う唯一無二のデバイス
理由はステーキを使用するのに爆発的な力が必要でステーキ用の力
ートリッジ、魔法強化用のカートリッジがある

威力を追求した結果、形態を変える事を破棄しリッパーやステーキ
は手動で展開をする

またアルフィリオスが六課出向時に所持していたイーグルレイダー
は複製品で本体はフレームとカートリッジ増強のため本局に預けて
ある

多種多様に使用できるがピーキー過ぎる性能とステーキの反動によ
る人体の負荷が問題となっているため企画は凍結している
試作品のテスターをしているアルフィリオスはそのまま自身のデバ
イスとして使用している
アルフィリオスにステーキの反動の影響が無いことに技術者は頭を
悩ませているらしい

A・EP：七夕（前編）（前書き）

季節のイベントが近いためにやってみました
今回はアルフィリオス×はやてです

イチヤイチヤを上手く表現してみたいです

A・EP：七夕（前編）

「先輩、私と星を見にいかへんか？」

それははやてから唐突に言われた事だった…

アナザー

AEP：七夕（前編）

いつもの朝食の時間、はやてがいきなり星を見に行こうと誘いをしてくるあまりにも唐突なので俺は全く理解出来ずにはやてに聞き返す

「急になんだ？星なら夜になれば見れるだろうが…わざわざ見に行く必要はあるのか？」

「ただの星ちゃうんよ天の川っていう、星の川や

今日は私の故郷で七夕っていう行事なんや」

疑いの視線を向けている俺にはやては人差し指を立てて理由を説明していく

行事ねえ…地球だっけか？いろんな行事があるもんだな…下手すれば一年中行事で埋まるんじゃないか？

陸士108番隊ではやてと一緒にいた時になんとなく聞いた事があるがはやての世界は本当に行事が多いと思う
嫌いではないけどな

でも考えて見ればサボれる口実になるんじゃないか？なるよな、な
っちゃうよな！？

「うつしならいつちよ行きますか！
俺、星が大好きだからな！！」

「あからさまな態度は怪しいんやで？

先輩、どうせ仕事をサバれると思つとるんやろ…そうは問屋が降ろさへんわ

帰ってきたらデスクワークの時間、先輩だけ延長やからな」

「なあにい！？」

チクショウ、一度持ち上げてから頂上付近で蹴り落とすはやて…ずいぶんと鬼畜なやり方じゃないか…

待てよ…今から断れば延長はなくなるんじゃねえか？

「はやて、やつぱり」ちなみに今から断ると更に倍になるけど…
何でもないです」

俺の最後の希望は打ち砕かれた…

デスクワーク倍とがあり得ませんって先生……ん？先生って誰だ？

テーブルに頭をつけながら落ち込む俺を無視して一人食事を済ませるはやて

俺はふと疑問に思つた事があり顔を起こしてはやてを見る

「七タつてのは何処でやるんだ？

ミッドチルダに星が見えるところなんてないだろ？」

「そんなん、地球の行事なんやから地球に行くに決まつとるやろ」
「はい？」

はやては何いつてんだコイツみたいな目をしながら言ってくる
仕方ないだろ？七夕って行事ははじめて聞いたんだからな

まあ…その後はあれよあれよという間に俺たちは…

「よつし！到着や！海鳴市！！」

はやての故郷である海鳴市に到着した、はやてせめて私は帰ってき
たくらい言えば良いんじゃないか、全くそれくらい面白味を出せよ
な…すまん、余計な事を言いました、だから無言で夜天の書を出す
のは勘弁して下さい

にしても出張任務で一度来たが遊びで来るとまた違った感じがして
いいな

ちなみにメンバーは俺とはやてのみ

「本当に俺らだけで良かったのか？なのは達もっふうっ！？」

「ぐちゃぐちゃ言つとらんで先輩は私についてきたらええねん！」

はやてに質問を投げ掛けると凄まじいボディブローを打ち込まれる
はやては何故か顔を赤くして早口で言う就先に歩いて言ってしまう
俺はよろけながらもはやての後についていくしかし何処へいく気だ
？聞くと殴られそうだけど聞いてみるか…

「何処に向かってるか聞いても良いか？差し支えなければだけど」

「まだ時間があるから散歩がてら買い物しようかと思っんやけど…ええかな？」

「良いんじゃないか、ついでに前は出来なかった市内散策も頼んでもいいか？」

「ありがとうな、先輩
なら市内散策も兼ねてまわろうか」

俺に話しかけられるとはやては自分の腕時計をさしながら時間があると答えると少しだけ不安気に俺に問いかけてくる

それを見て微笑を浮かべながら俺は了承すると、はやての頭を軽く撫でてから歩きだす

頭を撫でられたのが嬉しいのか、はやては笑みを浮かべながら俺に並ぶように歩くと俺の腕に自分の腕を絡ませてくる

「せっかく付き合ってくれるんやからこれくらいのサービスはせんとな」

「そういう台詞はフェイト並みのスタイルになってから言っんだな」

「ごめんな…貧相なスタイルで…」

「いや俺も言い過ぎた…だからそれ以上つねらないでくれ、千切れる…」

腕を絡めてきた直後にはやてが機嫌良く言ってきたので少しばかり皮肉気味に答えると、はやては空いてる手でギリギリと腹の肉をつ

ねりはじめる

笑顔でいるわりにはその力は凄まじいものだった、はやてに対してスタイルは禁句だな…

商店街まで出てきたが出張で来たときより変わっていた
どこの店にも笹や星が飾られていた
これが七夕という日なんだろうか？

「先輩、どないしたん？」

「いや、七夕ってのは笹がメインなのかと思ってな」

「ああ、それは願い事を叶える札を飾るためや
私は願掛けやと思ってるんやけどな」

はやての言葉に思わず首を傾げてしまう何故、願い事を笹に飾るの
だろうと…

はやてに聞いても良かったのだがあまり聞くのも迷惑だと思いやめ
ておく事にした

商店街を歩いているとはやてはブティックの前で立ち止まり何かを
見はじめる

「どうかしたか？…はやて？」

「これ…先輩に似合うやないかと思って…」
俺が質問をするとはやては一枚のＴシャツを取り出して俺に見せて

くる

それは全体的に笹がプリントされたＴシャツだった、そして商品名は七夕限定「笹Ｔシャツ」と書かれていた

「俺はパンダか何かかよ…そして何故、俺に似合うと思ったんだ？」

「あたたたっ！？痛い！痛い！！」

結構食い込んどる、指が、指が！頭に！？」

Ｔシャツを見せつけてくるはやてに満面の笑みを浮かべてから頭を掴むとジワジワと指に力を込めていく俗に言うアイアンクローだ

はやては俺のアイアンクローに耐えきれずに痛がり、何とか離そうと抵抗するが力の差があるためそのまま締められていた

少しだけ気の毒になり離すとはやては少し涙目になりながら俺を睨んでいた

「痛かったで…先輩…」

「変なもんを薦めるからだよ…まあ後がのこんねえ様にしたから勘弁してくれや」

恨めしそうに睨み付けるはやての頭に手を乗せて優しく笑みを浮かべる

はやてはその笑みに何も言えずに黙っているしかなかった

「さてと、これからどうするか…まだ時間あるよな…」

「せやな一応、一通りは回ったからなあ…何処かへ行くにしてもち
いとばかり時間が足らへんしな」

ある程度回り終えると俺は時間を見てからはやてにこれからの事を
伺う

この海鳴市に来たのは昼過ぎで今はようやく日没になったところだ、
街の中で時間は経つものだと考えたが意外とたつて無いことに驚く
はやても予想外だったらしく顎に手を当てて考え込んでいる
俺としては少しダラダラできる場所なら何処でも良いんだがな…

「そや、ここならアソコが近いな
先輩、ちよつと休憩しに行こか」

「どこだよ、ファミレスか何かか？」

「ええとこや、ほな歩いた歩いた！」

面倒そうに突っ立っている俺の背後に回ればはやては背中を押して
俺の身体を前へと移動させていく

さてさて、いったい何処にいくのやら…

A・E・P：七夕（前編）（後書き）

どうも、えのきです

七夕（前編）はどうでした？

デート描写は得意でないので意見が聞きたいです

これの感想などを糧にして後編に移りたいと思います

本編を待たれてる方はもう少しお待ちください

それでは！

A・E・P：七夕（後編）（前書き）

ようやく書き上がりました！七夕小説、ではお楽しみ下さい

最後に発表があるので見ていただければ嬉しいです

A・EP：七夕（後編）

星を見に行きたい、その言葉とともに俺ことアルフィリオス・ラーゼンハルグは後輩八神はやてと第97管理世界地球へとやってきたなんでも地球じゃ七夕という行事だという街中が笹フイーバーな感じを楽しみつつ散策するも時間が微妙に余ってしまった

それではやてが行きたい所があるという事で俺ははやてに先導をして貰ってる

「…ってのが前回のあらすじだな」

「先輩…何、独り言を言ってるんですか？」

「いやな…もしも前回の事が忘れがちな場合はこれを見れば一目瞭然つてのをヤツをしたかったただだ、だからその痛い人を見る目はやめろ」

明らかに目を細めながら怪しむはやてに俺は説明をしながら手をヒラヒラと動かす

それでもはやては疑いの眼差しをやめないなので俺は話を変える事にした

「そっぴや、目的地にはまだつかないのか？
なんも教えてくれないしよ、何処にいくくらい教えてくれよ」

「先輩はせつかちやな、もう少しやであつ、あつたあそこや」

歩きだしてから雑談はするものの、はやては俺に目的地の情報は全くくれなかった

俺の問いかけにははやては微笑を浮かべながら答えると一つの店を指でさした

うん…漢字で書いてあるからなんて読むのかわかりません…

外装から見て喫茶店か？

「喫茶店…だよな？」

「せや、ここはなのはちゃんの実家の喫茶店、その名も翠屋っていうんよ

ケーキとか凄く美味しいやで」

ケーキだと、はやて…いじめか？

俺がケーキあまり好きじゃないって事を知っててここを選んだんだろ…意地の悪い奴になりやがって

「先輩…一応甘さ控えめなのもあるからいじけないでくれると嬉しいんやけど…」

大の男が店先で地面にのの字を書いているのは非常に目立つんやから」

「つーん…知りませーん」

「……ていや!!」

「のんぶっ!？」

甘いものと聞いていじけている俺にはやては困ったように説得をしてくる

俺が聞く耳を持たないのでいるとはやては俺の頭にチョップを降りおろす

勢いをつけた一撃は綺麗に俺の頭に入った正直に言えば意識が飛ぶかと思う

「まだ言うようならもう一発いくで？」

「わかった、入るから…最近のお前らは実力行使する事が多くなつてないか？」

「先輩がそれくらいいしないと聞き入れてくれないという判断や嫌ならちゃんと聞いてな？」

「ハア…出来るだけ聞き入れるさ…」

痛がる俺を見ながらはやては手刀を作っていつてくる

俺がため息まじりに返すとうんうんと自分で納得してはやては答えるさすがに殴られ過ぎて頭を割られたくないから少しだけ気をつけるかな…何日持つかわからんけどな

喫茶翠屋の中に入ると二人の女性が雑談をしていた

一人は若めでなのはと少し似ている雰囲気を持つ人ともう一人は金髪でショートカットで…あれ？コイツどこかで見たような…あつ！

「その後ろ姿…アリサか？」

「ん？…はやてに…アル、フィリオス？」

なんでコイツ俺の名前をそんなに言いにくそうに言うんだ？
言いづらいからか？長いからか？

「どっちもよ、長いし言いづらいのよ、アンタの名前は」

「お前は読心術持ちか！？心の声に反応すんなよ！」

「先輩、普通に口に出てたで？」

おう！？マジか…

にしてもアリサがいたのには驚いた…

まあなのは達の親友だから来てもおかしくは無いか…

アリサとは出張任務の時に出会ったんだよな、宿泊施設を提供して
貰ったのを覚えてる

「それで、はやてはわかるけどアルフィリオスはなんでこっちに来てんのよ」

「ずいぶんと雑な言い方するな…俺は今日、こっちで七夕って行事があるからはやてに一緒に行かないかと誘われたんだよ」

年上っていう事を気にしないようにアリサは言ってくる…まあ初対面の時に好きに話せて言っただけなのは俺だけだな

俺の説明を受けてアリサはとても驚いた顔をしていた、なんだよ？七夕って星を見る行事じゃないのか？

「ちょっと、はやて！少し顔を貸しなさい！！」

「アリサちゃん？ちよつ、待ちや！？」

アリサがはやてを連れて奥のテーブルに移動してしまう…取り残された俺は仕方なくアリサが座ってた隣の席につく

「貴方もはやてちゃんやなのは知り合いなのかしら？」

「あ、すみません…申し遅れました、機動六課のアルフィリオス・ラーゼンハルグです、はやてやなのは同僚と考えてください」

「気にしないでいいわ、私は高町桃子…なのはの母です」

目の前にいたウェイトレスさんが俺に質問を投げ掛けてきた出張任務の時には挨拶する暇なんてなかったんだよな

目の前のウェイトレスさんに自己紹介をするとやんわりと笑って返してくれた

「つてちよつと待てい…今なんて言った？」

母？なのはの？ワッツハプン！？」

状況をいまいち理解できていない俺はただ驚く事しかなかった

「はやて…とりあえず一つ聞いてもいい？」

アルフィリオスから離れた席でアリサははやてに問いかける
はやてはと言うと凄く気まずそうにしながら頷く、アリサはそれを

見てため息を一つもらす

「海鳴市の七夕のジंकス…知らないわけじゃないでしょうね？」

「七夕の夜に一緒に同じ願い事をした二人は幸せになれるやろ？もちろん、知つとるで」

「ならアルフィリオスにはなんで話して無いの？
アイツ、只の天体観測としか思っていないのよ」

はやての返答にアリサはテーブルから身を乗り出して聞く
大切な親友が男と二人でいるアリサには心配でならなかった
それに対してはやては特に気にする事も無いようにするとゆっくりと語り出す

「私は先輩と幸せになろうと思って来た訳じゃないんや…少し先輩に恩返しできたらええかなって思ってきたんや」

「恩返し？アルフィリオスに？」

「そうや、先輩は管理局に入局した当初から何かと世話を焼いてくれたり、私の事を知っても受け入れてくれた人なんよ…」

そんな先輩が私に言ってきたんや、星が見えるところを知らないかって」

「だから今回誘ったって訳？」

はやてはアルフィリオスを連れてきた理由をアリサに語っていく
理由を聞いたアリサは真剣な眼差しで聞くとはやてはゆっくりと頷く

「はやてがなんの考えも無しに連れてきたならやめさせるけどそんな訳があるなら、引き留めるのは野暮ね…」

「アリサちゃん…」

「彼氏がないあたしが言うのもなんだけど、はやての行動でアルフィリオスも意識はしてると思うわ…まああんなちゃんぽらんを好きになったはやてには好都合ね…」

「ア、アリサちゃん！？何をいうとるん！！私は別に…」

頬杖についてつまらなそうにするアリサに微笑を浮かべるはやて

アリサははやての方を向くと人差し指をさして言い、やれやれと言った感じに肩をすくめるとはやては少し頬を染めながら慌ててアリサに言葉を放つ

「あんだねえ…二人っきりで出かけておいて意識の一つもしないのはおかしいわよ？」

はやての本心まではわからないけど、只の恩返しにしては手が込んでると思うわよ？」

「そうやるのか？」

「なににせよ、頑張りなさいよ？あともしアイツが何かしたら言いなさい、星に変えてやるから」

アリサは立ち上がり、考え込むはやての肩を叩くと応援をしていき、アルフィリオスを見ながら拳を作って星に言うと言つと外に出ていくはやてはその姿を見送ってから礼を思うとアルフィリオスの元に戻っていく

アルフィリオスはカウンターで腕組みをしながら何かを考えていた
はやては不思議に思い恐る恐る聞いてみる事にした

「先輩？どうかしたんですか？」

「はやてか…少し高町家の謎を考えてただけだ…」

「はい？」

考え込むアルフィリオスはそれだけを言うとまた考え始めた、はやては意味がわからずにただ首を傾げた

考えているアルフィリオスを翠屋からなんとか出すことが出来たは
やてはアルフィリオスを連れて街にある広場にやってきた

そこではとても大きな笹がいくつも置かれており人々がそれぞれに
笹に短冊をつけていた

「へえ…結構きてるんだな…」

「まあ市内での行事やからな、先輩も短冊を吊るすやろ？」

「短冊？…あああの紙か…そうだな、どこで貰えんだろう？」

先程まで考え事をしていたアルフィリオスは目の前に広がる光景を
見て驚きの声を上げる

はやては微笑を浮かべながら説明をすると短冊はどうするかと質問を投げ掛ける

短冊という単語を聞いてアルフィリオスは皆が吊るしてる紙を見てから何処で配布されているのか探すために辺りを見回す

「今、とつてきたで…先輩の分」

「ありがとうな、なんて書こうかな…」

紙とペンを渡されたアルフィリオスはじつと紙を見つめながら唸る、はやてはと言うと特に迷う事も無く短冊に書き綴っていく

「自分がしたいことを書けばええんや、そこまで難しく考えんでもええと思うで」

直ぐに願いをかける事に関心しているアルフィリオスにはやては短冊を見ながらアドバイスを言う

それを聞いてアルフィリオスはペンを持ち直して短冊に書き始める書き終えた短冊を見てアルフィリオスは満足そうに見るとはやてに視線を向ける

「はやては何を短冊に書いたんだ？」

「えっ!?!…その…内緒や、どうしても知りたかったら先輩の教えてや…」

アルフィリオスからの質問にはやては驚くと手に持った短冊に自分の後ろに隠してから思いついた様にアルフィリオスに提案をしてくる

「俺のか？別に構わないけど…改めて言うのは恥ずかしいけど次の七夕もはやてと来れるように、だ」

「……………」

「どうした？いきなり黙って」

「な、なんでもない！」

さてと短冊を吊るしに行こか」

短冊の内容を聞かれるとアルフィリオスは苦笑をしながら書いた内容を話すとはやては驚いた表情をしていた

不思議そうにはやてに問いかけるとまるでごまかすかのように言々と足早に笹の方に歩いて行ってしまふ

「教えてくれないのかよ…」

残されたアルフィリオスはただそれだけを呟いた

—

S i D E : はやて

私は先輩から見えない位置まで来ると頬に手を当てた、凄く熱い…多分鏡を見れば真っ赤なのは間違いないはずや、だって…

（同じやった…私と先輩の願い事…）

私の手には短冊がありそこには《来年も先輩と七夕に来れますよう》と書かれていた

先輩は私と来たことが嫌でなかった…それだけで私は凄く嬉しかった

「ここでええかな？来年も先輩と来れますように」

近くにあった笹に短冊を吊るすと私は改めて願い事をする先輩の所に戻る

なんで短冊の内容を覚えてくれなかったんだと言われたけど先輩は対して気にしてはいなかった

「先輩、少しええかな？」

「どうした、改まって構わないから話せよ」

「来年も一緒に来ような、七夕」

「…ああ良いぜ、約束だ」

ミッドチルダに帰る前に私は先輩に話しかける先輩は少し不思議そうにしていたが了承してくれた

私は先輩に来年、また一緒に来たいと言うと先輩は笑いながらOKしてくれた

私はあの人の隣にずっといたい
この気持ちはまだ恋なのかわからないけどお願いしてもええよね？

先輩…

おまけ

「……おかえりなさい」……

海鳴市から帰ってきたアルフィリオスにその言葉はかけられた
声をかけてきたのはなのは、フェイト、ヴィータ、シグナムであった

「アルさん、今まで何処に行ってたのかな？」

「えっと…地球の方に…行っていました」

なのはが笑顔を浮かべながら質問をしてくるしかしその背後にはド
ス黒いオーラが出ていた

四人の威圧によりアルフィリオスは正座をして答える

「ほう、地球にか…」

「休暇届が出てないのに姿が見えないから心配してたんだけど
思いすごしだったみたいだね」

フェイト、シグナムが絶対零度に近い視線でアルフィリオスを睨み
付ける

ヴィータはと言うと無言でグラーファイゼンで素振りを行っている

（完全に殺る気だ！）「ちょっと待て、休暇届ははやてが出すからって言ってたんだ出てないのがおかし、い……オイコラ……はやて、こっちを見る」

アルフィリオスは背筋が冷たくなるのを感じて慌てて弁解をしてはやてを見る

はやては何故かアルフィリオスから視線をそらして別な方をむいていた

「はやて、お前……言つたよな？」

休暇届は私が出しとくからな、ってなんで出てないんだよ！？
後、そのペコちゃんみたいな顔をやめろ！忘れてたんだな？
そうだろ！！頼むから答えてくれ、俺の生死に関わるから」

アルフィリオスははやての肩を掴んで自分の方に向けるはやては視線だけを違う方にむけて舌を出していた

そしてアルフィリオスのツツコミで視線をアルフィリオスに向けて

「先輩……ごめん！」

チョップをするように手を前に出して謝ったアルフィリオスが文句を言おうとした時に彼の肩に手が置かれる

「主ははやての不手際なら仕方ないが皆に迷惑をかけたのは事実……仕置きが必要だな」

「せめて9割9分殺しで勘弁してやる……」

（それは死んでるのとかわりませんけど！？）

手を置いたシグナムとグラーフアイゼンを構えているヴィータにアルフィリオスはツツコミを入れるがそれで何が、変わるわけでもなくアルフィリオスは四人の処刑執行人に引きずられ訓練スペースに連行された

余談だが深夜、機動六課で凄まじい爆撃音と断末魔が響き翌朝訓練スペースにて人の形をしたボロ雑巾が見つかったという

A・EP：七夕（後編）（後書き）

どうも、えのきです

見ていただきありがとうございます！

あまり構想がまとまらなくて苦労しました

それとこの小説のPV数1万を越えました！

たかが1万で、と言われるかもしれませんが嬉しいものです

それで記念小説を書こうと思っています

記念小説は見てくれた方々のリクエストで製作していこうと思います

良かったらリクエストしてください、感想でも活動報告でも構いません

それでは本編の更新をお楽しみ！
では

EP01：行こうぜ！機動六課！！（前書き）

さて始動を開始しましたえのき小説です

楽しんでくれたら良いと思います

EP01：行こうぜ！機動六課！！

時空管理局 陸士108番隊

時空管理局の一つで地上を守る部隊の隊舎、隊員がただひたすら事務作業に没頭するなかその男はいた椅子に管理局の制服をかけてもたれ掛かるように寝ている、誰が見てもサボりだ

顔は被せられたアイマスクで目元ははつきりとしなが顔つきは普通より細めで椅子の背より長い髪は一つに束ねていた、しかし髪は普通とは違っていて全体的な色合いは赤なのだが毛先のみ白だった
周りの隊員が全員、気にもとめて無いのは彼に注意することが無意味だからだとわかってるからである

青年が干渉されずに眠り続けていると一人の少女が青年に近づく

「アルさん？」

アルさん！アルフィリオス・ラーゼンハルグ、一等陸尉！！」

青いロングヘヤーの少女は青年、アルフィリオスに声をかけるが全く相手にされず何度か呼びかけても反応がないため
最終手段としてアルフィリオスのアイマスクを取ると彼の鼻をキュッと摘まむ

「ふが……ふご……えっふあっ！？」

息が上手く出来ないのか妙な奇声を上げるアルフィリオス、そして口から思いつきり息を吐くと目を開けて鼻を摘まむ少女に恨めしそ

うに視線を向ける

「…っ！ギンガ…もう少しマシな起こし方はねえのか？
お兄さん、息がつまりますよって」

「だったら早く起きてください、お父さんじゃなかったナカジマ三
佐がアルさんと呼んでるんですよ？」

文句を言いながらアルフィリオスは目の前の少女、ギンガ・ナカジ
マを見るとギンガは腰に手を当てて、ため息をつくとアルフィリオ
スに用件を伝える

首をひねっていたアルフィリオスは不思議そうにギンガに目を向け
て口を開く

「ゲンヤさんが？なんか用事でもあったか…この前の昼のツケは返
したし…昨日の事件の処理はレキに任せたから大丈夫…
どうしてだ？俺は何かしたか？」

指折りにアルフィリオスは数えていくと不思議そうにギンガにアル
フィリオスは質問を投げ掛ける

「むしろ、今…仕事サボってた件で呼ばれるって考えないんですか
？」

「ゲンヤさんが俺のサボりに一々口なんか出すかよ、そんな無駄な
事…」

（（（なら直せよ！）））

その時、ギンガ含めて陸士108番隊の意識は一つになったとかならなかったか…

「…って考えてる暇があるなら早く行って下さい！いつまで待たせる気なんですか！！」

「待て…ここまで出てるんだ、後一時間くらい…すみません…今いきます」

ため息をついているとギンガはふと我に返るとアルフィリオスに急ぐ様に促すと、アルフィリオスは手を前に出してから喉元に指でさしながら説明をする

ギンガはゆっくりと左手を上げて握り拳を作ってから笑顔を向ける素直にアルフィリオスは頭を下げるとギンガの父、ゲンヤ・ナカジマのいる部隊長室に向かう

「しかしまあ…何を言われんだか…」

部屋前に止まるとインターホンを押してから入室をする

「ようやく、来たか

また寝てたんじゃないか？お前さんは」

「ご明察！話しがわかるぜ、さっすがゲンヤさん！！」

アルフィリオスの顔を見て壮年の男性、ゲンヤ・ナカジマはため息混じりに言々とアルフィリオスはウインクをして腰に手を当てて、人差し指をゲンヤに向けると愉快的声を上げる

「そこはあんまり嬉しくは無いんだがな…まあお前さんと呼んだのには訳があるんだ…」

「また事件を解決しろって奴ですかい？それとも出張？出来れば後者が嬉しいんですがね」

「残念だがどちらも違う、お前さんにはある部隊に出向してもらいたいんだ」

ゲンヤの呼び出しの内容にアルフィリオスは指を二つ立てて言うから、二つの指の内的一本を動かして聞くとゲンヤは二つの意見に首を振るとアルフィリオスに出向をしると頼んでくる

「なっ！…なんだって！！」

アルフィリオスは真剣な声を上げてからよろよろと座り込むとさめざめと泣き出す

「酷いぜ、ゲンヤさん俺にサボり癖があるのはわかるけどお払い箱なんて無いでしょ！！」

アレですか？昼飯の金を踏み倒した事が原因ですか？

それともこの前にギンガと食事に出かけた事を根に持ってたんですか？

アレは俺の財布が食いつくされるという最悪の結果だったんですよ

！！」

「ギンガとの食事については後で聞くとしてお前さん、何を勘違いしてんだ？

別に俺はお払い箱なんて言ってるねえぞ」

涙を浮かべながらゲンヤに意見を述べていくとまるでこの世の終わりのような叫びを上げるアルフィリオス

ゲンヤはやれやれとため息をつくとアルフィリオスに事情を説明しはじめる

「お前さんは八神の事を覚えてるか？」

「当たり前じゃないですか、後輩の名前くらい覚えてますから、んではやてがどうかしたんですか？」

「ハア…今度設立される部隊、つまりお前さんが出向する部隊の隊長をやってるそうだ

新設の部隊じゃいろいろと戦力にバラツキがある、そこで」

「俺を送ると？荷物ですか？俺は…」

未だに話しの理解が遅いアルフィリオスにゲンヤはため息をまた吐くと、指をアルフィリオスに向けるとアルフィリオスは、乾いた笑みを浮かべて答える

「ああそうだ、性格に難があるうがサボリ癖があるうが、今の八神の部隊には戦力が必要だろうと思ってな」

「アレ？誉められてんの？全然嬉しくないんですけど…」

首を傾げてから肩を落としてアルフィリオスは言つと直ぐに顔を上げる

「まあ落ち込んでいてもしゃあねえな…なんとかなるっしょ

それとゲンヤさん、一つ頼みが」

「珍しいな、どうした？」

「出向の際に一人連れていきたい奴がいるんですけど良いっすか？」

アルフィリオスのあまりない頼み事にゲンヤは驚きを隠せずに返すとアルフィリオスはもう一人連れていっても良いかと提案をしてきた

「まあ一人分くらいなら大丈夫だが誰を連れてく気だ？ギンガか？」

「ギンガはこの隊に必要でしょ？」

俺が連れてくのは可愛い部下ですよ」

ゲンヤの問いにアルフィリオスは手をパタパタと振りながら答えると笑みを浮かべる、しかしそれは悪どい笑みだったという

陸士108番隊 食堂

「ホントにアルさんには苦勞させられるわ…レキ君もそう思うですよ？」

食堂で少し疲れたように食事を取っているギンガは目の前にいる黒い髪の少年に問いかける

「僕は慣れましたね、あの人の自由っぷりを見ていたら…真面目に

すればちゃんと出来るんですがね」

「それは私もわかるんだけどね…」

黒髪の少年、レキ・アーベントはまだ幼さが見える少年だがその意見はとても達観したものだった

本人曰くアルさんに付き合ってたら精神的に老け込んだとの事らしい

レキの意見にギンガは食事の手を止めて同意する

彼女はこれまで何度かアルフィリオスと模擬戦をしたのだが、大抵は彼が逃避するか良いようにあしらわれて終るというのがほとんどだった

それは彼女が弱い訳では無くアルフィリオスが相手の戦意を無くす事に長けているからである

しかしそんな彼でも犯罪者が相手となれば率先して先陣を切って戦いさらに、面倒見や人柄が良いため陸士108番隊では彼に呆れる事はあっても嫌うものはいないという

レキやギンガも同じだった、しかし普段の態度はどうしても改善して欲しいため注意をするが聞き流されてると言う

「おっ！　いたいた、レキちゃん、ちょっと良いか？」

「…僕はレキです、ちゃん付けは止めて下さい」

二人がアルフィリオスの話しをしているとその本人が遠くからレキの名前を呼びながら近づいてくる

レキはため息混じりに返すとアルフィリオスの方に視線を向ける

「悪かったってそんなに目くじらをたてるなよ…」

「お父さんからの話しは終わったんですか？」

自分を睨み付けるレキにアルフィリオスは苦笑しながら謝るとギンガがちゃん行ったか確認をしてくる

「ああ…まあな」

「今度は何をやらかしたんですか？」

「酷い言い方をするな…ギンガとのデートがバレただけだ」

睨み付ける視線をアルフィリオスに浴びせながらレキは質問をする
とアルフィリオスは口を尖らせながら返すと食堂全体の空気が冷た
くなった

「な…何を言ってますか！？」

デートじゃなくてアルさんがお昼を奢ってくれただけでしょ！
なんでデートになってるんですか！？」

冷めた空気の中でギンガが顔を赤くし慌てて否定をしてから事実を
説明する、アルフィリオスはしてやったりと意地悪い笑みを浮かべ
ていた

「人の財布の中身を食い尽くす程に食べた仕返しだ…まあ本当は新
設された部隊に出向することになったんだよ」

「新設された部隊？アルさんも大変ですね」

「ちょっと！無視しないで下さい、二人共！！」

「何を言ってるんだ？レキ、お前も行くんだぞ？」

騒いでいるギンガに構う事も無くレキはアルフィリオスに興味無さげに返すと、アルフィリオスもギンガを無視しながら、極上の笑みを浮かべながらレキに返答する

今まで興味のなく無表情だったレキに困惑の色が現れる、そして口にした食事を飲み込むとアルフィリオスにつめかかる

「ちょっと、待って下さい！！なんで僕まで行くんですか！？？」

「いやあ、俺一人じゃ寂しいからさ」

「今年で21になる人の理由じゃないでしょ！！」

「レキが泣くんじゃないかなって思うと…」

「泣くかつ！？むしろ清々しますっ！！」

「かくかくしかじか」

「んな言葉が通じる訳無いでしょ！！」

にこやかな笑みを浮かべながら適当な理由を述べていくアルフィリオスに、レキは苛立ち混じりにツツコミをいれていく
それでもアルフィリオスは特に表情を変えずにいた

「なあレキ？事後承諾って言葉知ってるか？」

「何を言っ……て……」

アルフィリオスは懷から一枚の紙を取り出してレキに見せる
そこには異動届と書かれており氏名の欄には「レキ・アーベント」
と書かれていた

アルフィリオスはグツと親指を立ててからいい放つ

「書類は出しといたからもう決定済みさ！
行こうぜ！機動六課！！」

「だあれが、行くかぁー……っ！！」

昼下がりの午後、陸士108番隊にて一人の少年の絶叫が響き渡った
この一つの決断がこれから先の大事件に二人を巻き込み事になると
は誰も思いはしなかった

今、自由奔放な魔導士と苦労性の魔導士の物語が始まる

EP01：行くっぜ！機動六課！！（後書き）

どうも、えのきです

思いの他時間がかかりました、自由奔放なキャラって楽そうで楽しいですね

何処までして良いか制限がつき辛かったです

さて次回はいいよ、機動六課に出向ですがアルフィリオスが黙っているでしょうか？

いえ大暴れさせます！（笑）

次回から原作の次回予告風にしていこうと思います

魔法少女リリカルなのはStrikers～夜天に舞い踊る荒鷲～
EP02：先輩、参上！！にテイクオフ

EP02：先輩、参上！！（前書き）

ドナドナ先生から前作者きのこのこととして貰った、バトンをこの前書きとあとがきでやりたいと思います！

この小説のイメージOPは

『強i ng! Go i ng! My Sou l! !』（ダイナマイトS
HU：元ネタ・デジモンセイバーズ）です

EP02：先輩、参上！！

SIDE：アルフィリオス

それは四年前の事…

「先輩…やっぱり、私は部隊を立ち上げたいです」

一人の少女の決意を聞いた…俺は少女の肩に手を乗せてから

「ならやってみろ、お前のやりたい事ならな」

「アル、先輩…」

「もし迷ったならいつでも呼べよ、俺が…」

俺の励ましに少女は嬉しさと期待に満ちた目で見つめていた

「全力で、冷やかにいってやるっ！！」

「こおんの！アホ先輩——っ！！」

親指を立てて最高の笑顔を送ったら全力で砲撃を撃ち込まれたんだ
よな

「なんでだと思っ？」

「答える価値もありません…」

ミッドチルダの道路を車で走りながら俺はレキにはやての事を話していた

走り出してから不機嫌そうにしているレキを横目でみながら俺は機動六課へと車を走らせる

話を聞いてからレキは余計に不機嫌になり俺に文句をいつてくる

「それにしても冷やかしに行くなんて失礼過ぎでしょ、八神さんはアルさんを信頼してたんですよ？」

「知ってるよ、けどな…俺はアイツなら手を貸さなくても自力でなんとかする

そう信じてんだよ」

「でも…」

レキの文句に俺は車を運転しながら答える、レキは俺の答えに納得ができないのか、少し渋っていた

「アイツは魔導士としても女としても強い…だから大丈夫だと思うんだ

もし無理してたらそんな時は手を出すさ」

「信頼してるんですね」

「ああ、自慢の後輩だからな」

ようやく納得したレキは俺に向けて聞いてくると俺は笑みを浮かべて返す

「あの…もう一つ聞きたいんですが…」

「どうした？」

「なんで僕はバインドをかけられてんですか？」

レキは少し言いにくそうに自分の身体に視線を移し胴体に巻かれている赤いバインドに目を向ける、ちなみにかけたのは俺だ

「そりゃいきなり逃げるからだろうが…いくら納得出来なくても逃げちゃダメだろ？」

「逃げたのは朝方いきなり部屋に「アイ！ゲッチューーっ！！」なんて叫びながら入ってきた不審者が居たからですよ」

「誰だい？それ「アンタだよ…」」

むう、言い終わる前に台詞を被せるなよ
つまらないぞ

仕方なく俺はレキのバインドを解除する、レキは身体を動かして解すとジロツと俺を睨んできた

「これから部隊に入るんですからしっかりして下さい、せめて稼働

式は普通にして下さいよ?」

「わかったって普通にしてるよ…」

いつものように口煩く言うレキに返答すると俺は少しだけ笑みを浮かべる

普通にはするさ、俺基準だけだな

初めての奴もいる第一印象は派手にいかないと、な…

機動六課 部隊長室

「…遅い…いくらなんでも遅すぎや
本当に来るんやろうな?」

新設された部隊、機動六課の部隊長室にてその少女の唸り声が聞こえた

栗色の髪の少女、八神はやては腕組みをしながら椅子に座りチラチラと時計を見ている

その横ではサイドテールの少女と金髪のストレートの少女さらに銀色の髪の小さな妖精が心配そうに見ていた

「ナカジマ三佐から今日、出向してくる魔導士がいるというのは聞いたんだけど…いくらなんでも遅すぎや!」

とうとう耐えきれなくなったのかはやては机をバンと叩いて立ち上がる

「はやて、落ち着いて！きつと何かあったんだよ！！」

「そつだよ！だからそんなに怒らなくてもいいんじゃない？」

「落ち着いて下さい、はやてちゃん！」

はやての行動に横にいた三人ははやてを宥めようと言葉をかける

「せやかて、フェイトちゃん、なのはちゃん、リイン…さすがに遅れるのはどうかと思うで？今日は機動六課の稼働式なんやから」

はやての恨めしそうな声に金髪の少女、フェイト、サイドテールの少女、なのは、銀髪の少女、リインフォース？は言葉を無くしたその時、部隊長室に通信が入る

《八神部隊長、そろそろ稼働式の時間ですが》

「あ、もう時間か…ありがとうな、グリフィス君
…仕方ないからまずは稼働式を済ませようか…」

通信を入れてきた眼鏡の青年、グリフィス・ロウランにはやては礼を言うと言った稼働式を済ませる事にして三人と共に部隊長室を後にする

なのは…はやて、ずいぶん落ち込んでるね…

多分、陸士108番隊から来る予定の人が来なかったからじゃないな

いかな？

もしかすると知り合いじゃないかって話してたから

はやての後ろを歩きながらフェイトはなのはに念話を送る
前を歩くはやてはどことなく納得の出来ない顔をしていた

それってはやてが前に話してた先輩のことだよな？

うん、凄くお世話になったって…でもその人かどうかはわからないけど、はやてちゃん信じてみたいだから

そっか…でも心配だね、ちゃんと来ると良いんだけど

フェイトは念話でなのはに問いかけるとなのはは黙って頷き念話で
返答する

前を歩くはやてを心配しつつフェイトとなのはは出向してくる魔導
士の事を考えた

機動六課 ロビー

稼働式がはじまり、はやての挨拶が終わろうとしていた時だった

「フフフ…アーハッハッハー！！」

突如ロビーに男性の笑い声が響き出す

隊員達は辺りを警戒し始めるが姿は確認出来ない

するとはやてと隊員達の間にかプセルのようなモノが横から投げ込まれると爆発を起こしロビーを爆煙が包み込む

「なんや！？いつたいなんなんや！！」

「なんだ、かんだと聞かれたら答えてやるのが世の情け！！」

爆煙に包まれ咳き込みながらはやてが叫ぶと先程の笑い声と同じ声が響く

そして煙が晴れてきた時にはやてと隊員達の間一人の男性が機動六課の制服に身を包んで佇んでいた

「俺！参上！！」

男性は右腕を高らかに上げて叫ぶ、彼の行動に隊員達は啞然としていた

「なんだ？なんだ？反応無しですか？」

隊員達の反応が無いことに男はやれやれといった感じに呆れるが、隊員達が啞然とした理由は他にもあった

まず一つは男の恰好だ、服装は普通の制服だったが何故かバタフライマスクをつけていたそして男の左手にはバインドと猿轡をされた黒髪の少年が抱えられていた

「あつ！もしかして名前を名乗って無いからか？ソイツは失礼した…俺の名前はアル、メルポっ！？」

黙ってしまってるのは自分の名前を知らないからじゃないかと考えた男は名前を名乗ろうとした瞬間、後ろからはやての守護騎士の一人ヴィータのグラーファイゼンの一撃によって床に沈んだ

「てめえ…よくもあたしの前に姿を見せられたな…アルフィリオス…」

愛機であるハンマーグラーフアイゼンを男、アルフィリオスに向けるとまるで宿敵に出会ったような口調でヴィータは言う、アルフィリオスは身体を起こしてヴィータの方を向くといったものと変わらない笑みを浮かべる

「よお、ヴィータ…相変わらずの一撃だな
どうした？そんなに怒ってもしかして…アノ日か？」

「……っ！」

ヘラヘラと笑いながらヴィータに問いかけるとヴィータはグラーフアイゼンをアルフィリオスに向けて降りおろす、鈍い音がロビーに響き渡る

「おぶあ！？ヴィータ！
落ち着け、頼むから無言で殴るのは勘弁してくれ！」

「うるせえ！毎回毎回、騒ぎを起こしやがって…！」

「げふお！！ヴィータ…頼む、話を聞いてくれじゃない下さい！」

「…ちっ…仕方ねえな、最期の言葉くらいは聞いてやるか」

「最後が末期の期になって…すみません、真面目にやります」

グラーフアイゼンで殴られながらアルフィリオスは懸命にヴィータに訴えるとヴィータは最後の情けという感じに言う

アルフィリオスはヴィータの台詞にツツコミを入れるが彼女の視線により直ぐ様謝る

アルフィリオスはよろよると立ち上がるとヴィータに目を向ける、
ヴィータはアルフィリオスの言葉次第でいつでも殴れるようにグラ
ーファイゼンを握り直す

（謝るだけじゃダメだな…誠意を見せないと）「ヴィータ…本当に
ごめ〜んちゃい」

アルフィリオスはヴィータを見ながら思うと小首を傾げて猫なで声
でヴィータに謝る

その瞬間…ロビーの空気が絶対零度まで下がった…

「…アイゼン…カートリッジ、ロード…」

ヴィータの弦きにグラフアイゼンは応えようとカートリッジを三発
分ロードし形態を身の丈以上の形に変形させる
ギガントフォーム…リミッター状態でも放たれるヴィータの必殺の
形態だった

そして処刑を執行するためにアルフィリオスに一步ずつ近づいていく

「とりあえずな……いつぺん、死んどけ!」

ヴィータの怒号と共に機動六課に局地的な地震が発生した
震源地は新設されたロビーでそこにはクレーターと一つの人間の形
をした何かがあった

機動六課 部隊長室

「それで…何か言うことは無いんか？先輩」

部隊長室にて八神はやては目の前にいるアルフィリオスに言葉を投げ掛ける

はやての横にはなのはにフェイト、

先程アルフィリオスに処刑を執行したヴィータ、そしてヴィータと同じ守護騎士であるシグナムにシャル、ザフィーラ最後にリインフォース？がいた

ちなみにアルフィリオスの恰好はボロボロの六課の制服姿で石畳にバインドをされたまま正座をし、膝の上には石が3つ程つまさっていて額には反省中という紙を貼り付けてるという状態だった

「ねえ、はやて…あの状態はマズイと思うよ？」

フェイトはさすがに可哀想に思えてはやてに言うとはやては凄く呆れた様に返す

「心配はいらんよ、フェイトちゃん…」

アレは偽物やから、下は発泡スチロール、石は大きなこんにゃくやからな」

「反省中の雰囲気だけでも出したくてさ」

はやての言葉に黙っていたアルフィリオスは愉快的な声を出しながら言つと膝の上の石がぶるぶると動き、石畳からはキュッキュツと発泡スチロール独特の音になる

「ねえ、はやて…射つても良いよね？」

「待ちや、フェイトちゃん

気持ちにはわかるけどまだアカンよ」

心配した自分がアホらしく思つたフェイトはデバイスを起動させてからはやてに問いかける
はやては片手で制止をしながらアルフィリオスに目を向ける

「先輩が機動六課に出向してくる魔導士でええんやな？」

「ああ、そうだ…ゲンヤさんから頼まれてなにしても本当に設立しちまうとはな…すげえな、はやて」

「先輩が励ましてくれたおかげや」
改めて…アルフィリオス・ラーゼンハルグ一等陸尉の出向、承認します」

「ああ、堅苦しいの苦手だから緩く挨拶するけど部下のレキ・アーベントと共によろしくな」

バインドと張り紙を取ってからはやての質問にアルフィリオスは答えると、はやてはにこやかに笑いつつ言つとアルフィリオスも微笑して右手を軽く上げて応える

今、この時を持ってアルフィリオス・ラーゼンハルグは機動六課の

仲間入りを果たした

「それじゃあ先ずは先輩に稼働式を邪魔したお仕置きをせんとな…」
「あれえ？今までの雰囲気台無しじゃね？」

挨拶を終えるとはやてはゆつくりと立ち上がりこやかな笑みを浮かべながら、アルフィリオスにいい放つ

アルフィリオスはつられて笑みを浮かべながら後退りをする

「まあ…それはそれ、これはこれ、やな…」
さて覚悟はええか？先輩…」

「アツハツハ…まいったぜ…」

アルフィリオスのその言葉を最後に、部隊長室から凄まじい爆音と断末魔が六課に響き渡った…

EP02：先輩、参上！！（後書き）

読んでいただきありがとうございます

前書きの続きですが

イメージEDは

『青空デイズ』（中川翔子：元ネタ・天元突破グレンラガン）

ちなみにその日、機動六課の話し辺りで変更します

いわゆる第二期というやつです

OPはアルフィリオスをイメージして、EDはレキをイメージして貰えると嬉しいです

続けてイメージC.Vに移ります

アルフィリオス・ラーゼンハルグ：三木眞一郎

レキ・アーベント：折笠愛

ガンダムとテイルズ繋がりの人になりましたね…

ともかくバトンは以上です

それでは次回予告にいきます

アルフィリオス「機動六課が始まり初訓練…皆、頑張ってますなあ…
…ってなんで俺までやるんだよ!？」

次回、魔法少女リリカルなのはStrikers（夜天に舞い踊る

荒鷲 EP03：初訓練！見学とばっちり…にテイクオフ！…面倒だからバックレようかな…」

すみません！レキ君の年を今回公表すると感想に書きましたが次回に移ります…本当にすみません

EP03：初訓練！見学とばっちり（前書き）

今回は原作でいう最初の訓練です

レキ君の活躍をご覧ください

誤字脱字があれば教えて貰えると嬉しいです

EP03：初訓練！見学とばっちり

それはアルフィリオスの断末魔が六課に響く少し前のことだ

稼働式を終えたレキはフォワードメンバーと合流するために休憩室に向かっていた

本当ならアルフィリオスに文句ついとして一撃入れようかと思えたが、はやてに連行されたのを見てする必要があると考えフォワードメンバーと合流する事を選んだ

「どうやらここみたいだ」

廊下を歩いていると休憩室と書かれたプレートを見つける事ができたレキは中を覗き込む

中には赤い髪の少年とピンク色の髪の少女がいた、少女の近くには白いトカゲのような生物が寝ていた

（使い魔？ともかく…あの子達がフォワードメンバーだろうな）
「あの、君達がフォワードメンバーかな？」

レキは休憩室に入ると少し緊張しながら二人に話しかける
二人はレキが話しかけると勢い良く立ち上がり敬礼をする

「はい、エリオ・モンディアル三等陸士であります！」

「同じく、キャロ・ル・ルシエ三等陸士であります！それとこちらは飛竜のフリードです」

「キユク」

「僕はレキ・アーベント、コールサインはライトニング5よろしくね、二人とも」

見た目より丁寧に自己紹介をする二人に、キはちゃらんぽらん上司とは違うと思いながら自己紹介をしてエリオに手を差し出す

差し出された手にエリオはしっかりと掴むんで応える

次にキャロに同じように手を差し出すと少しだけ緊張しながらゆっくりと握り返してくれた

エリオとキャロを見てふと気がついた事ができたレキは失礼と思いながら聞いてみる事にした

「二人は今、いくつなのかな

差し支えなければ教えてくれないかな？」

「僕は10歳です」

「私も10歳です」

「教えてくれてありがとう、僕は12歳だよ…そんなに歳も変わらないから敬語とかは抜きで良いよ」

二人の年齢を聞いてから礼を言っているとレキも自分の年齢を言ってからあまり堅くならなくて良いと二人に言う

「うん、レキがそれで良いならそうさせて貰うよ」

「私もあんまり慣れてないけどよろしくね、レキ君」

最初は戸惑いを覚えていた二人だが歳が近い事で納得できたらしく敬語を無くして話してくれた

二人が敬語をやめると言った時に話し声が聞こえてきた
声の感じで二人くらいだろうか？

「うわっ！？もうメンバー揃ってる、遅れちゃったみたいだね、ティア」

「アンタがノロノロしてたのが悪い、ほら挨拶をしに行くわよ」

休憩室の入り口で驚いたような声が聞こえるとそこには青い髪のシヨートカットの女性とオレンジ色のツインテールの女性が立っていた

青い髪の女性はレキ達が揃っていることに驚いたらしく少しだけオーバーなリアクションをし、ティアと呼ばれた女性はやれやれと言った感じに頭に手を当てると、青い髪の女性の背中を叩いてレキ達に近づいてくる

「アンタ達がフォワードメンバーでしょ？あたしはティアナ・ランスター」

階級は二等陸士それでこっちが」

「あたしはスバル・ナカジマ！
階級はティアと同じの二等陸士で15歳だよ、あつ！ティアは16歳なんだよ」

「レキ・アーベントです、こちらはエリオ・モンディアルにキャロ・

ル・ルシエそして飛竜のフリード：二人は三等陸士で、10歳です」

ツインテールの女性、ティアナはレキ達に確認を取ると自己紹介をする、それに続けて青い髪の女性、スバルは自己紹介をしてティアナと自分の年齢を教える

レキがエリオとキャロの分まで紹介をした時にスバルは不思議そうにしていた

「あれ？レキは同じ年じゃないの？」

「あ、忘れてました

僕は12歳です、階級は一等陸士」

「……えっ！？」「……」

スバルに質問をされた時、しまったという表情をしてからスバルに年齢と階級を教える

すると全員が驚愕の声を上げる、当然だ：スバル達には自分より年下がエリオ達は自分達と差ほど変わらない年齢の少年が自分達より上の階級なのだから

「階級が上だからって敬語はいらないですよ、僕は敬語が苦手なのでそれじゃあそろそろ行きますか、高町教導官が待っているでしょうから」

レキは驚くスバル達に特に気にする様子もなく言う

階級や年齢の事を驚かれるのはレキにとって日常茶飯事なので今更どうということがないからだ

レキは移動を提案して休憩室を出ていく、呆けていたスバル達も続

けて休憩室を出る

スバル達が休憩室を出た途端、凄まじい轟音が廊下に響き渡る
突然の事にスバル達や隊員は慌てるがレキはやれやれといった感じ
にため息をつく

「アルさんが何かやらかしたんでしょう
まあ気にする必要は無いですよ」

それだけ言つとレキはスタスタと先に歩いて行つてしまふ

「レキってなんか冷めてない？」

「むしろあれは達観してゐるって言つた方が正しいわね」

歩いていくレキを見ながらスバルは問いかけるように言つとティア
ナは自分と同じようにたくさん苦労したんだと思い少しだけ同情す
るように言つ

エリオとキャロは何も言えずにいた

「うう…身体が痛いぜ、はやての奴…もう少し加減しろよな」

「でも自業自得だと思いますよ？アルフィリオスさんが悪戯したか
ら砲撃を射つたんですから」

はやての砲撃を受けたアルフィリオスはよろつく身体を引きずりな

がらなのはと共に移動していた

文句をいうアルフィリオスに前を歩くのはは彼に事実を言う
アルフィリオスは自覚があるため言い返しはしなかった

「アルでいいぞ、長いだろ？俺の名前…それと同じ階級なんだから
敬語も使うな、堅苦しいのは好かないんだ」

「はやてちゃんが言ってた通りだね…うん、良いよ
ならアルさんって呼ぶね」

「なんて言ってたか気になるんだが聞いても良いか？」
アルフィリオスが敬語を無くしてくれと言うとなのはは、はやての
名前を出してから納得したように言う

アルフィリオスは何故はやての名前が出たのか気になり、なのはに
質問を投げ掛ける

「はやてちゃんから、先輩は礼儀とか考えて無いし、本人も敬語が
嫌いだからしないで良いって…まさか本当だとは思わなくて」

「はやての奴…どんな評価してやがんだよ
確かに敬語は嫌いだけだよ」(いちいち言わなくても理解できる所
を喜ぶべきかそこまでボロクソ言われて凹むべきか…悩むぜ…マジ
で)

「アルさん、大丈夫？訓練スペースについたんだけど」

頭に手を当てて落ち込むアルフィリオスを見ながらなのはは不思議
そうにしながら呼びかける

アルフィリオスが顔を上げるとそこには広い空間があった、しかしそれだけで何もなかった

「訓練スペースっていうわりには何もないんだな…ここでやるのか？」

「にははは、さすがにここじゃやらないよ、シャーリィー準備は出来てる？」

「はい、なのはさん
今最終チェックをしています」

首を傾げる俺になのはが苦笑して答えると訓練スペースの側でモニターを開いている眼鏡の女性に話しかける

モニターを操作していた女性はその手を止めてにアルフィリオスの方に目を向けてから身体をアルフィリオスに向ける

「はじめまして、私はデバイスマスターのシャリオ・フィニーノ一等陸士です、シャーリィーって呼んで下さい、よろしく願います」

「こちらこそよろしくな、シャーリィー
それで、種明かしはいつしてくれんだ？なのは」

「フォワードメンバーが来てからかな、だからもう少しだけ待っててくれる？」

眼鏡の女性、シャーリィーに挨拶をしてからアルフィリオスはなのはに、視線を向けてから訓練スペースについて質問をする

なのはシャーリーとは別のモニターを展開して操作をしながら
フォワードメンバーが来てから見せると答える

アルフィリオスはそれを聞くと退屈そうに欠伸をしながら後ろに手
すりがあるのを発見してなのはに声をかける

「ならただ突っ立っているのも疲れるし、少し後ろの方にいるから
な？」

「いいけど、暇だからって寝ないでね？」

「わーお…信用ねえな
大丈夫、善処はするから」

モニターを操作しているのは一旦手を止めてからアルフィリオ
スの方を向いて注意する
アルフィリオスは乾いた笑みを浮かべながら手をヒラヒラと動かし
て手すりの方へと歩いていく

SIDE：アルフィリオス

それから数分後にレキ達はやってきた、俺と同じで何もない事に驚
いていた

さてさて、どんなのが出てくるのやら

俺がそう思っているとシャーリーがパネルを操作していく
すると訓練スペースの中央に廃墟都市郡が浮かび上がる、ホログラ

ムか…手が込んでるわアイツらすごい驚いてるし

「まあ俺も驚いたんだけどな、こんなに驚いたのはギンガの食事量を見たとき以来だな」

「その例えは無いだろ…」

俺の呟きに誰かがツツコミを入れる、後ろを振り向くと呆れた顔をしている小さな鉄槌魔神ことヴィータがそこにいたいきなり後ろに立つなよ、びっくりするだろ？
寿命が5年程縮むかと思っただぜ

「お前がそんな肝っ玉の小さい奴かつての
つつか、誰が小さいって？」

何故、心の声に反応しやがる！？
何この子、読心術でも取得しやがったか？
やべえ、プライベートとかねえじゃん

「全部口に出てんだよ…あたしもいちいちツツコミをいれたくねえ
から黙ってる
次にボケたら脳天力チ割るからな？」

「イエスマミー…ごめんなさい、すみませんでした！
だからグラーファイゼンを振りかぶらないで！！」

ヴィータは面倒くさそうに言う俺の身体にグラーファイゼンの尖端を押しつける、正直痛い…

目の前にボケキラーがいる…だけどここでボケないとボケとしての
プライドが許せねえ！？…そんなの捨てちまえ？ひどい事を言うなよ

まあ結果として力チ割られんのは免れたけどそれに近い状態にはな
ったかな…ヴィータは手加減しねえからな

頭をおさえながら立ち上がるとフォワードメンバーの訓練が始まっ
ていた

内容は自立行動型魔導機械『ガジェットドローン』の撃破

確か機動六課が集めるロストロギア『レリック』を搜索してる機械
で製作者が不明なはず資料で軽く目を通したくらいだから詳しくは
知らないんだよな

「ヴィータ…アレって実際はどのくらいなんだ？」

「実際の攻撃頻度と移動スピードは早いけどそれ以外は一緒だ…一
番厄介なのはガジェットはAMFを搭載してるってところだ」

隣にいるヴィータに質問をするとヴィータはモニターを見ながら簡
潔に答えてくれた

説明を聞くとついため息がもれてしまう

「アレ、単体でか…そりゃ苦労するわな

しかもAMFを使うんだから動力も永久機関ってところか」

「アイツらが何処まで対応出来るかを見るのが最初の訓練の目的だ
…そこからあたしらが伸ばしていく、だからお前もサボるなよ？」

「ああ…さすがに死なせるのは勘弁だからそこはマジメにやるさ」

「なら良い…後、頭を撫でるな」

ガジェットドローンに手こずっているフォワードメンバーを見ながらヴィータは俺に釘を刺す、俺は微笑をしてからヴィータの頭を撫でながら答えると物凄い睨まれた…相変わらず子供扱いは嫌みたいだな

ヴィータをからかいながら俺はフォワードメンバーに視線を移す、もうそろそろレキが動きだす頃だな…

SIDE：レキ

訓練が開始してから此方はガジェットに翻弄されてばかりだった

出会って直ぐだからお互いのクセも把握は出来てない、それをいきなり訓練させるなんて高町教官はずいぶんとスパルタな事をするものだ…

だからと言って何も出来ないのは嫌だ…自信が無いけど、やってみるか

《ライトニング5からフォワードメンバーへ…このまま各個撃破していてもラチがあかない

皆、指示を出すから合わせてくれないか？》

《わかったわ…確かに撃破出来ないのは我慢ならぬわね

良いわ、アンタの指示に従うから」

《私も良いよ！レキ、頑張つて》

《《よろしく願いします！！》》

念話を使用して全体に通信を送るとそれぞれが賛同をしてくれた手があるならやりようはいくらでもある

僕はそう考えると皆に最初の指示をだす

《まずは全員の使用できる魔法を確認したい》

「あれ？皆の動きが変わってきましたね」

「誰かが指示を出しているんだと思う…多分、レキ君かな？実戦経験があるから」

データを収集していたシャーリィは動きが変わったフォワードメンバーに少し驚いた

なのははモニターを見ながら情報を冷静に分析すると自分の予測を出す

彼女の言う通りモニターではレキが地図を見ながら指示を出すレキの姿が映っていた

SIDE：レキ

皆の魔法を確認してから僕は地形を把握するそして活用出来そうな場所を見つけると全員に指示を出す

まずは目的地までスバルさんが誘導するように追いかける
フォワードメンバーの中で一番、機動力があるからだ

その間にエリオ、ティアナさん、キャロが目的地に先回りしておく
ガジェットが分散しないように目的地まで誘導すると、今度はエリオの定番だ

歩道橋の上でガジェットを待ち伏せして貰い近づいたら、カートリッジによって強化した一撃で歩道橋を破壊してもらう

魔力攻撃ではなく落石による質量攻撃にガジェット達はなすすべもなく飲み込まれる、しかしそれは先頭にいたガジェットだけであった

落石を逃れた五体に火炎弾が放たれる、二体くらいは何とか避ける
が三体は直撃を食らうがガジェットは機能を停止していなかった、
だが地面に魔方阵が展開しそこから生成された鎖によってガジェットは捕縛される

最初の火炎弾はフリードのブラストファイアで鎖はキャロの魔法、
アルケミックチェーンだった

《ティアナさん！残り二機のうち一つはお願いします！》
《ええ、アンタこそ仕留めそこなうんじゃないわよ！？》

ビルの上で状況を伺っていた僕は逃げたガジェットを追いながらティアナさんに指示をだすと短く返事をしてから僕に言葉を投げ掛ける僕はティアナさんの言葉を聞いた後、右手を振り抜く動作をして待機状態に戻して置いた白を基調とした双刃剣型のデバイス『ファフニール』を展開する

「ファフニール、まずはガジェットに追いつく…ソニックムーブ！」

「了解だ、レキ！ソニックムーブ！」

ビルの上を飛びうつる様に移動して前方に逃走するガジェットを確認するとファフニールに指示を出す

ファフニールの男性型、電子音声が響くと僕の身体に水色の魔力光が僕の身体を包み込みガジェットの前に高速移動する

「次にシフトB…^{バレット}多重弾核を連続で撃ち込む」

「了解、シフトB！ツインガンモード」

高速移動を完了させると直ぐ様、ファフニールに指示を出す

ファフニールは双刃剣は分離して双剣になると縦半分に割れると双銃の形になる

僕は双銃形態のファフニールをガジェットに構えると多重弾核で形成された魔力弾を撃ち込んでいく

僕の魔力弾はスピードと命中性を重視しているため威力はそこまで無い

だからこそ、連続で撃ち込んで相手を完膚なきまでに倒すやり方しか出来ない…それでも十分なんだけどね

僕は爆散するガジェットに目もくれずにみんなの場所へと移動を開始する、もし手間取ってたら支援するためだ

「レキの戦い方はずいぶん豪快だな…あそこまで撃ち込むなんてな」

「まあ動かれても厄介だろ？あれくらいで良いんだよ」

レキの戦い方を見ていたヴィータは意外そうな声を出す

アルフィリオスは特に気にする事も無く言う

するとなのはがいきなりアルフィリオス達に通信を入れてくる

アルさん、少し良いかな？

「なんだ？出来れば簡単な用事にしてくれよ？」

今からフォワードメンバーのお手本としてガジェットと戦って欲しいんだけど

「嫌だ、めんど　ガジェットが嫌ならヴィータちゃんと模擬戦して貰うよ？　全力でやらせて頂きます…！」

なのはが唐突に頼んできた内容をアルフィリオスは断ろうとしたが、ガジェットが嫌なら隣にいるヴィータと模擬戦して貰うと言われると態度を180°変えて了承する

「そんなにあたしとの模擬戦は嫌か？」

「まだ生き残れるからな…」

「…なのは、アルフィリオスがどうしてもあたしとやりたいとさ」
「ちよっ！？待って！」

「そうなの？なら…良いかな」

隣にいたヴィータは睨み付けるようにアルフィリオスに聞くとアルフィリオスは親指を立てて答える

その途端、ヴィータは青筋をたててなのはにアルフィリオスと模擬戦をすると言い出す

なのはは苦笑をしながら了承をして通信を閉じる
希望が絶たれて地面に膝をつくアルフィリオス
その肩にヴィータはゆっくりと手を置いて

「じゃあ、行くか…」

そう短く言うとアルフィリオスの首根っこを捕まえて引きずりながら訓練スペースに移動していく

その姿はまさに死刑囚と処刑執行人であった

EP03：初訓練！見学とばっちり（後書き）

EP03を見ていただきありがとうございます
えのきです

今回はレキの戦闘描写なんですがいかがでしたか？

彼の戦い方はTOGのキャラを元にしました

そろそろレキ君の説明も製作していこうと思います

それでは次回予告です

レキ「アルさんは余計な失言によってヴィータ副隊長と模擬戦をすることになりました

これを機に人格改善されると良いのにな」

次回、魔法少女リリカルなのはStrikers～夜天に舞い踊る

荒鷲～EP04：激突！紅の鉄騎vs荒鷲にテイクオフ

まあ死なない程度に頑張ってくださいね、アルさん」

EP04：激突！紅の鉄騎vs荒鷲（前書き）

アルフィリオスvsヴィータです
上手く出来てると嬉しいです

EP04：激突！紅の鉄騎VS荒鷲

SIDE：アルフィリオス

世の中には…納得のできないものがある…

なんで俺はヴィータと模擬戦をせな、いかなの？

いや…俺がわるいんだけどね

ビルの上で俺は膝について落ち込んでいた

ちなみに少し遠くの方にヴィータがバリアジャケットとグラーフアイゼンを構えている

完全に戦闘体勢だな…あれは

《アルさん、準備が出来た？》

「心の準備が《大丈夫そうだね》少しだけでも良いから聞いて」

通信を入れてきたなのは俺の返事を聞く前に判断をする
なのは、容赦がなくなってきたな

やれやれとため息を吐くと俺は自分の首にかかっているネクレスに
手を添える

「イーグル…良いか？」

「スタンバイ完了…いつでもいけます」

「行くか、イーグルレイダー…セットアップ!!」

「了解！」

ネックレスから女性型の電子音声が響く赤い魔力光が俺の身体を包む
ネックレスは待機状態から戦闘状態である複合機関銃の形態に移行
する

イーグルレイダーのトリガーを握るとバリアジャケットを展開する

俺のバリアジャケットは武装隊のアンダージャケットを黒くしたものに黒いロングコートを羽織ったものだ

良く烏みたいだと言われるが黒が気に入ってるのだから仕方ない

「文句言っても仕方ねえな
さあて、やるとしますか……」

魔力光を振り払うようにイーグルレイダーを振るとヴィータに視線
を向けながら俺は呟く

向こうがやる気になってる以上、応えるしかないよな

《それじゃあ、レディ……ゴーっ!!》

互いの準備が完了したのを確認してからなのは模擬戦を開始する
合図を出す

それと同時にヴィータとアルフィリオスは距離をつめる

最初に仕掛けたのヴィータからだった、グラーファイゼンを振りか
ぶりアルフィリオスの頭部、目掛けて勢い良く降り下ろす

アルフィリオスはイーグルレイダーの銃口でグラーファイゼンの軌道をずらすと、そのまますり抜けるように移動をしてからヴィータに向けて魔力弾を連続で発射する

ヴィータは右手にグラーファイゼンを持つと左手にシールドを展開して魔力弾を防ぐ

「相変わらず堅い防御、だことで…」

「フロントアタッカーが柔じゃ意味がねえから、な！」

「っち！？」

ビクともしないシールドを見てアルフィリオスは苦笑をしてから言う、ヴィータが当然だと返し防御を展開しながらアルフィリオスに向けて片手でグラーファイゼンを降りおろす

イーグルレイダーの銃身で受け止めるがヴィータの一撃の重さにアルフィリオスは顔を歪める

「このぐらいじゃないだろ…てめえの実力は！」

「ったりめえだ！イーグル、リッパーだ！！」

「ブレード、オン！刀身固定します！」

「うおおおっ！！」

グラーファイゼンをイーグルレイダーで防ぐアルフィリオスに向け

てヴィータは問いかけると、アルフィリオスは防ぎながらイーグル
レイダーに指示をだす
銃身とは真逆の位置から仕込み刃が展開するとグラーフアイゼンを
振り払うように切り払う

S I D E : レキ

「アルさん…ようやくエンジンがかかりましたね」

始まった二人の戦いを僕は少し離れたビルから見ていた
高町教導官は参考になればいいと思ったみたいだけど…正直…

「真似…出来ないよね」

「あたしらでできたら凄いわよ…近接型しかもベルカ騎士の一撃を
そらした上での反撃なんて、受け止めることすら出来ないわよ」

とまあスターズの二人の言葉だ…これには僕も同意だ…エリオとキ
ヤロは時々ハラハラしながら見ていた、観戦だよな…それ

「アルフィリオスさんのデバイスって射撃型に見えて近接もできる
両方こなせるタイプみたいですね」

「射撃、斬撃、さらにアレは杭打ち器？凄いの装備しているんだね」

僕達の後ろでは高町教導官とフィニーノ一等陸士がイーグルレイダーの分析をしていた

まあ教えるくらい良いかな

アルさんは面倒そうに思うけど

「イーグルレイダーは元々、多種多様をこなせるデバイスの試作品なんですよ

まあある理由から計画は凍結されたんですけど」

「レキ君、なんなの？理由って…」

「杭打ち器、ステークっていうんですが威力が高すぎて使用者の身体を破壊する恐れがあったんです

カートリッジを一つ使って撃ち出す杭ですからね…反動が半端ないんですよ」

イーグルレイダーの説明を聞いて高町教導官や他の皆さんは驚愕の声を出す

当然だ、自殺願望がある奴じゃなきゃ使わない代物なのだから

「なら、アルフィリオスさんは大丈夫なの？」

「本人のバリアジャケットもそうですけど、かなりいじってるみたいで少しは軽減されてるみたいですよ、ただイーグルレイダーの方が持つかどうか…」

「イーグルレイダーがどうかしたんですか？」

反動についてティアナさんが僕に質問をしてくる
アルさんについてはあまり詳しくは話せなかった、あの人はあまり

自分を語らないから

僕がそう答えると今度はフィニーノ一等陸士が質問を投げ掛けてくる

「今アルさんが使ってるイーグルレイダーは本物じゃないんですよ、コアは本物ですがフレームが少し柔らかいんです、本当のフレームは本局で改修しているんです

だから今のフレームでステークの衝撃に耐えきれるかどうか」

僕はそう答えると再び画面に目を向ける

僕らが目を離していた間に二人の戦闘は激しさを増していた

「ぶち抜けーっ!!」

ヴィータは片手に拳くらいの大きさの鉄球を作り出すとグラーフアイゼンで思いつき叩き、鉄球を打ち出す

魔力を纏った鉄球は凄まじいスピードでアルフィリオスに迫る

鉄球を見据えながらアルフィリオスはイーグルレイダーの銃口を鉄球に向ける

「撃ち落とす!ブレイズバスター!!」

イーグルレイダーの銃口から砲撃魔法が放たれ鉄球とぶつかり合い爆発と爆煙を巻き起こす、アルフィリオスは腕で顔を覆うと辺りを警戒する

「ラケーテンフォーム！」

「うおおりゃああっ！！」

電子音声とともにヴィータが爆煙を纏って現れる、その手に持たれたグラーファイゼンはピックのような突起とブースターが展開するフォーム、ラケーテンハンマーになっていた

「ちい！イーグル！！」

「ソニックムーブ！！」

アルフィリオスは舌打ちをしながらイーグルレイダーの名前を叫ぶとイーグルレイダーはソニックムーブを発動させる

アルフィリオスは後方に高速移動をしてラケーテンハンマーから距離をとると彼のいた位置を横から風ぎ払うようにラケーテンハンマーが振り抜かれる

（やっぱりラケーテンじゃかわされるか…ならっ！）「アイゼン！カートリッジ、ロード！！」

「ギガントフォーム！」

ラケーテンハンマーをかわされたヴィータはカートリッジをロードして形態を変える

それは自分の身の丈並みの大槌「ギガントハンマー」であった

「コイツで潰す！ギガントハンマー！！」

「そいつは勘弁だ！イーグル！ステーキ、セット！！」

「了解、ステーキカートリッジ、セット！」

降り下ろされるハンマーに合わせるようにアルフィリオスはイーグルレイダーの銃身に装備された杭打ち器、ステーキをむける向けた瞬間凄まじい轟音と共にステーキが打ち出される

ハンマーとステーキがぶつかり合った瞬間、魔力同士の激しい爆発が巻き起こる…そして

「チェック、メイト…だな…」

何かが叩きつけられる音とアルフィリオスの言葉がに辺りに聞こえた煙が晴れていくとヴィータの手にグラーファイゼンはなく、喉元に左手に持ち変えリッパを展開したイーグルレイダーを突きつけるアルフィリオスの姿があった

「……………」

「ヴィータ？そろそろ機嫌直したらどうだ？」

六課隊舎に帰る最中アルフィリオスは隣で明らかに不機嫌な顔をしているヴィータに声をかける

「別に機嫌なんか悪くねえ…」

「なら睨むなよ…」

「睨んでねえ、これは元々の目付きだからな」

声をかけられるとヴィータは威圧するように睨み付けて返答をする
アルフィリオスはやれやれと言った感じに言えばヴィータは少し拗
ねたように言うつと顔を背ける

それを見てどうするかなとアルフィリオスは深くため息をつく

沈黙が続く中でヴィータは足を止めた

アルフィリオスはヴィータを追い越した辺りで足を止めて振り返る

「アルフィリオス…なんで、普段はやる気無いくせに戦闘になった
ら真剣になるんだよ、バトルマニアか？」

「人をシグナムみたいな言い方をするな
真剣になったのはお前のせいだよ」

「あたしが？どうしてだよ」

アルフィリオスの顔を見ながらヴィータは質問を投げ掛けるとアル
フィリオスはげんなりした顔をしてからヴィータを指でさして返答
する

ヴィータは理由がよくわからないのか首を傾げてから聞き返す
アルフィリオスは頭をかきながら言葉を探す

「お前が、俺に対して真剣に見てきたから…その真面目に返さねえ
となって思っただよ」

「…ずいぶん律義だな…」

そう考えてくれてたなら嬉しいけどさ…でも普段から真面目にした方が良いと思う」

アルフィリオスの理由にヴィータは微笑を浮かべて返すと少しだけ顔を暗くして言い

「悪かったな…別に良いだろうが誰に何を言われようが気にしないし」

「あたしが嫌なんだ、お前がどうしようもない奴なら仕方ないけど、悪い奴じゃないのは陸士108番隊で一緒に行動していてわかる、だからなんも知らない奴に悪く言われんのが我慢ならねえんだよ！」

ヴィータの言葉を聞いてアルフィリオスは苦笑をもらす

今までここまで自分に言ってきた奴がはじめてだったからだ

アルフィリオスはヴィータの頭を左手で軽く撫でてから微笑をする

「ありがとうな、だけど…何も知らない顔も知らない奴等に俺を知られんのは勘弁だ

ちゃんと話し合ってわかりあった奴等に知られたい、まずは六課の連中に知られることからだ…それでも言ってくれて嬉しかった、ありがとう」

「う…気にすんな、これも仲間として当然だからな」

礼を言うアルフィリオスにヴィータは少しだけ言葉をつまらせると顔をそらしてから答える

「仲間っていうなら俺の呼び方、アルって言えよな…最初からずつとじゃねえか」

「言うタイミングを逃したんだよ！…えつと…あ、あ、お前向こうむいてろ！ガン見してたら言いにくい！！」

愛称で呼べといわれるがヴィータは中々言えずアルフィリオスの身体を反転させる

アルフィリオスは苦笑をしながらヴィータに背中を向けて言葉を待つ

「…ア、アル…これで良いか？」

「まあまあかな…もう少し恥じらいを無くせよな」

「無茶を言つなよ…大体な「録音データの保存が完了しました」っは？」

「イーグル…黙っててくれよ、滅多に見られないヴィータなんだぜ？」

たどたどしい喋り方でアルフィリオスの愛称を言つとアルフィリオスはため息まじりに返す、ヴィータが文句を言おうとした時イーグルレイダーの電子音声が二人の耳に届く

ヴィータは突然の事に目を丸くしアルフィリオスは非難をするようにイーグルレイダーに話しかける

「しかしながら録音をする必要は無いのでは？」

「これは後ではやてに聞かせるためだ、珍しいからな…っは！？」

「覚悟は出来てるか？てめえ…」

イーグルレイダーの質問にアルフィリオスは楽しそうに答えると殺気を感じてヴィータの方を見るとそこにはヴィータがグラーファイゼンを構える姿があった

「ヴィータ…落ち着いて話し合おうではないか…」

「ああ…良いぞ、ただしアイゼンで殴りながらだけとなっ！！
本気で潰す！このバカアル！」

ヴィータの雰囲気におされてアルフィリオスは少し逃げ腰に言う
肩にグラーファイゼンを担ぎながらヴィータは答えると怒号とともにアルフィリオスに殴りかかる

余談だが潰されたアルフィリオスは訓練が終了したフォワードメン
バーに発見されたらしい

目撃情報によると潰れたトマトのような感じ主に頭を殴られていた
そうだ

EP04：激突！紅の鉄騎vs荒鷲（後書き）

どうもえのきです！

今回のお話はアルフィリオスが六課設立前からの知り合いという設定をフルに活用しました

一応さわり程度に捜査官時代の話はしますがもし詳しく知りたい方は感想かメッセージに書き込みをお願いします

ちなみにヴィータが目立ってメインに見えるかもしれませんが、本命ははやてです！

はやての出番を増やせるようにこれからも頑張っていきたいと思います

今回はいよいよファーストアライトです
お楽しみに！！

EP05：新しい力と初出動（前書き）

ファーストアラート編です！

ようやく、機動六課が始動します
先ずは出動までですがお楽しみ下さい

EP05：新しい力と初出勤

朝…それは至福の時、何も邪魔されずに過ごせる時間…あえて言おう

「二度寝は…最高…」

「アル、そろそろ起きた方が良くと思うのですが」

「イーグル…いい気分なのに水をさすなよ」

二度寝を満喫しているアルフィリオスにイーグルレイダーは呼びかける
「アルフィリオスはシーツにくるまり恨めしそうに言う」

「しかしフォワードメンバーの早朝訓練が始まってしまいますよ？」

「たしかにそれはまずい…がしかし今日はベッドが温いので行きたくない!!」

部屋にある時計を見るとイーグルレイダーの言う通り訓練の時間であった、しかしアルフィリオスはわざとらしい口調で起きないでいた

「…そうですか…なら一つだけ教えておきますね」

「なんだよ…出来るなら手短にな、早く二度寝したいから」

「ヴィータさんが起こしに来てくれましたよ」

「な…んだ、と…」

中々起きないアルフィリオスにイーグルレイダーは何かを諦めたような口調で話し出す

アルフィリオスはシートの中で寝ようと目を閉じながら返すがイーグルレイダーの言葉で目を見開く、それと同時に彼の背後からカートリッジの排出音が聞こえた

アルフィリオスはその音で初めて自分以外の気配を感じ取る

奴がいる、確実に…

凶器と呼べるハンマーを肩に担いで今まさにそこに立っている

「さて、何か言うことはあるか？…アル」

（まだ言い慣れてないんだね、名前…いやそれを言えばギガントコースは免れない、ならばどうする！？）

後ろからひしひしと伝わってくる殺気と視線にアルフィリオスは冷や汗を浮かべながら考えた
そして一つの選択をする

「一緒に寝るか？」

「で、出来るかぁーっ！！」

アルフィリオスがしたのは自分が出来る最高のスマイルを相手にむけて添い寝を頼むことだった

ヴィータは少し言葉がつまると叫びながら凶器グライフアイゼンを降りおろす

意識を失う最中でアルフィリオスの目には肩で息をしながら顔を真っ赤にするヴィータが映ったそうだ

SIDE：レキ

機動六課が稼働してから早一週間が過ぎました

僕らフォワードメンバーは早朝の訓練があり朝が早いのですが大抵はヴィータさんがアルさんを起こす音で目を覚まします

部屋割でアルさんは一人部屋だと喜んでいましたが実際は、起こす時に同室の人がいたら被害を受けるからだと部隊長であるはやてさんから聞かされました

いつもながら寝起きの悪い人だと思う、残業で寝るのが遅いなら仕方ないと思うけどアルさんは残業はしない、ただベッドから起きたくないだけ、理由が単純な分だけに厄介だ

そういった事から起こし役としてヴィータさんが選ばれた、他の人では部屋自体、破壊しそうだからである

最初、フォワードメンバーはアルさんの目覚ましに驚いていたが今は慣れたらしい、適応力が高くて助かる

「それじゃあ本日の早朝訓練、ラスト一本
皆頑張れる？」

「「「「はい！！」「」」」」

そう考えている間に早朝訓練も終わろうとしていた

皆バテ気味だな…まあそれだけなのはさんの訓練が大変なんだろう

ちなみに僕の呼び方が変わってるのはなのはさん達が親しみを込めて欲しいからだそうだまあ訓練や戦闘に支障がないならいいと思う
呼んでいる

「じゃあシュートイベーションをやるね、私の攻撃を五分間かわす
が一撃を入れれば終わりだから、ただし一人でも被弾したら最初からだからね」

そう言うとなのはさんは魔力スフィアを展開する、簡単に言ってる
けど体力が無い今は難しい

「この状態でなのはさんの攻撃をしのぎきれる？」

「無理！」

「回避より一撃を入れる方が賞賛は高いですよ」

「レキ…ずいぶん余裕だね」

「レキ君は疲れてないの？」

「空気に近いかな…戦闘では疲れの色を見せたらつけこまれるからね、正直体力の限界だよ」

肩で息をしながらティアナさんが僕らに呼びかける、真っ先に答え

たのはスバルさん

素直だけど早すぎるような…

エリオとキャラコが僕を見ながら問いかけてくる、たしかに僕は皆と違つて肩で息をするほどではないけど

不思議そうに問いかける二人に僕は微笑を浮かべて答える

「それじゃあ準備は良いかな？レディ…ゴーっ!!」

「全員、散開！二分以内になのはさんに一撃を入れるわよ!!」

なのはさんの声と共に誘導弾が放たれる

それを見てティアナさんが僕らに指示を出す
指示を出されるとそれぞれで散らばる

僕らの作戦は単純だった、エリオのデバイス：ストラダによる一点突破：僕とスバルさんはエリオの突撃が出来るように隙をつくるのが役目だ

開始と同時に三つの操作弾が僕の背後につく双刃剣状態のファフニールを双銃に変えると操作弾を撃ち落とす

そして視界の端にスバルさんが操作弾に追われているのが見えた

ティアナさんが撃ち落とそうとしたが、手に持たれたアンカーガンから生成された魔力弾が突然消えてしまう

「レキ、ティアナのデバイスが弾詰まりを起こしたみたいだ！あれじゃスバルが危ねえぞ!!」

「わかってる、ファフニール！照準は任せるライトハンドでスバルさんの援護をする！！」

「任せろ！…今だ！撃て、レキ！！」

ファフニールが僕に状況を説明をする、援護をしようにも僕の後ろには二つ程、操作弾が迫ってくる

一つずつ処理してる暇が無いと考えた僕は右手の銃をスバルさんに、左手の銃を後ろにむけると操作弾を撃ち落とすために引金を引く放たれた魔力弾はスバルさんの後ろの操作弾は撃墜出来たが、自分の背後のは一つしか撃ち落とせなかった

もう一度撃墜しようと思えば構えた時、瓦礫に足を取られる

「まずい、このままじゃ体勢が！？」

「レキ！？」

足を取られた事で僅かだが気が散り目の前に操作弾が迫る、しかしそれは真横からきたティアナさんのオレンジ色の魔力弾によって撃墜される

レキ！大丈夫？ごめん、弾詰まりしちゃったから

なんとか無事ですよ…エリオ達は？

準備が完了したみたいよ！弾幕展開できる？

任せて下さい！「ファフニール！！」

「おっしやあっ！撃ちまくるぜ！！」

撃ち落としたティアナさんから念話が入る、申し訳なさそうに話すティアナさんに、心配ないと返すと僕はエリオ達の状況を聞く

ティアナさんは準備が出来たと答えてなのはさんの目眩ましとして弾幕を要請してきた

僕は両手に持ったファフニールをなのはさんに向けると大量の魔力弾を連続で、なのはさんに発射する

なのはさんはシールドで防ぐがこれは想定内だ…そして弾幕で出来た煙を引き裂くようなスピードでエリオがキャロのブースト魔法で強化したストラーダで突っ込んでいく

爆音と共にエリオは近くのビルに着地する

失敗か？…僕達の脳裏に不安がよぎった

「ミッションコンプリートです」

「うん、そうだね…皆お疲れ様！ちゃんと一撃入れる事が出来てたよ」

なのはさんのデバイスレイジングハートの電子音声で訓練スペースに響く

そしてなのはさんから訓練終了が告げられる、なのはさんのバリアジャケットの胸の所に少しだけ焦げた後があった

いくらBランクとはいえ全力の突撃で焦げ後だけなのは残念だけど今はそれだけ十分だろうな

SIDE：アルフィリオス

「いやあ…若いつて素晴らしいものだね…」

「年寄りくさいですよ？アルもまだ若いでしょう」

訓練スペースにあるビルの上から俺は先程の行動を一部始終見ていた
まだ荒削りだけど全員がかなりの素質があると思いつつながら呟くとネ
ツクレス状態のイーグルレイダーがため息をつくように話しかけて
くる

「イーグル…そんな事を言ってもな、この前線部隊じゃ俺が一番年
上なんだぜ？

年寄りって言っても間違いないだろ…」

「精神年齢なら低いんですがね」

それって…褒めてないよね？イーグル…

やばい…自分のデバイスに泣かされそうだ…

とりあえず一人でいたら泣きそうだから皆の元へ足に向けて歩きだす

「ようす！お疲れ様…」

「アルさん、ちゃんと一人で起きたの？」

なのはよ…まず最初にそれを聞きますか…

しかもなんか子供扱いっぱいし

まあ気にしないでおこうか…

「ヴィータの愛情を込めた一撃で一発だったな」

「それは愛情じゃなくて怒りなんじゃ…」

本当に一週間でコイツら俺に言うようになったな…

呆れてため息をつこうとした時にふとスバルのローラーブレードから焦げた臭いがした

視線を向けるとローラーから煙が吹き出していた、スバルはそれに気づいていなさそうだ…仕方ない教えてやるか

「スバル…ローラーから煙が出てる」

「うえ！？あああつ！やっちゃった…完全にオーバーヒートだ…」

「ティアナのアンカーガンも限界だよな？」

「はい…騙し騙しです…」

俺に指摘されるとスバルはローラーブレードを抱え込むと肩を落として落ち込む、こればかりはどうしようもねえよな…

次に俺の視線はティアナのアンカーガンに向けられる、ティアナに聞いてみると結構ガタがきているとの事だ

コイツはそろそろ良いかもしれないな…新デバイスを渡してもそれ

に無いと訓練出来ないしな

「なのは、そろそろ変えても良いんじゃないか？多分コイツらなら大丈夫だろう」

「そうだね…うん、皆新デバイスに変えちゃおうか」

「『『『新、デバイス？』』』」

俺となのはの言葉にレキ以外のフォワードメンバーは声を揃えて聞いてくる

仲が良いな、レキ…合わせないとおいてかれるぜ？

「なんか無償にアルさんに剣を向けたくまりました」

今、お前が俺に向けてんのは銃口だぜ？

間違えるなよ…ごめん、悪かったから魔力弾を生成しないで…

「ま、まあ詳しい話しは飯を食べてからにするか、今はシャワーを浴びてこいよ…良いよな？なのは」

「うん、それじゃあ皆で隊舎に帰ろうか」

とりあえずこの場にいたら、いつレキに蜂の巣にされるかわからないから隊舎に戻る事に決めた

隊舎に近づいた時、一台の黒い車が俺達の前に止まった、止まると同時に窓が開くとそこには

「アレ？あの車って…」

「八神部隊長にフェイトさん？」

エリオとキャラロが疑問を言葉にだす、というかはやての奴どっかに出かけるのか？

俺が質問しようとした時にフォワードメンバーがワラワラとフェイトの所に集まっていく

「これってフェイトさんの車だったんですか？」

「そうだよ、地上での移動手段なんだ」

スバルがフェイトの車を見ながら少し珍しそうにして質問を投げ掛けるとフェイトはやりわりと笑いながら答える

「皆、訓練の方はどないな感じじゃ？」

「まあボチボチって感じだな」

「先輩は、まだ訓練に参加してへんやん」

「まあな、だけど早起きしてちゃんと見にいつてるぞ？」

「そのセリフはヴィータが起こさずに言っただけじゃもんや」

つく！痛い所をつく！！

急所をつかれた俺は胸をおさえながら膝をつく、しかしながら皆慣れてしまったのか大した反応はなかった

「はやてちゃん、今日は何処かに行くの？」

「うん、聖王教会に用事があるんや」

「カリムのところ…：そっぴや最近会いに行つてねえな」

さめざめと泣くアルフィリオスに大した反応をせずになのはとはやては話を進めていく

聖王教会という単語が出てきた時にアルフィリオスは復活して話に参加する

「先輩、さすがに遊びに行くわけやないから、同行はできへんよ？」

「わかつてるよ、まあ気いつけてな…：カリムによろしく」

「うん、伝えておくで

ほな皆も訓練を頑張つてな」

「お昼には戻る予定だから一緒に食べようね、エリオ、キャラ」

「はい！」

会話を終えるとフェイトは窓を閉じて車を走らせる

エリオとキャラは車が見えなくなるまで手を振っていた

「アルさんつて聖王教会にも知り合いがいるんですね」

「ん？まあな…：聖王教会ははやてを通じて知り合つたのがほとんどだけだな…：ほら、お前らはシャワー浴びに行けよ

それとレキ、ファフニールの調整するから渡してくれないか？」

「わかりました、お願いしますね」

スバルが興味深々な顔で聞いてくるので軽く説明をするとファフニールの整備を思い出してレキに言うつとレキは十字架型の待機状態であるファフニールを俺の手に乗せる

「レキのデバイスはアルさんが調整するんですか？」

「うん、ファフニールはアルさんが設計したものであるから整備はアルさんじゃないと難しいんだ」

「そついう事だから、またな〜…」

ファフニールを受け取るアルフィリオスを見てエリオは不思議に質問をする、レキは頷いてからファフニールについて説明をしていくアルフィリオスは手をヒラヒラと動かしてデバイスルームに向かうためその場から立ち去っていく

機動六課 デバイスルーム

デバイスマスターであるシャーリィーは新人たちの新デバイスの最終調整をしていた

いつでも動かせるように丁寧かつ迅速に手を動かす、その時デバイスルームのドアが開かれた

「おっす！調子はどうだ？」

「アルさん、順調に皆仕上がってますよ」

入ってきたのはアルフィリオスだった、その手にはレキから預かったファフニールが握られていた

シャーリイは横目で確認をしてからアルフィリオスの問いに答える

「へえ…コイツらがそうか、皆手を込めてんだろ？」

「はい！特にスバルのマツハキャリバーは特にてを加えましたよ、ウイングロードをマツハキャリバーからも出せるようにしたんです」

「ありや先天系の魔法だろう？よく組み込めたな…俺も一度は試したけど出来なくてさ」

シャーリイは凄いなだな」

「いやそれほどでも無いですよ、それよりファフニールを持ってきましたけどメンテナンスですか？」

調整槽に浮かぶデバイスを見ながら、アルフィリオスが質問をする
とシャーリイは握り拳を作ってから答えると特に頑張ったデバイスについて教えると、アルフィリオスはスバルが使うウイングロードは難しいなとしみじみに思うと空いてる機材を立ち上げてからファフニールの調整を始める

シャーリイは照れながらアルフィリオスが手に持っていたファフニールについて質問を投げ掛ける

「ああ…コイツはシステムが普通と違うから俺が調整しないといけないんだよな…」

「私に頼めばやりましたよ？ファフニールやイーグルレイダーは少しシステムが気になりますし」

「お前にはスバル達の方に専念して欲しいんだよ、アイツらはまだヒヨッコだからな

ちゃんとしたものに仕上げて貰いたいからよ」

「アルさんって、意外に面倒見がいいんですね」

「意外は余計だ…」

シャーリーの質問にアルフィリオスはパネルを操作しながら答えていくとシャーリーがメンテナンスは自分も出来たと言うとアルフィリオスは新デバイスの方に目を向けてから答える

アルフィリオスの面倒見の良さにシャーリーは意外そうな声を上げるとアルフィリオスは不機嫌そうに返事をして作業に集中する

シャワーと朝食を終えたレキ達はデバイスルームに集まっていたデバイスルームにはシャーリーとリン、そしてアルフィリオスがいた

スバル達の手には調整を終えたデバイスが渡されて今、説明がされようとしていた

「ごめんごめん、お待たせー」

「ナイスタイミングです、なのはさん
今から機能の説明をするところなんですよ」

「そっか、ならちようど良いかな？」

ドアが開いて少し慌ててなのはが入ってきたシャーリーが手を軽く合わせてから笑顔を浮かべて答える

ちようど良かった事に安堵の息をもらすとさっそくデバイスの説明に入る

「皆のデバイスには幾つかのリミッターがかけられていて、各々が扱える段階になったら外していくんだよね」

「あの、なのはさん達にもリミッターはあるんですか？」

「うん、私達はデバイスだけじゃなくて本人にもかかっているんだよ」

「このリミッターは

聖王教会の騎士カリムかクロノ提督にしか解除できないんですよ」

「げっ！？クロスケに頼まないといけないの！！」

リミッターの説明を受けるとティアナが隊長達にはリミッターがあるのかと聞くとなのはがデバイスと本人にもかかっていると話を聞くとフォワードメンバーは、驚きを隠せなかった

ラインがリミッターの補足をしている時にアルフィリオスが心底嫌そうな声を出す、なのは達は何事かと思いアルフィリオスに視線をむける

「アルさんはクロノ提督と犬猿の仲なんですよ、性格が真逆だから」

「ああ…なるほど…」

「俺はアイツに頭下げるくらいならカリムに解除して貰った方がいい！」

レキが呆れたように説明をするとなのはは納得したように頷くアルフィリオスはと言うとクロノだけは頼まないと宣言していた

「そういえば、アルさんもかかっているんですよね？」

「ん？ああ…俺は元々が総合Aだから2ランクダウンさせてBランク、お前らとおんなじだな」

「Bランクまで下げてたのにヴィータ副隊長に勝てるなんて凄いですね」

「あの子、魔力ランクⅡ強さにはならないぞ？」

魔力ランクが低くても勝てる手段なんざいくらでもあるんだよ」

リミッターの説明を聞いた所でスバルがアルフィリオスに質問を投げ掛けるとアルフィリオスは指折りで数えて自分の状態を教える

アルフィリオスの魔力ランクを聞いてエリオが一週間前の模擬戦での事を思い出しながら言うアルフィリオスは呆れたように返す

アルフィリオスの言葉を聞いてフォワードメンバーは今日の訓練を思い出した、魔力ランクが上なのはのシールドをエリオは貰いたアルフィリオスの言う通り、魔力ランクⅡ強さで無いことの証明であつた

アルフィリオスの話しが終わった時に突如六課に警報が鳴り響く

「このアラートは!？」

「第一級警戒体勢!？」

「グリフィス君!!どうしたの？」

《聖王教会からの出動要請が入りました!》

いきなり鳴り出したアラートにフォワードメンバーは騒然とするのかなのはは指令室のグリフィスに通信を繋ぐ
グリフィスはアラートの内容を簡潔に伝えると今度ははやてが通信をいれてくる

《なのは隊長、フェイト隊長、グリフィス君それとアルフィリオス
陸尉!》

(今…俺の事ついでに言わなかったか?)

《はやて、状況は?》

はやてがモニターで各々の名前を呼びかける中でアルフィリオスは
ツッコミを入れる

はやてのモニターの隣にフェイトが通信を入れてくる

《教会調査団が追っていたレリックらしきものが発見、場所はエ
イリ山岳丘陵地区、山岳リニアールを移動中》

《移動中って…》

「まさか…」

「リニアジャックつてところだな、ガジェット共か？」

はやての報告にフェイト、なのは、アルフィリオスは真剣な表情をする

アルフィリオスの言葉にはやては頷くと報告を続ける

《先輩の言う通りや、中に侵入したガジェットがリニアレールを暴走、数は30は最低でもある

中には新型もあるとの報告や…皆！いきなりのハードミッションやけどいけるか！？》

「……はい！」「……」

《いいお返事や…なのはちゃん、フェイトちゃん、リインに先輩はフォワードのサポートをお願い出来るか？》

「《「了解！」》」

「ああ、任せろ！！」

状況を説明したはやてはフォワードに呼びかける
フォワードメンバーは声を揃えて答える

その次になのは達にサポートを頼むと、四人とも了承する

《ほんなら、機動六課…出動！！》

全員の意思を確認するとはやては前線フォワードメンバーに号令をかける

今、機動六課のファーストミッションが開始する

EP05：新しい力と初出動（後書き）

どうもえのきです！

割り込み投稿をすると更新したことにならないとようやく気付いた今日この頃です

七夕小説を見てないかた、見て下さいね！

さてとようやくファーストアライトですが本格的な戦闘は次回からなんですよね

アルフィリオスとレキの活躍を楽しみに待って下さい

では次回予告をします

レキ「秘めたる力は巨大なもの、幼き少女はその力を使えるのか？
大丈夫！皆がついてるだから心配しないで、キャロ

次回魔法少女リリカルなのはStrikerS～夜天に舞い踊る荒鷲～EP06：一緒に翔ぼう にテイクオフ」

ではでは、このへんで

EP06：一緒に翔ぼう（前書き）

ようやく仕上がりました！

EP06です！

アルフィリオスとレキのデバイスを展開するときイメージソングとして

アルフィリオスは『WILD FLUG』

レキは『絆を信じて』

どちらもスーパーロボット大戦OGで使われています
良かったら聞いてみてください

EP06：一緒に翔ぼう

アラートが鳴りアルフィリオス達はヘリに乗り込み、現場である山岳丘陵地区へと向かっていた

「いきなり新デバイスでのぶっつけ本番になったけど練習通りで大丈夫だからね」

「はい」

「大丈夫です」

「問題は無いでしょう」

ヘリの中でなのは少し心配そうにしながらフォワードメンバーに呼びかける、スバル、ティアナ、レキの三人は特に緊張も無く答えるが問題はエリオとキャロであった

「エリオにキャロそれにフリードも頑張るのですよ！」

「は、はい！！」

明らかにガチガチ緊張しているエリオとキャロにリインはガッツポーズをして励ますと二人は固くなりながら答える

「危なくなったらなのはやフェイト、リインそれに俺がなんとかすっから思いつきりやれよ…あぐあぐ…気楽にしとけよ…もぐもぐ」

「アルさんは気を引き締めて下さい！なんでおにぎりを食べてんですか！？」

「レキ…これはおかかだ…間違えるなよ」

緊張している二人に対面して座っているアルフィリオスが声をかけるが何故か手にはおにぎりが二つ握られていた

レキはため息まじりに指摘をするとアルフィリオスは真剣な表情をしてからおにぎりの中身を見せる

レキは黙って双銃形態のファフニールをアルフィリオスに向ける

「レキ！？落ち着くです！

こんな所で射つたらまずいのですよ！！」

「止めないで下さいリイン曹長！

あの人の頭を撃ち抜きたくて仕方ないんです！！」

「俺はファフニールの調整で朝食を食べてないんだよ、だからそう目くじらを立てるな…げふ」

双銃をアルフィリオスに向けるレキにリインは慌てて止めに入るとアルフィリオスは特に気にせずにおにぎりを食べ終わるとお茶を飲んでから、一息つくと軽く背伸びをする

その様子を見てなのは達は呆れたようにため息をつくと笑みを浮かべた

アルフィリオスの行動が少なからず緊張をほぐしていた、しかし一人だけ表情を暗くしているものがいた、それはキャロだった
レキはファフニールをしまうとキャロの横に座る

「緊張してる？」

「えっ？そこまでは…緊張はしてないよ…」

「無理をしなくていいよ、最初は皆おんなじだしね…でも一人じゃないよ、皆がいるからなんとかなるよ」

「そうだね…うん、頑張ってみる…」

レキはキャロの方を見てから聞くとキャロは少しだけ自信無く答えると励ますように言いながら肩を叩くレキ

レキの励ましに少しだけ自信を持ってキャロは答えるとヘリ内部に通信が入る

《ガジェット反応！空から！？》

《航空観測隊から報告、反応を多数確認！》

「最近のガジェットは空が飛べんだな…お兄さんは驚きだよ、ありがた迷惑だな」

「そんな呑気な事を…」

通信の内容を聞くとアルフィリオスがわざとらしい声を出してから言っとティアナがそれにツッコミを入れる

「アルさん！私とフェイトちゃんと一緒に制空権の確保をお願いしまする？」

「ああ、制空権を確保しねえとリニアには乗り移れないからな
ヴァイス！開けてくれ！！」

「うつす！頼みやしたぜ！！アル、なのはさん！」

状況を確認するとなのはがアルフィリオスに呼びかける

制空権の確保に賛同したアルフィリオスはヘリパイロットのヴァイ
ス・グランセニツク陸曹に呼びかける

ヴァイスは了承するとヘリのハッチを開ける

なのはとアルフィリオスは降下するためにハッチに近づいた時にア
ルフィリオスは足を止めてキャロに視線を合わせるようにしゃがみ
込む

「キャロ…一つ、いい言葉を教えとくな…なんとかなる、だ
俺はもう少し楽にしてなんとかなるっしょって言ってる」

「なんとか、なる…」

「自分に自信がねえ時に言うと思議とやれる気がするんだ
もし自信がなかったら試しに言ってみな」

アルフィリオスに話しかけられてうつ向いていた顔を上げたキャロ
は反芻するように呟き、アルフィリオスは立ち上がるとニンマリと
笑ってからハッチに向かう

「それじゃあ、皆…初めての实战、おっかなびっくりじゃなくて思
いっきりいこう！！」

「…………はい！！…………」

「それじゃあ、私は先に行くね」

ハッチの前に立ったのはフォワードメンバーに振り返ると握り拳を作って言うとはッチから勢いをつけて飛び降りる

アルフィリオスも続けていこうとしたが途中で止まってしまっ

「うわゝ…高ゝ…ヴァイス？もう少し地面に近「さっさと行く！！」
なああああーっ！！？」

高度が高いことに怖じけづいたのかヴァイスに高度を下げるように言った瞬間、レキによってアルフィリオスは蹴り落とされた

「ったく…恰好つけたならそのまま行けば良いのに…」

「アルさんは、大丈夫でしょうか？」

「これ以上の高度からの降下も経験あるから大丈夫だよ」

エリオは心配そうにアルフィリオスの無事を聞くとレキはまるでもう飽き飽きのようにため息をついて答える

「まったく、レキは手荒な真似をするなあ…」

「緊張を解すためとはいえふざけすぎだからですよ」

レキに蹴り落とされて地表に向けて落下中のアルフィリオスはイー

グルレイダーに呑気に話しかけていた、イーグルレイダーは手慣れた様に返答をしていく

「さてと地上に激突しても困るからそろそろ行くとしますか…イーグル！」

「すでにスタンバイは完了しています」

「ならいくぜ、イーグルレイダー…セット、アップ!!」

アルフィリオスの掛け声と共に赤いベルカ式の三角系の魔方阵が展開するとまばゆいばかりの魔力光が辺りを包む

待機状態のネックレスが複合機関銃へと変わると、同時にアルフィリオスの身体をバリアジャケットが包む黒い武装隊のアンダースーツに黒いロングコート、更に銀色の具足の様な装甲が脚部を覆うと複合機関銃となったイーグルレイダーを真上に向けて、引金を引くと魔力光を吹き飛ばすように砲撃が放たれる

「ロングアーチフ、アルフィリオス・ラーゼンハルグ！行くぜ!!」

アルフィリオスはその言葉と共になのは達が向かっているであろうガジェットの航空隊に向けて飛翔する

アルフィリオスが蹴り落とされた後、リインによるミーティングが開始された

「任務は二つ、レリックの確保とリニアールの停止です

レリックはここ七両目に安置されているはずですが、スターズかライティングそのどちらかがレリックの確保をしてください、それで「モニターを表示してラインが説明をしていき空中で一回転をしてから笑顔を浮かべ

「私も現場に降りて管制を担当するです！」

「新人ども、隊長達の働きで無事に降下ポイントまで来れたが準備は良いか!?」

「「「「「はいっ!」「」「」「」

陸士の制服から白い騎士甲冑に変えるとヴァイスから降下ポイントについたと知らせが入る

フォワードメンバーは一斉に返事をする。と先頭車両を担当するスターズがハッチにスタンバイをする

「スターズ3、スバル・ナカジマ！」

「スターズ4、ティアナ・ランスター！」

「「行きます!」「」

コールサインを言ってから勢いをつけて飛び降りる。ヘリは速度を落として後部車両へと移動をする

「次!ライトニング!レキにチビ共、気いつけてな」

「了解です!グランセニック陸曹」

「「はいつ!」」

ヴァイスに呼びかけられるとレキとエリオ、キャロはハッチに整列する、そしてレキは一步踏み込んでからエリオ達に向き直る

「僕が先に降りて降下ポイントをおさえるね…二人とも気をつけてきてね」

「レキも気をつけて!」

「直ぐに私達も合流します!」

「うん、ライティング5…レキ・アーベント、行きます」

降下手順を確認するとエリオとキャロはレキを心配するように言ってくる、レキは微笑を浮かべてからコールサインを言ってヘリから飛び降りる

「ファフニール、行くよ!」

「ああ、いつでもいいぜっ!」

「ファフニール、セットアップ!」

手に持たれた十字架に呼びかけると電子音声に応えレキは微笑してからファフニールをセットアップさせる

レキの目の前に水色のミッド式、魔方陣が展開すると魔力光が辺りを包む

十字架は基本形態である双刃剣に変わるとレキはバリアジャケットを展開する

アルフィリオスとは色の違う水色の武装隊のアンダースーツを身に纏うと白いジャケットが更に展開され両手と両足に装甲が展開される、それは動きを阻害しないように最低限の装甲だった

そして水色の魔力光を引き裂くようにレキはファフニールを振るうと後部車両に着地する

SIDE：レキ

僕が後部車両に着地するとそれより数秒遅れてエリオとキャロがバリアジャケットを身に纏って降り立つ

二人はバリアジャケットを見て感心の声を上げていた

皆さんのデザインは各隊長をイメージしたんですよ、レキのバリアジャケットも外套だけライトニングと同じなんですよ

リン曹長から念話が入ると僕は自分の外套とエリオ達のを比べると確かに同じであった

前はアルさんと同じロングコートだったからずいぶんと動きやすいから良しでしょう

「レキ！ガジェットが下まで来てやがる！！」

「エリオ、キャロ！ガジェットが仕掛けてくる！！」

ファフニールの警告に僕はエリオとキャロに注意をした時に足元から青いレーザーが飛んでくる僕は緊急で回避をすると車両の天井部を切り裂いて中に侵入する

車両内部には五体程のガジェットがいた

僕は迷わずにファフニールを握り直すとガジェットに向けて走り出す、そして近くにいた2体のガジェットを双刃剣で切り裂く

僕のファフニールの基本形態、名前はシフトSシングルと言うが攻撃力が高く、ガジェットを切り裂く事は容易いしかし取り回しがきかないため振るう方は一定のパターンしか持ち合わせていない

残りの三機に刃を向けた瞬間、上からエリオが屋根を切り裂いて突入をしてくと手近のガジェットを撃破する

その後を追うようにフリードが三機の中で壁際にいた一体に火炎弾を打ち込む

僕はその間に残りの一体の背後からファフニールによって突き刺す爆散するガジェットを確認するとエリオとフリードに目を向けると二人は特に傷はなかった

「ガジェットの掃討は意外に骨が折れそうかもね」

「それでも倒してかないとレリックは確認出来ないからやるしかないよ」

「そうだね、さてと次の車両に移ろうか」

爆散したガジェットを見ながらレキはため息まじりに話すとエリオはストラダーを持ちながら頑張っていこうと言う

レキもファフニールを持ち直してから頷くと屋根にいるキャロに声をかけてから次の車両に移動する

「アクセルシューター！」

「ハーケン、セイバー！」

「撃ち抜く、ブレイズバスター！！」

フェイトと合流したアルフィリオスとなのはは制空権、確保のために航空型のガジェットとの戦いを繰り広げていた

航空型はAMFを発動させることは無いが機動力と数が多いため、三人は簡単に全滅させる事はできなかった

ある程度片付いたところで三人は一ヶ所に集まる

「これで最後かな？」

「そいつはまだ早いかな…まだレリックを確保出来てないなら増援がくる可能性がある」

「…エリオ達…大丈夫かな…」

状況を確認し終えてからフェイトはエリオ達の事を思い浮かべ心配そうにしているとアルフィリオスは大きなため息をつく

「フェイト…」

「どうした？アルフィリ、ふわっ！？」

「ちつとはアイツらを信用してやれよ…お前がそんなんでどうすんだ」

フェイトは名前を呼ばれてアルフィリオスの方を向くといきなりアルフィリオスにデコピンをされ、情けない声を上げる

デコピンをしたアルフィリオスは呆れたようにフェイトに言う「フェイトは軽く額を抑えながら恨めしそうに見ていた」

《ライトニング小隊！六両目にて新型思わしきガジェットとエンカウントしました！！》

《航空型ガジェットの増援を確認！かなりの数です！》

緩んでいた雰囲気が一気に引き締まる、通信から入る情報を確認するとフェイト達の真後ろから航空型のガジェットが飛行してくるのが見えた

「なのは、フェイト！まずは航空型からだ、ライトニングの方が心配なのはわかるがコイツらを片付けないと手助けにもいけない」

「うん、そうだねアルさん」

「わかったよ、アルフィリオス」

アルフィリオスの言葉になのはとフェイトは納得をするとデバイスを構えて航空型ガジェットの群れにむけて飛翔する

六両目まで順調に来ていたレキ達の前にソレはたちふさがった

ソレは巨大な球体のようなガジェットがだった

「でえりあああつ!!」

エリオは魔力変換の一つである電撃を刃に纏わせてガジェットに斬りかかる

しかし刃はガジェットの装甲を貫かずに装甲表面で刃は止まっていた

「っ！堅い!？」

「エリオ!」

エリオの背後にいたレキは屋根の上まで移動すると、双銃形態にフアフニールを変形させてガジェットの上から装甲の一点にむけて集中射撃を行うが、ガジェットの装甲はヘコみすらしなかった

ストラーダの刃を受けながらガジェットはピンク色のフィールドを展開していく、それと同時にストラーダの刃に展開されていた魔力が解除される

さらに屋根の上にいたレキとキャロの魔方陣も解除されてしまう

「AMF!？」

「こんな遠くまで……」

魔力を解かれたエリオにガジェットは太いアームでエリオに攻撃を仕掛ける、エリオはストラダーを使ってアームを防ぐが徐々に押され始める

「エリオ！」

「エリオ君！」

「大丈夫！任せて！！」

エリオの言葉を聞いてレキは表情を歪める単純に力の差が大きすぎるからだ

（何か打開策は無いか？AMFから抜けるための策は！？）

エリオが頑張つて押し留めている中でレキは思考を巡らせてふと空が視界に入る

そして一つの考えが浮かぶとキャラコのほうに顔を向ける

「キャラコ！…竜召喚をしてくれないか？ガジェットのAMFから抜けて攻撃するにはそれしかない！！」

「無理です…私…制御できる気がしません…」

レキが竜召喚をキャラコに頼むとキャラコは顔をうつ向かせて首を振る

「キャラコ…竜召喚でなきゃエリオは助けられない、スバルさんやフイトさん達を呼んでる暇もない
だからお願いだ！」

「レキ君…」

「もし制御できなかったら僕がなんとかする…だから信じて僕を…自分を…キャラなら成功できるはずだから」

キャラの肩を掴むとレキはゆっくりと説明をしていく、そして自分を信じろと励ました瞬間、鈍い音と共にガジェットが姿を見せるガジェットのアームにはエリオが捕まっていた、気絶しているのである。その腕に力無くダラリと下がっていた

ガジェットはそのままエリオをリニアレールから放りなげる

キャラはそれを見て強く拳を握るとレキに目を向ける

「やります！私、やってみます！！」

「うん、いこうキャラ！」

レキはキャラの手を握ると放り投げられたエリオを追うように空中に身をなげだす

勢いつけて飛んだためエリオとの距離はどんどん縮まっていく

レキがエリオの手を掴んだ瞬間にピンク色の魔力光が辺りに広がる

「フリード…不自由な思いをさせてゴメンね…私、ちゃんとやってみるから、なんとかしてみよう」

「だから行くよ！竜魂召喚！！」

グローブ型ブーストデバイス、ケリュケイオンが光輝く中でキャラはフリードに優しく言う意識を集中させる

「蒼穹を走る白き閃光！我が翼となり、天を駆けよ！来よ、我が竜、

フリードリヒ…竜魂召喚!!」

キャラの詠唱が完了した瞬間ピンク色の魔力光を吹き飛ばすように
白い飛竜が翼を広げて雄々しく吠える

それは見事、竜召喚に成功したフリードの姿であった

「う…ここは…」

「エリオ、目が覚めたか…」

「大丈夫？エリオ君…」

「う、うん…大丈夫だよ、二人とも」

フリードの上でキャラに抱えられた状態で、エリオは目を覚ますと
自分の状態に気づいて頬を染める

レキはそれを見て微笑をするとフリードの手綱を引いて上空に飛翔
する

リニアレールまで近づいた時に球体型のガジェットがレーザーを射
ってくる

レキはフリードの巧みに操ってリニアレール並ぶように飛ぶ

「キャラ！砲撃を頼めるか？」

「はい！フリード、ブラストレイ…」

レキの指示をキャラに出すとキャラはケリュケイオンを前に出して
フリードに魔力を送るとフリードは巨大な火球を作り出す

「ファイア!!」

小さい時とは比べ物にならない勢いの炎をガジェットに向けて放つ
しかしガジェットはアームをシールド代りに防ぐとレーザーを放つ
て反撃をしてくる

「やっぱり硬い…」

「あの装甲形状は砲撃じゃ抜きづらい、僕とストラーダがやる!」

「なら僕も手を貸すよ三人でアイツを倒そうか」

「うん!」

フリードの炎を耐えきったガジェットを見てエリオはストラーダを
構えて言うと、レキも同じ意見だと言い三人で倒そうと提案をする
とエリオとキャラは快く了承する

「我が請うは青銀の剣、若き槍騎士に祝福の光を」

「ファフニール…シフト^{アロー}A行くよ!」

「任せろ!レキ…カートリッジ、ロード」

キャラがケリケイオンを構えて詠唱して始めるとレキもファフニ
ールに指示を出す

ファフニールは柄からカートリッジを二つ排出すると弓のような形
に刃がスライドしレキはガジェットの方に腕を向ける

「猛きその身に力を、与える祈りの光を!」

「エリオ、先に僕が仕掛けるから続いて飛び出して!」

「わかったよ！レキ」キャロの詠唱が最終段階になったのを確認すると、レキはまるで矢を射るような動作をすると白い光の矢が出現する

そして背後にいるエリオに攻撃内容を確認するとガジェットに狙いをつける

「走れ！アスタニツシュ、グリッツ！！」

「行くよ！ストラダー！」

光の矢が凄まじい速度で放たれた瞬間、エリオはレキの肩を踏み台にして飛び出す

「ツインブースト！スラッシュ&ストライク！！」

エリオが飛び出した瞬間、キャロがブースト魔法を発動させる

レキが放った光の矢はガジェットのAMFで消える事なく直撃するシフトAでの砲撃は多重弾核と同じようになっていたためAMFで消される事がない、直撃を受けたガジェットはアームと武器であるケーブルを無くしていたがまだ稼働していた

エリオはキャロのブーストを受けてからリニアールの屋根に降り立つとストラダーのブースターを噴射してガジェットに向けて突撃をする

ブースト魔法で強化された刃はガジェットを容易く貫きエリオはそのままに切り上げる
爆散するガジェットを背にエリオはレキとキャロに手を振る

レキとキャロもフリードの上で同じように手を振って応えたとリンからレリックを確保したという報告が入る

リニアレールも徐々にではあるが停止をはじめていった

リニアレールの横でフリードに乗るライティング小隊をアルフィリオスは遠くから眺めていた

「いやあ…若いつて良いもんだな」

《アルさん、少し良いですか？》

イーグルレイダーを肩に担ぎながらライティング小隊を見ていたするとリニアレールにいたリンから通信が入る

「どうかしたのか？」

《実はレリックがあつた部屋に少し気になるコンテナを見つけたんですよ》

「気になるコンテナ？どんなのだ？」

《えっと、少し説明しづらいので来てもらえますか？》

リンの通信にアルフィリオスは答えるとリニアレールに向けて飛翔する

リニアレール内に入るとリンは一つのコンテナの前に浮かんでいた

「リイン、これか？気になるってのは」

「はいです、実はこのコンテナから魔力反応が出ているんです」

「魔力反応？これにか…見たところただのコンテナにしか見えないけどな…ん？これは」

コンテナの前にいるリインに事情を聞くと魔力反応を感知したと聞くとアルフィリオスは、コンテナを触らないように調べるとコンテナにベルカ式の魔方阵のようなモノを発見する

「ずいぶんと煤けてんな…払うくらい良いよな？…っ！？」

魔方阵を発見したが汚れがヒドイため手で払おうとしてコンテナに手を触れた瞬間、一瞬電流がながれたような衝撃が身体を駆け抜ける

「アルさん！？大丈夫ですか！」

「なんともないな…心配しすぎ…？
なんか聞こえないか？」

慌てて手を離れたアルフィリオスにリインは心配をしながら聞くとアルフィリオスは大した事は無いと手を動かした時、何かが外れる音が部屋の中に聞こえる

すると空気が抜ける音がコンテナの上部から聞こえるとゆっくりと持ち上がっていく

リインとアルフィリオスはお互いの顔を見てから恐る恐る中を覗き込む

「っ！これって生体ポッド？」

「アルさん、中に誰が入ってるです！」

「リンサイズくらいの女のこ？」

コンテナの中にはデバイスの調整槽みたいな装置がありその中にはリンと同じ大きさで髪が緑色のロングヘヤーの少女が丸くなって眠るように入っていた

目の前の少女についてはまったくわからないがアルフィリオスは面倒なものを開いたと肩を落とした

EP06：一緒に翔ぼう（後書き）

どうもえのきです！

本来なら昨日の昼頃に上げる予定でしたがかなりおくれてしまいました

まだレキのキャラ説明が出来てませんがいずれ書き上げます！

さて最後に出てきた新キャラ含め次回で謎解きを出来るように頑張ります

これからも応援よろしくお願いします！

アルフィリオス「生体ポッドに入った謎の少女…彼女は何者か？

謎があるなかでも日常は進んでいく

次回、魔法少女リリカルなのはStrikers～夜天に舞い踊る
荒鷲～EP07：過ぎていく時間 にテイクオフ！」

次回もお楽しみ！」

EP07：過ぎていく時間（前書き）

かなり時間がかかりました

スランプ気味で支離滅裂に見えるかもしれませんがよろしく願います

EP07：過ぎていく時間

「まったく…とんだ拾いモノをしてきたんやな、先輩…」

機動六課のデバイスルームにて六課の部隊長八神はやては目の前にある調整槽を見ながら拾ってきたアルフィリオス・ラーゼンハルグに言う

「開いたものは仕方ないだろ？…というかやっぱりこの子は融合騎なのか？」

「ええ…しかも古代ベルカ時代に作られたんだと思います」

「古代ベルカやと夜天の書とおんなじくらいやろ？」

「どうしてリニアールの中にしかも封印処理されていたんやろな」

「単純に考えて遺跡で発掘されたのを密輸して売るつてのが妥当ですね…」

はやてに文句を言われて少し面倒そうにアルフィリオスは返すとシャリーに質問を投げ掛けると、モニターを開いていたシャリーはパネルを操作しながら答える

調整槽に浮かぶ少女を見ながらはやては疑問点を上げる

後からわかった事だがコンテナには封印処理が施されており特定の人間出ないと開けられない仕組みになっていた

アルフィリオスはその特定の人間に適合したためにコンテナの封印が解除されらしい

はやての疑問にシャーリィーは少し言いづらそうにしてから仮設を述べるとはやてとアルフィリオスは顔をしかめた

「…ところでこの子は主^{ロド}が居ないんだろ？目覚めたら六課に置いてくのか？」

「あ、それなんですがアルさんがコンテナの封印を解いた事でアルさんが主として登録されてるみたいなんです」

「「はい？」」

「それってその子が先輩とユニゾンをするって事なんか？」

話題を変えるようにアルフィリオスがシャーリィーに聞くとシャーリィーは思い出したように言ってくる

突然の事にはやてとアルフィリオスは間の抜けた声を出すとはやてが調整槽の少女を指でさしてからアルフィリオスを指でさして聞くとシャーリィーは頷く

「今、この子は前の主のデータを削除してアルさんの魔力に合わせで組み換えをしているんです
だから目覚めた時にはアルさん専用の融合騎になっています」

「ユニゾンに置いて、融合時に起きる事故を無くすための処置ってわけか…使用者じゃなく融合騎が合わせるって形をとる、理想って言えば理想だがなんか気に入くないな」

シャーリィーの説明を聞くとアルフィリオスは頭をかきながらため息をつく和不機嫌そうに言う

束縛を嫌う彼にとって他者に決められるという行為は一番、虫酸が走るからである

「なら先輩は、この子をどうするん？」

「主になったのは仕方ないが自分で決めさせるさ…融合騎って言うてもそれくらい自由はある」

アルフィリオスの隣にいたはやては少女の処置について聞くとアルフィリオスは目を覚ましてから決めさせると答える、はやてはそれを聞いて彼らしいなと思った

その後、調整槽から少女を出して医務室に寝かせる事にしアルフィリオスとはやては隊舎に向けて歩きだした

「初出勤からいろいろあつたもんだな…ああ、疲れた…」

「お疲れ様やな、先輩はもう寝るんやろ？明日からフォワードのデバイスの調整を兼ねた訓練をやるってなのはちゃんと言ったで？」

「そついや言ってたな…忘れてたぜ…眠くないからハーモニカでも吹こうかと思っただがな…お前が俺の下にいた時、よく吹いてたの覚えてるだろ？」

アルフィリオスは首を解しながら言う隣を歩いていたはやてが質問を投げ掛けるとアルフィリオスは制服の懷に手を入れてハーモニ

力を取り出して見せるそれを聞いていたはやては怪訝そうな顔をする

「確かに覚えはあるけども先輩って吹いたり拭かなかったりしてた
やん、私が頼んでも今日は気分が乗らないとか断ってたやん」

「まあな…でもなアレには法則があつてな、その日に変わった事が
あつた時だけ吹いてたんだよ、はやてが頼んだ時にはなんもなかつ
たから吹く気にならなかったんだ、また聞いてみるか？」

「そうやな、久しぶりに聞いてもええかな？」

アルフィリオスははやてに聞かれると少し苦笑していうとハーモニ
力に見せながら、アルフィリオスははやてに質問をするにこやか
な笑顔をみせてからはやては答える

「
♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪
」

隊舎近くにある海を背にアルフィリオスはハーモニを奏でていく
その音色はとても穏やかで心が休まるようだった

はやてはアルフィリオスの隣に立ちながら目を閉じて音色に耳を傾
ける

「
♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪… 4年前の航空火災から部隊を立ち上げたい
なんて言い出して本当に立ち上げちまうとはな」

「皆が協力してくれたのもあるけど先輩の言葉が一番やったよ」

「冷やかしに行くってやつか？」

「ちやうよ！自分のやりたいようにやれ

先輩がそう言ってくれたから自信がついたんや…それに、冷やかしに行く言っても先輩は私の事を助けてくれるそんな気がするんや」

演奏をやめるとアルフィリオスは昔を思い返すように言うとはやては自分だけの力じゃないといい、アルフィリオスの言葉がそのきっかけだと話す

アルフィリオスは少しからかうように言うとはやてはそれを否定するよに言い少しだけ嬉しそうに説明をする

「ったく、生意気言うな

後輩のくせに…

俺はもう寝るからな…おやすみ」

「あいた！…おやすみなさいや、先輩…」

嬉しそうにはやての頭を小突くとアルフィリオスは背を向けて隊舎に早足で歩きだすと片手だけ動かして挨拶をする

はやては小突かれて驚いていたが少しだけ嬉しそうにしながらアルフィリオスを見送る

SIDE：アルフィリオス

耳元でアラーム音がするおそろくイーグルがお節介で設定したんだろつな、しかしこの程度で俺の眠りは阻止できはしない！

しかしながら今日の布団はいつに無く暖かいな…まるで人が入ってるような…

「ん…んん…」

あれ？今声がしなかった？しかも肉声…なんか猛烈に嫌な予感が…俺はそつと目を開けた

「…どなたですか？」

そこには緑色のロングヘヤーのエリオやキャロくらいの少女が寝ていた

しかも俺は少女を抱き抱えるような体勢だった…何故に？とりあえずまあ俺が出来る事は一つだな…

「…じえ、じえろにもー…っ！…！」

「むう……つるさい…」

目の前の現実から目を背けるように俺は意味不明な叫びを上げるそしてその叫びで少女はうるさそうに唸ってからゆっくりと身体を起こす

まだ寝ぼけているのか瞳が呆けていた、だけど徐々に意識がはっきりしていくと少女はにこやかに笑いかけてくれた

「おはようございます、主^{ロード}…どうかしたんですか？そんなに騒いで」
「どうかしたじゃない…」

寝る前は誰もいなかったのに起きたら人が寝てました、なんてやら
れて騒がない人間はいないぞ？…ん？主^{ロード}？」

少女は欠伸をしながら俺に挨拶をして不思議そうに聞くと、俺は身
体を起こした少女の肩を掴むと騒いだ訳を教えてから、ふと疑問に
思った事を口に出す

今この子俺の事を主^{ロード}っていったよな？

それにこの髪色ってまさか…

「お前^{ロード}って昨日の融「アル！何かあったのか！？凄い叫び声が…」

…わーお…バッドタイミング」

少女の事を聞こうとした瞬間、ヴィータが部屋に入ってくる

ここで一つ問題が…

俺は少女の肩を掴んでいる、入室した訳を問いただすためにしかし
ながら事情も知らない人間がこれを見たら、どう思うか俺が少女を
連れ込んだという見解にいたる、更に欠伸をした事で目尻には涙が
ある…どうなるか

「アル…なにしてんだ！てめえは！！」

「誤解だ！話をき、げふお！！」

こうなるわけだ…俺の顔面にグラーファイゼンがめり込んで吹き飛
ばされた…

「…なるほどなあ、先輩の事情はよくわかったでその子には手を出してないんやな？」

「ああ…わかってくれたなら良いが、バインド外してくれないか？」

ヴィータに吹き飛ばされた後騒ぎを聞き付けたはやてや隊長達に叩き起こされて俺は今正座をさせられている、バインド付きで…

ちなみに寝ていた少女こと、融合騎の少女は今は俺の真似をして正座をしながら俺の顔を眺めている

俺と視線が合うとニッコリと笑顔を見せてくれる、どうしよ…凄く和む

「……………」

正面から殺気を感じる目を向けると笑顔なのにどす黒い何かを背負うはやてと今にも俺に殴りかかりそうなヴィータがいた

なんとかしないと殺られる！？

俺は内心焦りながら助かる方法を探した

「名前！俺はお前の名前聞いて無かったな？」

「そうでしたね、私はセレス…ベルカの融合騎、疾風の舞姫セレスです！よろしくお願いします、主アルフィリオス」

「俺の名前はわかってるんだな…セレスか、俺の事はアルと呼んでくれ

後、敬語は必要ないからな？」

セレスと名乗った少女は凄く堅い挨拶してくる、俺は敬語と堅い挨拶は必要ないと言うとセレスは不思議そうに首を傾げた

「アルはちゃんぽらんだからな、堅い言葉は必要ねえんだよ」

「せやで、その人はいいい加減な人だから必要ないんやで」

「二人とも言葉がヒドイ気がします」

「ふんっ！！」

凄くいい顔をしてセレスにヴィータとはやては教えていく、内容はとてつもなくひどかったがな

二人の言葉にセレスは何か考えていたが手をポンと叩く

「うん、わかった

アルはいいい加減でちゃんぽらんだから敬語は無しって事でいいんだね？」

「真っ正面からそんないい笑顔で言われると凄まじく傷つくんだけど…」

自分はいいい加減なのは認めるけど、こんなにいい笑顔で言われると正直こたえる

しかも本人は何かあったの？みたいな顔をしてる天然だな…間違いない

「あ…忘れてた、ねえアル！私が入ってたコンテナの他におんなじのはなかったの？」

「リニアレールにあったコンテナは、お前のしかなかったぞ」

「リニアレール？遺跡からじゃないの？」

「アル達が見つけてくれたんだと思ってたのに…」

「どうした？何かまずいこともあるのか？」

俺を見ていたセレスは少し慌てたように質問をしてきた、俺はありのまま報告をするとセレスは顔を暗くして落ち込む、ただ事ではないと思いセレスに事情を聞く事にした

「実は私にお姉ちゃん…姉妹騎つてのが正しいかな、がいるんだよね一緒に所に安置されてただけアル達が発見してないなら何処にいったのかな…」

ねえ、探すのを手伝ってくれない？融合騎が主に頼み事をするのは本来おかしいんだけど頼れる人がいないから…」

「…手伝ってやりたいが俺は六課に所属だからそう簡単に単独じゃ動けないな」

「それは私らも同じやな、手伝いたいけど場所も特定出来ないのにおいそれと部隊は動かせへんしな、かと言って隊員を単独で動かすのもあかんしな」

「そつか…なら仕方ないよね…」

セレスの事情を聞きなんとかしたいとは考えたが俺は管理局員…いくら不真面目でもさすがにマズイってのはわかる…
だがセレスをほっとけない…どうするか…

「はやて…聖王教会やクロスケに要請してみないか？
俺達で出来ないならそれしかないと思う」

「せやな…私もおんなじ事を考えてたで
次元航行艦や騎士団ならまだ自由が効くやろ、だけどあまり積極的
にはできへんで？」

「無いよりマシだ…セレス」

「…なに？」

何とかしたいと考えた俺ははやてに提案をすると同じ事を考えていたのか頷いてくれた
俺は微笑してからセレスに話しかける、顔をうつ向かせていたセレスは俺の方を向く

「お前の姉さんの特徴を教えてくれるか？
俺達じゃ難しいけど少しいろんな奴に掛け合ってみるからさ」

「アルにはやてさん、ですよな？
ありがとう」

「うん合ってるで、礼はいらへんよ」

ただしお姉さんが見つかるまではここにいて貰うで？」

「はい！わかりました！」

俺達の言葉にセレスは満開の笑みを浮かべる、なのは達も賛同してくれたようで特に意見もなくセレスに挨拶をしていた…ところでさ…

「いい加減、バインド解けよ！！」

「ああ忘れとつた」

俺の言葉にはやては今思い出したように話すがその笑みはわざとらしいものだった

「髪の毛はショートカットで金色…目付きは少しキツめと…他には？」

「外見特徴はこれくらいかな…服装はその主の望んだのを着用しているからわかんないだね」

「じゃあ今セレスが着るのは先輩が望んだからなんか？
なんか私の騎士甲冑と似ているようやけど」

バインドを解かれたアルフィリオスははやてと共にセレスの姉の事を聞いていた

なのは達はそれぞれの仕事に戻っていつて今はアルフィリオスとは

やて、セレスの三人以外はいない

セレスの説明を聞いていて、はやてはふとセレスの衣服に目を向ける彼女が着ているのは、色こそは黄緑色だがはやての騎士甲冑と類似していた

「これはアルの見てきた服装から選んだよ、主の意識がない場合は私が選ぶ事ができるの、そっかはやてさんのだったんだ」

「着替えとかはどうすんだ？」

「戦闘時は魔力で作成した騎士甲冑を纏うけど普段は皆が着ている服かな」

「なら私のおさがりか何かを渡しておこうか、ライン用に何着があるからちようどええやろ」

自分の衣服に手を当てながら説明をするとアルフィリオスが質問を投げ掛ける

セレスは人差し指を口元に当てながら答え、はやてが普段から着る服が必要だと言って自分のお下がりを渡すと言う

「ありがとうね、はやてさん」

「暇を見つけて服を買いにいかないとな...」

「先輩は衣服に詳しい方や無いから私も一緒に行くけどええよな？」

「ああ、そのときはよろしくな」

セレスははやてに礼を言う

服と聞いてアルフィリオスが購入するかと、計画を練っているとはやてがその時はついていくと言ってきた
これにアルフィリオスは快く了承する

「あつ！肝心なお姉ちゃんの名前を忘れてた、探してくれる人たちにはお姉ちゃんじゃ通じないもんね…」

「そうだな…俺もすっかりしてたな」

「お姉ちゃんの名前はライナ、迅雷の戦姫ライナ
本名を知ってるのは私とお姉ちゃんの主だけだから言えば話しは聞いてくれるはず」

「ライナは気難しい子みたいやな」

話しを聞いていてセレスは姉の名前を言っていない事に気付くとアルフィリオスとはやてに説明をする

そして少し不安そうに言うとはやては冷や汗を浮かべて言うとセレスはゆっくりと頷く

「まあ何にせよ、みつけないや話しにはならないだろ…セレス、一つ言っておくな」

「どうしたの？アル」

「お前が六課のメンバーになっても戦闘には出さない、融合騎だから一緒にいるっただけで戦闘をさせるわけにはいかない
戦う理由が弱かったら怪我じゃすまないからだ」

「戦う、理由…」

アルフィリオスは背筋を伸ばしてから少し真剣な表情でセレスに話しかけると戦闘には出さないと言う

セレスは驚いていたが話しの続きがあるため黙っていた

アルフィリオスは戦う理由がちゃんとしていないセレスを戦闘に出したら最悪死なせてしまうと、説明をするとセレスは何も言えずにただ呟いた

「役に立たないから出さないんじゃないぞ？」

もしも絶対に譲れないものがあつて戦うなら俺は反対はしない
少し考えて欲しいんだ、融合騎としてで無くセレス本人としてな」

「わかった…アルが私の事を考えて言ってくれたってのはわかるよ、
考えてみる…難しいけどちゃんと答えをだすよ」

アルフィリオスの言葉を聞くとセレスはゆっくりと頷いて答える

「まあ先輩の言葉も大事やけど先ずは六課になれて貰わんとな
入隊するだけじゃ仲間になったとはいわへんからな」

「そうだな、セレスは先にそっちを優先するべきだな」

「仲良くなれるかな？皆と」

「考えるより行動や！ラインを呼んで案内とかさせるから自由に動きまわるとき」

難しそうにしているセレスにはやては六課と触れ合う方が先だと言
うと、セレスは不安そうに聞くとはやては親指を立てて答えてから
リインを呼び出すために念話を使用する

「皆、イイ奴らばかりだ直ぐに慣れるさ」

「うん、私頑張るよ！」

はやてが念話をしている隣でアルフィリオスは、セレスに補足する
ように言つとセレスは笑顔を浮かべてから意気込みをする

今、機動六課に新たな仲間が加わった
行方不明の姉妹騎を探す融合騎セレス、彼女はアルフィリオスと何
を描くのか…まだ誰にもわからなかった

EP07：過ぎていく時間（後書き）

どうも、えのきです

今回はいつもより更新が遅れてしまいました

前回に登場した融合騎ことセレスですがいかがでしたか？
天然を意識して書いたのですが表現出来たでしょうか？

よかったら意見などをお願いします！

S・E・P：2万PV記念「夜天に舞い踊る荒鷲の裏ラジオ」（前書き）

会話文のみの記念小説です

いろいろな話しが聴けると思っているので楽しんで下さい

S・E・P：2万PV記念「夜天に舞い踊る荒鷲の裏ラジオ」

アルフィリオス「夜天に舞い踊る荒鷲、2万PV達成！と言うわけ
スペシャル
でSEPでいかせてもらうな」

はやて「今日はこれまでの話しについて語るためにラジオ番組風でやるで！」

セレス「メインパーソナリティをつとめるのはアルフィリオス・ラーゼンハルグと八神はやての二人だよ！」

サブは私、セレスとレキ・アーベントがつとめるよ！」

レキ「このブースは機動六課につくられています、まあ放送はしませんけど…」

アルフィリオス「なんだよ、気の滅入る事をいうなよなせつかくの記念だぜ？楽しくいかねえと」

レキ「それで何をするって言うんですか？僕は内容を聞いてないんですよ」

はやて「簡単に言えば今までの話しの裏や設定を話していくんや内容がどうなるかは作者の頑張り次第やな」

セレス「それでそれで何から話していくの？」

アルフィリオス「まあ最初は俺達のキャラ設定からだろうな」

その1：各キャラのコンセプト

レキ「なんです？上のその1とか…」

はやて「今、何を話しているかの説明や

レキ君？あまりツツコミしてたら将来ハゲるで？」

レキ「嫌な事を言わないで下さいよ！」

アルフィリオス「レキがハゲるかは置いといてまずは俺からだよね？主人公だし」

セレス「アルのコンセプトは皆のお兄さん何だって…頼りになったりでも普段はそんなんでもないよね…」

アルフィリオス「普段からフルスロットルなんて無理だからな適度に抜いているんだよ」

レキ「抜きすぎのような気がしますけど…」

はやて「それも先輩のコンセプトの一つやな、原作じゃ私やヴィー
タ達は何処か気が張ってるみたいな感じやん
だから作者は私らが笑えるようなキャラがいてほしいなって思って
先輩ができたんや

ちなみに私の先輩つてのも初対面より知り合いの方が親しみがある
から先輩つて設定になったんや」

アルフィリオス「戦闘においちゃ皆を守るフロントアタッカーで加
速による一点突破を得意とした戦いをしていく

ヴィータと被るけど作者が特化した戦闘スタイルが好きだからな、
逆にレキはバランス型になったんだよな、俺の背中を預けるにはち
ようどいいって事で」

セレス「確かイーグルレイダーもそんな戦闘スタイルに合わせて作
ったんだよね、でも最初はレキのファフニールを使う予定だったと
か言ってた気が…」

レキ「それは正解です、ファフニールはアルさんが使う予定でした
がファフニールでの一点突破は射撃なので止めたんですよ」

はやて「EP03でレキ君がしてた戦い方やな、確かに先輩には向
きそうにないかもしれへんな」

アルフィリオス「俺についてはこんなもんだな、次はレキにいつてみるか」

レキ「僕のコンセプトはアルさんと真逆なパートナーかつライトニング小隊との関わりが深くなるキャラって事です」

はやて「だから年齢が低いんやな、キャラやエリオ達とそんな変わらんし」

セレス「歳上ならエリオとキャラは絶対丁寧語になると思っから歳を低くしたんだって」

レキ「戦闘スタイルについては射撃を重視したオールラウンダーです
アルさんがクロスレンジだから射撃になったとか」

アルフィリオス「レキのキャラ説明がまだ出来てないからあんまり言わないでるか」

はやて「セレス含めてキャラ説明はちゃんとせな、あかんな」

セレス「そこは作者の問題だね、皆さんももう少しだけ待っててね？」

はやて「レキ君のコンセプトはこれくらいやな…問題はセレスの方や」

セレス「登場したのが前回つてのもあるけど私のコンセプトを全部話すとネタバレになるんだよね」

レキ「とりあえず、差し支えのないところを説明しませんか？」

アルフィリオス「そうだな、セレスのコンセプトは心の成長だな偶然だけど目覚めたセレスが六課やレリックを通してどう関わるのかを書きたいと作者が考えたみたいだ

融合騎なのは戦闘描写を三人にするのが出来ないからだそうだ」

はやて「技量不足を感じさせる理由やな…

セレスが登場して六課に起きる変化もお見逃しなくや！」

その2：キャラのイメージCVとビジュアル

アルフィリオス「さて次は俺達の容姿についてだな

キャラ説明じゃわかりにくいし作者が絵を描けないから説明するぞ」

セレス「先ずはアルからだね、アルはTOVの主人公ユーリ・ローウェルだってさ

面倒見良さそうなお兄さんって感じだから決めたんだって」

はやて「そういえば、先輩は髪の手が白やったな、なんでなん？」

アルフィリオス「特に理由はないな、作者が奇抜な髪の手にしたかったからだそうだ」

レキ「実は適当なんですネ…あの髪が特殊なものとかでなくて」

アルフィリオス「人混みでなら目立つだろうな、それだけだ」

はやて「なんや、悲しい感じやな…ちなみにCVは三木眞一郎さんや！

兄貴キャラの定番やな真面目と不真面目の落差が激しいのも採用の一つみたいや」

レキ「次は僕ですか、僕のイメージビジュアルはキノの旅の主人公キノだそうです」

アルフィリオス「でもそれって実は女のコでしたって子だよな？

レキもそうなのか？」

レキ「そんなわけないでしょ!!」

中性的なイメージと僕の髪が黒だからだそうです」

セレス「レキのイメージＣＶは折笠愛さんだよね
大人びた子供が似合うから採用したんだってさ

ところでレキは声変わりはしないの？」

レキ「いきなりですね…まだしてはいないです

作者はこの先の作品も考えているようなので一応声変わりしたイメージも決めてるみたいです

成長した僕は保志総一郎さんがやってくれるそうですよ」

はやて「声変わりしても可愛い感じはまんまなんやな

ほな最後はセレスやな

セレスのイメージビジュアルは、遊戯王デュエルモンスターズから
風霊使いウイン、やて」

セレス「私だけカードっ!？」

…イメージに合ったからってカードは無いと思うよ…ぐす」

アルフィリオス「作者の好きなカードなんだとさ
ちなみに次回からのセレスはポニーテールで登場するらしいな」

レキ「作者はポニーテール萌えなんだそうですよ」

はやて「キヨンかつ!？」

まあええわ、次にイメージＣＶに行こうか

セレスのイメージＣＶは阿澄佳奈さんや
純粹な感じで採用したみたいやな」

アルフィリオス「これで一通り説明をしたよな？」

レキ「そうみたいですわ、次はなんでしょうか？」

その3：E P O 1からE P O 7までの裏話

セレス「裏話だつてさ、私はE P O 7だけの登場だからあんまり話
しに加われないなあ…」

アルフィリオス「まあ他の裏話を聞いて意見をいつてくれていいか
らよ、そんじゃまずは一つめにいくが、E P O 1からこんな話しが
あったのさ」

裏話1：アルフィリオス・ラーゼンハルグは…最初は陸士108番隊ではなかった

セレス「どういうこと？」

アルは最初は何処から出向する予定だったの？」

アルフィリオス「多分そこらへんの次元航行艦隊かな…陸士108番隊に所属してたのはEP01を書きだした時に決めたんだと」

はやて「書いてる最中ってプロットとかは書かへんのか？」

レキ「作者は二度手間になるとかでプロットを書かずに執筆しはじめます、話しの筋は頭の中にボンヤリとあるくらいだそうですよ」

セレス「それって空で書いてるってこと？」

アルフィリオス「そういう、事だからスランプになったら執筆速度が遅くなるんだよな」

はやて「でも次元航行艦隊なら私の先輩にはならへんよね？」

アルフィリオス「まあな、この時はコンセプトが少しまとまりきってなかったんだよな、だからコンセプトはこのEP01が完成して

まとまっただ」

はやて「なるほどなあ…ほな次の裏話にいこうか」

裏話2：レキ・アーベントは…初めはいなかった

セレス「これって本当なの!？」

レキ「残念ながら事実ですね、僕はEP01の執筆中にキャラが足りないと思った作者が作り出したのです

まあ作者はそこから詳細な設定に時間を費やしましたが」

はやて「主役二人の意外な事実が出てきたもんや…他には何があるんやろ？」

裏話3：EP04は…最初、書く予定はなかった

アルフィリオス「作者…これ本当かよ」

セレス「これってヴィータさんのバトルですよね？」

はやて「そうやで、EP02でヴィータが先輩をアルフィリオスっ

て呼んだから作る事になったそうや

どうにかしてアルって呼ばせたかったみたいやな、作者は」

レキ「この一件でヴィータさんははやてさんに次ぐヒロインの地位を獲得したんですけどね」

セレス「準ヒロインって感じで目立ってるよね、朝起こしにいったりとか」

はやて「私は六課部隊長やし、先輩に絡める場面少ないやけど本当にヒロインなんやろか？…ヴィータに取られるんとちゃうかな」

アルフィリオス「心配するな、はやて…作者がきつと何とかするからだから信じる」

レキ「まあ時期的にははやてさんは目立つかもしれませんがよ？」

はやて「ホンマか！？次は何の話やったけ？」

セレス「次は主張任務編だよ、私も出番あるといいな」

はやて「よっし！俄然とやる気が出てきたで！！」

アルフィリオス「俺の言葉は無視かよ…にしてもこの小説ってギャグ傾向が多いよな、まあ大抵俺なんだけどな」

セレス「ホテルアグスタ編まではギャグがメインなんだよ、アグスタではかなりの展開を考えてるみたいだから、笑いをチャージしてくんだってさ」

レキ「もう一度読み返して貰えるような小説にするのが作者の希望ですからね

皆で頑張りましょうか！」

はやて「せやな、たくさんの人が見てくれるようにせんとな、ほら先輩もふてくされんのはその辺にしとき」

アルフィリオス「わかったよ…なら最後はみんなで次回予告をするか！」

レキ「訓練付けの毎日に突如、舞い込んできた一つの指令…」

はやて「それは懐かしき故郷へいくとなる指令だった…」

セレス「はじめてだけどどこか見覚えのある景色とそして出会う人々……」

アルフィリオス「今、俺達はその地に降り立つ、どこだろうがいつも通りだけだな」

次回魔法少女リリカルなのはStrikersへ夜天に舞い踊る荒鷲へEP08:レッツゴー!海鳴市にテイクオフ!!」

はやて「それじゃあ今日はこのくらいにしとこか」

レキ「ただ会話文のみでよかったのでしょうか?」

セレス「たまには良いんじゃないかな?

次回もあるんだよね?」

アルフィリオス「そうだな、次は5万PVを達成した時にでもやるかな」

さてと、夜天に舞い踊る荒鷲!」

全員「……これからよろしく願います!!
それではまた、いつの日か……!」

S・EP：2万PV記念「夜天に舞い踊る荒鷲の裏ラジオ」（後書き）

どうも、えのきです！

いかがでしたか？記念小説の方は

普段は会話文のみはやらないので少し新鮮でした

次回もラジオ番組風の記念小説をかけるように頑張って執筆します

2万PVをして頂きありがとうございます！

それでは、えのきでした

EP08：レッツゴー！海鳴市！！（準備編）（前書き）

出張任務編に突入しました！

予告では海鳴市までいくはずでしたが文面の都合により二分割しました

EP08：レッツゴー！海鳴市！！（準備編）

SIDE：アルフィリオス

セレスが六課の仲間入りを果たして数日が経過したその間、レリックはまったく現れず新人達は訓練漬けの毎日を送っていた

「ではいくぞ、アーベント！」

「はい！シグナム副隊長！！」

フォワードメンバーはそれぞれの分野の人が訓練を担当している

スバルはヴィータ、ティアナはなのは

エリオとキャロはフェイト

レキは俺なんだが今はシグナムと稽古という名の模擬戦をしているなんでも剣術の方の技術を向上させたいから、だそうだ…シグナムに頼むとはある意味勇気があるよな、レキの奴は

「はぁあああつー！！」

「ファフニール！シフトD！！^{ダブル}！！」

レヴァンティンを構えて斬りかかるシグナムにレキはファフニールを双刃剣から双銃に変えて降り下ろされる刃を頭上で交差して受け止める

体格差と一撃の重さにレキの足は地面にめり込む

「受け止めた事は流石と言えるが、まだ甘い！」

「うわっ！？ファフニール！」

「ソニックムーブ！！」

シグナムはレヴァンティンを尻ぎ払うように振るうとレキのガードを弾き飛ばす

レキは体勢を立て直そうとソニックムーブで後退すると直ぐ様双剣から双銃に変形させる

「ガトリングバレット！ファイア！！」

後退する体勢のままシグナムに向けて魔力弾を連続で打ち込む、砂塵と爆煙がシグナムを包みこんでいく

レキは連射の反動で体勢を立て直すと双銃を双刃剣に繋げて身構えた瞬間、爆煙をまといながらシグナムが飛び出してくる

「でえええいや！」

「っ！？だあああっ！」

シグナムがレヴァンティンを降り下ろしたと同時にレキはファフニールで切り上げる

激しい金属音の後にファフニールはレキの後方に突き刺さる、そしてレキの喉元にはレヴァンティンの刃が突きつけられていた

「勝負有りだな…」

「そうですね…参りました…」

シグナムの言葉にレキは残念そうに答えたとシグナムはレヴァンティンを下ろす

二人の打ち合いの眺めていたアルフィリオスはスツと立ち上がる

「イーグル、時間は？」

「56秒です、高タイムかと」

「それでも一分もいつてないのは悔しいですね」

「シグナム相手でここまでやれたんだ、普通ならまずは初撃で落とされる」

イーグルレイダーから時間を聞いたレキはファフニールを抜くと顔をうつつ向かせて落ち込むとアルフィリオスは上出来だと言ってレキの頭を小突く

「私もなかなかの実力だと思う、アーベントまだやるか？」

「はい！もう一度お願いします！-」

レヴァンティンを鞘にしまってからシグナムはレキに問いかけると

レキは再びファフニールを構えて頷くがそれと同時に訓練終了の笛がなる

「シグナムとの打ち合いはまた今度だな…レキ、クールダウンしてから戻れよ？」

「わかりました、それでは」

笛の音を聞いてからアルフィリオスは苦笑をしてからレキに指示を出す。レキはファフニールを待機状態にしてクールダウンに入る、レキがクールダウンに入ったのを確認するとシグナムがアルフィリオスの傍に移動し隣に立つ

「お前はアーベントに教えないのか？アル」

「一通りの基礎はやったが俺がレキに教える事はねえよ、アイツはアイツなりの戦い方を見出した。なら口を挟む気はねえし、クロスレンジならお前が上だろ？シグナム」

「確かにそうだが、私は人に何かを教える事は出来ない、近づいて斬れくらいだ」

「教える事だけが教導じゃねえよ
今のレキに必要なのは力の強い相手と戦う経験だ…どうにもサポートばかりさせてるからな

実践じゃ経験なんて考える気にはならねえ
だからお前に頼んだんだよ、俺だとパターンが読めるから意味がないし」

クールダウンをしているレキを見ながらシグナムはアルフィリオスに問いかける

アルフィリオスは手をヒラヒラさせて軽く笑うとレキについて説明をする

シグナムはレヴァンティンを見ながら呟くように言っているとアルフィリオスは背筋を伸ばして答えるとシグナムに相手をしてもらった訳を話す

「なるほどな、ならこの剣を存分に振るわせてもらおうか」

「お手柔らかにな、てかなんで騎士甲冑を解いてないんだよ？」

「何…久々に身体を動かしたがまだ物足りなくてな
アル、良ければ私と「断る！！」…最後まで言ってないだろ」

「お前に付き合ってたら命がいくつあっても足りないんでな、レキ！先に集合場所にいくぞ！！」

鞘に納まったレヴァンティンを見ながらシグナムは答えるとアルフィリオスは疑問に思っただけ事を投げ掛ける

シグナムは質問をされると少しだけ楽しそうに返すとアルフィリオスに模擬戦を頼みこもうとしていたがその前にアルフィリオスに断られ少し不機嫌そうに返す

アルフィリオスはクールダウンにしているレキの横を通り抜けてシグナムに返すと少し駆け足でなのは達の所へ向かった

「あつ！アルさんようやく帰ってきたね」

「ああ…珍しい客が来てるけど何かあったか？はやて」

「そないな、言い方はないやん

少しお知らせにな、レキ君とシグナムが帰ってきてへんけど…あつ！来たようやな」

なのは達の所に戻るとはやてが一緒に待っていた

アルフィリオスは不思議そうに聞くと若干不機嫌そうにはやては返すと尋ねた理由を説明しシグナムとレキについて質問をした時にちようど良くレキとシグナムが戻ってきた

「主、何かありましたか？」

「今から説明するで、実は先ほど、聖王教会からロストロギアがある管理外世界で見つけたそうや、騎士団は動けへんから機動六課に要請がかかったんや」

「それで何処の管理外世界なんですか？」

前線メンバーが集まってはやては話を始める話しの途中でティアナがはやてに質問を投げ掛けるとはやては黙ってしまった

「はやてちゃん？」

「場所は…第97管理外世界、惑星名「地球」
それで発見された現地名は日本にある海鳴市や」

「二度あることは三度あるって言ったもんだな」

第97管理外世界…そこはなのはやはやての故郷であり過去二度に
渡るロストロギア事件が巻き起こされた場所だった

フォワードメンバーやなのは達の表情が不安の色を浮かべる

「あつ！でも今のところ危険性がないちゅう話しや
だから大事にならないと思う」

「なら気軽な旅行に洒落込むとしますか
出発はいつなんだ？」

「さすがに旅行気分はマズイと思うで、先輩
出発は明日の昼からや、それまでに各自準備しておくように」

不安そうにしている前線メンバーにはやては慌てて補足をする
とアルフィリオスが茶化すようにいう

ロストロギア関連なのに相変わらずの調子の彼を見て一同は呆れる
が何処か安心が出来た

はやてが出発時間について答えると全員がそれぞれに返答をして朝
の訓練が終了した

「セレス、少し良いか？」

「ん、どうかしたの？アル
シヤマルさん、少し待ってて貰えますか？」

「ええ、良いわよゆっくりしてらっしゃい」

皆と別れたアルフィリオスはセレスに会うために医務室に来ていた
セレスは目覚めたばかりで知らない事が多い、そのため様々な人に
話を聞いて勉強をしている

今日はシヤマルに古代ベルカの事を聞いていた
入り口からアルフィリオスが声をかけるとシヤマルと話していた、
セレスはシヤマルに断りを入れてからアルフィリオスの傍に走りよ
ってくる

「実はな、明日の昼から管理外世界に出張するんだが一緒に行くか
？」

「アルも行くんだよね？なら私はついていく！
それに管理外世界は初めてだから楽しみだよ」

「浮かれてんなあ、まあこっちは仕事だけど六課預かりのセレスに
は関係ないんだよな」

走りよってきたセレスにアルフィリオスは用件を伝えると、セレス
は特に迷う事なく決断をすると気持ちを隠しきれないのか、少し楽

しそくにアルフィリオスに言う

アルフィリオスは少し苦笑してからセレスの頭を軽く撫でてから少しうらやましそうに言う

「出張任務についていくなら洋服を買ってきた方が良いんじゃないかしら？」

「そうだな、さすがにはやてのお古だけじゃ足りないよな」

「そうなの？私は問題ないよ」

「ダメよ！セレスは女の子なんだから身だしなみに気をつけないといけないんだから！……セレス？」

セレスの背後まで歩いてきたシャルが会話に加わる

シャルの意見を聞いてアルフィリオスはセレスの格好を見る

六課預かりになっているセレスは、はやてのお下がりを着ていた

セレスは小首を傾げながら言う「シャルが力説するように言い、あまりの迫力にセレスは思わずアルフィリオスの影に隠れる」

「シャルさん、怖いよ…アルも新しい服の方が良いの？」

「そうだな、初めての場所に更に新しい服で行けばウキウキはUPだな」

「なら買いに行きたい！アル、連れていってくれる？」

アルフィリオスの影に隠れながらセレスが言うとシャルは落ち込んだように肩を落とす、セレスは隠れたままアルフィリオスに聞いてみる

アルフィリオスは顎に手を当ててから人差し指を立てて答えるとセレスは先ほど以上に目を輝かせて連れて行って欲しいと頼みこむ

「ああ、良いぞ

はやてに許可貰ってくるから準備をしててくれないか？」

「了解だよ！…早くしてね？アル」

「わかった、わかった…あんまり急かすなよ」

アルフィリオスは苦笑してから答えると、セレスは急ぎ足で外に出るが直ぐに戻ってくると顔だけだして言うところアルフィリオスは苦笑を浮かべながら返す

「そんじゃ行くけどじゃあな、シャル」

「ええ…わかったわ…アルさん…」

未だ落ち込んでいるシャルに声をかけるとアルフィリオスは医務室を後にする

その足が向かうのは部隊長であるはやての部屋だった

「ってな訳だ、一緒に来てくれ」

「先輩…いきなりすぎや…確かにセレスに私服は必要やと思うけど
外出届けを三人分とりに来て、私を連れ出すのはどうかと思うで？」

部隊長室ではやてはアルフィリオスにため息まじりに話す

つい数分くらいにアルフィリオスは部屋に入室してはやてに外出届けを出すと一緒に出ないかと言ってくる

ちなみにアルフィリオスの外出届けには、彼とセレスさらにはやての名前が書かれていた

「前にセレスの私服を選ぶ時は頼むって言っただろ？」

女物の服はわかんないんだよ、頼む！！」

「仕方ない人やな…ええよ、ついて行くから車を回してくれへんか？
もちろん先輩が運転やで、誘った張本人やから」

「わかってるよ、なら車をとってくるから着替えとけよ？」

アルフィリオスは数日前に話した内容を掘り出してはやてに手を合
わせて頼み込むと、はやてはやれやれとため息をついてから車をア
ルフィリオスに任せる

アルフィリオスは微笑を浮かべてから部屋の入り口に移動するとは
やてに着替えるように言う部屋を後にする

「ホントに仕方ない人やな…にしても先輩と外出するのは考えたら
初めてやな…ふふ」

立ち去るアルフィリオスの背を見ながらはやては呟くと、ふと昔の

事を思い出してから実は外出するのは初めてな事に気づいて少しだけ嬉しそうに笑う

車を隊舎前に移動したアルフィリオスは車に寄りかかって待っていたその姿はいつもの陸士制服ではなく白いジャケットに黒のVネックのシャツに青色のジーンズであった

「先輩！お待たせや
少し遅れたけど大丈夫やる？」

後ろから自動ドアが開く音がすると私服に着替えたはやてがハンドバックを片手に走りよってきた

「よお、セレスがまだだから間に合ってる
……なるほどな」

「ん？なんや？なんかおかしいところがあるんか？」

「いや、私服なんて初めて見るが似合うなと思っただけ……」

「うえっ！？／＼／＼い、いきなり何を言っんや！先輩は！？外出するのに似合う服を選ぶのは当然やろ／＼／」

はやての私服姿をアルフィリオスは食い入るように見ていると、はやてはおかしい所があるのかと不安気にしながら衣服を調べてだす

アルフィリオスは私服が似合っていると言いだす

はやてはまさかアルフィリオスが服装について意見を言うなんて思っていたなかったらしく頬を染めて少し慌てながら答える

はやてが慌てていると自動ドアが開き先ほどとは違う服に着替え髪を二つに束ねるツインテールのセレスが出てきた

「お、セレスも出てきたな？
誰かの服か？似合ってるぞ」

「本当？良かった…違う違う、コホン、別にアルのために着替えた訳じゃないんだからね！」

「はい？」

はやてと同じように服装を誉めるとセレスは、最初は嬉しそうにするが途中で首を振ってから腰に手を当てて人差し指をアルフィリオスに向けてと若干、棒読みな言い方で言葉を放つ
アルフィリオスとはやては不思議そうに首を傾げる

「セレス、どうしたんだ？」

「男の人はこの髪型でこういうセリフを言えば喜ぶものだってヴァイスさんが教えてくれたから嬉しくなかった？」

困惑するアルフィリオスにセレスは自分の髪型をさしてから答えると小首を傾げながら聞く

「人それぞれだからな、俺はそこまで喜ばないな」

「そのわりには私に撮影を指示してましたよね？音声含めて」

「先輩……」

苦笑をしながらアルフィリオスは答えるとイーグルレイダーが撮影をしていた事を告げる

それを聞いたはやては目を細めながらアルフィリオスを睨み付ける

「いやこのセレスを見て写真をとらないのはおかしいだろ、可愛いし」

「アル、貴方はいま変態か親バカの境目にたってますよ」

「イーグル、うるさい！とりあえず行こうぜ店が閉まったら大変だろ？」

慌てながらセレスを見て言うアルフィリオスはイーグルレイダーはため息まじりに話すとアルフィリオスは早く行こうと車に乗り込む

「ごまかしたな、先輩…」

セレス、はよ乗ろうか」

「うんわかったよ、はやてさん！

でもその前に…髪型を元に戻してっ」と

「？そのまんまでもええやん、どうかしたんか？」

「なんか落ち着かなくてさ、やっぱりこれの方が良いと思って」

慌てて乗り込むアルフィリオスを見てはやては呟くとセレスに声を

かける

セレスは車に乗り込もうとしたがいったん足を止めるとツインテールをほどき、いつものポニーテールに結び直す

はやてはふと疑問に思い質問をするとセレスはポニーテールの方が落ち着くと苦笑をしてから車に乗り込む

理由に納得したのははやても笑みを浮かべてから同じように車に乗り込む

SIDE：アルフィリオス

機動六課を出た俺達はミッドチルダの首都クラナガンへと向かった、六課を出た時のセレスは凄くウキウキしていて着いたら疲れているんじゃないかと思ったが…

「これがクラナガンなんだ、ねえねえアル
いろんな建物があるよ、見ていつでも良いかな？」

「まずは服だ、それからな」

前言撤回…テンションがはち切れそうなくらいに上がってる、いわゆるMAX状態だ
車でコレなら降りたらどうなるんだかな

「セレス、すっかりはしゃいだるようやね
見失わないようにせんとアカンな」

「確かにな…大丈夫か心配だな」

「ふふ、そうしてるとホンマにお父さんみたいに見えるで？」

バックミラーを見ながらはやては呟くのを聞くと俺ははぐれた時を
考えて腹を抑える、本当に不安だ…

はやては俺を見て微笑を浮かべて意地悪く言ってくる、にやろう

「ならお母さんは、はやてだな」

セレスが六課で俺を除いて良くなつてるのは、はやてだからな」

「わ、私！？なにを言うんや、先輩は！！」

…先輩と夫婦なんて嫌な訳やないけど私としてはもう少し……」

仕返しの如くに俺ははやてにセレスのお母さんじゃないかと言うと、
はやては凄く慌てて返答すると何やらブツブツと呟きだす、どうし
たんだ？

後ろで騒ぎまくるセレスと思考にトリップをしているはやてに俺は
ただため息を吐いた

クラナガンにあるデパートの服売り場に来た俺達はセレスの服を探

すためにいろいろ見はじめた

まあ、俺は近くのベンチに座って待ってるんだがな

子供とはいえ女性用の服売り場にいたくはない…さっき親子連れに白い目で見られて泣きなくなっただけ

俺が座ってる少し前ではやてがセレスに服を合わせていく
セレスは退屈なのか欠伸をしながら立っていた

「うーん…これは迷うな…先輩！少しええか？」

「どうしたんだよ、呼び出したりして」

「この服とこの服…どっちがセレスに似合うとおもっ？」

服を選んでいたはやてがおもむろに俺に声をかけてきた
その手には青いワンピースと白いブラウスと緑のスカートのセット
が握られていた

あんまり服に詳しいほうじゃないからよくわからないってのが答え
だがせっかく聞かれたんだ答えないと

「そっちのブラウスの方が良いと思うぞ」

「ふむふむ、先輩にしては良い意見やな」

「おい、聞いたってそりゃねえんじゃね？」

まあ確かに良い意見は言っただけええけどな」

俺の意見を聞いてはやては意外そうな顔をしてから、ブラウスを見

てから呟くとセレスに合わせる

俺は肩を落としてからベンチに座ると再び仲良さそうにしているはやて達を見る

改めて見ると親子みたいだな…

はやてが母親か…器量良し、料理できる、顔立ちも悪くない…アレ？今考えたら理想的なんだよなあ…アイツ…

…なんか他の奴にやるのが嫌になってきたな…って！何を考えてんだ、俺は…

いやでも、まともな奴じゃないと納得は出来ないよな…

だから違うつつの！！

「先輩、どないしたん？凄い百面相して…なんかあったん？」

「アル…大分怖いよ…」

「おう！？もう終わったのか…悪い悪い考え事しててななら行くか」

はやてとセレスに話しかけられて、俺は声を裏返らせて答えると慌てて立ち上がる

まさかはやてについて考えてたなんて言えないよな…
しかもあり得ない心配をしてたなんて余計に言えない

その事もあってからかはやての方は見れなくて帰るまでそのままだった…

——おまけ——

「ア、アル！？待って、くれ！悪かった、俺が悪かったから！」

機動六課のある一室にてそれは起こっていた後退りをしながらヴァイス・グランセニックは目の前にいる男に謝っていた

ヴァイスの前にいるのはバリアジャケットを身に纏い肩にイーグルレイダーを担いで仁王立ちをしているアルフィリオスだった、無垢なセレスに余計な事を教えた、ヴァイスを肅正しにきたのだった

「謝らなくて良いぜ？…少し痛い目にあってもらっただけだからな」

その言葉の後にヴァイスの悲鳴が六課に響いた…

翌朝、ヘリポートにてズタボロのヴァイスが発見された

EP08：レッツゴー！海鳴市！！（準備編）（後書き）

どうも、えのきです

出張任務編であります、前書きにありましたが二分割しました最初
は海鳴市でサーチャーを設置するまでやる予定でしたが明らかに長
くなるなと思いわけました

それぐらい良いじゃないかと言われても仕方ありませんがすみませ
んが納得をお願いします

では次回はレッツゴー！海鳴市！！（到着編）をお楽しみに待つて
下さい！

キャラ説明（レキ編）

名前：レキ・アーベント

年齢：12歳

身長：142?

体重：47?

性別：男

イメージCV：折笠愛

髪の色：黒

髪の長さ：耳にかかる程度

目の色：青

性格：几帳面で苦労性

年齢に比べて達観している

魔力ランク：陸戦B

レアスキル：魔力変換資質「重力」

ポジション：ガードウイング

階級：一等陸士

趣味：パズル

好きなこと：計画通りに進むこと、工作

嫌いなこと：サボり、居眠り、働かない上司

詳細

2年前からアルフィリオスの部下となった少年

レキには姉が一人いて彼が5歳の時に亡くなっている、亡くなった詳細を聞かされなかったため管理局に入局した

姉に習った射撃の基礎とアルフィリオスに習った近接を合わせたスタイルで戦闘を行う

また彼の魔力変換資質「重力」は本来は引力と斥力の二つを使えるがレキが未熟なため引力しか使えない上に制御が難しいためよほど事が無ければ使用しない

コールサインはライトニング5

エリオやキャロとは仲間としてもプライベートでも仲が良い

デバイス名：ファフニール

待機状態：十字架型のロザリオ

戦闘状態：双刃剣

カートリッジ：マガジン式

電子音声：男性

形態

シフトS：双刃剣

シフトD：双剣

シフトA：弓

シフトB：双銃

詳細

アルフィリオスがレキに作ったデバイス

カートリッジを使用せずに変形というコンセプトで分離と組み換えにより形態を変える

シフトSは基本形態、クロスレンジに強いが取り回しが効きづらいため多対一を目的としている

シフトDはシフトSを分離させたスピード重視の形態
手数は多くなるが一撃の威力が無い

シフトAはシフトSを弓の様な形態
一撃の砲撃は高く多重弾核のようになっていたためAMFが効きづらいが砲撃のタメと連射ができない

シフトBはシフトDを銃のように変形させた形態
レキが愛用する形態、連射能力があり敵を蜂の巣のように打ち込む事ができる

本来は量産試作機として設計したが取り扱うものの器用さが問われるため、計画は凍結し今ではレキ以外使う人間はいない

キャラ説明（セレス編）

名前：疾風の舞姫セレス

愛称：セレス

身長：135?

体重：38?

性別：女

イメージCV：阿澄佳奈

髪の色：緑

髪の長さ：腰くらいまでのポニーテール

目の色：茶色

性格：無邪気で天然な勉強家

魔力ランク：A

レアスキル：ユニゾン

術式：古代ベルカ

階級：無し

趣味：調べもの、探検、解析

好きなこと：読書、知識を得ること

嫌いなこと：黙ってること、うごかないこと

詳細

ファーストアライトが解決した時にリニアールから発見された融合騎

魔力の相性が良ければたとえ使用者に適正がなくともユニゾンすることができる

通常のユニゾンと違い使用者と融合騎の心の一致具合で能力が変動する

互いに思いあえば力は際限無く上がるという

セレスは目覚めたばかりで知識があまり無く六課の隊員にいつも聞きまわっている、たまにおかしな事を教える隊員がいるがその後、必ずアルフィリオスに粛正される

無邪気で活発なのは使用者の魔力から読み取った情報の影響で違う人間ならまた違った性格になるという

リインフォースのような縮小が苦手なため常にフルサイズで行動している

そのため魔力消費が激しいのでたくさん食べるカロリーは魔力消費に使われるため太る事はない

EP09：レッツゴー！海鳴市！！（到着編）（前書き）

ようやく仕上がりました

EP09、楽しんでもらえたなら嬉しいです

EP09：レッツゴー！海鳴市！！（到着編）

機動六課 ヘリポート

管理外世界「地球」に向かうためにフォワードはヘリポートに集まっていた

いつもの制服とは違いそれぞれが私服であった

「皆、もう来てたんだゆっくりしても良かったのに」

「なのはさん！実は、待ちきれなくて」

「遅れないよりはマシかなと思ひまして」

フォワードメンバーが話しをしている時に私服に着替えたなのはがヘリポートにやってきて驚いたように声をだすとまだ時間じゃないと言うと、スバルが苦笑してから言うと言と補足するようにレキが付け加える

レキの私服は魔力光と似たような水色の上着に青色のジーンズであった

「もう皆そろつとるようやな」

レキが補足を加えた時にはやてやフェイトといった残りの隊長陣がやってきた

しかしアルフィリオスとセレス、ヴィータの姿がなかった

「あの、アルさんとセレス、それにヴィータ副隊長は？」

「まあいつもの通りや…直ぐに来ると思うで」

「わりいな、待たせちまったか」

エリオがこの場にいない三人について隊長陣に質問をするとはやてがやれやれとため息をついたように答えると、ヴィータがヘリポートにやってくる、その手にはまるでボロ雑巾のようなアルフィリオスが引きずっていた、その後を少し眠そうなセレスがついて来ていた

「あのアルさんに何が？」

「ティアナ、世の中には気にしなくて良いことがある、コレは気にしなくて良いことだ」

「わ、わかりました…」

アルフィリオスを引きずるヴィータにティアナが質問すると怒気の籠った視線に頷くしかなかった
ヴィータはフォワードメンバーの前にアルフィリオスを放置するとはやての所に歩いていく、するとアルフィリオスがむくりと起き上がった

「あゝ、いたたた…ヴィータの奴、頭が割れたらどうすんだよ」

「むしろ、割る気だったと思いますが…それで何をしたんですか？」

「俺が悪い事前提かよ！？…って言っても何がなんだかさっぱりだな」

「私、知ってるよ…ふわぁ…」

頭を抑えながらアルフィリオスは言っているとレキはため息まじりに質問を投げ掛ける

明らかに疑われている事に、アルフィリオスはショックを受けながら何故ヴィータに殴られたか検討がつかずに首を傾げる

すると眠そうにしていたセレスが欠伸をしながら訳を知っていると答えてから話しはじめる

S I D E : セレス

アレは数時間前かな？朝ごはんを食べてからアルの部屋に戻るとアルがお昼寝してたの

「イーグル、なんでアルは寝てるの？」

「レキに書類の処理をさせられて疲れたからだそうですよ」

「それってサボってたからだよね…ふわぁ…朝ごはん食べたからかな…眠いや…イーグル、アルと一緒に起こしてくれる？私も寝たいから」

「わかりました、では出発前に起こしますね」

「お願いねえ…」

イーグルにアルが寝ている理由を聞いてから私も眠くなってね
アルと一緒に寝る事にしたの

「アル？…いねえのか？」

「ヴィータさん？アルは寝てますよ、どうぞ入って下さい」

セレスがアルフィリオスと一緒に寝始めた頃にインターホンが鳴る
とヴィータの声が聞こえてきた

アルフィリオスの首にかかっているイーグルライダーは声の主に対
して入室を許可する

「つたく、もう少しで出発なのにノンキだ…な…」

「どうかしましたか？」

「なんで…セレスと一緒に寝てんだよ、しかもだ、抱き合いながら
…」

中に入ったヴィータは目の前に広がる光景に言葉を無くした
そこにはアルフィリオスがセレスを抱きしめながら寝ていた

実際は寝返りをうつた時に手がセレスに乗っただけだがヴィータに
とってはそう思っしかなかった

「ヴィータさん、これには訳がありまして」

「理由なんて知る気はねえ…けど見ててなんかムカつくいつも通りに起こすか」

イーグルレイダーの言葉にヴィータは耳を傾けずに寝ているアルフィリオスを睨み付けながら呟くと愛機グラーフアイゼンを起動させる

「いつまで寝てんだ、こんのロリコンがつー！」

「ぐばあっ！？」

怒号にも聞こえるヴィータの叫び声とともにグラーフアイゼンはアルフィリオスの顔に叩きこまれた

「…って事があつたんだよ」

「それを見てたのはイーグルの方だよな？なんで自分が見たように話せるんだよ」

「まあまあ、気にしない気にしない…」

セレスはヴィータが怒ってた理由を説明するとアルフィリオスは疑問に思った事を投げ掛ける

セレスは笑いながら手をパタパタと動かしながら答える

「とりあえず、またアルさんが悪かったって訳ですか」

「ちよいと待て、セレスと昼寝してたのがなんで悪いんだよ時間が空いてたから寝てただけだぜ？」

「それは…ねえ？」

話を聞いていたレキはやっぱりかため息を吐くとアルフィリオスは意味がわからなさそうに答える

そんなアルフィリオスの問いにレキは言葉を濁しながらスバル達に同意を求めるとスバル達はそれぞれに頷いた

「みんな〜！そろそろ出発だよ〜！」

「……「わかりました」「……」

「…何？何がなんなんだよ…」

ヘリの中からはがフォードメンバーに呼びかけるとフォワードは一斉に返事をしてからヘリに向かった

残されたアルフィリオスはレキ達の行動の真意がわからずに立ち尽くしていた

フォワードメンバーがヘリに乗り込むとシャルがリインフォースに荷物を渡していた

「これがリインちゃんのお洋服よ」

「ありがとうございます！シャル」

「リイン曹長のってそれ普通の子供服ですよね？」

「ああフォワードのみんなには見せてなかったですね…システムスイッチ、アウトフレームフルサイズ！」

リインフォースが受け取った洋服を見てエリオが不思議そうに質問をするとリインフォースは思い出したように言う

そして目を閉じて集中すると彼女の身体が白く光りだすとエリオやキャロと同じくらいのサイズに変わっていた

「でかつ！？」

「…それでも小さいけど…」

「皆、どうかしたの？」

「セレス、実はリイン曹長がおつきになったんです！」

大きくなったリインフォースに、スバルとティアナが感想をもらすとセレスがヘリの中に入ってきて何かあったのかと聞く

キャロは少し興奮まじりにセレスに教えるとセレスは奥にいるリインフォースに目を向ける

「システムスイッチで大きさを調整しただけだよね？
そんなにびっくりしたの？」

「ふえ、セレスは知ってたの？」

「スバルさん、私も融合騎なんですよ？
それくらいわからないとマズイですから…」

「じゃあセレスもリイン曹長みたく小さくなれるの？」

セレスは特に驚く事はせずに言う「スバルが不思議そうに、質問を
するとやれやれといった感じに答え

自分も融合騎だと改めて言う「とキャロが小さくなれるのかと質問を
投げ掛けてくる

「私のシステムスイッチは一度発動すると中々、再起動はしないの
だから普段からフルサイズな訳…まだ本調子じゃないからかな？」

「ところでアルさんは？
一緒に来なかったのかい？」

セレスは自分の胸元に手を当てながら、説明をし呟くように言う「
レキがアルフィリオスがいらない事に気付くとセレスに聞いてくる

「アルならさつきはやてさんが連れていったよ、なんでも向こうで
会わせたい人がいるって…置いていかれたの」

「そうなんだ、ごめん…余計な事を聞いて、にしてもはやてが会わ
せたい人って誰なんだろ」

アルフィリオスがいないことを説明すると、ハアと深いため息を吐いてセレスは肩を落とす

レキはマズイと思い素直に謝罪すると疑問に思った事を口に出す

SIDE：アルフィリオス

レキ達がヘリに乗ったところで俺ははやてに呼び止められた、訳を聞いたらなんでもはやて達は別の場所から地球に行くらしい

「それでな、先輩に会わせたい人がいるんや、私の友達で先輩の事をよく聞いて貰ってたんよ」

「別に構わないがどんな話を話しているのか、気になるんだけど聞いていいか？」

「ほな行こうか、待たせたら悪いもん」

「答えるよ！お前、俺について何を話してんだよ！？」

はやては俺に友達の所に一緒について来てほしいとたのみ込んできた俺ははやてが自分の事をどんな風に教えているかと質問を投げ掛けみる

はやては質問には答えずにスタスタと歩いて行ってしまった
こいつ、いったいどんな話をしてんだよ…

なのは達とは違う転送ポートにつくと俺達は地球の海鳴市へむけて
転送を開始した

「…転送完了だ「ミギヤアアーっ!」おうわ!?なんだ、猫
か?」

「ああっ!?ゴメンな?猫ちゃん、にしても久しぶりやな…」

「なあ、はやて…こっつて個人の家なのか?ずいぶんと豪勢に見える
んだが…」

転送が完了して地面に降りた瞬間、甲高い鳴き声が入ると足元
に二匹の猫がいるのに気がつく

はやては慌ててしゃがみこんでから猫に謝ると二匹を抱き上げて呟く

俺はと言うと目の前にある家に驚いていた、はやてにここについて
教えて貰おうと質問をした時に足音が聞こえてそちらを向くと紫色
でロングヘヤー、年齢ははやてと同じくらいの女性がこちらに歩い
てきていた

「はやてちゃん!」

「すずかちゃん！久しぶりやな！」

「本当だね！元気そうで良かった！」

はやてはすずかと呼んだ少女と手を合わせて再会を喜びあっていた俺は邪魔するのも忍びないと思い近くのヴィータに身体を傾けて聞いてみる事にした

「なあ、ヴィータ…あの子がはやての友達なのか？」

「ああ、月村すずかつて言ってよ
多分なのは達より先にはやての友達になってくれたんだよ、変な事すんなよ？」

「しないから…少しは信用してくれよ」

少し小声で話しかけるとヴィータも同じように返答をすると睨み付けながら俺に言ってくる…酷い…

「皆さん、お久しぶりです」

「ご無沙汰でした」

「元気だった？すずかちゃん」

「お久しぶり、です」

はやてとの再会を終えた月村は俺達の所に来ると優しく笑うとシグナム達に挨拶をする、ヴィータの敬語に笑いそうになるのをこらえてると月村は俺をジッと見ていた

シグナム達は早く挨拶しろと視線で命令をしてくる

「はじめまして、アルフィリオス・ラーゼンハルグです
今回転送ポートの到着地点に場所を提供してくれてありがとうございます」

「あ…いつ、いえお役に立てたなら光栄です
あの…少し良いですか？」

「ええ、遠慮なくどうぞ」

「アルフィリオスって事は、はやてちゃんの先輩なんですよ？
すみません、余りにも話しかから聞いていた人とは違うから」

視線で俺に命令してくるシグナム達に、俺は半ば自棄になりながら
普段ならしない敬語で自己紹介をする

俺の猫かぶりに驚いたのかはやて達は俺に疑いの眼差しを向けてくる

月村は意外そうにしながら俺に質問を続けるそして話すと違っていると
言ってくれた…はやて、なんて説明をしてんだよ…

「…あぁなんだ、どんな感じに説明してるか聞きたいが俺は丁寧語
は使わないぜ
さっきまでは人に自己紹介を強要してきた奴等に向けて言っただ
けだからな」

「なるほど、やっぱり
はやてちゃんから敬語とかは必要ない気さくな人って聞いてたから
少し戸惑っちゃいました、それじゃあはやてちゃん達が使うコデー

ジに案内しますから車を用意しますね」

俺は頭をかきながら月村に説明をすると近くにいたシグナム達に視線を向ける

月村は手を軽く合わせると微笑して答えると車をとつてくるとその場を後にした

なんかああいうタイプはいなかったから珍しく緊張するな…

「先輩…何をにやついているんや？」

「はやて、さん…いかがなされました？」

後ろを振り向くとはやてがジト目で俺を睨み付けていた
しかも黒いオーラを纏いながら…俺は軽く後退りをする

「いやな、すずかちゃんにはずいぶん態度が違っやん
どうしてかなと思うてな」

「それはアレだ、俺の周りには凶暴な奴等しかいないわけだから、
あんなおしとやかな子には緊張が…すみません、本当に！」

「ほう、私らが凶暴…ねえ…」

「いや…今のは言葉のあやでして本心ではないのです！だからごめん！」

黒いオーラを纏いはやては笑顔のまま俺に質問を投げ掛けてくる

俺は指を立てて説明をしていくとオーラの高まりを肌で感じた、やばいなど…

だんだん口数が減っていくはやてと口数が増える俺、面白いくらいに対象的で第三者から見れば笑えるものだった

まあ本人は笑えないけどな、次の瞬間白い閃光が視線覆った…

まあそれがはやての砲撃だと気づいたのは俺が空に飛ばされていた

「あれ？アルフィリオスさんは？」

「つい先ほど、星になったわ」

車を用意して戻ってきたすずかは一人減った事に気がついてはやてに質問をするとはやては少し満足したように空を見上げていた

EP09：レッツゴー！海鳴市！！（到着編）（後書き）

仕事を立て込んだりさらに夏バテになったりといろいろな事があつてようやく仕上がりしました

次回はEP10：レッツゴー！海鳴市！！（搜索編）になります
が次は早く仕上げるように頑張ります

EP10：レッツゴー！海鳴市！！（搜索編）（前書き）

レッツゴー！海鳴市！！の最後です

予定では二部編成でしたが三部になっちゃいましたけど読んで楽しんで貰えたら嬉しいです

EP10：レッツゴー！海鳴市！！（搜索編）

はやての砲撃で吹き飛ばされたアルフィリオスはなんとか回収をしてもらい、今回の出張任務で使わせてもらうコテージにたどり着いた

「なのは達はもう行ったみたいだな…セレスは？」

「セレスは自分も手伝いたいとかでスターズについていったそうよ」

「一人で出かけてないからまだ良いか…んで俺は何をすればいいんだ？」

コテージの周りを見渡してからなのは達がない事を理解するとふとセレスもない事に気付く

するとシャルマルがセレスについて教えアルフィリオスはほっと胸を撫で下ろしてから自分は何をするのかと聞く事にする

「アルさんは夕食の準備を手伝って欲しいってはやてちゃんが言ってたわ」

「良いけど夕食って何をする気だ？」

「コテージで食べる料理、そんなのバーベキューに決まってるでしょ！」

シャルマルはアルフィリオスに夕食の手伝いをして欲しいと答える

アルフィリオスは夕食の内容を聞いてないためシャルマルに質問をす

ると答えは後ろから聞こえてきた

振り返るとそこには金髪でショートカットの少女が立っていた

「久しぶりねアリサちゃん！」

「シャマルも元気みたいね…さて私はアリサ・バニングス、なのは達の幼なじみよ

あんたがはやての言ってたアルフィリオスって事で良いのよね？」

「ああ、そうだ…もしかしてそれだけを聞きにきたのか？」

「んなわけないでしょ！！」

買い出しよ、足りないものがあるし多いからあんたに手伝って欲しいんだけど」

ショートカットの少女、アリサにシャマルはにこやかに挨拶をする
とアリサは少し嬉しそうに話す

アルフィリオスを見ながら自己紹介をするとアルフィリオス本人が聞いてくる、特に考える事なくアルフィリオスは答えるとアリサに質問を投げ掛ける

名前を聞きにきただけかと聞かれて、アリサは少し声を荒げて答えるとアルフィリオスに買い出しの手伝いをしてくれと言ってきた

「わかった、車を出すからナビゲーターを頼むぜ、バニングス」

「アリサで良いわ、あたしもアンタの事アルフィリオスって呼んでるし」

「了解だ、んじゃちゃちゃと終わらせるか」

片手を上げてからアルフィリオスはアリサに答えるとアリサは名前
で構わないと返す

アルフィリオスはその言葉に頷くと車を用意するためにその場を後
にした

——コテージ内——

トントンと景気の良い音を奏でながらはやてとすずかは夕食の準備
を進めていた

「ねえはやてちゃん、少し聞いて良いかな？」

「ん？急にどないしたん、すずかちゃん」

切り揃えられた野菜を籠に移しながらすずかは包丁を動かしている
はやてに質問をする

はやては包丁の扱いには慣れているため切る動作を止める事なく続
けていた

「はやてちゃんはアルフィリオスさんの事をどうおもってるの？」

「っ！？い、いきなり何を言うとの！！別に私は先輩の事なんか
…なんとも…／＼／」

ザン！と大きな音を立ててはやては包丁を止めてすずかに視線を向ける

すずかはと言うと少し期待をしながらはやてを見ていた

「だってはやてちゃん、メールに先輩はどうしたとか相変わらず先輩はとか書いてるんだもん
もしかしたらって思っちゃうよ」

「いや、アレは先輩がアホな事をしてるだけで…私としては…その
／／／」

すずかは良くはやてから受け取るメールの内容から推理した事を、
はやてにいうと包丁を置いて人差し指同士を軽く付き合わせながら
言葉を濁す

「はやてちゃんの立場が重要なのはわかるけど自分の気持ちを押し
込めてると持たないよ？」

「すずかちゃん…心配してくれてありがとうな…せやけどこついう
の初めてやかからわからないねん…
異性を好きになるいうんが…だからはつきりさせたいねん」

すずかの言葉にはやては俯きながら答えていくとグッと拳を握りし
めてから静かに言い放った

「はやてをどう思ってるかだつて？」

「そうよ、はやてからアンタについては聞いてるけど、アルフィリオス自身がはやてをどう思ってるか気になってね」

海鳴市にあるスーパーにてアリサとアルフィリオスは食材を選びながら話していた

最初はアリサがはやてについて聞いてきたのがはじまりであった

「むう…頼りになる後輩、だな…」

「それだけ？私が言うのもなんだけどはやてやなのは結構可愛いわよ？」

男としてほっておくほうがどうかしてるわー！」

アルフィリオスは飲み物を片手に確認するように呟くとアリサは呆れたような顔で言うと2リットルのペットボトルを買い物籠に入れる

「確かにあいつらは美人だけど一般士官からすれば高値の花もいとこなんだよ、なんせエースだからな」

「それを聞くと管理局の男が情けなく見えるわね、アンタも同じなの？」

「いや、俺はそういう恋愛対象に見てないだけだ
気の合う同僚や後輩にしか見てねえよ」

アルフィリオスの言葉にアリサはやれやれといった感じに、ため息をつくと当のアルフィリオスはどうなのかと質問をする

会計を終えて買い物袋に詰めてながらアルフィリオスは答えると軽いものをアリサに渡してたくさん入った買い物袋を両手に持つ

「アンタ、もしかして恋人とかいるの？」

「……いないな…俺と付き合える女がいるとは思えねえよ…」

車までたどり着くとアリサは買い物袋をアルフィリオスに渡してから質問を投げ掛ける

買い物袋をトランクに入れるとアルフィリオスは少し黙ってから微笑をして言うと車に乗り込む

アリサは微笑したアルフィリオスの顔がどことなく暗いものだと思いながら車に乗り込む

車が走りだした時にイーグルレイダーに通信が入る、アルフィリオスは運転をしながら繋ぐ

「どうかしたのか？」

《アルさん、まだ街にいる？

少し向かって欲しい場所があるんだけど良いかしら、フェイトちゃんかフォワードメンバーを車で迎えに行っただけで人数が多くて乗りきれないらしいの》

「シャマルか、わかった何処に向かえば良いんだ？」

《なのはちゃんの実家で翠屋って言うの、アリサちゃんに聞けばわかるわ》

通信を入れてきたのはシャルだった、彼女は申し訳なさそうにアルフィリオスに頼み込んでくる

アルフィリオスは車の速度を緩めると向かう場所を確認するために質問をする

シャルはアリサに聞けば場所はわかってと言って通信を切ってしまう

「アリサ、翠屋って場所に案内してくれないか？
フォワードを拾ってかないといけないみたいでな」

「わかったわ……そのさっきの事、謝るわ……なんか聞いちゃいけないみたいだったから……」

「気にすんなよ、いろいろあるんだよ
お前に悪気がねえのもわかってる
だから気にすんな、いいな？」

アリサに事情を説明すると少し沈んだ口調で返すとアリサは謝罪の言葉を口にした

どうやらアルフィリオスが先ほど表情を暗くした事を気にしていたらしく勝気な口調ではなくなると、アルフィリオスはため息を大きくつくどと気にすると言ってアリサにナビゲートを頼み、車を走らせた

アルフィリオスの操縦する車はなのはの両親が経営する翠屋の前に
停車をした

「へえ…結構綺麗な店だな、人気なのは頷けるってもんだな」

「見た目だけで無く味も良いのよ、ケーキが好きな人には最高のみ
せなのよ」

「甘いものが苦手な人間には結構キツイよ？それ…にしてもなんか
騒いでないか？」

「そうね、まあ入ってみましょうか
まずはそれからよ」

翠屋の扉に近づいた時に何やら騒ぎたてる声が聞こえアルフィリオ
スとアリサは互いに顔を見合わせた

アルフィリオスはいつでもデバイスを起動できるようにしてから翠
屋の扉に手をかけて開け放つ

「いらっしやいませ！喫茶翠屋にようこそ…！」

「…何名様で…いらっしやいますか？」

「何してんだ？セレス、レキ」

扉を開けた瞬間、元気いっぱいのセレスの声と少し声の小さいレキ声が耳に入った

そして目の前にはウェイトレス姿のセレスと同じくウェイトレス姿のレキが立っていた

セレスはミニスカートで満開の笑顔を浮かべレキはロングスカートを履き顔をうつ向かせながら接客をしてきていた

あつけに取られたアルフィリオスはとりあえず何をしているかと質問を投げ掛けた

「げえっ！？アルさん！」

「あ、アルだ！ねえ、アル見て見て！ウェイトレスさんだよ、似合ってる？」

「感想を言う前になんでこうなったか説明をしてくれないか？」

「えっと…実は…」

入ってきた客がアルフィリオスだと気づいてレキはあからさまな声を出す

アルフィリオスだと気づいたセレスは近くまで走りよると自分の服装をアピールする

アルフィリオスは手を前に出してセレスを静止させるとレキに事情を説明してほしいと頼む

レキは何から話せば良いか迷いながらも話しはじめる

——数分前——

街にサーチャーを設置しおえた時になのはからフェイトが迎えにくるまで、実家である喫茶翠屋で休憩しようと提案したのはの家族と談笑していた時だった

「桃子さんや美由希さんが着てるのは翠屋での仕事着なんだよね？」

「そうよ、これが翠屋の制服なの
どこか変な所があった？セレスちゃん」

「変なところは無いよ、お店の感じとあってるから、私も着てみたい
な、なんて思ってた」

出されたミルクティーを飲みながらセレスはなのはの母、桃子と姉の美由希を見て質問を投げ掛ける

桃子は自分の服装を見てからおかしい所があるのかと聞くと、セレスはミルクティーを両手で支えながら首を振ると自分も着てみたい
と言いだす

「セレス、さすがにそれはマズイよ
僕らは遊びに来た訳じゃないし迷惑がかかるよ」

「あたしは良いと思うよ、セレスちゃんなら似合う気がするし」

「確かなのは小さい時のお手伝い用があったからそれを貸してあ

げましょうか」

「まだ、あつたんだ…」

セレスの頼みにレキはため息まじりに反論をすると美由希は面白そうに答える

それに便乗するように桃子がなのはが昔着ていたものがあると言うと苦笑をしながらなのはが呟く

「じゃーん！どうかな？似合ってる？」

「うわぁ、セレスすんごい可愛いよ！」

「本当ね、似合ってるわよ」

美由希と桃子と共に奥に行ったセレスは少ししてから桃子達が着ているような白地のシャツに黒いエプロンで黒いミニスカートに着替えてきた

スバルとティアナは着替えてきたセレスを誉める

セレスは誉められると嬉しそうにしながらレキに近づく

「レキ、どうかな？ウェイトレスさんに見えるかな？」

「似合ってはいるけど仕事をしてないからウェイトレスとは言えないよ」

「なるほど…ならレキの紅茶のおかわりを持ってくるね！」

レキの反応につまらなさそうに答えると、セレスは空になっているカップを持つとおかわりを持ってくると言ってカウンターに向かう
「マスター！紅茶のおかわりお願いしますー！！」

「かしこまりました、ずいぶん元気の良いウェイトレスさんだな
…」

カウンターにいたなのは父、士郎はセレスから注文を受け取ると、紅茶の準備をしながらセレスの元気の良さに微笑を浮かべる

カップに紅茶を注ぐとトレイに乗せてセレスに差し出す

「はい、気をつけてゆっくりといくんだよ」

「了解です！…これはかなり難しいかも…」

トレイを持つとカップの紅茶を見ながらフラフラと歩きながらレキの方に歩いていく

「セレス…ゆっくりで良いからね？絶対に急がなくて良いからね」

「わかってる、よっ……あっ……」

レキはふらつきながら近づいてくるセレスにゆっくりで良いと指示をする

セレスは冷や汗を流しながら進むために一歩踏み出した瞬間床につまづき紅茶の入ったカップが空中に投げ出される

「紅茶を被った僕は服が乾くまでの間だけこの格好をするはめになったんですよ」

「いやあ、レキごめんね？」

私もまさかそこでつまづくとは思わなくてさ」

ウェイトレス姿のレキは腰に手を当てながら言つとセレスが乾いた笑みを浮かべながら謝る

今までの経緯を聞いていたアルフィリオスは何かを考えるようにうつむいているとスツと顔をあげる

「レキ、一つ聞いていいか？」

紅茶を被ったのならお前はいい、ぶおばあ！？」

「何を言おうとしてんだ！？あんたは！！」

真剣な表情のアルフィリオスにその場にいる全員が、息を飲むが、いざ放たれた言葉にレキは渾身の右ストレートをアルフィリオスの頬に打ち込む

端から見たら美少女ウェイトレスに殴り飛ばされる成人男性という間抜けな光景だった

「いや、気になるじゃないか！？

…うん…ごめん…」

殴り飛ばされたアルフィリオスは起き上がりながら言い訳をすると、
今にも爆発しそうなくらいの怒りのオーラを放つレキに謝るしかなかった

EP10：レッツゴー！海鳴市！！（搜索編）（後書き）

どうもえのきです

いかがでしたか？ウエイトレスバージョンのレキとセレスは、絵が書ければ挿絵を出したかったんですが絵が書けないのがくやしいです、それでは次回予告にうつります

セレス「見れないものを見たい、それが男のロマンだってさ、よくわからないけどそれはしちゃいけない事だと思うよ？

次回、魔法少女リリカルなのはStrikerS～夜天に舞い踊る荒鷲～EP11：それは男のロマンなんだ！！にテイクオフ！ロマンってなんなのかな？」

それでは次回の更新をお待ち下さい

EP11：それは男のロマンなんだ！！（前書き）

今回は少しイチャつきをメインにしてみました

まあ砂を吐くほどの技量では無いのでいつも通りに見てください

EP11：それは男のロマンなんだ！！

紅茶にまみれたレキの服が乾いたところでアルフィリオスとアリサ、セレス、レキの四人はコテージにむけて車を走らせた

コテージにつくとそこではバーベキューの準備がちゃくちゃく行われていた、準備を見ていたらアルフィリオスは見知った後ろ姿を見つけると足を運んだ

「やっぱり、エイミイさんとアルフ！こっちに來てたのか」

「アル、お久しぶり

クロノ君から六課配属は聞いてたけど実際に見ると驚くよ」

「サボってないよな？アルはいつもサボりばかりだからな」

アルフィリオスに声をかけられて茶色の髪的女性と犬耳と尻尾のついた少女は振り返る

エイミイ・ハラウン、クロノ提督の妻である犬耳の少女はフェイトの使い魔のアルフ、クロノと何かと交流のあるアルフィリオスは二人とも知り合いだったのである

「エイミイとアルフはアルフィリオスと知り合いだったんだ」

「うん、良くクロノ君と飲み出掛けたりして送ってきて貰ってるんだよね」

「クロノの奴も仕事のストレスが溜まってるからアルフィリオスに

愚痴を言ってるんだぞ」

「そうなの？アルフィリオス、ごめんね…お兄ちゃんが迷惑かけて」
準備をしていたフェイトはアルフィリオスと自分の家族が知り合いなのに少し驚いていた

エイミィとアルフはアルフィリオスと知り合った経緯を話すとフェイトは申し訳なさそうに頭を下げた

「気にすんなよ、クロスケが大変なのはわかるし、家族に心配をかけたくないだけだからフェイトが気にする事じゃねえよ」

「ありがとうね、アルフィリオス…」

「お礼より俺の事はアルと呼びな！
お前だけだぜ？六課で呼んでないのは」

「うん、わかったアル」

頭を下げられてアルフィリオスは手を軽く振るとにこやかに笑いながら言っと、フェイトもつられて笑顔を浮かべる

アルフィリオスはビシッと指をフェイトに向けると自分の事は愛称で呼んで欲しいと言いさらに六課では皆、愛称で呼んでいると伝えとフェイトは苦笑を浮かべながらアルフィリオスを愛称で呼ぶ

「ほおら！その二人イチャコラしてないでちゃんと手伝いなさいよ！…」

「アリサっ！？べ、別にイチャついてなんてないよ？／＼／」

アルフィリオスとフェイトが笑顔を浮かべていると遠くからアリサが二人に呼びかける

フェイトは突然の事にあたふたしながら弁明をする

「弁明ならあたしよりあっちにしたほうが良いわよ？」

アリサは意地悪い笑みを浮かべて自分の後ろを指で指すとそこでは黒いオーラを背負いながらはやてが焼きそばを作っていた

「嫌やわぁ…アリサちゃん、それやとまるで私が怒ってるみたいやん、私は別になぁんも怒ってへんよ？」

遅れたばかりか仕事もせえへん先輩にちいっとも怒ってへんよ…」

「…すみません、直ぐに作業に移ります！！」

こちらには背を向けているが明らかに怒っているという雰囲気を出しているはやて、焼きそばをつくる小手は心なしか苛立ちを表すかのように振るわれていた

アルフィリオスは敬礼をするように夕食の手伝いをはじめ、といつても残ってるのははやての焼きそばだけでありアルフィリオスははやての憤怒のオーラに当てられながら手伝いをしていった

「なあ…はやて？」

「なんや？先輩…」

「…ヘソを曲げてんのはどうしてだ？」

焼きそばが焼ける音がするなかでアルフィリオスは不機嫌そうなはやてに声をかける

「別に先輩には関係ないやろ？」

私は六課メンバーやないんやからな」

「何を言って…なるほど、はやて…拗ねてるな？自分だけ俺の呼び方が違う事に」

「そ、そんな訳、ないやん…そないな子供じみた理由…絶対、ない」

アルフィリオスの問いかけにははやてはわざとらしい言い方で答えるはやての言葉に何かを思いついたアルフィリオスは質問を変えて問いかけると、はやては明らかに図星という感じに動揺をすとうつむいてしまう

それでも焼きそばが焦げないようにするのは料理をする人間のプライドだからだろうか小手の動きは止まらなかった

「ったく、わかりやすすぎだ…」

はやて、俺の愛称を呼ぶやつは知り合いなら誰でもいるけどな、先輩って呼ぶのはお前だけだよ…試しに愛称で呼んでみるか？」

「う、うん…ア、ア、…先輩…」

「ぷっ…くくく…結局先輩じゃないか…」

拗ねてるはやてにアルフィリオスは愛称で呼んで見ると言うとは
やては言葉を詰まらせながら結局アルフィリオスの愛称は呼べずに
先輩と呼んでしまう

アルフィリオスは口元を隠しながら笑いを堪える

「なっ！？そんなに笑う事ないやん！！／／／
先輩って呼び方が染みついとるんや！
うあゝ、そのニヤケ面が腹立たしいわ！！／／／」

「すまん、すまん…けどどうも言えないと…笑いが、止まらなく
てな…くくく、さあて逃げないところわあい後輩がくるからな！」

「ちょっと待てや！アホ先輩！！」

はやては手早く焼きそばを皿に盛り付けると、アルフィリオスが笑
っているのを見て顔を赤くしながら怒鳴りつけて噛みつくように反
論をする

それでもアルフィリオスがニヤケ顔を止めないので止めさせようと
小手を振り上げる

アルフィリオスは流石にマズイと思ったのか笑いを堪えながら逃げ
出す

それを遠くから見守っていたシグナムとシャマルは一息つく

「全く、一時はどうなるかと思ったな…アルの奴、主はやてを泣か
せたらレヴァンティンの錆びにしようとおもったんだがな」

「まあそうならないようにするのがアルさんよね…はやてちゃんが
あんなに笑うのは久しぶりね…」

それにしてもアルさんが好きなら早く告白すれば良いのに…」

「あまり主はやての恋愛に口を出したりするな
あれでも精一杯なんだろうさ」

「意外ね、シグナムが恋愛について語るなんて」

遠くでじゃれ合うアルフィリオスとはやてを見ながらシグナムは安
堵の息を漏らすとシャルがにこやかに言う
しかしにこやかな笑みを曇らせるようにため息をつきながら言う

ちなみにアルフィリオスは頭に当たるかわからないギリギリ所では
やての小手を真剣白羽取りで抑えていた

「悪いか？少しくらいはわかるさ…しかし…」

「何か気になる事でもあるの？」

「アルはどうも人の好意をはぐらかせているように見えるな」

「うーん…気のせいだと思うけど…ねえ」

シグナムは少し疑うような目で言うとシャルは気のせいだと言い、
アルフィリオスの方に顔を向けるとそこにはボロ雑巾になったアル
フィリオスが転がっていてシャルは苦笑を浮かべた

SIDE：アルフィリオス

夕食を食べ始めたが…うん、地獄絵図つてのはこの事だな…

「スバル！てめえ、あたしの肉だぞ！！」

「これはあたしが先に取りました！早いもの勝ちです！！」

「なら私も貰うね！いったき！！」

「なっ！私の皿から取るとはええ度胸やな、セレス！！」

そこで行われていたのは肉争奪戦が繰り広げられていた…

網の上の肉をヴィータが取ろうとするとスバルがそれをかつさう
それとは別の場所ではやての皿からセレスが肉を奪いとっていた…
お前ら野菜を食えよ

「アルさん…無駄ですよ、聞く耳を持ってないんですから」

「まあ自分の分を取られないようにするんだな…今の主たちは獣以上だ…」

俺の呟きに隣にいたティアナとシグナムは呆れたように言ってくる
ちなみに残りのメンツは平和そうにバーベキューを食べていた
にしてもすげえな…スバルやヴィータもだがセレスがそれについて
いつてるんだからな

「アル！ボサツとしてないで次のお肉を焼いてよ！！」

「お前な…一応俺の融合騎だろうが…わかったよ…」

セレスの余りの剣幕に俺は従うしかなかった、だってあいつ言うことか聞かないと噛みつくって目をしてたんだよ…従うしかないだろ…

まあそんなこんなで殺伐とした夕食は終わり、俺たちはサーチャーの反応が出る前に入浴する事になった

「これだけの大人数やと行くところは一つしかないな」

「あそこだね」

「おいこら、地元民ちゃんと説明をしてほしいんだがな」

「にやははは、大丈夫だよ別にへんな所じゃないから、それじゃあ入浴道具をもつて銭湯にいこうか」

セントー？また聞いた事がねえ名前だな…

それからはやて達に案内をされて俺達は一つの施設にたどり着いた名前はスーパー銭湯…ハイパーもあんのか？

「いらつしやいませ、何名さまですか？」

「えつと大人13人に子供6人です」

「子供は僕とセレス、キャロとエリオ、アルフさんにリインさんですよね」

「あれ？ヴィータ副隊長は？」

番台と呼ばれる受付にいた人が挨拶をするとはやてが人数を述べていく

子供の数をレキが確認した時にスバルがヴィータを見ながら質問を投げ掛ける

「あたしは大人だ…」

「その体型でか？いたい、です！ごめんなさい！！」

子供のくくりに入れられてヴィータは不機嫌そうに答える、それに便乗して言ったら思いっきり足を踏まれた…

「大きいお風呂だって楽しみだね、エリオ君」

「う、うん…スバルさん達と楽しんで来てよ」

「えっ？一緒に入らないの？」

「ええっ！？だって僕は男子だし…／＼／」

足の痛さに涙を流しているとキャラが嬉しそうにエリオと話していた

何やらキャラはエリオと入りたがってるようだ、積極的なのは良いが大胆だな、キャラよ

「大丈夫だよ、10歳以下の児童ならどっちでも入れるって書いてあるから」

「そうだよ、久しぶりに入ろうがエリオ」

おおっとキャラがここでセントーの規則を持ち出した！

さらにフェイトも加わったぞ！！

エリオ、どうする！？

「助けないんですか？エリオ」

「なんか憎らしいから嫌だ」

「それにしても10歳以下ですか…アルさん？よもや変身魔法を使
って入ったりしませんよね？」

「レキ…お前にはがっかりしたぞ！！！」

実況中継をしていた俺にレキが話しかけてきたが俺はケラケラと笑
いながら見捨てる

規則を見ていたレキはジト目で俺を睨んできた、その時のレキの発
言に俺は怒りを露にしながら言うと、今までエリオにかかりつきり
だった全員がこちらに視線を投げ掛ける

「変身魔法を使って覗きをするなんて俺がすると思ってるのか？そ
うならがっかりだぞ！」

「すみません、そうですよね…アルさんも大人「それじゃあ…ロマ
ンが無いだろ？」…あ？」

俺の怒りに満ちた意見にレキも間違っていたと笑みをうかべるが続

けられた一言で言葉が変わるが、俺は構わずに続けた

「良いか！？覗きとはバレるかバレないかの瀬戸際が重要なんだ！！
困難な道を歩み、そしてたどり着いた桃源郷…その時に人は達成感
と優越感に浸れる…」

合法で見た以上の楽園^{エデン}、それは男のロマンなんだ！！」

「へえ…なら後ろの方々にも説明してあげたらどうです？」

まるで演説をするかの様に語っていく俺に対してレキは凄くどうでも良さそうな感じに見ていた

そして呆れながら後ろを指でさした時に俺は後ろから放たれる殺気に気付いた

「いやあ、これはあくまで一般的な理想であって私個人はそこまで…すみませんでした！！」

俺は出来るだけ後ろを見ない様にしながら語るが殺気が増した所で後ろを振り向くと、そこにはまるで女神のような笑みを浮かべたはやてが、まるで首を斬るようなサインを出した
その後？言うまでもない、ボロ雑巾だよ…

ボロ雑巾となったアルフィリオスはなんとか男湯に入るとエリオとレキが待っていた

「エリオに感謝してくださいよ？せっかくなら三人で入りたいって
言ってたんですから」

「エリオ、サンキューな…ムツツリー二つて呼ぶのは止めるよ」

「そんな風に思ってたんですか！？」

腰にタオルをまいたレキが呆れたようにいうとアルフィリオスは服
を脱ぎながらエリオに笑いかける

エリオはアルフィリオスの軽口に驚いていると番台のおばさんの声
が耳に入った

「はい、毎度あり」

「ありがとうございます、あっ！レキ君、エリオ君、アルさん」

「…はいつ！？」「」

聞きなれた声が男湯の脱衣所に響くと三人は一斉に振り返るとそこ
には、バスタオルをまいたキャラが笑顔で呼びかけていた

「キャラ、キャラ、キャラ！？こっちは男性用だよ！！」

「うん、でも10歳以下ならどっちでも入って良いんだよ」

「確かに書いてあったけどまさか本当に来るとは…」

「キャラ…その積極的な感じなんて恐ろしい娘…」

慌てながらエリオが説明をするとキャロはにこやかに笑いながら答える

規則は破っていないから確かに大丈夫ではあるが納得のいかないレキとその積極性にアルフィリオスは驚いていた

「それにちゃんとバスタオルは巻いてるよ？」

「キャロ…わかったからバスタオルに手をかけるのは止めるんだ」
にこやかに笑いながらキャロはバスタオルを強調するように手をかけるとレキはすかさずそれを止めさせる

それから急遽キャロを交えた男達は浴場に足に向けた

「エリオ…痒いところはねえか？」

「今の所は無いですよ」

「よし、なら流すぞ？」

浴場についた四人は二組に別れて身体を洗い始めるエリオはアルフィリオスがキャロはレキという組み合わせだった

アルフィリオスはエリオの頭を洗いながら定番の事を聞くとエリオは笑みを浮かべながら答える

「そういえばアルさんに髪を洗って貰ったのははじめてかもしれま
せんね…」

「そっぴやいつもいなかっただな…どうだ、良いもんか？」

「はい！…お父さんって、こんな感じなんでしょうか？」

「俺もそれはわからんが…俺はまだそこまで老けて、ない！」

「あいだだだっ！！痛いですよ…」

髪を洗い流しているとエリオは思い出したように話したす
アルフィリオスも思い返してからエリオに聞くと元気の良い声でエ
リオが返事をする

そして呟くようにアルフィリオスに質問を投げ掛ける

エリオの言い方から何かあると感じたアルフィリオスは特に答えず
に話題をすり替えるようにエリオの頭をわしづかみにする

いきなりわしづかみされた事でエリオは慌てて手を退けると頭を軽
く撫でる

「エリオ君…なんか楽しそっだね」

「アルさんがバカをやってるからだよ…まったく風呂くらい静かに
入れば良いのに」

「そっだね…ねえレキ君…私、一つレキ君に言いたい事があるんだ」

「どうしたの？改まって」

エリオが恥ずかしいとのことで壁を挟んだ感じに別れたレキとキャラは壁の向こうから聞こえるエリオの声に苦笑を浮かべていた

頭を洗っているレキにキャラは少し恥ずかしそうにうつむきながら話しかける

「最初の出勤の時…励ましてくれてありがとう、あの後からずっとお礼を言いたかったんだけど、なんて言えばいいかわからなくて遅くなっちゃったんだよね」

「キャラ…それは僕も同じだよ、フリードとキャラの力がなかったら多分ダメだった、だからお礼よりこれから先を頑張ろう！」

「うん！よろしくねレキ君」

初出勤の時の事をキャラは思い返すようにいうと、レキは苦笑を浮かべながら自分も礼を言わないといけないと言い

これから先も頑張ろうと言葉をかけるとキャラは首だけを後ろに向けて笑顔を浮かべて答える

SIDE：アルフィリオス

身体を洗い終わった俺達は湯船に使った、途中でキャラがエリオを

やはり女湯に連れていくと言い出し

エリオはそのまま女湯に連行された、レキはゆったりとつかるといつて俺から離れていき俺は一人となった

「…露天、風呂？外に風呂があんのか…いつてみるかな？」

風呂にもたれかかっていると露天風呂という案内表札が出ており、俺は何を考えたかいつてみようと思った

「うはー…これが露天風呂か…やっぱりさみいな…早く入ろつと」
露天風呂に出てみると冷たい風が肌に当たる、身震いをしながら湯につかると俺はもう少し奥の方に行くことにしたせつかくの外風呂なので景色を見るためだ

「にしても湯煙が酷いな…前が見えない「きやうつ！？」ってわりい、ぶつかつたか
わざとじゃねえんだ許してくれないか？」

「いや、こっちも同じやからお互いさまや…堪忍な…」

「そう言つて貰えるとたす…かる…はやて？」

「せ、先輩？」

湯の中を移動していた時に柔らかいものにぶつかりさらに短い悲鳴が聞こえて、人がいたことに気付いた俺は慌てて謝るとぶつかった本人も謝ってきて気がついた、今のは女の声じゃないかもしかかもか

なり見知ったやつの声だ

そしてちょうど良く風が吹いて湯煙を散らすとそこには驚愕の表情を浮かべるはやてがいた

しかしながら人間いや男とは思議なもので相手が女とわかると、例え見知った奴であろうとこれから撲殺されようと目線は下にいつてしまう訳でして

「み、見るなあーっ！！／／／」

「ぶげふうっ！？」

当然こうなるわな、はやての左ストレートが俺の頬にめり込むだが怒りの乙女はまだ終わらなかった

「いつかやるとは思ってたけどほんまにやるとは思わなかったで！／／／

このエロ先輩！！／／／」

「ちょっと待、げぼおっ！？」

話を聞き、ごぶあ！！」

まあそのままはやての気がすむまで俺は殴られ続けていた

——数分間後——

「…なんか言うことはあるか？…」

「やり過ぎました…ごめんなさい…」

俺とはやては背中合わせになるように湯につかっていた

まあ容疑は晴れたのだが、代償は大きかった…とりあえず顔が痛い…

「だって先輩が胸の方を見るからいけないんや！／＼…そしたらそないになんですんだんや」

「しっかりタオルまいてたから良いじゃねえか…ていうか混浴なのは知らなかったのかよ…」

「久しぶりやから変わってたのに気づかなかった…」

はやては胸を隠すように手を動かしてから恨めしそうに睨む

俺はやれやれと言った感じに聞くと少しだけ静かになって呟くように説明してくれた

「……………」

気まずい…俺達は互いに喋る事も出来ずにただ背中合わせで湯につかる、しかし黙っていると他の所が敏感になってくるもので、背中合わせになってるはやての体温や息遣いがだんだんと鮮明になってきた

「…なあ、先輩？少し話してもええかな？」

「肩がこる話しか？なら遠慮し「あのな、私」…許可をとる必要あったのか？」

黙っていたのをはやてが破った、少しだけ恥ずかしそうにしながら聞いてきたので俺はいつもの調子で返すとスルーされた

「先輩が六課に来てくれてホンマに嬉しいねん、不安があつた私の背中を押してくれた人に見せられるからや、これが私の夢ですつて」

「はやて…」

「先輩だけやない、クロノ君やカリム…いろんな人が支えてくれただから私はこの機動六課を絶対に続ける…命に変えてもや…」

「…こんのバカすけ!!」

はやてはポツリポツリと呟いていく中で俺は少し眉を潜めるとはやての後頭部に頭突きをする

「いたっ!?!いきなり何する気や!!」

「命とか、簡単にかけんなよ…」

お前がそれだけ熱意があんのはわかるけどな、それだけはすんな…」

「せやかて、先輩も知つとるやろ？」

私には罪がある…夜天の魔導書が闇の書として犯してきた罪…それは最後の夜天の主である私が償ないとあかん事や…だから」

「罪つてのはどんな事をしても無くならねえよ…どれだけ償つてもどれだけ後悔してもな…」

本当に世話になった奴等に恩を返したいって思つなら生き続けてやり遂げるよ…」

頭突きを食らったはやては頭を抑えながらこちらを睨み付けた
俺ははやてに構うことなく言葉を続ける、はやてはそれを反論する
ように言葉を放つ

俺は湯船から手を出して固く握りしめて呟くようにはやてに言う

それは俺自身が過去に犯してきた事に対しての経験に基づく答えだった…それよりもはやてに対しての説教が先だと思い言葉を続けた

「はやて…一つ約束してくれないか？」

自分でどうしようもねえ時に必ず俺を呼べ、そしたら世界の果てだろ？が次元の果てだろ？が飛んできてやるよ…」

「なんやそれ…どこのスーパーマンや？」

…覚えておくで、先輩の言葉…でも一度決めた事や…そう簡単に変わる事は無理や」

「だろうな…まあ少しくらい自分を大切にしろ、お前ら隊長陣を見てると過労死つてのが頭に浮かぶからな」

俺の出してきた約束にはやては笑いながら返すとゆっくりと頷くがそれでも首を横に振ってから言葉を紡ぐ

俺は苦笑をすると今までの雰囲気崩すようにおどけた態度をとると、はやてに背中合わせのまま耳を引っ張られた

「それこそ余計なお世話や…！…もうせつかくの雰囲気が台無しや…かつこよかったのに…」

「あたた…なんか言っただか？」

「なんもない！こんのバカ先輩！！」

「引っ張ろうとすんなよ、んじゃ先に上がるぞ？」

はやては耳から手を離すとブツブツと呟きだす

俺が質問を投げ掛けると噛みつかんばかりに言われてしまう、これ以上はのぼせるかもしれないので俺は先に風呂を出た

はやてが逃げたなんて言っただけにしないでおう

「まったく先輩は……」

アルフィリオスが風呂を出たあとはやては呟くように言うが直ぐに笑みを浮かべた

「どこでも、か…先輩やったらホンマにやりそうやな……先輩……」

先ほどのアルフィリオスの約束を思い出してはやては耳を引っ張った手を軽く包むと呟いた、その顔は湯気のせいかなのり赤くなっていた

EP11：それは男のロマンなんだ！！（後書き）

どうも、えのきです！

今回のいかがでしたか？

楽しんで貰えたなら嬉しいかと思います

ちなみに少しネタバレになりますが、レキのお相手はキャラです
だから今回、エリオの台詞をかつぱりました
これからレキの活躍が増えたら良いと思います

では次回からはいよいよ戦闘に入ります、楽しみして下さい

レキ「いよいよロストログアとの交戦、しかし意外にも苦戦をする
僕たちに救いの手が

次回、魔法少女リリカルなのはStrikerS「夜天に舞い踊る
荒鷲」EP12：重なる力 にテイクオフ！…敵がまともなら良かったのにな…」

EP12：重なる力（前書き）

久しぶりに時間がかかりました…

今回は前に指摘を貰った名前を書き方を変えてみました、良かったら意見を下さい

今回の戦闘の際にノリの良い曲をかけると更に良くなるんじゃないかなと作者は考えてます

最後にアンケートみたいなのがあるので良かったら答えて下さい

EP12：重なる力

全員が風呂から出て一息をついていた時、キャロのケリユケイオンとシャマルのクラルヴィントが鳴り出した

「どうやら、目標が見つかったみたいね」

「ほな皆、じっくり休んだやろ？」

「さっそくお仕事や、準備はええな？」

「……了解!!」「……」

「ちょい待て、せめて風呂上がりのコーヒー牛乳を飲みたい!!」

シャマルの報告を聞いてからはやてはスバル達の方を向いて真剣な表情になり気持ちを切り替える

スバル達も同じように先ほどのなごやかな雰囲気は無く全員が真面目な表情をとる中でまるでお約束の如くボケをかます奴がいたはやて達は声がした方を向くと湯上がりだからか髪を上で留めたアールが腰に手を当てて、今まさにコーヒー牛乳を飲もうとしていた

「先輩、そのコーヒー牛乳を真っ赤なトマトジュースに変えてもええんやで？」

「…はやてさん、目がマジだよ？お兄さんを酷使用するなよ…さっきの事を根に持ってたのか？」

「んなっ!?!何を言うてるんや!!!!／／／

まったく…緊張感を持つて欲しい言つとるんや!」

こめかみを抑えながらはやては言つと、アルは少し引きぎみ言つとため息をついて先ほどの露天風呂での事を口に出す

アルの話しにはやて以外のメンバーは不思議そうに首を傾げると顔を赤くしながらはやてが遮ると一回、咳払いをしてから責任感が足りないと言つ

「まあ、気を張るなよ…ポカやらかすぞ?
んじゃま…行きますか」

アルははやてが説教するなかでコーヒー牛乳を一気に飲み干し、留めておいた髪を解いていつも通りのスタイルに戻すと軽い口調のままいい放つ

アルを加えたフォワードメンバーは反応があつた海鳴市の河川敷に向かつて走つていた

《今回だけアルさんはロングアーチからスターズにコールサインを変更するです》

「了解、それじゃあ指揮はティアナに任せっからな?」

「えっ!?!でもアルさんの方が階級も指揮能力も高いです、あたしに任すより断然に良いです」

「だあほっ！お前はセンターだろうが指揮をフロントに任せんな
戦況を確認し、冷静に的確な指示を出す、それがお前のポジション
だ…やってみるお前なら出来る」

移動している最中にリインからアルに通信が入る

アルは足を止めて変更内容を確認すると後ろを走っていたティアナ
に指をさして指令を出す

突然の事に驚きを隠せずにティアナはアルに出来ないと返答すれば、
アルはティアナの頭を小突いてから少し呆れたように言う

「でも…自信が無いです、あたしじゃアルさんや隊長達のような指揮
は出来ません…」

「自信ねえのはわかるが、一つ間違いがあるな…ティアナ」

「間違い？」

アルに励ましを貰ってもティアナは自信を持てずに諦めたように言
うと、アルはティアナの頭に手を乗せると少し真面目な表情で言葉
を続ける

間違いがあると言われてティアナはアルの顔を見るように見上げる

「誰が俺達みたいな指揮をしろって言った？」

指揮のやり方は人それぞれのだ、今出来る自分のベストを尽くせ
それに俺やスバル達はティアナを信頼してる、だから頼んでいるん
だよ」

「アルさん……」

「ならこの方が良いか？」

お前が必要だ、この任務……いや、これから先の戦いでもティアナに指揮を頼みたいだから今やつてくれ」

SIDE：ティアナ

その言葉を言われたのは初めてだった……

機動六課に来てからあたしの頭にあった不安……それは自分に何の取り柄が無く、いつか皆から必要とされなくなるんじゃないかという不安だった

けど今、目の前にいる人は私が必要だとはっきりと言った

魔力ランクはあたしより上でなおかつ実戦経験が豊富……確かな実力があるのにどうしてだろう？

そしてこの人の言葉はどうしてこんなに響くんだろう？

考えても答えは出ないそれに求めていた答えを言っただけであたしは動揺をしていた

だけど早く答えなきゃ、何を？そんなのは決まっている

「あたし、やります！サポートをお願いしても良いですか？」

「ああ、お安い御用だ…行こうぜ、ティアナ」

フォワードメンバーの指揮を承る事だ

でもまだ不慣れなあたしはアルさんにサポートを頼むと、アルさんは心良く引き受けてくれた

「ロングアーチ、フォワードの指揮はティアナが一任する指示を頼むな」

《こちらロングアーチ、了解や！

ティアナ、無理せんようにな？》

「はい！頑張ります…それじゃあ配置を確認するわね？

前衛はアルさん、スバル、エリオで後衛はあたしにレキとキャロ前衛組にはロストログアの移動を制限して貰うわね？」

「「おう！」」

「「「はい！」」」

ティアナが指揮をやると決断しアルはロングアーチに通信を送るとはやてがそれに答える

はやてからの激励を聞くとティアナは意気込むと作戦の配置を確認するとスバルとアル、レキとエリオ、キャロがそれぞれに答える

「目標は反撃無しの逃走型って情報がある
なら足の早いスバルが先行して、アルさんとエリオが目標のサイド
に回る
動きが止まった所でレキかあたしがキャロにシーリングをかけても
らい狙撃する
皆質問は？」

「下手に近づけばかえって動きまわるからな、上出来だ…さて行く
か！！」

「……了解っ！！」「……」

ティアナが作戦を確認してから全員に聞くと皆も賛成したらしく頷く
アルが作戦の出来を評価すると全員に呼びかけてから河川敷のほう
に再び移動を開始した
河川敷が見えた時にアルとスバル、エリオの三人は待機状態のデバ
イスに手をかける
そして土手の上から一気に飛び上がると三人の身体を魔力光が包む
「イーグルライダー！」

「マツハキャリバー！」

「ストラダー！」

「……セットアップ！！」「……」

空中でデバイスを展開して三人は河川敷に降り立ちいざロストロギ
アに向かって走りだした

ボヨヨン、ボヨヨン

ズサア！！

聞こえてきた擬音に一人ずつこけた、それは今先ほど良いことを言っていたアルだった

彼がこけるのは無理もなかった、着地した目の前に大量の青い物体状のロストロギアが跳び跳ねまくっていたのだから

「珍しくでた俺のやる気返せや！ゴオラア！！」

「なんですか？これ…」

「ねえ、これが今回のロストロギアなの？」

目の前を跳び跳ねるロストロギアを目にして三人は少し啞然としていた

それにそんなアル達に構わずロストロギアは一目散に逃げ出した

《皆さん、ロストロギアは身の危険を感じると分裂していくみたいです！》

「つまりこんなから探せと？ふんじばってまとめて依頼人ここに送れば良いんじゃないか？」

《さすがに数が多すぎですから地道に探して欲しいのです》

「せめて特徴くらい無いのかよ？赤いとか角ついているとか動きが他より三倍とかさ」

やる気の削がれたアルのところにリインが通信を入れてくる
それを聞いたアルは探したく無いと言う目でリインを見ながら提案
をすると苦笑をして地道に探して欲しいと返す

提案を却下されてアルは地面にしゃがみながらやる気無さげに呟く
が、そんな彼の頬を一筋の魔力弾が通過する振り返って見ればそこ
にはファフニールを展開したレキが明らかに不機嫌そうな目で狙い
をつけていた

「早くやれ」ボディランゲージでメッセージを送るとアルはしかた
なさそうに立ち上がりロストログアの群れに突っ込む

「うおりやあああつ!!」

ボヨン!

「手応え無し!? 打撃無効がついてるの?」

「でえりやあああつ!!」

ボヨヨン!

「斬撃も無効化されてます!」

「往生せいやあ!!」

ボンボン、ボン!!

「きもつ! 派手に動くな、軟体生物!!」

スバル達はロストロギアに攻撃するが打撃、斬撃、更にはステーキでの一点突破も効果が出ずに更に逃走範囲を広げるだけであった

《アルさん！こちらも効果はないです

銃撃やフリードの火炎、レキのシフトAもダメです！》

「見た目がアレでもロストロギアって訳か…」

《可愛いのに侮れません…》

《そうだね…ちょっとマズイかも》

「その天然コンビ…のほんとすんな」

少し離れた場所でロストロギアに攻撃をしかけていたティアナから報告が入りアルは苦虫を噛み潰した様に呟く

難しい顔をしながらキャロが言うのとレキがそれに同意しているがその雰囲気は何処か緩やかなものだった

「でもなんとかまとめないと、確認した奴と混じって本体の見分けが更につかなくなります！」

《アルさん…スキルリミッターの解除許可を申請します、僕の力なら奴等を集めれると思います》

「…ダメだ、無傷で捕らえられる保証が無い…それはお前自身がわかってんじゃないか？」

動きまくるロストロギアにエリオは焦りながら言う

するとレキがアルにスキルの使用許可を申請してきた、レキの言葉にスバル達は不思議そうにする中でアルはそれを却下した

先ほどまでのだらけた表情ではなく真剣な表情にスバル達は息を飲んだ

《アルさん、レキのリミッターってどういうことなんですか？》

「レキにはレアスキルとして魔力変換資質がある、その名は重力変換資質：簡単に言えば引力と斥力が使えるんだ」

「でも引力ならロストロギアを集めるのは楽ですよネ？」

「そこまで緻密な制御が出来るとは思えない、下手すれば際限無く引き寄せてしまうブラックホールを作りかねないんだぞ？
そんなの市街地、ましてやロストロギアの確保には使えない…わかるな？」

リミッターについてティアナが問いかけるとアルはロストロギアの逃走に先回りをしながら説明をしていく

アルの説明を聞いて同じように進路を塞いでいたスバルが言うところアルはきつぱりと出来ないと言い、仮に出来たとしてもロストロギアの確保には向かないと断言する

《出過ぎた事を言いました…すみません》

「わかれば良い、だけどやっぱなんとか手を打たないとまずいのは確かだな…」

《アル！聞こえる？何とか出来る方法が多分あるかもしれない！！》
アルの言い分にレキは声を落として謝るとアルは少し投げやりに答えると苦い顔をして呟く

いきなり通信画面が開きセレスの声がアルの耳に入った

数分前、コテージ

作戦指揮のために戻ってきたはやてとリインそれとシャルとセレスはアル達が相手をしているロストログアの情報を集めていた

「物理ダメージや魔力ダメージも無効化するなんてずいぶんとかいかな…」

「なんとか本体を識別出来ればいいんですが、ダミーの数が多すぎるです…」

「動かないように固めるのはどうかしら？」

「いやリインみたいな凍結系ならなんとかなるけど普通のバインドやとあかんやろ」

アル達の戦闘状況からロストログアの状態をまとめるはやてとリイン状況を聞いていたシャルが提案をするがはやては難しいと答えて唸る

「あの！アルに通信を繋いでもらえますか？もしかしたら無傷で集める事が出来るかもしれません」

「ホンマに！？それはええけど
けどどうやってや？」

「それについてはアルに伝える時に話します
アル！聞こえる？何とか出来る方法が多分あるかも知れない！」

はやて達の話しを聞いていたセレスは難しい顔をしていたが直ぐ様顔を上げるとはやてにアルに通信を繋いで欲しいと頼む

いきなりの事にははやては驚きつつもセレスに問いかけるとアルに話すついでに言うと彼女は答えて教えてくれなかった

《セレス！？何をする気なんだ？》

「私の使用できる魔法に竜巻を巻き起こすものがあるの、それを使えば多分」

《無傷での捕獲が出来る…って訳だな？》

「うん…けどそのためにはユニゾンしないといけないの」

いきなりセレスから通信が入った事にアルは驚いていたが直ぐ様セレスの思いついた方法問いかける

セレスは自分の魔法を使えば無傷で集める事が出来ると言うと最後

にユニゾンをしなければ使えないと補足する

アルは以前セレスにユニゾンはしないと言った事がある、それは戦う理由が無いものを戦わせたくないという考えもあったが、他にも彼女を思つての事もあった

一度でもユニゾンをすれば彼女はアルの保有戦力として認識されてしまふ、そうなればもし姉が見つかつて管理局から簡単に抜け出す事が出来ない

だからセレスは悩んでいた、アルもまた答えに迷っていた、しかしセレスの決意は堅かった

「アル、私なら大丈夫…」

それに力があるのに何もしないなんて我慢出来ないよ、皆の力になりたい…そのためなら戦う覚悟なんて簡単にできる！」

《はっ…お前つて奴は…》

反対なんてしねえよ、言つたろ？戦う理由を見つけたら俺は受け入れるってな

来いよ、緊張感に欠ける面をした奴等が相手だけどやるぞ、俺とお前のユニゾンをな！！》

「うん！行くよ、アル！！」

セレスは迷い無くアルに自分の意思を伝えると帰ってきたのはアルの微笑する声だった

アルはセレスとユニゾンをすると言うとセレスは笑顔で答えて騎士甲冑を身にまとう

セレスの騎士甲冑ははやての騎士甲冑の色違いで、彼女の髪と同じ緑色の騎士甲冑に白いコートを纏うとセレスの周りに緩やかな風が吹き始める

「今からアルの所に行くね」

「待つて、河川敷まで距離があるわ

いくら飛んでも直ぐには着かないわよ？」

「大丈夫だよ…私だけに備わってる移動手段があるから…我と共にある風よ、私の願いを聞け、我を彼の地に運べ！ウィンド…ジャンプ…！」

騎士甲冑を展開してセレスは目を閉じて呟くように言うと、シャマルがここからだとすぐにはいけないと言うがセレスは特に焦る事もなく告げると、彼女の周りに吹いていた風がだんだんと勢いを増していく

そしてセレスの詠唱とともに彼女の身体は風が包み込んでいき魔法名と共にセレスはその場からいなくなっていた

《ウィンド…ジャンプ…！》

河川敷で通信をしていたアルの耳にセレスの声が入る、その瞬間さまざまに突風が吹くと目の前に騎士甲冑を身にまとったセレスが立っていた

「話しでは聞いていたが凄いいんだな…それ」

「マスターの所に緊急で向かうための魔法だから大して凄くないよ？アルが離れてないと使えないからね」

いきなり目の前に現れたセレスに苦笑をしながらアルは言う。セレスは大した事無いと答える

セレスが現れた事でロストロギア達はいつでも逃げられるようにしていた

「練習なしだけど…いけるよな？」

「もちろん、私はアル専用の融合騎だよ？問題は無し！」

ロストロギアを視界に入れながらアルはセレスに確認を取ると、当たり前なことは聞かないで欲しいとセレスは答える

その言葉と共に二人に引き寄せられるかのように風が吹き始める

「それじゃあ、行くよアル！我は疾風の舞姫セレス！これより我は主アルフィリオス・ラーゼンハルグの刃となる、我らが絆が精強ならばいかなるもの貫ける、脆弱ならば刃は砕けよう！

されど我は主を信じこの身を主と共に戦地に置く、我らが戦刮目せよ！ユニゾン、イン！！」

セレスの凜とした声は河川敷に広がる、そして祝詞の如き声と共に風が吹き荒れていく

ユニゾンの掛け声と共にセレスは緑色の光となりアルの身体の中に入り込む、その瞬間爆発するような衝撃が当たりを包む、まるで新しい力の誕生を祝うかのように融合騎として真価を発揮した彼女を賞賛するように風は河川敷、一帯に拡散した

「凄い衝撃…レキ君ありがとう」

「大丈夫なら良いんだ…これがセレスのユニゾン？…あれはっ!？」

いきなり起こった衝撃に吹き飛ばされそうになったキャロをレキは抱き抱えるように掴むと冷や汗を流しながらアルの方を向いて驚いた

そこには鮮やかな橙色のロングヘヤーに深緑色のロングコートを着たアルがいて、閉じていたまぶたをゆっくり開けると瞳は黄緑色に変わっていた

SIDE：アルフィリオス

「成功したのか？」

セレスが中に入って着て少ししてから目を開けて俺は呟く
いまいち実感がわかなかった、確かに身体は軽くなってるが本当にユニゾン出来てるか不思議だったからだ

失礼だなあ…ちゃんと成功してるよ？
今のところは順調だよ

「頭の中からセレスの声が聞こえてら、すげえ違和感あるけどさっそくお仕事をするか」

了解だよ！それじゃあ魔法の情報を教えるから合わせてね？

不安そうにするとエコーがかかったセレスの声が頭に響く、それを聞いて初めて成功したなと思った

俺達がユニゾンを成功させたのに気付いたロストロギア達は一目散に逃げ出した、恐らく今の怖さを理解したからだと思う…まあ

「そう問屋は下ろさないがな！」

術式転送、良いよ！アル！！

「彼の者を風縛の檻に閉じ込めろ…唸れ！烈風！！」

「ゲイルオブサンクチュアリ！！」

俺はイーグルレイダーを腰にあるホルダーにしまうと右手をつき出すように構える、セレスの声と共に魔法の情報が頭に入ってくる

完全に頭に入った時には身体は自然と詠唱を初めていた、セレスと声を重ねて魔法を発動させると５メートルくらいの竜巻がロストロギア達を巻き込んでいく

本体ではない奴等を巻き込んだ様で回転している最中に増える事はなかった

「スバル、エリオ！確認が出来た奴は片っ端に投げ込んでいけ！」

「了解!!」

問題が無さそうなのを確認するとスバルとエリオにダミーを投げ込む様に指示をだす

「アルさんとセレス… 凄いです」

「そうだね、こっちも負けないように頑張ろうか!」
「うん!」

アルとセレスが巻き起こす竜巻を見てキャラロは関心するように言う
とレキはそれに負けないようにしようと激励すれば、キャラロは笑顔を浮かべて答える

皆! 本体を見つけたわ、一気に封印をするわよ!!

おう!

わかりました

「キャラロ!」

「うん、私たちも行こう!」

念話を通してティアナが全員に報告をするとスバルとエリオがそれに答える

アルは竜巻を維持する為にその場から動けなかった

レキはキャロに目線を配らせると真剣な眼差しでキャロは返すとティアナの方に走りだす

ティアナの所にたどり着くとそこではスバルとエリオが先に来ており目の前には薄い防御壁を張ったロストロギアがいた

「レキ、キャロ！本体が防御壁を展開してるわ、スバルとエリオが破砕するから隙を見て封印してくれる？」

「了解！」

レキとキャロがきた事でティアナはロストロギアの防御壁を破砕するようにスバルとエリオに指示を出す

「エリオ！コンビネーションで行くよ！！」

「はい！頑張ります！！」

「うおりゃあああつ！アサルト、ストライク！！」

スバルがマツハキャリバーで移動を開始しながらエリオに呼びかける

エリオも少し後ろを移動しながら答えるとロストロギアに攻撃を仕掛ける

最初にスバルがナツクルで一撃をいれてすり抜けるように移動するとエリオがスバルの軌道に交差するようにストラーダで切り抜ける魔力が交差した事により爆発が発生したがロストロギアの防御壁にヒビを入れるだけで破砕は出来なかった

「キャロ！」

「わかった、レキ君！」

防御壁のヒビが入るのを見たレキは直ぐ様キャロに声をかけるとフアフニールをシフトAにしてカートリッジを二発ロードする

「レキ！？まだ防御壁があるから、もう少し待って、キャロも！」

「大丈夫です、いけます！！」

「私はレキ君を信じてますだからやれます…封印の力、彼の者の矢に宿れ…いくよ！レキ君！」

「うん、わかった！一矢封縛！」

「「シーリングバニッシャー！！」」

レキが封印作業に入りだした時にティアナは静止をかけるが、レキとキャロは構わずに作業を続行する

キャロのケリユケイオンから放たれた光がフアフニールの矢に付加されたのを確認するとレキはキャロと声を揃えて撃ち放った

矢は流星の様なスピードでロストログアに命中するとロストログアは動きを止めた、そして辺りにいた大量のダミーもどんどん消えていく、封印が成功した証だった

「レキ君、やったね！」

「そうだね、キャロ」

「まったく、あんたら成功しなかったらどうしてたのよ……」

「その時はその時ですよ、でも決めるつもりでやりましたから」

封印に成功した事にキャロは嬉しいそうにしながらレキに手を上げてハイタッチを求めると、レキも同じように笑顔を浮かべながら手を合わせる

封印したロストロギアを見ながらティアナは呆れたように言うとレキは微笑をしながら答える

どうやら成功したみたいだね、アル

「そうだな…セレス…少し良いか？」

何？アル

「改めてこれからもよろしくな？」

えと…うん、わかった！

竜巻を解除するとセレスがアルに話しかけてくる
アルは少し考えてから頷くとセレスに呼びかける

いきなり呼ばれてセレスは少し驚きながら返事をする、アルの改
めての挨拶に笑いをこぼしながら答えた

EP12：重なる力（後書き）

どうもえのきです！

いかななものでしたか？セレスの初のユニゾンとレキキャロの無自覚な信頼関係は

もし変わりすぎじゃないかなと思ったら遠慮なく言って下さい

そして前書きであったアンケートですが昨日をもって5万PVを達成しました！

前回の記念で5万あたりでまたラジオ番組をしようと言いましたが少し間がそんなに空いてないなと思ってます

そこで記念小説のお題を提供して貰えますか？

もちろんラジオ番組ネタでも構いません

良かったら協力をお願いします

そんな訳で次回の夜天に舞い踊る荒鷲は記念小説になります

それではまた！

S・E・P：夏は海に行くってのが相場だろうが！！（前書き）

間違いがあり修正しました

S・E・P：夏は海に行くつてのが相場だろうが！！

暑い…

それは誰かが言った言葉だった、ここ数日のミッドチルダは例年を超える猛暑が続いた

当然、機動六課にも影響は出ていた
猛暑が続いたせいで六課のエアコンがご臨終し外界とほぼ同じ気温になっていた

「…暑い…」

「スバル、皆同じなんだから頑張りなさい…」

「だってこんだけ暑いのに仕事なんてやる気起きないよ…」

スバルの項垂れるような言葉がムシムシとした部屋に響く

それによって他の隊員達も次第にだらけだした

「これだけ猛暑の中で見返りもなく人は動けませんよ…」

「確かにフラフラしてきました…」

「キャロ、水分はしっかりとった方がよいよ…」

デスクワークが不慣れなライトニングの手伝いをしていたレキが咳くとキャロが頭に軽く手を当ててよるめく

レキはキャロの身体を支えるとエリオが注意をする

「あうゝ…休みが欲しいかも…」

「同感だわ…作業をする環境にしちゃ最悪だしね…いつそ休みたいわ…」

体力があるスバルも真面目なティアナもこの暑さではどうしようもなかった

そして全員が口を揃えて言った

暑い…

「案の定全員がへばってるぜ」

「まあ当然やな、私も気を抜けば倒れそうな暑さやからな」

「なあはやて、エアコンを直す業者きたらさ…皆に休みやらないか？」

オフィスの状況を簡潔にアルは報告をすると、上着を脱いでYシャツ姿のはやてが少し疲れたように答える

はやてのいる部隊長室は日の光が入りやすく窓を開けていても大して変わらなかった、そんな中でアルが一つの提案をする

「せやな…作業効率を考えるとそうした方がええかもしれへんな、業者の方は今日の午後から入るようやから休みをとるなら、今日から明日の夕方までやな」

「それだけ時間あるなら行けるかもな…」

「？一応聞くけど何処にいく気や？先輩」

はやてはモニターを表示すると業者のくる時間帯と修理に必要な時間を計算してから答えるとアルはまるで悪巧みをするような表情をする

アルの表情に不安を覚えながらも一応質問をするはやて

「そんなの決まってるだろ？」

むし暑い夏は海って相場が決まってるんだよ！ってな訳で海に行こうと思う」

アルは握り拳をつくって力説をする、はやては暑さのためかいつものツツコミをせずにハアとため息をつくだけであった

「なんでこんなに暑いのに、そんなに元気やの？先輩は…」

「あえて言うなら休みがあるからだな！」

ダルそうにアルに元気が良いのかとはやては言つとアルはよくぞ聞いてくれましたと、言わんばかりに答える

氷づけにすれば少しは静かになるんじゃないかとはやては本気でそ

う思いながら、アナウンスマイクのスイッチを入れて今日から明日の昼まで全体休暇だと伝えた

それから六課前線メンバー＋シャマル、ザフィーラ加えた一行は海に向かうために準備をしていた

「ねえ、アル…私泳げるかわかんないんだけど…」

「まあ心配するな、泳げない奴には浮き輪があるからな」

荷物を用意していたセレスは手を止めて真剣な表情で言うとアルは頭に軽く手を乗せてからフォローをする

「そっか、なら安心だね

よし！準備OKだよ！！」

「セレス、着替えような？さすがにその姿の奴をつれ回す気はない」

「ええーメンドイよ…」

アルの指摘で明らかに嫌そうにセレスは答える、ちなみにセレスはTシャツ、短パンさらに頭に冷●ピタをつけた姿だった

本人曰く暑いのはダメなんだそうで、自分なりの工夫をしたらしい
「着替えないと連れてかないからな？」

「うあー！了解、着替えます、直ぐに着替えますとも！！」

「んじゃ車を用意してくるからちゃんとした格好で来いよ」

駄々をこねているセレスにアルはすっぱりといい放つと、セレスは慌てて敬礼をしてから自分の衣服がしまつてある棚に向かって走りだす

アルはやれやれといった感じに立ち上がると服を選んでいるセレスに一言いつてから荷物をもって外へと歩いていく

玄関から出てガレージに車を取りにいくアル、今回使う車はいつもの乗用車では無く人数を乗せられるワゴン車にした

車を玄関先に移動させるとそこにはフェイトが乗った車が止まっていた、フェイトの車の後ろに停車をさせたアルは他のメンバーを待つため車外に出ていく

実のところ、目的地と移動手段が決まっているが誰がどの車に乗るかは決まっていなかった

その事を打ち合わせするためにアルはむし暑い車外に出たのである、本来なら冷房が効いたなかで待つ予定だったが狂ってしまったなどアルは内心後悔をしていた

「あちい…フェイト…その服で良く平気、だな…」

「黒が好きなんだ…でも少し後悔してる…」

アルが車を降りたと同じくらいにフェイトも降りてくる、フェイトは薄手の上着にロングスカートなのだが、上着の色が黒ということ

もあり、かなり暑そうだった

「フェイト、これを使っとけ…少し涼しいから」

「ありがとう…でもよく団扇なんてあったね…」

「この前の主張任務で見つけてな、帰りがけに買っておいたんだよ」

アルは自分の荷物の中から団扇を取り出すとフェイトに渡す

渡された団扇で扇ぎながらフェイトはどうして団扇をもっているのかと聞くとアルは主張任務の時に見つけたと答える、それと同時に玄関の自動ドアが開かれた

「二人共、お待たせや」

「みんな、準備出来たからさっそく行こうか」

「海に行くなんて久しぶりだな、まあ羽休めには良いかもな」

はやてを先頭に六課の前線メンバーが玄関から出てくる

後ろにいたなのはとヴィータが言う後ろでフォワードメンバーが和気あいあいと話していた

「んで誰がどっちに乗るんだ？早く決めてくれないと溶けるぞ…俺が」

「ほなら、適当でええか
各自乗りたい車にのることええか？」

「『『『『はい！』『』『』『』」

話し込んでいるフォワードメンバーを見て早く移動しないかとアルは言つとはやては少し考えてから好きな方に乗るようにと言う

先ほどまで話していたフォワードメンバーは元気良く返事をして返した

SIDE：アルフィリオス

「ああ、ようやく出発した…

にしても…好きにしろって言われてもお前らは固まるんだな…」

呟くように言ってから俺は横とバックミラーを見る

隣にはやて、後ろの前列にリイン、セレス、ヴィータ

さらにその後ろに人型のザフィーラ、シャマル、シグナムがいた
そうこの車には八神家が勢ぞろいしていた

「なんや、先輩は私らと一緒にいるのがそんなに嫌なん？」

「そこまでは言っていない…仲が良いいんだなって思つてよ」

「当たり前やろ？八神家の絆は鋼より硬いんやで？」

横にいたはやてがジロリと睨み付けるように俺に言ってくる

俺はハフウと欠伸をしてから答えるとはやては自慢をするように言う

「休みを取れたのは良かったな…実験部隊だからそう簡単に休みは取れないから取れて良かったと思うな、お前らほっとくといつまでも仕事してそうだからな」

「むう、人をワーカーホリックみたいな言い方はやめてくれへんか？」

「違うのか？てつきりそうだと思ったんだがな…いやぁ意外だなあ」

「なんやとっ！そのあからさまな言い方が腹がたつ！」

俺は機動六課についてを思い返しながらはやて達が仕事から解放されて良かったと言うとはやてが明らかに不機嫌そうな顔をして言うてくる

はやてをちやかすように言うと言つて噛みつきそうな感じにはやてが怒ってくる

だけどそれは本当に怒ってるわけじゃない、ある程度一緒にいたんだそれくらいわかる

アルとはやての会話を聞いていたヴィータ、リイン、セレスの三人はハアとため息をついた

「二人とも、凄く仲がいいのです……」

「本人達はただ話してるだけだけど、私にはイチャついてるようにしか見えない……」

「前の空気だけ暑くなってるないか？」

三人は出来るだけ前の二人を見ないように言うと再びハアとため息をついた

八神家とアル、セレスが乗った車はクラナガン郊外の海水浴場に到着した

「うーみーだーっ……!」

「わーいですー……!」

車から真っ先に飛び出したのはセレスとリインだった

それを見ながらシグナムやシャマルたちも続々と降りていく
フェイト達の車も着いたようでスバルを筆頭に皆が降りてくる

「んじゃ、荷物の置き場確保しとくから
着替えてこいよ」

「せやね、ほなら皆行こうか」

「……………」

「どうかしたんですか？アルさん黙りこんで」

浜辺ではしゃぐ奴等をよそにアルは荷物とかパラソルを用意すると言う

それを承諾したはやては女子メンバーに声をかけて更衣室に向かうはやて達がいなくなつてすぐにアルが考え込むように難しい顔をしていると、エリオが不思議そうに質問を投げ掛ける

「いやな…改めて女子の比率が多い舞台だなと痛感してな、あれだけいたのに今はこんだけだ」

「まあ確かにそうですね、それより早く用意しないとどやされますよ？」

「へーい…」

質問をされたアルはフムと一息ついてから考えていたことを言うてから今いるメンバーに目をむける

ここにはアル、レキ、エリオに獣型のザフィーラしかいなかった

レキもそれに同意はするが荷物を早く置こうとアルを急かす

「よつと…これで良いな、はやて達はまだか？」

「女性の着替えは長いものだ、我が荷物の番をしよう
お前達は先に遊んでこい」

「ありがたいがさすがに先に遊んでたらなんか悪いだろ？
待っておくさ」

パラソルを立てたアルが汗を拭ってからはやて達が来たかザフィーラに聞くとザフィーラは首を横に振ってから答える

ビニールマットの上に寝てからアル達に海に先に入るといいと薦める

アルは苦笑をしながらマットに座ると抜け駆けは出来ないと答える、エリオとレキも同じなのかマットに腰をおろしていく

数分後

「やー、お待たせや！着替え終わったで？」

「ようやく来たか…危うく日干しになるとこだったぜ」

「先に入っても良かったんだよ？」

四人がうとうとしはじめた時にはやての声が耳に入る、四人は起き上がって見るとそこには水着に着替えた女性陣がいた

ようやく来たことにアルは待ちくたびれかのように言うとなのはが苦笑をしながら答える

「アルさんが皆さんより入るのは悪いって言ってたんですよ」

「レキ、余計な事はいふな…」

「へえ、先輩がね」

「ありがとうね、アル」

待ちくたびれたようにしているアルを見てレキは先ほどまでの事を教える

アルは不機嫌そうに言うとはやてが良いことを聞いたという表情を浮かべて言い、フェイトが申し訳なさに礼をする

「だあああつ！さつさと遊んでこい！！
でも準備運動はしっかりやれよ？」

「…行っちゃいましたね…アルさん」

「ほな皆、明日までの休暇を楽しんでな？」

では解散！！」

フェイト達の反応をみたアルはごまかすように言つと海の方に向かっていく

走りだしたアルを見てティアナが呟くとなのは達は苦笑した

そしてはやてがアル以外のメンバーに連絡を伝え機動六課の休暇が始まった

照りつける太陽の中、様々な場所で各々がゆったりと過ごしていた

「さてと、どうするか」

海を一通り泳いだアルはこの後の予定を考えていた

「一人で行動してたから、他の奴等を見てくるとするか、イーグル皆の位置はわかるか？」

「現在、海、浜辺、入り江、海の家それぞれの反応があります、どうやら何人かで固まっているかと」

「なるほどなあ…さあて何処から行くか」

イーグルに位置を教えて貰ったアルは誰の様子を見に行くか考える
と決めた目的地に向けて海の中を泳ぎだす

— 海 —

「確か、ここら辺に誰かいたはずなんだがな…誰もいねえや…帰
ぷはあっ！！」おうわっ！？ス、スバル？」

反応があつた地点に来たのだがそこには海が広がってるだけで何も
なかった

今日はイーグルも休暇のようなもので機能も最低限のものしか起動
してなかったから誤差も考えられる

そう考えたアルは移動しようとした時いきなり海中から現れたスバ
ルに奇声を上げた

「むう、ティア酷いよ…あんな手を使うなんて…」

「しかも無視か!？」

「あれ? アルさん、いつからそこに？」

「ついさっきだよ、何をしてたんだ？」

水の中で腰を擦りながらスバルは落ち込みながら言う

アルは無視された事に驚きながらツツコミをいれるとスバルは不思議そうにしながらアルの方を向く

「素潜りですよ、ティアと競争してたんですけどティアったらキックして邪魔するんですよ」

「そうなのか? ティアナが妨害するなんて珍しいな「ぷはっ!」!」
あっ…出てきた」

「ティーアー、酷いよ! キックするなんて」

「アンタが最初に胸を触ってきたからでしょ! 自業自得よ!」!

水から顔を出したティアナにスバルは文句を言うと、ティアナは睨み付けて噛みつきそうな勢いで反論をする

「スバルもそうだが、ティアナもあまりやり過ぎるなよ? 下手したら溺れるからよ」

「ア、アルさん! ? いつの間に…すみません…心配をかけてしまつて」

「ついさっきだ、わかってくれたなら良い具合とか悪くないよな?」

「は、はい！／＼大丈夫です／＼」

二人の間に入るように割り込むとティアナは驚くとシュンと落ち込む頭を下げてるティアナに微笑するように言うと体調の方を聞くと、ティアナは顔を赤くして少し嬉しそうに返事をする

主張任務の終わり辺りからティアナはアルに対して態度を変えていただが明らかに態度が変わってもアルは気づく事はなかった

「どした？顔が赤いけど…」

「嬉しいんですよ、アルさんに気にして貰って「スバルっ！！／＼／」やばっ！？それじゃアルさん、あたし、逃げます！！」

「あ、待ちなさい！スバル！！」

顔を赤くしてるティアナにアルは不思議そうに聞くとスバルがからかうように教えるとティアナは怒鳴り声を上げる

スバルはまずそんな顔をしてから凄い勢いで泳いで逃げていく

「いつちまった…仕方ない、他の所に行くか…」

その場からいなくなった二人にアルはハアとため息をつくと別な場所に移動するために浜に向かって泳ぎだす

「さてと、ここからなら海の家が浜辺が近いな…」

浜辺に到着したアルは右に見える海の家と左に見える自分達のパラソルがあった

どちらに行くかと迷つてると、海水浴に来てた人たちが次々と海の家に集まっていくなが見えたので先に海の家から行く事にした

「なんかあるのか？行ってみるか」

アルは人だかりが気になり海の家に向けて足を進めた

——海の家——

「ハグハグ！」

「アグアグ！！」

「ガブガブ！！！！」

そこではすさまじい光景が広がっていた、海水浴に来てた人たちは一つのテーブルに視線を集めていた

そこでは三人の少女がまるで吸い込むようにかき氷を食べていた

「ヴィータにリン、セレスまで、何をしてんだ？」

「アル！？悪いけど今は構ってる暇はねえからまた後だ！！」

「見ていて！アル、私優勝するからね！！」

「リインも負けないのです！！」

人混みを掻き分けて入ったアルは、凄まじい勢いでかき氷を食べている少女たちに質問を投げ掛ける

よほど食べるのに集中しているのか、アルに対してぞんざいな言い方で返すとヴィータ達は食べるのに集中した

アルはヴィータ達の近くで見守っているシャルルを発見しそちらに向かった

「シャルル、これはなんの騒ぎだ？」

「実はアレが原因なの、もう三人とも止まらなくて」

アルに質問されたシャルルは壁のポスターを指でさす、そこにはかき氷早食い対決、優勝者にはサマーフェスタペア招待券！

「サマーフェスタ？…聞いた事ないな」

「クラナガンのホテルでやる予定の行事よ、ペア招待券って聞いて三人はこうなったの」

「いきたい奴がいるんだな…まあ良いや、んじゃ俺は浜辺の方に戻るな」

三人に腹を壊すなつて伝えてくれ」

「ええ、わかつたわ」

ポスターの内容をシャルに聞くと、シャルは簡潔に説明すると三人がやる気をだしたと補足をする

アルはハアとため息をついてから浜辺に戻ると伝えたと海の家を後にした、アルが外に出た時に中で歓声が上がった、どうやら優勝者が出たそうだ

アルは特に気にする事なくパラソルの方に向かった

—— 浜辺 ——

「たあっ!!」

「フェイトちゃん!!」

「任せて、はやて!!」

「よっし!もろた!!」

パラソルの所にたどり着いた先では熱戦が繰り広げられていた

砂浜に線でコートを作つてはやてとフェイト、シグナムとなのはのビーチバレーが行われていた

「凄い迫力のある試合だな…遊びじゃないだろ…」

「アルか、何かようでもあるのか？」

アルは繰り広げられてる戦いに苦笑をもらした時に、パラソルの下にいたザフィーラに呼びかけられる

「少し寄っただけだ…珍しい組み合わせだな、なのはとフェイトが別れるなんて」

「主はやてがたまには別れて見ればどうだと提案してな」

「なるほどね…」

ビーチバレーをしている組み合わせにアルは珍しげにしながら言う
とザフィーラがそれに答える

その間にも攻防戦は激しさを増していく、それでもラリーが切れな
いのが凄いとアルは関心をしていた

「少し別な所を見てくるか…ザフィーラ、またな」

「そうか、わかった」

ここに居ても暇だと思ったアルは残った入り江に向けて足を進めた

——入り江——

反応があった入り江に来たアルは周りを見渡して人を探した

「と言っても残ってるのはライトニング小隊の奴等だけだな」

誰に聞いてるわけでもないのにアルは呟く、自分の行動に虚しさを覚えながらもレキ達を探した

そして日陰で座って休んでいるエリオを見つけた

「エリオ、休憩中か？」

「アルさん…はい、少し疲れちゃって」

「なんかそれだけには見えなかったけどな
間違いならいいけど、少し寂しそうだったからな」

日陰まで歩いて移動しエリオに声をかけると苦笑しながらエリオは答えた

遠くから近くまでくるまでエリオの表情が沈んでいることに気がついたアルはエリオに聞いて見ることにした

「僕は別にそんな事は…」

「お前らちびっこ組はどうも人に頼らないよな、少し頼れお兄さんはいつでも空いてるんだからな？」

なかなか訳を話さないエリオにアルはやれやれといった感じにため息をつくと軽くエリオの頭を小突いてニツと笑う

「アルさん、なら聞いて貰えますか？」

…実は最近、レキとキャロの仲が良いなあと思っててるんです…」

「確かにあいつらは仲が良くなってるな…嫉妬か？キャロをとられ

たつて」

小突かれてからエリオは少し嬉しそうにするとポツリポツリと語りだした

話しの内容を聞いたアルはふうむと顎に手を当ててから指を立ててエリオに聞く

エリオは首を少し大きく横に振ってから言葉をだす

「違います、僕とキャロはそんな関係じゃないです…でもキャロがレキとそういう関係になりたいなら僕は邪魔じゃないかなって思ってます」

「ハア…お前って奴はんな事はお前が気にする事じゃねえんだよ
大体恋愛は本人と相手の問題だ

第三者がいようがいまいが関係ねえよ

別にあいづらがお前をばういてるわけじゃないんだろ？」

遠くの方で遊んでるレキとキャロを見てエリオは言つとアルは深く息を吐いてから二、三回頭を小突いてから言う

「そんな事はしませんよ！二人とも気にかけてくれます…だけど…
やっぱり」

「それでお前が断つたりしてたら余計にあいづらは心配すんぞ？
何があつたかなってそしたらお前がいなくなつた意味がねえだろ」

アルの言葉にエリオは直ぐ様反論をするとだんだんと声は小さくなつていく

アルはレキ達に視線を向けながら言つと今度は頭を小突く事なく優しく撫でる

「優しさで身を引くのは良いけどそれがかえって傷つけることになる、それがわかんないわけじゃないだろ？」

お前ら似てるからな、まあイチヤつかれんのが見たくないならお前も彼女を作れよ、いい子がいるかもな？」

「ア、アルさん！？」

「ハッハッハ、またな！」

アルは立ち上がってエリオに背を向けたまま話し、指をエリオに向けてニツと笑いながら言つとエリオは慌てふためながら何を返せば良いか迷つてるとアルは手をヒラヒラと動かしながらその場を後にする

入り江の近くまで来たアルは後ろを軽く振り返ると座っていたエリオをレキとキャロが立たせて海に向けて手を引いていく姿が見えて少し安心したように笑顔を向けた

日も落ちて全員が集合した時だった

「明日までの休暇や、シャマルが近くの旅館に部屋を取ってくれたみたいやから移動しよか」

「あ、はやてちゃんそれについてなんだけど部屋割で一人の人がでちゃうの、取れた部屋は大部屋と三人の中部屋、個室しか取れなかったのよ」

はやては浜辺から見える旅館を指でさしてから言つとシャマルが少し申し訳なさそうに割り込んできて説明をする
誰が一人になるかと皆が考えているとアルが手をあげた

「俺は一人でいいぞ、わざわざ大部屋にいく奴等から出すより人数少ない野郎が良いだろ？」
それとエリオとレキはザフィーラと交流しとけ、普段から喋らないんだからな」

アルの言い分に皆は一理あると思い個室はアルに決まった

—— 旅館 ——

「ふいゝさっぱり、さっぱりっど…明日も休暇、ゆつくりと休むかな」

個室のシャワーを浴びて砂を流したアルは窓際の椅子に座り込むと明日の事を考えているとふと控えめなノック音が部屋に響いた

EP13：言葉にしなきゃわからない時がある（前書き）

今回はフラグ破壊とフラグ立てです

場面がコロコロ変わって見にくいかもしれませんが、ので注意を

EP13：言葉にしなきゃわからない時がある

出張任務が終わりアル達は機動六課に戻ってきていた
小休暇のような出張任務を堪能したメンバーは再び出撃に向けて訓練に励んでいた

「ふうむ…少し、いや大分だよな…」

「どうかしたんですか？アル」

訓練スペースの近くにある階段で訓練を見学していたアルはなのはの訓練内容を見て難しい声を上げるとモニターを展開してデータを表示していく

イーグルは突然のアルの行動に怪訝そうな声で聞くとアルはやっぱりと呟やいて手を止めた

「なのはの訓練はどうにも基礎を重視してるな…」

「悪い事ですか？新人なら基礎を重視するのは当たり前かと」

アルの弾きだしたデータにイーグルは何を言いたいのかと思いがながら言うイーグルの考えを察したアルは説明を始めた

「訓練を始めて2ヶ月くらいはたってるけど、一般的な訓練密度なら特に問題はねえだけど…このデータを見る限りかなり密度が濃いなだよ、だからそこらの新人と対戦させたら圧勝できるくらいあいつらの実力がついてんだ」

「確かにそれならば個人技を高めた方が良いですね」

アルの説明でイーグルは理解をする、アルはそのままフォワードの方に目を向ける

朝の訓練が終了したフォワードはこちらに向かって歩いてきていた

「まあここまでは推測だから間違いがあるかも知れない、今度は実証だな」

「何をする気なんですか？」

「少し話を聞くだけだ、聞く相手はティアナにしとくか」

階段から飛び降りながらアルは言つと少し駆け足でフォワードの所に向かった

「みんな、お疲れさん」

「アルさん、何かありましたか？」

「ちよいとティアナに話しがたくてな、悪いけど先に行つてくれないか？」

フォワードメンバーの姿が見えるとアルは速度を緩めて片手を上げて呼びかける

フォワードメンバーは何事かと首を傾げるとレキがアルに質問を投げ掛ける

アルは人差し指と親指で隙間をティアナに手招きをする、ティアナは少し不安そうにアルの側に来るとレキ達は言われた通りに先に行き、その場にはアルとティアナしかいなかった

「あの、話してなんですか？」

「そうだな、なのはの訓練についてかな？」

ティアナ、お前は今の訓練で十分だと思うか？」

「そ、それは…満足しています、あれだけ手の込んだ訓練なんてありませんから」

「そうか？ティアナ、お前さ自分が強くなった自覚がねえんじゃないか？」

不安を表情に出しながらティアナはアルに質問をすると、アルは人差し指を立ててから用件を言う

いきなりの質問にティアナは戸惑いを隠せなかった、けど少し息を飲んでから質問に答える

アルはティアナの回答に不満があるのか怪訝そうな目をしながら、ティアナに指をさして言うティアナは凶星をつかれた表情を浮かべた

それを見てアルはやっぱりと呟いてから手をおろす

「アルさんはなのはさんの訓練に間違いがあると思うんですか？」

「いや、間違いはねえよ…というか訓練の内容に間違いなんてねえな、何かしら意図があればそれでそいつの経験になる…けどなのはの意図がどうにも見えなくてな…」

「意図、ですか？」

「そういう事、まあちいとかするから訓練時間以外で自主トレとかすんなよ？身体を壊すからな」

アルの呟きにティアナは何故そんなことを聞くのかと思ひ質問を投げ掛ける、アルは少し難しそうに頭をかきながら説明すると少し真剣な表情で呟く

アルの表情にティアナは表情を強ばらせる、それを見たアルはニツと笑いティアナの頭を軽く撫でると釘を刺してから、なのはがいるであろう訓練スペースに歩いていく

——訓練スペース——

フォワードメンバーがいなくなったその場所でののはがモニターを開いて今日の訓練のデータをまとめていた

なのはの後ろ姿を確認したアルは意を決して近づいた

「あれ？アルさん、どうかしたの？」

「ちょっと、用があつてな…まあ作業しながら聞いてくれや…」

アルの足音に気づいたなのは笑顔を浮かべながら言うと、アルは少し言葉を選びながら答えて手を軽く動かす

「うん…いいけど、用ってなに？」

「なあに…訓練で基礎を重視する理由を、聞かせてくれないか？
なんで個人技よりも基礎を重視しているかをさ」

モニターに目を移しながらなのは不思議そうに頷くと、アルはなのはの方は見ずに本題に入った

突然の事にモニターの操作を中断したなのは苦笑をしてアルの方を向く

「いきなり、何を聞くの？基礎は重要なのは当たり前でしょ？」

「普通の教導官がするならこんな質問はしねえ…けどお前の訓練の密度の濃さを知ってるからこそ聞きたいんだよ…なんで基礎を重視するのかってな」

「…もうアルさんは大げさだよ…エリオ達もいるから基礎は念入りにしたかっただけだよ？」

本当にそれだけだから…ほら早く戻ろ？皆が心配するから」

モニターを閉じるとなのはははと苦笑しながら説明をする

アルは自分が抱いている疑問をなのはにぶつけると一息ついてから改めてなのはに質問をする

なのははよほど話を切り上げたいのか少し早口で言いながら訓練

スペースを出ようと歩き出す

「今のまま、続けりや近いうちに取り返しのつかないことになるぞ？
あいつらの中には強くなつたか自信がねえやつがいるからな」

「だ、大丈夫だよ！皆ちゃんとわかつてくれるよ、自分達は強くな
つてゐるって」

「都合の良い解釈をするな…自分の本音を聞かせない奴の訓練の意
味がわかるほど、お前らの関係は深くねえだろ」

歩き出したなのはがアルの横を通りすぎた時にアルは普段の口調と
は違い無感情に近い口調で話すとなのはは足を止めた、それに構う
事なくアルはいい続ける

いい続けるアルに焦りながらもなのはは答えると切り捨てるかのよ
うに言葉を放つ

「なら…私の訓練は間違っているって言いたいんですか？」

「別に間違ってるなんて言っちゃいねえ、けどな…何事にも理由
がある…俺にはそれが見えない、なんで入れ込むかどうしてそこま
で出来るか、話してくれないか？」

背中を向けたままなのはは拳を握りしめてから絞り出すように言っ
とアルは腰に手を当てながら答えるとなのはの方を向く

なのはは少しうつむいてから考えると顔を上げてアルの方を向く
「わかった…話すよ、私が教導する理由を…」

SIDE：アルフィリオス

俺の方を向いたなのははゆっくりだけど話してくれた、自分の過去を…

魔力とまったく関係の無い世界で育ったなのはは9歳の時にユーノと言う魔法使いに出会った、それが魔法との最初の出会いそしてロストロギア事件の一つジューエルシード事件の始まりだった

その時にフェイトと出会ったのははフェイトとわかりあうために魔法使いとしての技量を高める…若干9歳にして並の魔導士以上の魔力を発揮していったなのは

正直に言えば有り得ないと思った、いくら才能があってもそれだけの魔力に子供の肉体はついていけない…無事に事件を解決したのは運が良かったとしか言えなかった

それでもなのはには更なる事件が待ち受けていた、ヴィータ達が起こした闇の書事件…圧倒的な実力差になのはとフェイトは一つの手段に出る、当時は安全性に欠けていたカートリッジシステムの導入だ

力には力、カートリッジシステムを最大限に活用してなのは達は闇の書の闇を撃破した、だけどそれが問題だった…

度重なる事件と魔力の反動はなのはの身体にだんだんと溜まってい

きついにそれは起こった

管理局の任務で次元世界で戦闘していたなのは、長い戦いのかで溜まった疲労により撃墜…重体となった、二度と飛べないと言われたそうだがなのは諦める事なくリハビリを続け、再び飛べるようになった

「長いリハビリを終えた私は自分と同じ目を他の人にも、味あわせたくないって思って教導に力を入れるようにしたの…これが私の教導をする理由だよ…」

「そうか…よく話してくれたな、おかげで良くわかった…」

なのはは俺を見ながらそう告げた、その瞳には確かな決意があつて嘘はついてないのはわかった…辛かったんだな、だけど

「お前がアホなのが、良くわかったわっ!…」

それはそれ、これはこれだ

俺は手を振り上げると勢い良くなのはの頭にチョップを叩き落とす

ドゴス!という鈍い音が訓練スペースに響いた、いきなりのチョップになのはは反応出来ずに直撃を貰いあまりの痛さに頭を抑えた

「い、痛い!?何するの!」

「それだけの理由があるならなんで言わねえ、通じないと思ったか？見損なわれると思ったのか？

なんにせよ、それだけ大事な事ならちゃんと言葉にしろよ…」

「アルさん…」

「間違いだとかじゃない、自分の気持ちは言葉じゃないとわからない…つうわけでお前は今日の午後にもアイツラに話せ」

痛がるなのはアルは鼻先に指を突きつけると言葉を放つと仕方ないと言った表情を浮かべる

アルのその表情を見て意外そうな表情を浮かべる

ハアとアルはため息をついて視線を落としてからなのはの方を向き直すと再び指をさす

「えっ！？午後？しかも今日の！？」

「そういうこと、思ったら吉日っていうだろ？」

だから今のうちに話しとけ、無くしてからじゃおせえからなんじゃな…」

アルの言葉に上手くまとまらないのかオウム返しのように返すのは

驚き戸惑ってるなのはの横を通りすぎながら軽く手を上げて訓練スペースを後にする

「あん？なにをまってるんだ？あいつ…」

訓練スペースを出てきたアルは隊舎の玄関先で車に寄りかかっているはやてを見つけた、腕時計を見ながら少し不満そうにしていたが、アルを見つけるとズカズカとアルの方に歩いて来てくる

「遅い！！いったい何をしてたんや？」

連絡いれてもイーグルは全然つないでくれへんし」

「本当なのか？イーグル…」

「すみません、話しの最中でしたので邪魔をしたらマズイかと思ひまして」

「悪い…気を使わせたか」

はやての言葉にアルは気まずそうな顔をしてから、イーグルに問いかけると申し訳なさそうにイーグルは言い訳をするとアルはすまそうに目を閉じる

「話しって誰としてたん？」

「少しなのはとな…んで何かあったのか？」

二人の会話を聞いてはやては少し不思議そうに首を傾げて入ると、アルは苦笑をしながら簡単に説明すると逆にはやてに質問をする

「せや、実はナカジマ三佐に頼み事があるやけど、ちょうどナカジマ三佐からアルさんを連れてきて欲しいと頼まれたんよ」

「ゲンヤさんから…なんだろ？借金…返したよな？」

「そんな事してたんか…あんたは…」

「まあ行ってみりゃわかるか、んじゃ詫びに運転するから乗ってくれ」

はやての用事を聞いて顎に手を当てながら考え込むとはやて呆れながら握り拳をつくる

特に思いつかなかったアルは軽くはやての頭を撫でると車に乗り込む、ため息をつきながらもはやては車に乗るとアルは陸士108番隊に向かって車を走らせた

それから数分後、陸士108番隊についたアルは隊舎を見上げる

「いやはや、久しぶりに帰ってきたな…にしても変わってないな」

「数ヶ月で変わってたら凄いですよ？」

「リイン…いたのか、鞆の中だから気付かったぞ」

「確かに何も言わなかったのはわかりますが、何かどうでもよさそうだと思っ

隊舎を見ながらうんうんと頷くアルにはやての肩掛け鞆に入ってた
リインがひょっこり顔を出してから言う

いきなり聞こえたリインの声にアルは投げやり気味に答えるとリイン
はかみつくような感じに反論をする

「ほらほら、二人とも早くナカジマ三佐のところにいかなアカンよ」

「へーい」

「はいです」

二人のやりとりを聞いていたはやては手をパンパンと叩いて止めさ
せると目的を確認させると隊舎にむけて歩き出す

陸士１０８番隊 部隊長室

「オッス！ゲンヤさん、久しぶり！元気か！？」

「そついうお前さんは相変わらずうるさいな……」

部隊長室に入るなりアルは大声で言うつと陸士１０８番隊の部隊長に
してアルの上司であるゲンヤ・ナカジマはため息をついた

「あつたり前だろ？俺が静かだと調子狂わないと思うっしょ？」

「いやそれが一番だと俺は考えるがな」

「ゲンヤさん、ヒドイ……」

「先輩…その辺で話しがすすまへんから」

ゲンヤに文句を言われてアルはビシツとにこやかに決めるとゲンヤはすっぱり切り捨てる

アルが肩を落としているとはやてが苦笑をしながらツツコミをいれる

「おう、久しぶりだな八神、悪かったなこのバ力をつれてきて貰ってな」

「いえいえ、私も用がありましたから先にナカジマ三佐の方からで良いですよ」

「そうか？なら先に済ませるか、まあ座ってくれ
ついさっきギンガに茶を頼んだから直ぐにくると思うぞ」

ゲンヤは入ってきたはやてに挨拶をすると敬語を使いながらはやては言っと、ゲンヤはソファアの反対側をさすと二人はソファアに座る

「そんで用ってなんだよ、大体俺が必要な理由がわからん」

「それについてはこれから話す、実はな…お前さん達が主張任務に行った翌日に管理局の施設が何者かに襲撃されてな、その際にデバイスが一つ盗まれたんだ」

「ハッ、管理局の施設から盗みを働く奴がいるとはな…大それた事しやがる」

「つか何を盗んだんだ」「盗まれたのはTBシリーズの二号機だ」…
なんだと？」

ソファーに座ったアルは面倒そうに返すと神妙な顔をしてゲンヤは答える

告げられた内容にアルは膝を組んでから鼻で笑うと盗まれた代物の名前を聞いて表情を変えた

「なんなんですか？TBシリーズって…」

「正式名称はトライアルバードシリーズ…作られたものに鳥の名前が入ってるから名付けられたプロジェクト名、次世代量産型デバイスの試作品を作るプロジェクトだ

そしてイーグルを作ったプロジェクト…でも凍結したんじゃないかったのか？」

「確かに、プロジェクトは凍結はされた
だけどTBシリーズは三号機まで開発されていたらしくてな
今回襲撃を受けた施設は二号機の保管をしていたそうだ」

聞きなれない単語にはやては質問をするとアルがそれに答える首元にあるイーグルを手にとって見せて語る

ゲンヤは更に補足を加えるように説明を加える、話を聞いていたはやてはふと気づいた事があり二人に聞いて見ることにした

「先輩が一号機、盗まれたのは二号機…三号機は何処にあるんですか？」

「三号機は開発者ガドルフ・ザイチエが持っているそうだが、昨日本局から連絡が入ってイーグルレイダーはあるかと聞かれてな、そのついでに聞いた」

「ガドルフのじいさん相変わらずだな…んでゲンヤさん、犯人の特徴とかわかんないのか？」

「…いくつかわかってる事がある」

問いかけられた内容にゲンヤは答えると昨日の出来事を話す

開発者の名前が出るとアルは苦笑を浮かべた後、真面目な顔をしてゲンヤに問いかける

ゲンヤは少し考えてから口を開き犯人について語っていく

「まずは人数だが三人で犯行は一人でやっている

こいつは映像だけでしかわからなかったが一人は長身、体型から男だとわかってる

もう一人は少し低めの女だ…どっちも顔はわからなかった、最後に

…」

「ゲンヤさん？どうかしたのか？」

「何か不味い事でも？」

犯人について語っていくゲンヤだったが突然、言葉を濁し言いにくそうな表情をした

ゲンヤの変化にアルとはやては心配そうに聞く

「いや、最後の一人は融合騎だ…しかも雷の能力を持ってるって事がわかってる」

「融合騎…しかも雷だと…まさか」

「迅雷の戦姫ライナ…」

ゲンヤの言葉を聞いて二人は思いわたる事があった

それは以前セレスが言っていた姉妹騎の事だった

融合騎自体が少ないミッドチルダで同じ能力を持った融合騎がいるとは思えなかった、だがそれを認めると言うことはセレスの姉は犯罪者と共にいるという事になる

「まだ確定した訳じゃない、気休めかもしれないがそうじゃない可能性もある、それを忘れるな」

「わかった…セレスにはまだ伝えないことにする、ゲンヤさん悪いけど」

「心配すんな、少し調べるつもりだからな」

二人の表情を見てからゲンヤは言葉を選びながら話すとアルは決めた様に頷くとゲンヤに頼もうとしたがお見通しだった言わんばかりにゲンヤは返答する

「ありがとうございます、ゲンヤさん」

「よせ、普段言わない言葉づかいをすんな」

「これはさすがにちゃんとしないとまずいだろ…んじゃ話しはもう良いよな？少しその辺ぶらついてくるから」

アルは素直に頭を下げるとゲンヤは困ったように言う

アルは苦笑をしながら答えると立ち上がり部隊長室を出ていく

「リイン、悪いけど先輩と一緒にいてくれへんか？」

「わかったです、それでは失礼します」

「…多分大丈夫だとは思っけどな、それで次はお前さんの話しか」

「はい、実は…」

部屋を出ていくアルに少し不安を覚えたはやてはリインに言うと心配そうに見つめていた

ゲンヤは一息ついてから言うのと改めてはやてに向き直す、はやてもアルを心配しながらも自分の目的を話す為に口を開いた

「アルさ〜ん！待って下さいです〜！！」

「リイン…どした？なんか用か？」

「はやてちゃんが心配してたから追いかけてきたです！だけどそれでも無さそうですね…」

廊下を歩いているアルの後ろからリインの声が聞こえ、アルは振り返ると全速力で飛んでくるリインが見えた

アルは不思議そうに質問をするとリインは急ブレーキをかけながら止まると首を傾げながら訳を話す

「まあな、考えても今はどうにかなる訳じゃねえからなま、なんとかなるしょ」

「ハア…はやてちゃんの思い過ぎだったみたいですね…」

アルは腕を頭の後ろで組みつつ歩き出すとリインは疲れた様にため息をついた

「というわけなんですがお願ひ出来るでしょうか？」

「確かにそれならうちに頼むのが筋だな…」

ゲンヤと向きあったはやては一つの頼みをした、それは陸士108番隊によるレリックの密輸ルート of 捜査であった、地上の事は地上の部隊がよく知っているからだ

「こちらからはハラOWN執務官が協力します」

「わかった、ウチからはギンガとラッドを貸し出すか、ハラOWNのお嬢ちゃんならギンガもやりやすいからな」

「すみません、スバルや先輩だけでなくギンガもお借りしてしまつて」

はやては調査の人員について説明をするとゲンヤも人員を選別する協力してくれたことを喜びながらも申し訳なさそうに頭を下げるはやて

「気にすんな、スバルが自分で選んだ道でギンガも納得してる…そしてお前さんにはアイツが必要だろ？」

「う…それは、その…はい…」

「なんだ、まだアイツに言ってねえのか…お前は端からみたらバレバレなんだよ
勢いつけていっちまったらどうだ？」

「む、無理です！言える訳ない…って先輩に対しては憧れでしか無いんですよ！

だいたい私があんなちゃらんぼらんを好きになりませんから…！」

「そうか？なら良いけどな…そうだ、この後ギンガとアルを誘って飯でも食いに行くか？詳しい話しもしときたいからな」

ゲンヤはからかうように言うとはやては言葉を詰まらせながら答える

ハアと深いため息をついてからゲンヤは言うど、はやては手遊びをしながら考えているとはやては噛みつく様に反論をすると、ゲンヤはその様子を見て微笑してからはやてに提案をしていく

「わかりました、では先輩に伝えてきますね？」

「ああ…それとアイツ…ちゃんとやってるか？」

「先輩ですか？はい！六課の皆の世話してくれて今では私達を支えてくれてます！それじゃあいきますね」

「…いつちまったか、しかしよ…八神、少し違っぞ
アイツはお前らを支えてんじゃねえ…お前らが逆にアイツを支えてんだよ、いつまで引きずる気なんだかな」

立ち上がってはやては外に行こうとした時にゲンヤに呼び止められると質問をされた

ゲンヤの唐突に聞かれた事にはやては少し嬉しそうに答えたとアルに会うために外に出ていく

はやてが出ていってからゲンヤはため息をついてから呟くと立ち上がり、デスクに立てかけてあった写真立てを手にとった

そこには今より若いゲンヤとにこやかに笑う毛先の白い赤髪の少年と黒髪の少女が写っていた

「あ、先輩！ここにいたんか…これからゲンヤさんがギンガと一緒に食事に行くって言うてるやけど先輩はどうするん？」

「むう…悪いが先に帰る、少しだけ調べたい事があってな…」

「そか、なら仕方ないやな
うん…わかった、ところでリインは？」

「リインならギンガの所だ、話があるそうだからな」

休憩室で休んでいたアルを見つけたはやてはゲンヤから誘われた内容を教えると、アルは少し気まずそうに返す

はやては残念そうに肩を落としてからここにいないリインについて聞くと、アルは短く答えてから立ち上がりはやての頭を軽く撫でると休憩室の入り口に歩いていく

「車は置いていくからな？一応こっちにバイクがあるからそれで帰るんじゃ楽しんで来いよ？」

休憩室を出ようとした時にはやてに伝えたとアルは手をブラブラと動かしながら外へと出ていく

陸士108番隊からバイクで帰ってきたアルはガレージにバイクを止めると、被っていたメットを脱いで隊舎入り口に向けて歩きだした
「ん？誰か待つてら…なんかデジャヴ感じるけど行くか」

辺りが暗い事と玄関の明かりで人の顔は見えないがシルエットが見えたアルは、昼間の事を思い出しながら歩をすすめる

「あ、アルさん、おかえりなさい」

「ただいま、誰か待つてるのか？なのは」

見知った声を聞いて誰かを判断したアルは相手の名前を言うと近くまで歩いていく

「うん、アルさんを待ってたんだ」

「なんでまた？」

「今日…皆に話した結果報告かな…ちゃんとわかってくれて、ティアナなんて生意気な事考えてましたなんて言われちゃった…」

「そうか…どうだった？」

壁に寄りかかっていたなのはアルと向き合うように話すと用件を話し出した

なのはの言葉を聞いてからアルは今のなのはの心境を聞いて見ることにした

「アルさんの言う通り…ちゃんと伝えた方が良かったっておもった」

「ならそれで良いな、後は特にねえだろ？」

なのはは一旦うつむいてから顔を上げると今の気持ちを言葉にするアルはそれを聞くと短く答えてからなのはの横を通り過ぎていく

「ねえ、アルさん…聞いても良いかな？」

「ある程度ならな」

「物事には理由があるって言ったよね？」

ならアルさんも何か理由があって私達の間違いを正しているの？」

「…んなもん、ただの気まぐれだ…気にすんな…それじゃあもう寝るから」

アルが通り過ぎた時になのははアルを呼び止める、そしてゆっくりと語っていく

なのははから問いかけられたアルは黙っていたが光を背にしてなのははに答えると微笑を浮かべてから隊舎に入っていく

質問をしたなのははそこから動けずにいた、それは逆光を背にして笑った時のアルが、どことなく寂しそうに見えたからである

見間違いかもしれないそう思うのはには誰も答える事はなかった

EP13：言葉にしなきゃわからない時がある（後書き）

どうも、えのきです！

ようやく本編を進めることが出来ました

いかがでしたか？今回やったことはティアナ撃墜フラグの破壊です

正直な話しティアナ撃墜編はオリジナルでシナリオを作ってるので
ティアナをかまってる暇がないのです！

だから今回、破壊をしました、そして深まっていくアルの謎、それは
ホテルアグスタ編でわかります

それでは次回の更新を楽しみして下さい下さい

S・E・P：やっぱりベストパートナー（前書き）

5万PV記念小説の続きです！

楽しんでもらえたら嬉しいです！！

S・E・P：やっぱりベストパートナー

アルが部屋で明日の事を考えていた時、ノック音が部屋に響いた

「誰だ？まあでりやわかるよな」

シャワーあがりの頭を乾かしながらアルは扉の前まで行くとドアに手をかけて開けた

「はいよう、なんかご用ですか？」

「あつ！先輩、ちよつとええかな？」

「はやてか、構わないけど中にはいるか？」

ドアの向こうにいたのははやてだった、アルと同じく湯上がりなのか髪はしんなりしていた

とりあえず立ち話もなんだと思ったアルはクイツと指を部屋にさして言う

「んゝ…せやな、ならちよつと失礼させてもらうで」

少し顎に手を当てながらはやては答えるとアルの部屋の中に入ると部屋の中央に座る、アルはそれと向かい合うように座るとはやての言葉を待つ

しかしいつまで経ってもはやては喋ろうとしなかった

「はやて、用があつたんじゃないか？」

「えっ！？いや…なんや緊張してな…何を伝えにきたか忘れてもうた」

「おいおい、大丈夫か？俺相手に緊張することなんか無いだろ」

話を始めないはやてにアルは首を傾げながら言うとはやてはしどもどろしながら話しだす

アルは苦笑を浮かべながら手をパタパタと動かして言う

「せやけど、なんやろ？普段よりなんか雰囲気が違うからかな？」

「シャワー、浴びただけだがなあ…」

はやては目を細めながらアルの身体を見ているとため息まじりにアルは答える

「ああなるほど！そうとわかったら、気にもならんくなっただわ」

「お前なあ…んでなんか思いだしたか？」

「えっと、そや先輩に明日の予定を聞きたくてここにきたんや」

はやてはポンと手を叩いて納得をして笑いながら言うとアルはハアと疲れたようにため息をつくと投げやり気味に言う、顎に手を当てながらはやては考えると思いだしたように人差し指を立てて用件を話し

「明日？…特にねえな、なんだデートのお誘いか？」

「っな！？そんな訳ない…事もない、明日…帰るまで一緒にいてもええかなって聞いたかったんや…」

明日の事を聞かれるとアルはアハハと笑いながらちやかすように言う、はやては反論するように言うが途中で言葉を止めると少し手遊びをしながら気まずそうに言うてくる

意外な内容にアルは思わず言葉が出なくなり苦笑いを浮かべて黙ってしまう

「黙つとらんではつきりしてな！／／／
行くか行かないか！さあ！さあ！！さあ！！！」

「わかった！行くからオトモするから、離れてくれ！！」

気まずい空気が流れる中ではやては顔を赤くしながらアルに返事を迫ってくる

床を叩きながら迫ってくるはやてにアルは後退りをしていく、そのうち壁に追い詰められてしまうがそれでもはやては迫ってくるのでアルは思わず叫ぶように返答しながらはやてを手で静止する

「ならええんや！…って、うわわわっ！！」

…ア、アハハ…」

アルの返答を聞くとはやては迫るのを止めてふと、自分の体勢に気づくと脱兎の如く引き下がり苦笑いを浮かべて勢いよく立ち上がる

「と、ともかく伝えたで？明日は一緒にいる、ええな？ほな！！」

はやてはシュタつと勢いよく手を上げてからアルの部屋を後にする
はやてが去った後、アルは深いため息をつくと自分の顔を片手で覆う
だ…」

先ほどのはやてが迫ってきた事を思い出して顔を赤くして呟くと再びため息をつく

——次の日——

「寝不足DEATH…」

「早朝の挨拶からそれかいな…」

日が上がって朝食に降りてきたアルは目に隈を作って欠伸をしながら言つと、はやては呆れたように返す

昨日の夕食は全員バラバラであったが今朝は全員、一緒にとることにした

アルは少し寝ぼけながら席につくとフラフラしながら箸を手にとる

「むう…眠い…この魚、味がしない…」

「なんでそんなに眠そうなん？ちなみに魚ちゃうからな、それ」

「昨日、どこぞの誰かさんが俺に詰め寄ってきたからな…頭に残って寝れなかった」

「んなっ！？ずいぶんと根に持つてるんやな…もうええやろ…」

オカズを取ろうとしたアルはおしほりを箸でつまむと口に含みながら不思議そうに言う

はやてはジト目でアルを見ながら呆れたように言つと薄目を開けて明らかに不機嫌そうに返す

昨日の話を蒸し返しされてはやては拗ねたように答える

朝食を終えたアルとはやては水着に着替えて砂浜にやってきた

「水着に着替えてきたのは良いけど、なんで上着を着てんだ？」

「ひ、日焼け防止や…あんまジロジロ見んといてな…」

旅館から出てきたはやては上に少し大きめな上着を着こんでおり、アルの質問に身体を手で隠すようにしながら答える

「いやいや、はやてさんよ…水着を見られたくないって乙女心はわかるがそれは逆にエロチックだぞ？その上着から覗くあ、しゃぐう
！！」

「わかつてるなら、それを堂々と言つな！！／／／」

アルは苦笑を浮かべながら手をパタパタと動かしてはやての太ももを指でさして言おうとした時、はやてのアップーが顎に決まり言葉は途中で切れた

はやては肩で息をしながら何か言えば殴れるように身構える

「すみません、何も言わないです…だからその手を下ろして下さい」

「まったくせっかく誘ったんやから、ふざけるのも大概にしいや…私だけ緊張してるみたいやん…」

「あたた…はやて？どうかしたか？」

「なんでもない、ほな行こうか！」

はやての握り拳を見てアルは素直に頭を下げるとはやてはため息をついてからボソリと呟く

顎を擦っていたアルは頭に？を浮かべながら聞くとはやては問いかけに答えずにアルの手を取って浜辺へと走りだす

「海ときたら水泳！沖のブイまで競争や！！ちなみに負けたら海の家でなんかおごるってのはどうや？」

「良いけど、体力の差があるだろ
ハンデ…いるか？」

「そんなのは必要ない！真っ向勝負でいかせてもらおうでー！」

浜辺にたどり着いたはやては周りを見渡してから海の沖に浮いてる
ブイを指して言う

浜辺とブイの距離を目算で測るとむうと一息ついてから、はやてに
提案するとはやてはビシッと指をさして宣言をする

「…仕方ないな…後悔すんなよ？
俺は加減しないからな」

「そっちこそ、負けた時の言い訳はそれでええんか？」

「ぬかせ、行くぜ…レディ…」

「GOーっ！！」

軽く準備運動をしながらアルは言うとはやては挑発するようにつたえる

アルは短く返すと走り出す体勢をとる、はやても同じ体勢を取り二
人は同時に海へと駆け出す

「「だありゃあああつー！！」」

さながら魚雷のようなスピードで二人はクロールで泳いでいく

時にはやてが抜かすとアルがそれを追い越す、そしてはやてがまた
追い越すその繰り返しだった

（はやてがここまで食らいつくなんてな…）「だが負けてらんねえ、
オウリヤアアアッ！！」

並走するように泳いでいるはやてにアルは苦悶の表情を浮かべると
帰り分の体力も無くするような勢いで加速をしていく

（なっ！？まだ余力があつたんか！だけど私も負けていられへんな、
よっしゃ！）「行く、あうっ！？」

どんどん離されていくはやては自分も加速しようとした時に足に激
痛が走る

それが足がつつたのだと気づいた時には、はやての身体は海の中に
沈んでいった

「はやて？…まさか、っ！」

ブイの間近まできたアルはスピードを落とすと、後ろにはやてがい
ない事に気付く、嫌な予感が頭をよぎると勢いをつけて海の中に潜
っていく

海中は昼間の日当たりのおかげで澄んで見えいた、アルは来た道を
戻るように泳いでいく、そして力なく沈んでいくはやてを見つける

と抱きかかえて浮上する

「ぷは！？はやて、すっかりしろ！おい！！」

「っ、げほ！げほ、げほ…ん、先輩？」

浮上して直ぐにアルははやての背中を叩いて意識を戻そうとする

二、三度叩くとはやては咳込みながら目を覚ます、アルははやての声を聞くとハアと安堵の息をもらした

「心配させやがって…ったく、戻るけど良いよな？」

「…うん、ごめんな？心配かけて…」

「アホ、命がかかってたんだ…んな言い方するな、次言ったら置いてくからな？」

はやてを背中に担ぐとアルはゆっくりと浜辺に向かって泳ぎだす

アルの背中に揺られながらはやては少し気弱そうに言う「アルははやてを叱りつけてから担いでいた手を少し強めに握る」

はやては苦笑を浮かべながらアルの背に寄りかかった

浜辺についたアルは一息ついてからはやてを下ろした

「その様子じゃ泳ぐのは無理だな…そうだな、着替えて来いよ散歩でもしようぜ？」

はやては返事をする元氣も無いのか肩で息をしながら頷くとよろけながら立ち上がり旅館に向けて歩きだした

はやてを見送ったアルは軽く辺りを見渡してから何かを見つけたのかはやてとは違う方に歩きだした

――数分後――

私服に着替えたはやては防波堤に寄りかかっているアルを見つけそちらに歩き出した

「着替え、完了や！待たせてしもうたかな？」

「特に気にしてねえよ、少しは元氣になったみたいだな」

「シャマルにヒーリングをして貰ったんや…説教付きで…」

「ハハ、そいつは運がなかったな…とりあえずゆっくりできる場所見つけておいたから昼飯がてら行こうぜ」

はやては先ほどより元氣な声でアルに話しかけると防波堤に寄りかかっていたアルははやての顔色を見てから微笑し言う

はやては元氣になった時の事を話すと少しだけため息をついた、ずいぶんこつてり絞らんだとアルは苦笑をして、足元にある買物袋を指でさして提案をする

「そやな、それでええよ」

「んじやついてこい」

時間を確認したはやては頷く、それを見たアルはニツと笑い袋を持つて歩き出す

アルが案内をしたのは昨日レキ達が遊んでいた入り江だった

近くある流木に座りはやてに手招きをするとはやてはアルの横に座る

「ほいつと昼飯、って言っても適当に見繕ってきたやつだけだな」

「いや、ありがとうな…先輩…」

アルは手に持った袋を下に下ろすと中から入れ物に入った焼きおにぎりを取り出すとはやてに差し出す

はやては少し沈んだ口調で受け取ると中々、口をつけようとはしなかった

「どした？嫌いだっただか？」

「そうじゃないんよ、ただ私は先輩に迷惑をかけてるだけやなっと思っただんや」

せつかく誘ったのに大した事できへんし今だって何も気のきいた会

話できへん…こんなダメダメや…」

「はやて……とおりやつ!!」

「あいった!!何するんや」

顔をうつむかせながらはやては語っていく、苦笑をしながら自身を非難するとアルがはやての頭にチョップを降り下ろす

チョップはそのままはやての頭部に吸い込まれるように決まると、はやてはいきなり事にパニックになるが犯人がアルだとわかると恨めしそうに睨む

「まったく何を言ってたんだか…はやて、俺はお前に大した事しろとか気のきいた会話しろって言ったか? つか俺には必要ねえよ…」

「せやけど、して貰ってばかりはイヤや

私も先輩に何かしてあげたいんや」

「なら普通にしろ、俺にとっちゃその方が良い

なんつか…あれだ、俺はお前といるだけでそれで十分だ

気を使わない普段通りの会話とか何気ないやりとり、それが良いな」

「ホンマにそんなんでええの?」

アルは呆れたようにはやての頭を小突きながら言つとすっぱりと答える

はやてはそれでも食い下がるようにするとアルは断言するように答えてから少し言葉を詰まらせながら答える、アルの答えにははやては

目を丸くしながら質問をする

「ああ、俺はお前と波長つうか相性が良いのか…気兼ねしないんだ、言っちゃえばベストパートナーなんだよ、誰かと組んだり一緒にいたりしてからお前と一緒にいると改めて思っただよ

ああ俺にはコイツが一番合っただなっとな

だから下手に気取るのはかえって嫌なんだよ」

「うえっ！？そんなのはじめてや！一度も聞いた事あらへんよ！！」

「いつてねえからな…んで、俺の言葉はわかったか？

だから普通にしてるよ」

「あう…／／卑怯や、そないな言い方…／／／」

アルは少し恥ずかしそうにしながら答えていく、今までまったく聞いた事ない答えにはやては驚きを隠せなかった

対してアルは開き直ったかのように答えると、はやての頭にポムっと手を置いてから言うとはやてはあまりの恥ずかしさに押し黙ってしまう

それから二人の間に沈黙が流れた、しかしそれは直ぐに破られた

「なら…普通に先輩に話しかけたりすればええんやな？
ふざけてたら砲撃とか撃ち込んでええんやな？」

「さすがに砲撃は勘弁して欲しいがそれで良いぞ」

「わかった…フウ、なんや必死に恩返ししようとした自分がアホみ

「たいやな…ハフウ…気が抜けたら眠くなってきたわ」

うつむきつつアルの服の裾を掴むとはやては質問をする

砲撃の単語に苦笑を浮かべながらアルは答えると、はやては手を離してから一息つくと自傷するように言ってから欠伸をする

「寝ていいぞ？ 帰りくらいには起こすから」

「ならお言葉に…甘えさせてもらっ…わ…」

うつらうつらとするはやてにアルは言うとはやてはそのままアルの身体に身を預ける

少ししてから静かな寝息が聞こえてきた

「必死に今日のプランでも考えてたのかねえ…寝る時間とか削ってさ」

「見事にアルが壊しましたがね」

「仕方ないだろ？ はやてらしくないのは見てたくないからな」

「わがままかと思います」

「承知の上だ…それにこの方がらしくて良いだろ？」

直ぐに寝たはやてに微笑気味に言うといーグルがツツコミをいれるアルはそれに苦笑をしながら答えると文句を言うようにいーグルは呟くと聞こえていたのかアルが答えるといーグルは黙ってしまったアルははやてを起こさない様に昼飯を食べると特に何をするわけも

なく海を眺めていた

はやてと過ぐす何気ない一時が少しでも長く続けば良いと思いが
ら…

——おまけ——

「帰ってこないと心配して探してみればこれかよ…」

「まあまあ、二人とも幸せに寝てるから起こさないようにしようよ」

日がくれたした時、いつまでも帰ってこない二人を探していた六課
メンバーは、入り江の流木に寄りかかって寝てる二人を発見した

アルに寄りかかって寝てるはやてと寄りかかれたまま器用に寝る
アルを見て、ヴィータは苛立ちながら呟くとなのはがそれを抑える

「とりあえずどうやって運ぼうか…ザフィーラ、頼めるか？」

「承知した…」

ため息をつきながらシグナムはザフィーラに二人の運搬を頼むと同
じようにザフィーラは頷く

「それにしても八神部隊長もアルさんも本当に幸せそうに寝てます
ね」

「アルの寝顔見てたらぶっ飛ばしたくなるけどな」

二人の寝顔を見てキャロが呟くとヴィータが腰に手を当てて言つと
全員が失笑した

S・EP：やっぱりベストパートナー（後書き）

どうも、えのきです！

いかなものでしたか？

本編がシリアス入る前にラブ成分とギャグ成分の補充が出来たら嬉しいかと

とりあえず5万PVが達成した事は本当に嬉しいです！

これの投稿時にはおそらく7万は越えてるんですけどね…

ともかくここまで夜天に舞い踊る荒鷲を見ていただきありがとうございます
ざいます

これからおそらく物語のターニングポイントに入ります、加速していく物語をお見逃しなく、そしてえのき作者の応援よろしくお願いします

次の記念は10万ですかね？…少し調子に乗りましたがそれくらいを達成出来るように励みます！

それではこれからもよろしく願います
では！！

EP14：予期せぬ邂逅（前書き）

いよいよ、ホテルアグスタ編でございます！

ギャグ中心な作品が一変するように頑張りますのでよろしくお願い
します

EP14：予期せぬ邂逅

そこは薄暗い空間で無機質な通路にカプセル型の水槽がいくつも並んでいた、その中には人らしきものが入っているのもいくつかあった

その通路の先にある広めな空間にその男はいた

紫色の髪の毛に白衣をまとった男は部屋全体に展開されたモニターを眺めて興味深そうに見ていた

「ふふふ、やはりこの部隊は素晴らしいな…プロジェクトFの遺産、タイプゼロ、エースオブエース…他にも有能な魔導士…」

そこに映されていたのはリニアレールで戦闘を行う機動六課の姿だった

「更に彼までいるとはね…ふふふ、中々興味深いサンプルが取れそうだよ」

「ドクタースカリエッティ…少しよろしいでしょうか？」

「おや君か…どうかしたのかい？」

白衣の男はモニターに映されたアルの姿を見て意外そうに言葉をもたず、するとカツカツと音を立てながら彼の後ろの通路から足音が聞こえる

そして彼の背後で足が止まった時、男に声かけられたスカリエッティと呼ばれた男は振り返って相手を確認すると友好的

な対応をする

そこにいたのは金色のショートカットで黒いベルカの騎士甲冑に身を包んだ少女だった、あどけない容姿とは裏腹の鋭い眼光は気弱なものなら萎縮するほどのものだった

「マスターからの伝言を預かってきました、用事があるから出るとの事です」

「ああわかった、しかし君たちが探しているものは今機動六課と言う場所にあると判明したんだがね」

「管理局の新部隊…それは本当なのですか？…」

「間違いないよ…目覚めているかは別だがね…」

スカリエッティの言葉を聞くと少女は握り拳をつくり力の限り握り締める

その瞳は怒りに満ちていた、そして少女はスカリエッティに背を向ける

「機動六課がどこにあるか教えて貰えますか？

私が貴方たちのアジトにくるのはあの子を探すためにすぎないのだから…」

「そうだったね、彼らは今ホテルアグスタに向かうそうだよ、クライアントからの情報だから間違いない」

「クライアント、ねえ…聞けば管理局の重役とか管理局の話しは信

じたくないけど仕方ないわね」

少女はスカリエッティを睨み付けるように言うとスカリエッティは仕方ないと言ったように答えると、少女の目がさらにきつくなる

苛立ちを隠さずに答えるとスカリエッティに背を向けて歩きだす、それを見てスカリエッティは興味深そうに笑いだす

「風と雷の戦いか…どうなるか楽しみだよ」

独り言を呟くとスカリエッティは笑い始める、その笑いは通路に不気味に響き渡った

ミッドチルダ・ホテルアグスタ

自然に囲まれたそのホテルのロビーで柱に寄りかかる男性がいた、アルフィリオス・ラーゼンハルグである

彼の服装は普段の六課の制服ではなくピシッとした群青色のスーツで髪は普段のぼさついた感じではなく綺麗にとか根元でまとめられていた

そしてロビーにある時計を眺めると退屈そうにため息をついた
なぜ彼がこのような恰好をしているか、それは少し前にさかのぼる…

六課からヘリにて飛び立ったときになのはが今回の任務について詳細を説明しはじめる

「今回の任務はホテルアグスタの警備が任務だよ、アグスタではオークション行われてるから警備を厳重にして欲しいんだよね」

「まあ問題なきや楽なもんだ、気張らずにやれよ？」

「……はいつ……」

なのはの説明の後アルが手をプラプラと動かしてだらけた感じに言う
「とフォワードメンバーは元氣良く答える」

「それで、皆にちよつと報告があるんだ
ガジェットの背後にいる製作者が少しわかったから聞いて欲しいんだ」

「ガジェットの……」

「製作者……」

話しを終えた時にフェイトが軽く挙手をして全員にアピールをする
フェイトから話された内容にスバルとティアナは息を飲んで呟く

フェイトは少し大きめなモニターを展開すると一人の男性を映し出す、その男は紫の髪に白衣姿で医者か研究者のように見えた

「この男はジェイル・スカリエッティ、数年前から私はこの男を追ってるんだ」

違法研究で広域指名手配を受けてる、レリック収集やガジェット製作はこの男を線に入れて捜査を進めてる…これは私がやるから皆は頭にいれておく程度でいいから今回の任務に集中してね」

「……了解です!!」

フエイトは説明を終えると微笑みを浮かべて言う

アルは退屈そうに横目でモニターを眺めていると不意に袖を引かれた、引かれた方に目を向けるとセレスが少しだけ不安そうにしていた

「アル、私っていても大丈夫なのかな？」

「まだ正式に決まってるじゃないがお前も管理局員に登録は申請されてるから大丈夫だ、まあ基本はシャルルとお留守番だ」

「うん、わかった

ちよつと退屈だけど私頑張るね!!」

不安気に聞いてくるセレスにアルは優しく頭を撫でながら答えると、反対側に座ってるシャルルを見て言う「セレスは満開の笑みを浮かべて答える

「所でシャルル先生の足元の箱ってなんなの？」

「あ、それ私も気になってました」

シャルルの方に目を向けたセレスはシャルルの足元に置いてある箱を指でさすと不思議そうにする

それを聞いて近くにいたキャラも同じように言う

「気になる？これは、はやてちゃん達とアルさんのお仕事着よ」

箱を持ち上げてシャマルは答えるとヘリの中にいた全員は首を一斉に傾げた

「内部警備でこんなを着ることになるとはなあ…うう息がつまる」

「フフ、先輩つらそうやな

居心地が悪いって顔に出とるで？」

「わかってんなら俺を外の警備に置いてくれよ…」

アルは襟元に手を当てながらため息をつくと後ろからはやての笑い声が聞こえる

その笑い声にアルは目を細めながら振り返るとそこにはドレス姿のはやて、なのは、フェイトの三人がいた

本来ならその姿に男性は見惚れるものだがそれを見ているのはアルである、特に気にする様子もなく肩を落とすとさすがにその態度に女としてのプライドが許せないのかはやてが噛みつくように詰め寄る

「って、この恰好に対して何もいわへんのかい!？」

「まあまあ、はやてちゃん何もそんなに怒らなくても」

「んー？似合ってるものに他にかけ言葉があんのか？

あいにくと誉め言葉のストックがねえんでな…そうだな、強いて言うなら」

「言うなら？」

アルの目の前に立ったはやては自分の胸元に手を当てながら言つと、後から追いついたなのはがそれを宥める

アルは面倒そうに爪先から顔まではやての姿を見始める、まじまじと見られるのが緊張しているらしくはやては少しだけ後退りをした見終えたアルはお手上げのようなポーズを取りながら言つともう一度、見直して顎に手を当てて呟く

アルの呟きが聞こえたフェイトは小首を傾げて言葉を待った

「お前ら、化粧濃すぎだな…そんなのは、肌年齢が隠居した奴のやることだ

ナチュラルメイクが良いかもな…ほれ、さつさについてこんかい今回はツーマンセルだろ、誰が来るんだ？」

「うあ、今いく、ちょい待ってな…！」

アルはビシツとなのは達を指でさすと背を向けて歩き出す、途中で止まると手招きをして呼び出すとはやてが慌てて、アルについていく

「…少し落として来ようか、フェイトちゃん」

「…そうだね、なのは」

二人がいなくなった事を確認したなのはとフェイトは先ほどアルに言われた所を直すために化粧室に小走りで向かった

フォワードメンバーは各自別れて警備についていた
ティアナは正面入り口、スバルはリインと外周、ライトニングはザ
フィーラと共に地下駐車場といった組み合わせで配置についた

地下駐車場のライトニングは不審な車や不審物が無いか探していた

「フェイトさんたちのドレス姿、凄く綺麗だったねレキ君」

「そうだね、それにしてもアルさんがちゃんとするか心配だな…」

「それって警備に慣れてないって事？」

「違うよ、逆に警備に慣れすぎてるからサボるかもしれないって事
だよ、エリオ」

地下駐車場を歩いていたキャロは隣にいたレキに先ほど見たフェイト
達のドレス姿の感想を言うと、レキは肯定をしながら少し不安気
に呟く

その呟きにレキの横にいたエリオが不思議そうに聞くと、首を横に振ってからレキが説明をする

「レキ君はアルさんと警備任務をたくさんしたことがあるの？」

「僕じゃないよ、その時のアルさんのパートナーは姉さんがしてたんだ」

「お姉さん？レキ、お姉さんがいたんだ」

「7年前に事件で死んじゃったけど……あ、でも大丈夫だから、寂しいってのはあるけど姉さんが信頼してるアルさんと一緒にいたらそんな気持ちにはならないし、ほとんど吹っ切れてるから」

キャロの質問にレキは少しだけ懐かしそうに答えると直ぐに肩を落としてしまう

エリオとキャロは質問をしたことに後悔をしていると、レキは慌てて訂正を入れて微笑を言う

先ほどとは違った表情にエリオとキャロは安堵の息をもらした

「レキはアルさんの事を信用しているんだね」

「うん、サボリ癖のある上司だけど一番信頼してるよ、あの誰よりも強い意思とか……」

エリオの質問にレキは笑顔を浮かべて答えると別な所で警備をしているアルを思い描く

「へ、へ、ペブシっ！…だれか噂してんのかね？」

「くしゃみ一回やからきつと悪口やね」

「あの地味に傷つく一言は勘弁して…」

アグスタの通路にいたアルはいきなりのくしゃみをしてから、不思議そうに首を傾げると隣にいたはやてが笑顔で言っているとアルは肩を落としてため息をつく

「つつか、風邪とかって心配はないのかよ？」

「なんとかは風邪を引かないいうからなあ…特に心配はしてへんよ」

「これは怒っていいとこだよな？…そうだろ？」

「暴力、はんたゝい！それにしても何事も起こらんとええんやけどな…」

肩を落としていたアルは少し恨めしそうにはやてを見ると少し考えてからにこやかにはやてはいい放つ

アルはため息をつくと手刀を作るとはやては少し小馬鹿にするように言っと少しだけ不安そうに呟く、その瞬間イーグルが緊急通信を受け取った

《機動六課、各員へ南西からガジェットの反応あり！まっすぐホテルアグスタに向かってきます》

「口は災いの元だな…」

「言わんといてな…ともかく機動六課、内部警備の隊長陣以外は迎撃準備や！」

「シャマル！前線のモニター、よろしくや」

《了解です！それとアルさん、セレスがアルさんに伝えたい事があるみたい》

緊急通信を繋げてきたシャーリイの報告を聞いたアルはやれやれといった感じにはやてに言うと思わずそんな表情を浮かべながらはやては返答する

気を取り直したはやては前線メンバーに指示を出すとヘリポートにいたシャマルに管制を頼むと指示すると、通信モニターが開きシャマルが答えるとアルに呼びかける

《アル、今ガジェット反応と同時に南東方向に融合騎の反応をキャッチしたの、もしかしたらお姉ちゃんかもしれないの…》

「本当か？…南東か…それだと俺はここを離れないといけない…はやて」

セレスの言葉にアルの表情は曇るが意を決したようにアルはやての方を見る

「うん、行ってもええよ、本当にライナなら保護をしないとアカン

「からな」

「すまん…セレス、南東に向けて飛ぶぞ！」

フォワードメンバー、俺はこれからホテルアグスタを離れる、いつ戻るかわからん…無理すんな、以上だ」

《《《《《了解！！》》》》》

アルの決意を受け取ったはやては別行動を許可した

アルはセレスに指示を出して緊急通信を閉じるとフォワードメンバーに通信をつなぐ

そして簡潔に用件を伝えと言葉をかける

その言葉に答えるようにフォワードメンバーは自信のある返事をするとアルは外に向けて走り出す

屋外に出たアルの視界に屋上から飛び立つ緑の閃光が見えた、セレスであると確認をするとアルはイーグルに手をかける

「イーグルレイダー…セットアップ！！」

「スタンバイ！！」

赤き閃光となったアルはバリアジャケットと複合機関銃のイーグル

を手に空中に飛び上がり、セレスと平行するように飛行していく

「時間がおしい、セレス!!」

「わかった!行くよ、アル!!」

「ユニゾン、イン!!!!」

「加速魔法で急行する!!」

了解!我らに風よ、ウィンドブースト!!

平行していた緑色の閃光と赤色の閃光は一つになる、ユニゾンが成功した証にアルの髪の色は橙色になり目の色も黄緑になっていた

アルの指示にセレスは魔法を発動させる、発動した瞬間アルの足に風が渦巻きスピードがどんどん増していった

アグスタでの戦闘が始まりだした時、アグスタ南部にある崖の上に人の姿があった、マント姿で大柄の男性と男性のその手を握る子供がいた、男性のマントと同じマントを羽織り顔はフードで隠れていて見えなかった

二人はアグスタを見ていると目の前にモニターが突然、展開した
《やあ、騎士ゼストにルーテシア、少し良いかな?》

「…ドクター…どうかしたの？」

通信を繋げてきたのはジェイル・スカリエッティだった、ルーテシアと呼ばれた子供はフードを被ったまま顔を上げる

《実は少々欲しいものがあってね、良かったら手伝って欲しいんだが良いだろうか？》

「…わかった…ドクターの頼みなら、聞く」

《ありがとう、欲しいものは君のアスクレピオスに送っておくよ、それでは健闘を祈ってる》

スカリエッティが用件を話すとルーテシアは小さく頷いてから答える

微笑を浮かべながらスカリエッティは礼を述べると通信を切る、それと同時に彼女の手にはめられたグローブのクリスタルが輝きだす

「良いのか？ルーテシア、今回はレリックでは無いのだぞ？」

「良い…ドクターの研究の手伝いをすればレリックが集めやすくなるから」

「そうか…」

隣にいた男性、ゼストはルーテシアに確認をとるとルーテシアは短く返答する

そして彼女の足元に召喚魔法の陣が展開した

SIDE：レキ

それはいきなりの事だった、副隊長とザフィーラがガジェットを迎撃しているときに僕らが守っている防衛ラインの前に紫色の召喚魔法の反応が出た

「これは召喚魔法！？」

キャラの言葉とともに魔法陣からガジェット一型と三型が姿を表した、数こそ5／6機程だが魔法陣が消えて無いことから増援が来ることは明白だった

「エリオと僕でガジエットの迎撃、キャラはティアナさん達を呼んで！」

「任せて！行くよ、レキ」

「うん、直ぐに呼ぶから二人とも頑張つて！！」

エリオとキャラに指示を出すと僕はファフニールをシフトSでガジエットの群れにエリオと共に突っ込む

「ソードダンス！！」

「スピアアングリフ！！」

僕は双刃剣で踊るように切り払うその後ろで、エリオがストラーダ

でガジェット2体を貫通させていた

攻撃を終えて背中合わせになりながら構えていると上からガジェット三型のアームが降り下ろされた

「エリオ！二回目の交戦だけどやれるよね？」

「うん！あの時より僕たちは強くなってる！だから今度は楽勝だよ！」

「その意気、コンビネーションで仕掛けるよ！」

三型のアームをかわした僕はデバイスを構え直してから、エリオに聞くと自信のある返答に僕は微笑した

そしてエリオに指示を出してガジェット三型に向かって大地を蹴る

「わかった！ストラダー！！」

「行くよ、ファフニール！！」

「いけえええっ！クロス、グレイブ！！」

エリオは首を縦にふるとカートリッジを二発ロードする、僕も同じようにカートリッジをロードするとガジェット三型にコンビネーション名を叫びながら仕掛ける

最初にエリオが雷を刃に纏わせてガジェット三型を真つ正面から下から上に向けて切り上げる、エリオをそのままソニックムーブでガジェット三型から離れる

それに続くように僕がファフニールで右から一閃するとシフトSからシフトAに切り替えてエリオと僕の切口の交わってる部分に向けてシフトAの砲撃を打ち込む

ガジェット三型は大きな風穴を空けて爆散した

「よし、じゃあ次は一型を「デイバイン、バスター!!」スバルさん!？」

《あんたら怪我とかない!？》

「大丈夫です!ティアナさん!!」

自分達の背後にいる一型を片付けようとした時、ガジェット一型の一団を飲み込むように青い色の砲撃魔法が放たれる、ガジェットが爆散したと同時にスバルさんが到着しティアナさんから連絡が入るティアナさんの連絡はエリオが答え、僕たちの間に安堵の空気が流れたがそれは直ぐ様破られた

《召喚魔法の反応が三つ!!みんな、気をつけて次のガジェットが来るわ!》

シャル先生の言葉と共に地面に三つの召喚魔法の陣が展開する

スバルさんとエリオが身構えると僕は一步離れてファフニールをシフトBに切り替える

魔法陣が強く輝いた時、先ほどと同じ編成のガジェットが三つの魔法陣から現れた

「こんなに出さなくて良いのになあ…エリオ、レキ行けるよね？」

「はい！」

「もちろん！！」

《三人とも！ヴィータ副隊長がこっちに向かってきてる、それまで何とか持たせて！！》

スバルさんのうんざりした口調に微笑を浮かべながら、僕とエリオは返答するとティアナさんが通信を入れてきた

だけど、このまま続けるのは不味いと悟った

ガジェットは倒したそばから次々と出現していく、減らすより増えるスピードが早くこのままじゃ突破される

（アルさんの魔法なら閉じ込められたんだけどな…）

ガジェットを倒しながら僕はそう考えた、だけどあの人は僕らに任せたんだ、呼び戻す真似はしたくない

そんな時に僕はふと昔の事を思い出した、アルさんの部下になって間もないころの話だ…

次元犯罪者を捕縛する任務を請け負っていたアルさんと僕、当時は今のようない信頼関係はなかった姉さんから話しは、聞いていたがこんな不真面目な人が姉さんのパートナーな訳がない

そう思い手柄を立ててさつさと離れたかった僕は罨の有無を確認せず
に次元犯罪者に突撃した

その結果、簡易的な転移魔法で呼び出された魔獣に囲まれてしまった
焦りと死の恐怖から僕は自分の魔力変換資質を発動させた、重力変
換資質…それが僕のスキル、炎や雷とは違い扱いにくく威力が強ず
ぎて管理局でも使えたものはいないその事はアルさんに言われてい
て理解はしていた、だけど…生き残りたい…そう考えた時、スキル
は暴走した

気がついたら僕は病院のベッドの上に寝ていた、隣にはアルさんが
いた

『まったく、無茶しやがって…苦勞したぜ、助けるのにさ』

『ごめんなさい…今度は上手くやります』

『いや、次も失敗するな…今のままじゃな…』

ため息まじり言いながらもどこか安心したようなアルさんに僕は素
直に頭を下げた

アルさんは僕の頭を撫でるとはつきりとした口調でいい放つ

『封印、ですか？』

『まあな、だけどリミッターをかけるだけでお前がちゃんと扱える
くらいになつたら外す…』

『扱えるようになったら、ですか…自信ないです』

『自分の背中に乗っかってるもんがわかれば使えるようになるさ、まあなんとかなるから頑張れ』

アルさんの下された処置に僕は肩をおとしながら言うところアルさんは席を立ち病室の入り口に向かいながら僕に笑いかけてくれた

あの時の言葉…少しだけわかる

今自分の背中にあるのはキャロやフォワードのみんな、守りたい人達がいる

あの時は一人で不安で信じられるものなんてなかった…だけどいまは違う！

「ファフニール…アルさんには言っていないけどスキルリミッターを外してくれないか？皆を守りたいんだ」

「レキ、俺にはじめからリミッターなんてついちゃいねえよ」

「どういう事？」

「アルフィリオスが言ってたんだよ

スキルだけ封じるなんてリミッターは存在はしねえ、嘘でも言っておけばお前は使わないだろうってさ

んで言い付けを破るくらいの決心がついたら話してくれって言われてたのよ」

ファフニールの言葉に僕は驚いた、アルさんは僕がそこまでやると

信じていてくれていたのだから、同時にあの人に見抜かれてた事に可笑しく思えた

そして僕は双銃形態のファフニールのグリップを握りしめて目の前のガジェットを睨み付ける

「スバルさん！エリオ！…少し考えがあるから下がってもらえる？」

「レキ、でも今下がったら…」

「大丈夫、上手く行けばここから先にはいけないから」

「信じていいんだね？」

「もちろん、任せて下さい」

レキの突然の提案に二人は目を丸くするがレキの表情を見て後ろに下がる

レキは双銃の銃口を地面に向けて身体前でクロスさせると精神集中を始める

「ファフニール…重力レベルは+…相手を引き寄せる、カートリッジは二つ…」

「了解、演算開始…ツインロードカートリッジ…重力レベル+に固

定…演算終了、発射スタンバイ」

レキの呟きと共に彼の身体から紫色の雷が発生し足元の小石や土が浮かび出す

ファフニールの銃口に黒い色の魔力が収束していき拳より一回り大きい魔力スフィアを作り出す

準備が完了したのかレキはゆっくりと銃口をガジェット達に突きつける

「グラビティバレット…シュート!!」

レキは魔法名と共に引金を引く

勢い良く撃ち出された魔力スフィアはちょうどガジェット達にいる真ん中に到達すると停止してだんだんと大きさを増していく、それと同時にガジェット達は魔力スフィアに引き寄せられていく

レキが撃ち出したグラビティバレットは予め指定した物体を引き寄せる能力がある、指定してないものでも近づけば引力によって引き寄せられてしまう

引き寄せられたガジェット達はまるで団子のように一つにまとまっていく

「ファフニール！重力レベル・

グラビティバレットもろとも破壊する!!」

「了解!!重力レベル+から-に変換、ツインロードカートリッジ!!」

レキは再びファフニールを構える、グラビティバレットには欠点がある

それは一度、発動すると消失するまで時間がかかりその間も範囲が拡大していくという欠点であった

レキは範囲が拡大しアグスタに被害を出す前に反対の属性を拡大するグラビティバレットと同じ威力で相殺するためにファフニールを構えたのであった

カートリッジをロードしたファフニールの銃口には白い魔力スフィアが形成されていく

「砕け！グラビティバスター！！」

魔法名と共にファフニールの銃口から白い砲撃が放たれる、- 重力つまり斥力が付加された砲撃はグラビティバレットの中に吸い込まれるように入ると白い閃光が辺りを包み激しい爆発を巻き起こす

少し離れた所で見ていたスバルとエリオは慌ててレキの所に走り出す

スバル達が到着するとレキは地面に片膝をついて息を荒くしながら呼吸をしていた

「レキ、大丈夫？」

「少し魔力の負荷が大きかったただだよ…なんとか成功したみたいだ…」

かけよったエリオはレキに寄り添うと安否を確認するとレキは微笑を浮かべながら正面を見る

そこには爆発したような後とガジェットの残骸が散らばっていた、今度は失敗をしなかったレキはそう思いながら安堵の息をもらした

「まだ戦闘は終わってない、二人とも頑張ろう！」

「「うん！！」」

エリオに支えられてレキは立ち上がると息を整えてから掛け声をする

アグスタから飛び出したアルは反応のあった地点に降り立つとユニゾンを解除した

アルの胸から緑の閃光が出てくると光は人の形となり弾けて消え騎士甲冑をまとったセレスが現れる

「この辺で良いのか？」

「うん、確かこの辺だと思うの」

二人が辺りを見回していると物音が茂みから響いた、アルはイーグルを構えセレスはいつでもユニゾン出来るようにし茂みに視線を注目した

「セレ、ス？セレスよね？貴女…」

「お、姉ちゃん…ライナお姉ちゃんっ！！」

茂みから出てきたのは修道服ような服を着た金髪の少女だった、セレスを見て驚いた口調で言うと、セレスは涙ぐみながら少女の名前を言いながら抱きつく

「良かった…無事だったんだ、私凄く心配したんだよ？」

「私もよ、ごめんね…直ぐに見つけようと思ったんだけど目が覚めて遺跡にいったら既に誰かに運び出された後だったから…無事で良かったわ、所であの人がセレスの主？」

「そうだよ、アルフィリオス・ラーゼンハルグって言うの！ちやらんぼらんだけどいい人だよ」

「そう…はじめまして、迅雷の戦姫ライナです、セレスの保護ありがとうございます」

泣きつくセレスを優しく抱きしめながらライナはアルの方を見て聞くとセレスは満開の笑みを浮かべて答える

ライナは短く返すとアルの所にいき軽く頭を下げる

「いや、こちらも助けられてるから気にするな…それよりここは危ない、ついて来てくれないか？」

「いえ私はセレスに言わなければならぬことがあります…だから

…」

「お姉ちゃん？どうしたの？」

アルは軽く手をあげて答えるとライナにアグスタに戻ると告げるがライナはその場から動こうとせずにつつむいてしまう

セレスは心配そうにライナの側にいき不思議そうに質問をするとライナはゆっくりと顔を上げてすがすがしい程の笑みを浮かべた

「貴方は、ここで死んでください…アルフィリオス・ラーゼンハルグ」

「何を、っが！？」

ライナの突然の言葉にアルはイーグルを構えようとした時、腹部に激痛が走った

突然の事に混乱しながらも腹部に目を向けると鋼色の刃が腹部を貫通していた、その証拠に刃には鮮血が滴り落ちて地面に染み込んでいた

「てめえ…いつの間に…」

「ふん…」

気が飛びそうなのを耐えながら後ろをみると仮面をつけた男が長剣を手に立っていた

男は答える事なく剣を引きぬくとアルを背中を蹴り飛ばす

立つのもやっとなったアルは重力に任せるまま倒れ込む

「ア、アルっ！！？」

突然の事に思考が追いつていなかったセレスはアルが倒された事により意識を覚醒させ力の限りアルの名前を叫んだ

EP14：予期せぬ邂逅（後書き）

どうもえのきです！

いかがでしたか？中途半端じゃないかって思いますがそれは次回を楽しみしてほしいという作者のわがままです

では久しぶりに次回予告まいります！！

レキ「僕は貴方を信じていた、だけど貴方のしたことが本当なら僕は何を信じればいいんですか！？

次回、魔法少女リリカルなのはStrikers～夜天に舞い踊る
荒鷲～EP15：砕ける絆

にテイクオフ…お願いだから嘘だと言って下さい」

次はギャグ無しのシリアス小説です、お楽しみ

EP15：碎ける絆（前書き）

シリーズ第二回目でございます！

作者も少しギリギリで作ったので読んで貰えたら嬉しいです

EP15：碎ける絆

SIDE：アルフィリオス

ライナの笑みを見た時言い表せない悪寒が走った、しかしそれより早く俺の身体を激痛が貫いた

「てめえ…いつの間に…」

「ふん…」

突き刺さる長剣は後ろから刺されたものだとなりそちらを向くと、黒いマントを羽織り仮面をつけた赤髪の男が鋼色の長剣を手にしていた

剣を引き抜くと俺の背中を蹴り飛ばす

突然の事に俺は身動きが出来ずに地面に倒れこむ

「アル！しっかりしてアル！！」

セレスの叫び声が耳に木霊する、なんとか立とうとするが痛みで起き上がれなかった

「ダメよ、貴女は私と一緒にいましょ」

「ふざけないで！アルに何するの！？」

アルに駆け寄ろうとしたセレスは急に手を捕まれる、振り返るとライナがセレスの手を掴んでいた

セレスは手を振り払うと怒りをあらわにしながら叫ぶ

「私としては即死を希望したのだけど…マスター…何故殺さなかったのですか？」

「殺したらセレスが眠りについてしまっただろ、お前達はマスターが力尽きれば眠りにつく…それは避けたかったのだな」

「そのような心づかいを…ありがとうございます」

「…人の目の前で物騒な話しをしてんじゃ、ねえよ…」

ライナは残念そうにいうとセレスの背後からアルを蹴り飛ばした仮面の男の声が聞こえ、セレスは思わず身構える

「ほう、まだ意識があったか…しぶといな」

「あいにくと、頑丈さはフロントアタッカーの売りなんだな…」

「どうやらもう少し痛めつけないといけないらしいな、しかしそれは俺の役目じゃないんでな」

「何を言って、っ！？」

アルは体を起こしてイーグルを構えると仮面の男は意外そうに言う

がハッと笑い飛ばす、言葉の真意を問おうとした時アルの足元に魔力弾が撃ち込まれる

慌ててかわしアルは魔力弾を放たれた位置を見るとマントを羽織った魔導士が立っていた、構えた黒い双銃をアルに向けると魔力弾を連続で発射していく

アルは腹の傷を気にしながらも魔力弾を回避していきイーグルを向けて反撃をする

魔力弾同士がぶつかり小規模ではあるが爆発が起こりアルの視界は爆風によって封じられた

「ハアアアッ！！」

「ぐっ！？うぐあっ！」

「アル！？つく、離して！」

視界を包む爆風を纏いながら魔導士をアルに接近すると傷口に魔力で強化した鋭い蹴りを打ち込みアルを弾き飛ばす

木に叩きつけられたアルにセレスは駆け寄ろうとしたが仮面の男に腕を捕まれ抵抗するが力の差でどうしようもなかった

「セレス、マスターの手を煩わせてはダメよ、大人しくしなさい」

「お姉ちゃん！どうしてアルにヒドイ事をするの！？アルがお姉ちゃん達に何をしたって言うのさ！！」

「理由ならあるわ…その男、いえ管理局は私にとって悪しき存在で

しか無いの…セレス、私はね…貴女に出会うまで管理局の施設で実験動物のように扱われてきたの」

「え…そんな…事って」

やれやれと言った感じにライナは言うのとセレスは抵抗をしながら叫ぶ

ライナは厳しい眼差しでアルを睨み付けながら答えると自分にされてきた事を話す、聞かされた内容にセレスは信じがたいという表情を浮かべた

「残念ながら本当よ、セレス…私達の機能は魔導士にしてとても理想的なの

魔力の波長さえあれば誰でもユニゾンが出来るまさに夢みたいな機能…管理局はその機能をフルに活用するために私に様々な仕打ちをしてきたわ…

いつそ壊れてしまえば楽だと思うくらいにね…だから私は管理局を破壊するためにマスターと一緒にいるの！」

「お姉ちゃん…そんな事があったなんて」

「セレス、私は管理局を破壊したいのと同時に貴女を助きたいの…貴女がこのまま機動六課にいれば私と同じ目にあうわ…そんなのは我慢出来ない…だから、さあ」

ライナの言葉にセレスは力なく地面に座り込む、ライナの瞳には恨みと怒りの色が浮かんでいたからだ

ライナは優しそうに微笑みを浮かべるとスッと手を差しのべる、しかしセレスはそれを握るのに躊躇っていた

「お姉ちゃんの言うことは本当なのかもしれない…だけど私はアル
やはやてさんを信じたい！！」

「そう、だけどセレス…あの男は貴方が思っような男では無いわ、
ねえ…レナ」

「レナ…だと？」

「気安く名前で呼ばないで欲しいわ…アルフィリオス…貴方は私を
殺したんだからね」

セレスは自分に向けられた誘いを振り払うように答えるがライナは
落胆したように答えマント姿の魔導士に視線を向けて呼びかける

レナと呼ばれた魔導士にアルはまるであり得ないといった表情を浮
かべると魔導士は冷たくいい放ちフードを取り払う

フードから見せた顔は女性で夜のような色をした黒い長髪に血のよ
うに赤い目は戦慄を覚えそうな視線だった、その場がシンと静まり
返ったようになる

しかし静まり返ったその空気を破ったのはアルでもセレスでもなか
った

「姉さ、ん？…なんで姉さんがいるんだ？それに今の言葉はどうい
う意味なんだ！？」

「レキ…なんでここに」

アルの支援の為に駆けつけたレキだった

アルの呼びかけにレキは答える事はなくレナに視線を向けていた

レナの本名はレナ・アーベント、レキの実の姉で七年前に事件によって死去していた

死んだはずの人間がいることとその死んだ原因にレキはただ力なく腕を下ろすと握り拳を作り出す

「姉さんが死んだのは事件での不慮の事故…なんでアルさんが殺した事になっているんだ…！」

「レキ、私は不慮の事故では無く殺されたのよ…アルフィリオスの手によってね…っ!？」

「でえらあっ!!イーグル！」

「ソニックムーブ!!」

レキの問いに銃をアルに突きつけながらレナは答えると隙をついてアルはレナの顔面目掛けて蹴りを放つ

レナは寸での所でかわすと銃の引金を引くがアルはソニックムーブで仮面の男のどこまで移動をするとセレスを奪還してレキの側に移動をする、突然現れたアルにレキはファフニールを突きつける

「答えてください!!?今の言葉の真意を!貴方は姉さんを殺したんですか…!!」

「……そうだ、俺はレナを殺した…」

「「っ!？」」

突きつけるファフニールの刃は怒りと戸惑いで震えていた、アルはそれを見てからセレスを地面に下ろすとレナの言葉を認めた、予想外の回答にレキとセレスは言葉を無くしたが我に返ったレキはアルに掴みかかる

「貴方と言う人は!？」

「今お前がするのは俺を斬る事じゃない…セレスをつれて逃げる事だ…」

「っ誰がアンタの言うことを聞くか!！」

「俺の言うことより仲間の事を優先しろ、アイツらはセレスを狙ってる…それだけはさけなくちゃならねえ、ちゃんと戻るから斬るなりなんなりはそっからにしろ」

掴みかかるレキをアルは片手で静止をすると撤退するように指示を出す

謝罪や反省の色が無いアルにレキは怒りをぶちまけるように返すとアルは目の前のライナ達に視線を向けながら答える

「……ファフニール、ソニックムーブ…」

「……行っただか…さてとやるか」

「一人で私たちの相手をする気なの？只の犬死にでしかないわね」

「…レナ、お前も引け」

レキはセレスの腕を肩に担ぐとアグスタに向けて移動をした

レナはイーグルを構えるアルに冷笑を浮かべれば銃口をアルに向けるが後ろにいた仮面の男が突然、レナに指示を出す

「アルファ！どういふつもり！？私はまだやれるわ！！」

「お前の体は動いてから日数が経過していない、以前のように動けば再起不能になるぞ…」

「つく…わかったわ、アルファ

アルフィリオス…お前は必ず私が殺してやる」

突然の事にレナは慌てながら聞くとアルファと呼ばれた仮面の男は、撤退の訳を説明しはじめる

理由を聞いて悔しそうに唇を噛むと、レナはアルに指をさしてから宣告をするとアグスタとは逆方向に飛翔しいなくなる

その場にはアルとアルファ、そしてライナが残った、アルファは手首をならすとアルに視線を向ける

「さあ、やろつか…っ！」

「イーグル、リッパーだ！！」

言葉をいい終えると共にアルファは地面を蹴ってアルの懷に飛び込むように接近をする、アルはイーグルのブレードを展開するとそれに受けてたつように構える

その瞬間、鈍い金属音が辺りに響いた

アルファが手に持っていた片刃のロングブレードで縦に一閃すると、アルはイーグルのブレードの根元を引きグリップを出すとトンファーのようにイーグルを構えてブレードを受け止める

一撃が重かったのかアルの足は地面にめり込む、ギリギリと金属音が響く中アルファはロングブレードを引くとアルの傷口を狙い蹴りを放つ

「ぐあっ！？なろうっ！！」

止血魔法で辛うじて止めていた傷口は再び開き鮮血が宙を舞う
アルは踏みとどまると反撃をするために地面を蹴る

空中に踊り出たアルはイーグルのブレードで右から風ぎ払うように振るう、アルファはそれをなんなくかわすと打ってこいといわんばかりに片手で手招きをする

「なめるなっ！！」

アルはまるで嵐をも彷彿とさせるくらいに連続で攻撃をアルファに放っていく、ブレード、蹴り、拳、射撃、ありとあらゆる攻撃と様々なバリエーションで放っていくがアルファは最初からわかってるかのようにかわしていく

「ならコイツはどうだ！！」

「バカの一つ覚えだな」

「そいつはどうか？イーグル！！」

中々当たらないアルファに苛立ちを隠しながらもアルはもう一度、初撃のように右から一閃をする

アルファは余裕でかわすがアルの攻撃はまだ終わりではなかった、かわしたアルファの腹部、目掛けて肘うちのように腕の位置を変えるとそのまま懷に飛び込むように前進するとイーグルのステーキが打ち出される

「つく！…ふふ、まさかそんな手を使うとはな」

「ステーキはイーグルの意思でも打てる、カートリッジはロード出来ないけどな…」

なんでか知らないがてめえにはパターン知られてるみたいだな…」

「ふ…やはり生身での戦闘はこれくらいが限界か…使わせてもらうか、なあアサルトホーク！」

ステーキを腹部に食らったアルファは軽く笑みを浮かべると立ち上がるとポケットから指輪を取り出すと右手の中指にはめると血の色に似た真紅の魔力光が辺りを包んだ

「アサルトホーク、セットアップ！」

「イエス、マイマスター」

無機質な電子音声とともにアサルトホークは待機状態から戦闘状態に移行する、アルファの体はアルと同じような黒いロングコート型のバリアジャケットに身を包むと右手にひし形の赤い楯が展開され腰には鋼色の鞘が展開する

魔力光を切り払うとアルファはロングブレードをアルに向ける

「さあ、ここからが本番だ」

その言葉と共にアルファはロングブレードを振りかぶりアルに飛びかかる

ホテルアグスタまで移動していたレキの頭の中は処理しきれない量の情報にパンクしかけていた

何故、レナが生きているか

何故、レナが死んだ原因がアルなのか

何故、アルはそれを認めたのか

考えてもわからない情報にレキは足を止めてセレスを下ろすと地面を思いっきり殴りつける

信じていた、いい加減だけど仲間思いなアルを

信じていた、いつも話題の中心になり皆を笑顔にしていたアルを

信じていた、レナが想いを寄せていたアルを

だけどそれは突然の事実により揺らぎだした、やりきれない思いと何も出来ない自分に嫌悪したレキは

「うわああああああっ!!!」

力の限り叫んだ、すべてを忘れるように只の一時しのぎでしかないが今のレキにはそれしかなかった

隣にいたセレスも同じだった、ライナが受けてきた仕打ち、行ってきた管理局、そしてアルのした事…すべてが信じられないセレスはただ力なく項垂れるしかなかった

二人はヴィータ達が来るまでずっとそのままだった

その戦いは熾烈を極めていた

デバイスをセットアップしたアルファはソニックムーブによりアルを何度も強襲していく、アルも同じようにソニックムーブで応戦する

「だああああっ!!!」

「うおおおおっ!!!」

激しい金属音が辺りに響く、刃と刃がぶつかるたびに火花を散る

アルファの降り下ろされる刃に躊躇いはなくアルの命を奪おうとする

アルはイーグルのブレードでアルファの一撃を防いでいくが徐々に押されていく

「本当にしぶとい奴だっ！とつとくたばれっ！！」

「生憎と簡単にやられんのはごめんなんで、なっ！！」

「ぐあっ！？」

中々倒れないアルに苛立ちを覚えたアルファは楯で体勢を崩しロングブレードにて一閃しようとするが、アルはイーグルの銃身で楯の軌道を反らすとアルファの顔面に向けて足を蹴りあげる

その瞬間アルファの仮面が外れ地面に叩きつけられ砕け散る

「仮面が取れたみたいだな…さあ、てめえの面を拝ませてもらうか」

「くく…良いだろう、なら見るが良い…俺の素顔をな」

「っな！？…そんな、バカな…俺と…同じ…顔だと」

地面に落ちた仮面を見ながらアルはイーグルの銃口を突きつけながらアルファに言う

アルファは薄気味悪く笑うと手で覆っていた顔をアルに晒す、隠された顔を見てアルは驚愕の表情を浮かべた

仮面で隠れていたアルファの顔はアルと瓜二つであった

「不思議そうだな…それもそうだ、同じ顔が二つも有るわけ無いのだから…だがこれは貴様のせいだ」

「俺のせい!？」

「ライナの話しを聞いてなかったか？」

ライナは管理局の施設で実験動物のような扱いを受けていたとな…貴様は疑問を感じなかったか？

ライナはセレスと同じ融合騎、波長が合うものがいなければ目覚める事は無い…ならば何故目を覚ましたか…」

アルファは指をアルに向けながら言い放つとアルは身構えながら聞く

アルファはライナの話しを語っていくとアルは一つの仮定にたどり着いた

「波長が合うものがいた…まさか」

「そうお前だ…管理局の奴らはデータベースにある魔力の波長をライナに浴びせ、起動を試みた

その結果、貴様の魔力はライナの波長に合うものだった

ライナの能力を解析し詳しく調べるにはモルモットが必要だったそれが俺だ、わかるか？俺はお前のクローンなのさ」

「クローン…バカな今の技術でクローンなんて出来るわけないだろ!？」

語られていくアルファの言葉にアルは否定をするしかなかった

それでもアルファの言葉は終わる事はなかった

「プロジェクトF…まあ名前をしまったところで貴様には関係ないな…俺は貴様に復讐をする

貴様さえいなければ俺はアルファという不名誉な名前やあんな地獄を味わう事はなかったのだからな…

だが同時に感謝はするさ、ライナに引き合わせてくれた上でこの手で葬る事が出来るのだからな!!」

「マスター、遊びはもう終わらせましょうか」

「ああ、そうだな…行くぞライナ…」

「了解です…」

アルファが語り終えたところでライナが彼の前に立つ、アルファは頷くと顔に狂気が宿らせた

ライナの身体が黄色い閃光に包まれるとアルファの身体に入っていく、ユニゾンである

「ユニゾン、イン!!」

閃光が身体の中に入ると魔力が爆発するように膨れ上がり、アルの目の前にはユニゾンし髪の毛が金色になったアルファが立っていた
ユニゾンしたアルファはロングブレードを真上に掲げると辺りが曇り出し雷が落ち始めた

「見るがいい!俺たちの恨みの一撃を!迅雷の戦姫ライナとユニゾ

ンしたアルファの力をな!!」

「つく…!?!」

「受ける!狂雷!!」

アルファの言葉と共に雷の音が増していく、彼らの怒りに呼応するかの様だった

そして青色の雷撃がロングブレードに落ちると魔力と融合し力を上げていく、魔法名と共にアルファはロングブレードにまとった雷撃をアルに向けて撃ち放つ

砲撃魔法とは比べる事の出来ない威力の魔法、まるで空間攻撃クラスの魔力波にアルはなすすべもなく飲み込まれた

轟音と衝撃が辺りを包み込む、戦いが行われていた場所にはアルファしかおらず、目の前にはまるで削り取られたような後が出来ていた

死んだのでしょうか?

「いや…生きているだろうな…勘だがな、アルフィリオス・ラーゼンハルグ!今日はここまでだ、次に合間みえる時には貴様を殺す…せいぜい生き長らえると良い!!」

身体の中にいるライナにアルファは答えると何処かに隠れているであろう、アルに宣言をするとその場を去っていく

アルファがいなくなった後消し飛ばされ、黒ずんだ大地からアルが這い出てくる、寸での所でソニックムーブを使い地上に降りたアル

はステーキを使い地中に隠れた

そしてアルファがいなくなった時に出てきたのである、しかし完全に避けきれなかったのかアルの右肩のバリアジャケットは消しとんでいた、さらに傷口から溢れる血のせいで意識は朦朧としはじめていた

アルは膝をつくとそこには碎かれたアルファの仮面があつた、そしてアルファの自分への恨み、管理局への恨みが頭に再生されるとアルは仮面の破片を更に砕く

「ちくしょう…血を流し過ぎたか…セレス達…ちゃんとアグスタについたよな？」

アルは倒れ込むと悪態をつきながら撤退したセレス達の心配をする
と意識を手放した

そしてアルファの作り出した雷雲から雨が降り始めアルの傷だらけの身体を容赦なく雨は打ち付けていた

EP15：碎ける絆（後書き）

どうもえのきです！

ぶっちゃけテンションが上がらずに書き上げが遅くなりました、シリアスが苦手なのででもストーリーの起伏には重要なので次回も頑張りたいと思います

次回予告

セレス「奏でる音がずれる時、それは酷く不快な音となる…ずれた音は簡単には直らない
わからないよ、私はこれからどうすれば良いのかな？

次回、魔法少女リリカルなのはStrikers～夜天に舞い踊る
荒鷲～

EP16：不協和音

今、歯車が狂い出す」

EP16：不協和音（前書き）

シリアス全開な感じでお送りします

今回の話でアルさんの株が暴落するかわかれます

最後にお知らせがあるのでしっかり最後まで見てください

EP 16：不協和音

ホテルアグスタでの戦闘から三日が過ぎた、機動六課にいつもの賑わいは無く何処か重苦しい雰囲気がただよっていた

「ハア…何か気が滅入るよね…」

「スバル、気持ちはわかるけどシヤンとしなさい」

「だってさ、こんなに雨が振る中でデスクワークなんて出来ないよ」

スバルは外を見ながら退屈そうにため息をつく、横にいたティアナはそれを注意をすればスバルは窓を指でさしながら答える

スバルの言葉どおり外では大粒の雨が降り、もう三日も続いていた

「アグスタからずっとね…わかる気もするけどやるべき事はしなさい」

「わかったよ…あ、エリオ、キャロ！」

「ってスバル！？…もう…あんたってやつは…」

注意した側からいなくなるスバルにティアナはため息をつくと後を追った

「スバルさん…」

「レキの様子はどうだった？」

「相変わらず部屋から出てきませんでしたけど少しは返答をしてくれました」

「ご飯の方も少しはとってるみたいです…もう少しだけそつとしておいて欲しいそうです」

スバルの呼びかけに顔をうつむかせていたキャラは顔を上げると報告をはじめめる

アグスタの一件以来レキとセレスは自室から出てきていなかった、ファフニールからの報告を聞いてはやては気持ちが落ち着くまで休むように指示を出した

それから三日の間、フォワードメンバーは二人の姿を見ていなかった、そしてもう一人この場にはいない人物も同じであった

「でも本当なのかな？アルさんの事って」

「わからないわ…正直に言えば信じたくはないけど」

ここにいない人物、アルフィリオス・ラーゼンハルグも三日前から自室から出てきていなかった、デスクワークや報告等はイーグルレイダーから送られてくるだけだった、アルやレキがいない六課は何処か寂しく思うスバル達だった

SIDE：アルフィリオス

目に入る光景はあの日の事…あの時ほど悲しんだ事はない、あの時ほど感情が爆発した事はない…あの時ほど自分に憎しみを覚えた事はない

腕の中で冷たくなるパートナーを抱きしめ俺は世界を恨むように叫んだ、壊れてしまえば良いと思うくらいに…

「…ここは…イーグル、どのくらい寝てた？」

「一時間程…まだ寝てた方が良かった」と

「一時間も寝りゃ十分だ…続きをすんぞ」

ふと俺は目を開けた、ずいぶん懐かしい夢を見ていた気がする…

おそらく見るきっかけはアグスタでの一件のせいだろうな…死んだはずのレナ、クローンのアルファ…そして恨みを抱くライナ、どれをとっても一筋縄ではいかない相手だ…ならばどうするか、決まってる勝つために対策を練ることだ

そう考えた俺は帰ってきてから戦闘データと睨み合いをしていた、本当なら製作者であるガドルフのじいさんに話を聞く所だがあいにくと連絡がつかなかった

あてになるのは自身が交戦した時のデータのみ何度も見直していき、一つの結果がわかった

それはアルファとは直接対決では敵わないという事実であった、当然と言えば当然だ

向こうはリミッター無しのユニゾン有り、こちらはリミッター有りのユニゾン無し…明白すぎるものだ、更に言えばイーグルレイダーとアサルトホークのコンセプトの違いも関係してくる

イーグルレイダーはクロスとロングの両方に対応し一撃で相手を落とす、強襲型

アサルトホークはロングを捨てクロスのみに対応し防御性能も高い近接型

正面からぶつかりあえば負けるのは目に見えている、ここまで負けるとわかる相手は会った事が無い…それがまさかの自分自身だという事に自傷の笑みを浮かべてしまいそうだ

しかしまったく希望が無いわけではない、イーグルレイダーの分野である強襲だ

相手が認知する前に致命傷を与えればいい…簡単には言えるが勝率はかなり低い、一番有効な手ではあるがこれ以外に方法が無いと言った方が正しいのかもしれない

「なににせよ…お前に負担をかけるな…イーグル」

「私は貴方が死ぬより良いと思います…貴方は生きなければならぬのだから」

「罪を償うためにか？」

「アル！いくらなんでも怒りますよー！！」

デスクの脇に置いてあるイーグルを撫でながら言つとイーグルは真剣な口調で返してくれる

それを俺は聞いてからかうように言つとイーグルは不機嫌そうに返す、すまないな…どうにも前向きには考えることが出来なくてな

「冗談だ…ハッ、罪はどんな事をしても無くならない、どれだけ償いをしようが後悔をしようがな…アイツに言つといて俺自身が出来てないんだから笑えるな…」

「アル…」

「少し休む…誰かきたら教えてくれ」

「わかりました」

俺は席から立ち上がると前にはやてに話した事を思い出しながらイーグルに返答をしてからベッドに倒れ込み、イーグルに言つと目を閉じる…

SIDE：レキ

たくさん考えた、どうしてあの人姉さんに手をかけたのかと…

時間をたくさん使ったけど答えは出ずに僕はただ重いため息をつく、

自室のデスクにかけて窓の外を見ると止むことのない雨は降り続いていた

まるで誰かの気持ちを表しているように思えたが、僕は考えるの止めて部屋から出ることにした… 久しぶりだろうか、キャラやエリオ達は心配してるだろうな…

「きゃっ！？レ、レキくん？」

扉を開けて外に出た時に短い悲鳴が聞こえた、考えすぎて疲れていて無意識だったためか声を聞いた瞬間、僕は少し驚いてしまった

声を上げたのはキャラだった

三日、会わないでいただけなのにひどく懐かしく思えてしまう、そう考えながらキャラに声をかけようとする前にキャラは僕の身体に抱きついてくる、そして少しだけ強く抱きしめてくる

「キャラ？…どうしたの？」

「凄く、心配したんだよ…レキくんが部屋から出てこなくて…」

僕の身体に顔を埋めて声を震わせながらキャラは僕にポツリポツリと話します

「レキくんにそっとしといて欲しいって言われたけどやっぱりほっておく事が出来なくて…私…」

「良いよ、ごめんね…心配をかけてもう大丈夫だよ」

「レキくん…本当に？」

泣くのを堪えながらキャラは僕に語りかけていく、途中で詰まってしまうけどキャラの気持ちはちゃんと伝わっていた

キャラに応えるように優しく抱きしめると出来るだけはつきりとした口調で言っと、顔を埋めていたキャラは不安そうに僕を見上げて聞いてくる

「うん…大丈夫だよ

キャラ、少しだけ僕の考えを聞いてくれるかな？」

「うん、いいよ」

「ありがとう、はじめは…僕はアルさんを憎んだんだ、姉さんのパートナーなのに死なせたんだろって」

僕は笑顔を浮かべて返すと三日の間に考えた事をキャラに話す事にした

キャラは快く頷いてくれて僕はゆっくりと語り出す

「でもおかしいな所があるのに気付いたんだ…アルさんが姉さんを殺したと認めた時、まるで苦しみながら出した答えのように聞こえたんだ…だから僕はもう一度アルさんと話して見ることにするよ、真実を聞くために」

「本当だったら、レキくんはどうするの？」

「わからない…けど何か理由があると思うんだ、それを知らずにあの人から離れるのは間違いだと思う…」

僕が話す内容をキャラ口は黙って聞いていたが聞き終えてから不安そうに質問をしてくる

それは最初に考えた事だけど、僕の意味は変わらない事を伝えようとキャラ口は安心したような笑顔を浮かべてくれた

「それじゃあまずはセレスの所に行かないとね…セレスも今回の事に関わっているから」

「リイン曹長から聞いたんだけどセレスは今、シャルマル先生の所にいるみたいだよ」

「なら医務室だね、よしさっそく行こう」

「うん！」

キャラ口から身体を離れたレキはこれからの事を考えだす
そして自分と同じように自室から出てこないセレスに話をして一緒に、アルから真実を聞く事をキャラ口に告げるとキャラ口は笑顔を浮かべて頷く、ようやく彼らしさが戻った事にキャラ口は本当に嬉しかったからである

「はい、ココアよ飲むと良いわ、セレス」

「ありがとうございます、シャルマル先生」

医務室に来ていたセレスはシャルマルから渡されたココアを手になく笑う

「その様子だとまだ気持ちの整理がついてないみたいね…」

「すみません…一人でいると不安しかなくて邪魔にならないようにします、だからここに居ても良いですか？」

「別にそんな事は思っていないわ、気がすむまでここに居ても良いわよ
隊員のメンタルケアも私の仕事だから」

セレスの様子にシャルマルは苦笑をしながら言うと、セレスは頭を下げて謝ると不安そうにしながら頼むと、シャルマルは優しく微笑むとセレスの頭を撫でて答える

セレスは嬉しそうに表情を明るくするとふと何かに気付いたのか直ぐに表情を暗くした

「…シャルマル先生はアルのしたことどう思ってますか？」

「ファフニールから報告されたことよね…そうね、私はアルさんとずっといた訳じゃないからわからないけど、私はアルさんを信じているわ、何か理由があつたんじゃないかって」

「理由？」

「そうでなきゃ、アルさんが人を手にかける真似はしないと思うの、もしアルさんが人の事を何とも思っていないなら、みんなを励ましたりするかしら？」

セレスは顔をうつむかせながらシャルに問いかける、自分以外の人はどう思っているのか知りたくなったからである

シャルは少し難しい顔をしてからセレスの問いに答える、その答えにセレスは首を傾げて聞き返す

シャルは続けて話していき最後にセレスに確認するように聞くと、セレスは今までの事を思い出す

出会ってから少ししか経っていないセレスでもわかるくらい、アルは面倒見が良くそして優しさがあつた

「不安ならアルさんと話したらどうかしら？今のセレスの気持ちとかぶつけてみるの」

「でも怖いです、それで話を聞いて貰えなかったらって思うと」

「言葉はちゃんと言わなきゃ伝わらないわ、でも怖いって気持ちもわかる…だから一人じゃなく誰かについて来てもらえば良いんじゃないかしら？例えば…レキとか」

「…レキが話を聞きたいって言うのでしょうか？」

「それは本人に聞いて見ると良いわ、ちょうど来たみたいだからね」

シャルの提案にセレスは自信無く答えると、シャルは肩に手を置いてアルとちゃんと向き合うように説得をしそのためにレキの力を借りるように言う

レキは難しいんじゃないかと答えるとシャルは扉の方を見ながら

言っと、タイミング良く扉が開かれレキが医務室に入ってきた

「アル、起きてください」

「…どうした？イーグル」

「はやてさんが話があると言ってきています」

「はやてが？…わかった」

ベッドで横になっていたアルにイーグルが呼びかけてくる、目を開けて用件を聞いたアルは身体を起こし扉に向かって歩きだすと扉のロックを外すると直ぐに扉が開く

「えっと、三日ぶりだな…」

「せやな…私がここに来た理由、先輩はわかるやるか？」

「いや皆目、検討がつかないな」

アルは出来る限りいつも通りに挨拶をするとはやてはそれが気に入らないのか、目を細めてから質問をする

アルはわざとらしく知らないフリを装いながら答える

「ロクに連絡せずに三日も皆に心配をかけたんや！その事について

何か言うことはないんか!？」

「それについては悪かった…アルファとの再戦を想定した戦術を練っていたから…」

「アルファ?…ファフニールが報告した仮面の男の名前なんか?」

とぼけるアルに少し怒りを滲ませながらはやては怒鳴ると、アルは今まで連絡しなかった理由を話すとはやては不思議そうに聞いてくる

(なるほど、アルファについてはまだ仮面の男でしか報告されてないみたいだな…なら)「ああ、それ以外は何にもわからなかったけどな…」

「なら次の交戦した時はヴィータやなのはちゃん達と連携をして、その必要はない」…え?」

「奴とは俺がケリをつける、お前らは手を出すな…レナについても同じだ」

「な、何を言うてるんや…そないな事したら今度こそただではすまないんやで!?それなのに一人で戦わせる言うんか!？」

アルファについてはやて達が何も知らないとわかったアルはアルファ達とは関わるなとはやてに言う

突然の申し出にはやては戸惑いを隠せずに聞き返しながら言う

「ああ、そういったつもりなんだがな…」

それに六課には関係の無いことだ、お前達はレリックを回収するの

が任務だろ？

余計ないざこざに首を突っ込んで被害をだしてどうする気だ？」

「そのいざこざの中心にいるのが六課のメンバーなんやで！？いきなりどうしたんや、いつもの先輩らしくないで？」

「勘違いすんな、俺はあくまで出向命令で来てるに過ぎないてか、いつもってなんだよ？俺は最適な判断をしてるだけだ…十分いつも通りだ」

「っ！！」

アルはわざとらしく言いながらはやてに返すと、はやては頭の中が混乱しながらもアルに問い続ける

しかしアルはそれをハツと笑い飛ばすと何か間違っているかと答える、それを聞いた瞬間はやてはアルの頬を思いつきり平手打ちをする

「何処がいつも通りなんや！そんな人を危険にさらす事を先輩が考えるはずない！！」

「お前は俺に夢を見すぎだ…はつきり言うが今の俺に構うな…迷惑なんだよ」

堤防が決壊したかのようにはやては感情を露にしながらアルに言う
とアルはそれを嘲笑うかのように言い捨てると部屋に入り、ドアをロックした

はやては扉を叩こうとしたが手は震え先ほどのアルの言葉が頭の中でリピートされだす

いたたまれ無くなったはやてはアルの部屋の前から逃げるように駆け出した

部屋に入ったアルは扉に寄りかかりはやてが立ち去るのを黙って聞いていた、そして殴られた頬に手を当てる

「後悔しているのですか？」

「ノーコメントだな…怒ってるか？イーグル」

「デバイスとしては何とも言いません…だけど女性としては最低と思います」

「それで良い…」

デスクに置かれたイーグルがアルに問いかけると、身体を扉から離してデスクに近づくと苦笑して答える

逆にアルはイーグルに問いかけるとイーグルはきっぱりと答えた

SIDE：はやて

嘘だと思ったかった、先輩からの言葉が

聞きたくなかった、迷惑だと言う言葉

頭の中がグシャグシャになった、それ以上に胸が痛い…はつきりとした拒絶を受けたから？

それもあるけど何より先輩にそれをされた事だった

まるで他人事のように私は考えながら足を歩くスピードまで落とす…胸の痛みはどんどん痛くなっていく、押さえても痛みは鎮まらない

「っわ！はやて？危ないよ？ちゃんと前を向かなきゃ」

何かにぶつかる感触があり前を向くとそこには心配そうにするフェイトちゃんがいた

「はやて？どうしたの、涙を流して何かあったの！？」

「え？…私、なんで泣いて…」

フェイトちゃんに言われてから気付いた自分の頬を流れる涙に

「ともかくこれで拭いて！はい、ハンカチ…何があったの？」

「ありがと…先輩に話を聞きに言ったんやけど…そしたら構うなって…そしたら凄く胸が痛くなってるな」

「そっか、はやてはアルに突き放されたから泣いたんだね…アルの事が本当に好きだから」

フェイトちゃんは私にハンカチを渡してから事情を聞いてきた、私はなんとか説明をするとフェイトちゃんはわかったかの様に言うと共に言葉を投げ掛ける

先輩の事が好き…フェイトちゃんは確かにそう言った、いつもなら違うつて言う所なのにその言葉を聞くと少しだけ痛みが和らいた

多分、この痛みの正体がわかったからだと思う…だけどわかると同時に涙が込み上げてきた、泣きたくないそうおもいながらも涙は溢れてくる

「フェイトちゃん…少し頼みがあるんや…」

「うん、気のすむまで泣いて良いよ…それから先は後で考えようか」

「うん…ありがとうな…」

耐えきれなくなった私はフェイトちゃんに言うどフェイトちゃんは快く受け入れてくれた、そして私は声を押し殺して泣いた…
今の気持ちを吐き出すために

EP16：不協和音（後書き）

どうも、えのきです！

はい、はやてのファンの皆様には申し訳ないです、泣かせました…
皆様の怒りは分かる、私も怒ってるから！

じゃあなんで書いたって事になりますが、それははやての気持ちを
はつきりさせるためです！

さてさて次回からはようやくシリアスも折り返し地点に入ります
楽しみにしてください

アルさんはいつもより三割増しでズタボロにする予定です

それでは予告にうつります

アルフィリオス「真実を求めてレキとセレスはアルフィリオスの元
に向かう、しかしそれを阻止するかにようにアルファから宣戦布告
が出される

自身の信頼関係を破壊してまで出撃するアルフィリオス、そして今
すべてが語られる

次回、魔法少女リリカルなのはStrikers～夜天に舞い踊る
荒鷲～EP17：過去の真相 にテイクオフ

俺はあの時から何一つ変わっちゃいない」

そして昨日でこの小説が10万PVを越えました！さらにユニーク
も1万を越えてました、見てくれた皆様に感謝をしながら記念小説
を書こうと思います

直ぐには書けませんアンケートに答えてくれると嬉しいです

1：読者様からのリクエスト

2：現代パロディ

3：季節もの

の三つを候補に上げます良ければえらんで下さい

EP17：過去の真相（前書き）

お久しぶりというくらい遅れました…

シリアスシリーズは本当に時間がかかります、そしておそらく今回ののは今までで一番長いです

間違っていたりしたら指摘をよろしくお願いします

最後にアルとアルファの対決するシーンがありますがそのイメージとして「Regret nothing Tighten Up」
（渡部 秀）と推奨します

名前でわからない人は仮面ライダーオーズのタトバで探してみてください
さい

EP17：過去の真相

医務室の前まで来たレキは深呼吸をしてから中に入る

「失礼します、セレスはいますか？」

「レキ、もう大丈夫なの？」

「完全にまではいかないけどね…セレス、アルさんについて話があるんだ」

「うん、わかった…聞くよ」

入ってきたレキにセレスはココアを置いて近くに寄り心配そうに話しかける

レキは苦笑をして答えてから本題に入る、レキの用件を聞いたセレスは息を飲んで頷く

「僕はもう一度アルさんから姉さんが死んだ時の話を聞こうと思うんだ」

セレス、君にも来てほしい…アルのパートナーである君に」

「私もおんなじ事を考えてた行こう、レキ！アルの所に！」

レキは自分の決めたことを話してセレスに手を差し出す、セレスもそれに応えるように手を握ってから返す

二人はアルの元に向かおうと医務室を出ようとすると突然、第一級

警戒体勢のアラートが鳴り出した

「どうした！？いったい何が起きているんだ！？」

「外部から六課にハッキングがかけられている模様！
通信システムが完全にダウン、これじゃあ外部との連絡が！！」

指令室にいたグリフィスは突然の事に焦りつつも状況を確認する

オペレーターの一人であるルキノは機動六課に起きている状況を説明していき新たな異常に驚愕の声を上げる

「グリフィス君！状況はどんな感じや！？」

「八神部隊長！現在、機動六課はハッキングを受け通信システムがダウン、外部との連絡が完全に遮断されました」

「犯人から要求とかはきたの？」

「いえ、今の所は何もありません、ハラオウン執務官」

廊下にいたはやとフェイトは指令室に駆け込みグリフィスに状況を聞く

グリフィスは敬礼をしてから現在の状況を伝える、報告を聞いたフェイトはグリフィスに他には無いかと聞くがグリフィスは首を横に振った

「どう思う？はやて」

「十中八九これだけやない…皆、相手の目的わからん以上、警戒だけは怠らんといてな」

「……了解！」「……」

はやてはフェイトの問いに答えてから指令部にいるメンバーに指示を出す

それと同時に扉が開きなのは、ヴィータ、シグナムの三人が指令室に入ってくる

「はやてちゃん！状況は？」

「今の所はハッキングのみや」

四人はいつでも出られるようにしててな？」

「……了解！」「……」

入ってきたのはがはやてに尋ねると一通りの状況と何かあった場合の対処についてははやては指示をだす

その瞬間、アナウンススピーカーからノイズが出始める

いきなりの音にははやて達は耳を塞ぐと突然通信モニターが展開されるとそこには仮面をつけた男性が映された

《機動六課の者たちよ、俺はアルファ！愚かな管理局を妥当するために存在するものだ！！》

「アルファ…」

「コイツがアグスタでアルが交戦した奴か…」

モニターに映し出された男性は演説をするかのように宣言をしてくる、アルファという名前にはやてはつぶやくように復唱をしヴィータがモニターを睨みながら言う

《俺が通信を入れた目的は二つ、融合騎セレスとアルフィリオス・ラーゼンハルグの引き渡しを要求するためだ》

「アルとセレスの引き渡し!?!」

「こちらは機動六課、部隊長の八神はやてや、そないな言い分通せるはずないやろ!?!」

《お前が八神はやてか…部隊長ならもう少し合理的に対処したらどうだ?》

犯罪者まがいの隊員と協力者でしかない融合騎を差し出せば隊は無事なんだからな》

アルファの言葉に指令室に緊張が走る

その中ではやては平静を保ちながらはつきり返答をする

返答を聞いたアルファは呆れ果てた口調でいい放つ

「たとえ隊が無事でもそんなの全然嬉しくない、この機動六課は二人も入れての機動六課や
だから私は誰も見捨てたりせえへん!?!」

《大した意思だ…しかしアルフィリオスがそれほどの価値があるやつか？

自分の部下に手をかける男だぞ》

「その真意はわからへん…

だけど私は信じてる、あの人が望んでやった訳やないって!!」

《気丈だな…なら一時間の猶予をやる、アルフィリオスを差し出さなければ貴様らも葬ってやる》

未だにアルの事を信じているはやてに対してアルファは彼の犯した事を告げる

それを聞いたはやては少し迷いはしたがそれでも信じると答える

アルファは鼻で笑いはやてに指を突きつけてから宣言をする

一時間…誰もがその言葉に息を飲んだがその硬直は直ぐに解けた

「一時間もいらねえ…てめえは何処にいるアルファ」

その場にいた全員が後ろを見るとそこにはアルの姿があつた

ヴィータやなのは達は安堵の息をもらすがはやてやフェイトは先ほどの事を思い出して顔をしかめた

《ようやく出てきたか…

そんなに死にたいのなら相手をしてやる、俺は廃虚都市郡にいる、来る気があるなら来い無論、一人だな》

「ああ、良いぜ…俺はサシでてめえと勝負をつける気だったからな、ちょうど良い」

《その強がりが絶望に変わるのを今から楽しみにしているか…》

アルの姿を確認したアルファは獲物を見つけたかのような目をしてから言っと、アルはそれを腕組みをしながら答える

余裕のある言い方をしているアルにアルファは含み笑いをこぼすと通信を切る

通信が切れた後、指令室には沈黙が流れた

アルは何も言わずに出ていこうとした

「待てよ、本気で行くつもりなのかよ…アル」

指令室から出ようとした時、ヴィータに呼び止められた
アルが振り返るとヴィータの表情は不安の色しかなかった

「当然だ…これは俺にしか出来ない事だからな、お前らの力は借りない」

「なんだよそれ！？あたしらが役に立たないって言うのかよ…！」

「そうだ、邪魔だから来るな」

「っ！？てめえ…！」

アルは一度はヴィータの顔を見たが直ぐに背を向けてから答える

不安から苛立ちに変わりだしたヴィータは感情を滲ませながら聞く、
アルはそれを冷たく切り捨てるように返す

その言葉に我慢の限界がきたヴィータはアルに殴りかかろうとするがシグナムがそれを静止させる

「落ち着け、ヴィータ」

「これが落ち着いてられるか！

ふざけんなよ！あたしらは仲間だろ？なんでそんな言い方ができるだよ！！」

「……悪いが話す事はもうない」

「待てよ！？アル！おい！！……なんでだよ……」

シグナムの静止にもヴィータは止まらずアルに食いかかるがアルは短く返し、指令室を後にする

アルがいなくなった後の指令室にヴィータの声だけが響いた

アルがいなくなって数分後にフォワードメンバーとセレスが指令室に入ってくる

「八神部隊長！アルさんが一人で出撃したんですけど、どうしたんですか？」

「…アルファっていう魔導士からの要求や……」

「この間の仮面の魔導士か…でもどうして一人でアルさんらしくない…」

「ロングアーチ7が目標地点に到着しました、っ！
イーグルレイダーから映像が送られてきます」

スバルの報告を聞いたは yet は短く返答する、フォワードメンバーが動揺するなかレキはアルの行動に疑問を覚えた

そんな中でシャーリーが状況報告をするとモニターが展開し映像が映し出された

そこにはサーチャーからの映像だろうかアルとアルファのにらみ合う姿が映し出されていた

「逃げずによく来たな、アルフィリオス」

「まあな…どうせ相手をするんだ早い方が良いだろう？
それに戦えんのは俺だけだからな…てめえはなのは達が来たらその仮面を外す気だろ？」

「やはり気づくか…勘が良いな、この顔を見ればアイツらは手出し出来ないからな」

向かい合うアルファは腕組みをして関心するようにアルに言つ、対

してアルは辺りを見ながら答えるとアルファの仮面を指でさす

指摘されたアルファは含み笑いを浮かべると仮面を外し投げ捨てる、暗雲の隙間からもれた月明かりがアルファを照らし顔を露にさせるのだから…

そんなはやて達を知らずにアルは話を続ける

「ずいぶんエグい手を使うな…
確かにアイツラには効果的だけどな」

「だから貴様は一人で来たのだろ？仲間を危険に晒したくないからわざと小芝居をうつてな」

「おいおい、そこまでわかんのかよ…よくわかったな」

「俺はプロジェクトFで作り出された貴様のクローンだ…
作った奴らはお前に似せるように思考パターンも同じに調整したらしくてな

だからわかるんだよ、心を許した相手を戦場に出さないために貴様が何をするかな」

仮面を脱ぎ捨てたアルファにやれやれとため息まじりにアルは言い肩で笑う、アルファは何故アルが一人で来たかわかっているかの様に話しだす

正解だった事にアルは驚きながらも薄気味悪そうに言う、アルファは何故わかったかまるで他人事のように言いアルに指を向けて言う

「思考パターンねえ…面倒な事だな、どこまで似せてるかは知らないが戦う前にレナと話をさせてくれないか？
アイツもいるんだろ？」

「…まあな、しかし今さら命乞いか？それとも謝罪か？どちらにせよ冥土の土産だ、好きに話せば良い…レナ」

アルは面倒そうにつぶやくと突然、レナと話しがしたいと提案をする
アルファは少し驚いた顔をするが鼻で笑い、自分の後ろに目を向けてから呼びかけるとマント姿のレナが現れた

「良く私がいることに気付いたわね…」

「局入りして三年間、一緒にいたんだぜ？わからなかったらダメだろ」

「っ！そのパートナーを殺した理由…聞かせてもらおうかしら！？
お前の用件はそれのはず！！」

「話す内容がそれだけど聞く事は違う、俺が聞きたいのはお前がどうやって死んだかだ、正確には俺の殺し方だな」

レナの口調は変わらず憎悪に満ちているのに対しアルの口調は、涼やかなものでまるで談笑するかのようなだった

そんな態度をとるアルにレナは苛立ちを覚え話しの内容を指摘して

から早く話せと催促をする

アルは苦笑を浮かべてから答えるとレナに自分の死因を問いかける
それを聞いたレナは怒りのあまり銃口をアルに向ける

「貴様がそれを聞くか!？」

自分の手でした事すら忘れるとはどういうつもりだ!!」

「俺の知っている事とお前の知っている事…どう違うのか確かめた
いのさ」

「自分は殺してないと言っても言う気？」

良いわ!なら話してあげる、7年前に起きた事をね!!」

怒りのこもった口調でレナは答えるがアルは平静のまま返答をする
レナはアルの言葉を笑い飛ばすと罪を確認させるために語り出す

SIDE：レナ

7年前、私達はある犯罪者を追っていた
何人もの局員が返り討ちに合う程の手練れだという話だった

そこで数より質を重視し実績を残している、私達に白羽の矢がたった

正直な話し私も不安だったけどアルフィリオスを信頼しているからこそなんとかなると思った、あの時まで…

「捕縛完了…本当になんとかなったね、アル」

「まあ俺とお前なら出来るって思ってたからな」

「そうだね…うん、私達は無敵のコンビだ！」

犯人の捕縛して私は息をついてから隣にいたアルに呼びかける、私と同じように肩で息をしながらアルは返答した

にこやかに笑うアルに私もつられて笑うとグツと握り拳を作ってからアルの呼びかける

「ああ、そうだな…でもそれは今日で終わりだ…」

「アル？なに、あぐっ！？」

アルの口調が低くなり発せられた言葉の意味がわからず聞こうとした時、私の胸をイーグルレイダーのリッパーが貫いた、最初はわけがわからなかったけど飛び散る血で意識が戻された

「ど、どうして…アル…」

「悪いな…だけど仕方ないんだよ…だからあばよ、レナ」

鮮血が滴り落ちるリッパーの刃に手をかけながら、アルを見るとその顔は狂気に満ちていた
そしてアルは私の身体を引き裂くようにリッパーを振るい、私は絶

命した

「これが私の死んだ時の事よ！
すべてこの子【シュバルツファルケン】が教えてくれたわ」

「そうか…よくわかった…」

「どうやら思い出したみたいね…私はお前を信じていた…なのに手の平を返して裏切るお前に失望した！
理由があるうと関係ない、私はお前を討つ！！」

「勘違いすんなよ、別に忘れてた訳じゃない…お前が死んだ時の事を忘れられるわけないだろ
俺がわかったのはお前が記憶操作を受けたって事だ」

語り終えたレナは黒い銃を見せつけるようにいう、話を聞いていたアルはため息をついて下を向いてから納得をする

レナは鼻で笑うとギリッと歯を食いしばってから銃口に魔力弾を生成しながら宣言をする

下を向いていたアルは顔を上げると真剣な表情で返答をしてから指をレナに向けて言う

「っつな！？何を根拠にそんな事が言えるの！！
私は確かにこの目で見てシュバルツファルケンの映像でそれを知った！間違いであるはずがないわ！！」

「いや間違いだ、一件正しいように見えて間違いがある…さあ真相を説明しようか」

突然の事にレナは魔力弾の生成を止めてから反論するように言い自分が正しいと答える

アルはそれでも戸惑う事なく答えるとレナを見ながら語り出す

「まずはお前のデバイスシュバルツファルケンについてだな…そいつはヴァイスファルケンって名前のはずだろ？」

「そうよ、復讐を誓った日から変えたのよ！それがどうしたの？まさかそれが間違いとでも言う気？」

「いや本題はここからだ…ソイツの待機フォルムはなんだ？」

「待機、フォルム…」

今までとは違う雰囲気を押されながらもレナは答えると馬鹿らしいと笑い飛ばすが、次に出されたアルの言葉に言葉を無くした

「どうした？自分のデバイスだろ…なんで直ぐに出ない？当たり前だよな…ソイツは偽物だからな」

「っ！？そんな筈はない！
ずっと使ってきたデバイスよ、間違えるはずはない！戻さないのは戻す必要が無いからよ」

「…ッハ、あり得ないな…教えてやるよ、お前のヴァイスファルケ

ンの待機フォルムはコレだ」

「…ハーモニカ、？」

言葉を無くしたレナにアルは畳み掛けるように言葉を言っていく

それでも間違いを認めないレナは反論をし始める、レナの話しを聞いていたアルは発言を否定するように笑い飛ばすと自分のバリアジヤケットに手を入れると何かを取り出しはじめる

それはアルが良く吹いていたハーモニカであった

「そう、ヴァイスファルケンの待機フォルムはハーモニカだ…コイツはレナ、お前自身から受け取ったものだ」

「嘘…そんなはずない…信じられない」

「なら、その目を見開いて良く見やがれ！

お前の相棒の姿をな！ヴァイスファルケン！セットアップ！！」

語られていく事に目を背けるかのようにレナは耳や目を塞ぐがアルはそれを打ち破るように叫ぶ

アルの声と共にハーモニカが輝くと純白に金色のラインが入り銃身が翼ようなデザインの拳銃に形を変えた

「ヴァイスファルケンの待機フォルムがハーモニカなのは、このハーモニカがレキとの思い出だから持つてる事でいつでもレキつながってる証って言ってたんだよ」

「なら、私の記憶は一体…」

「まだ話しは終わってねえ

シユバルツファルケンが教えた間違いを正す真実を今から話す」

ヴァイスファルケンをレナに向けながらアルは待機フォルムの理由を説明する

自分の信じている事が違った事でレナは困惑しはじめていた、アルは困惑するレナを見つめながら語り出す

S I D E : アルフィリオス

7年前の事件についてレナが話した事はほぼ正解だった
違っているのはレナが無敵のコンビといったあたりだった

「ふざけるな！管理局の犬どもが…！」

「てめえ、ぐあっ！？」

「アル！？そんなバインドを破るなんて…」

意識を取り戻した犯罪者がバインドを破り俺に体当たりをしてきた
のだった

突然の事に対処できなかった俺は壁に叩きつけられ形勢は一気にひっくり返された

犯罪者は武器に使っていたアームドデバイスである槍を持つとダメージで動けない俺に向けてくる

レナは牽制のためにヴァイスファルケンを構えるという三竦みになってしまった、しかしその中でも一番危険なのは俺であった

叩きつけられた衝撃によりイーグルを手離してしまっていたからである

「おいおい、コイツを見捨てたるのか？大切なパートナーなんだろう？」

「つく…わかったわ…」

「よせ！！構う事なく撃て！！！」

「だとさ…出来るかい？お嬢ちゃん」

槍を俺の喉元に押しつけながら犯罪者はレナを見て不気味に笑いかけてくる

レナは仕方なくヴァイスファルケンを下ろす、俺は構わず撃てと言うがレナは首を振って否定をするとヴァイスファルケンを床に置いて下がる

「へへっ…良い子だ…お嬢ちゃんには人質になってもらうとして坊主には死んで貰うか！」

「アル!!」

喉元に突き付けられた刃が引かれ勢い良く放たれ自分に突き刺さり
そつになった時、目の前にレナが割り込んできたのが見えた

それはやけにスローで手を伸ばせば止められそうだった、けど手
は伸ばせずに刃はレナの身体に深く突き刺さり俺の身体には鮮血が
飛び散った

生暖かい血はだんだんと冷えていきレナが死んでいくのが手にとる
ようにわかった

気がつけば俺の前には死にかけのレナと肉片となった犯罪者…そし
て手には血に染まったヴァイスファルケンが握られていた

「レナ、レナ!! おきろ、起きてくれ!!」

「…ハア…アル? 良かった…無事だったんだ…」

「俺より自分の心配をしろ!! 死にかけてるんだぞ!!」

「本当だ…やばい、なあ…ドジっちゃったよ」

我に返った俺はレナに駆け寄り必死に呼びかけ、なけなしの回復魔
法をかける

呼びかけで薄く目を開けたレナは力なく笑うと息をもらした、自分
の心配をしないレナを叱りつける、そこでようやく自分の状態に気
付いたレナは苦笑をもらして答えた

「なんで俺をかばったあの時、お前なら槍を撃ち落とせばはずだ」

「なんで、だろ？…アルが危ないって考えたら勝手に動いてた、ごめんね…」

「謝るな！直ぐに救助がくる、だからもう少し起きてろ！！」

「うん…アル…ちょっとだけ約束してくれる？」

傷に魔法をかけながら俺はレナに問いかけるとやんわりとした口調でレナは返答をしてから謝ってきた

俺は怒鳴りながら傷に魔法をかけ続けるがだんだんと無意味だと言う言葉が頭に浮かんでくる

必死に振り払っている時にレナはかすれそうな声で話しかけてきた

「後で聞く！だから頑張れ！！」

「無理だよ…自分でもわかる…もう後が無いことが…だから今、言うね」

自分を責めたりしないでね？これは私が勝手にしたんだから…あとね…好きだよ…ア、ル…」

「レナ？…嘘だろ…レナっ！！」

レナはそれだけを言うと俺の腕の中で息を引き取った

これが7年前に起きた本当の出来事だ…

「そんな…なら私の記憶はなんなの…アルフィリオスの話を嘘だと思えない…違う、あれは嘘だ…でも私は…」

「お前が恨むのは構わない…俺のせいで死ぬ事になった…俺が殺したものだ、否定はしない
ただ、事実を見失うな！お前のしてきた事を他人の横槍で汚したままにするな！！」

「ア、ル…私は…」

《いけませんわ、レナお嬢様》

支離滅裂な言葉をつむぎながらレナは平静を保とうとしているが、アルは訴える様に言葉を投げ掛けると、レナは瞳にうつすら涙を浮かべて手を伸ばそうとする

しかしそれを遮るかのように通信モニターが表示され眼鏡をかけた女性が映された

「クアットロ？…どう、したの」

《お嬢様のバイタルに異常が発生しましたの、至急お戻りくださいな…》

「でも、私は《ルーお嬢様、よろしく願いしますわ》これは召喚

陣！？」

「レナ！！」

眼鏡の女性、クアットロにレナは問いかけるとクアットロはわざとらしい態度で言い返るように提案をする

しかしレナは何かを言おうとした時、クアットロは話を聞かずに指示を出すとレナの足元に紫色の召喚陣が展開され、光に包まれだすアルは慌てて手を伸ばすが届く前にレナの身体は光となりその場から消えた

《残念でしたわね、アルフィリオス・ラーゼンハルグ
それではアルファさん？後始末をお願い出来ますか？》

「ああ、良いだろう…邪魔をするなよ？」

《承知しましたわ、では》

クアットロは手を伸ばすアルを嘲笑うように言い、アルファに残りを任せる

近くで見ていたアルファはクアットロに念を入れるとアルに視線を向ける

クアットロはそれを見て愉快そうに笑いながら通信モニターを閉じる

「気はすんだか？まあその様子じゃ、まだまだ納得は出来てなさそうだな」

「そうだな…納得は出来ない、けどお前から先に片付ける…」

「ほお…少しはやる気が出ているみたいだな…それで何処までやるか、見せて貰うか」

「構わないが、加減なんざ期待すんなよ!!」

通信を切られ行き場のない手を握りしめているアルを見て、わざとらしく言葉を放つアルファ

握りしめていた手を解いてからアルは、目の前にいるアルファに目を向ける

その瞳にはやり場のない怒りがこもっていた

それを感じ取ったアルファは笑みを浮かべて挑発するような、言い方をするとアルはヴァイスファルケンを待機フォルムに戻してアルファに斬りかかる

アルファは素早くアサルトホークを展開するとロングブレードでイーグルのリップパーを防ぐ、その瞬間辺りに凄まじい衝撃が伝わる

「…やるじゃないか、さあやるぞ！アルフィリオス!!」

「アルファ!!」

リップパーを受け止めながら心底楽しそうに返すアルファに、アルは感情を爆発させるように叫ぶと斬りかかった体勢から、後ろに飛んでイーグルの魔力弾をアルファに向けて連射する

辺り弾幕が巻き上がるがアルファはそれを纏いながらロングブレードを振りかぶりアルに向けて飛びかかる

指令室にて先ほどのやり取りを見ていたはやて達は言葉を無くしていた

アルが自分達を遠ざけた理由、それはなのは達では自分のクローンであるアルファと本気で対峙する事が出来ないという事だったからだ

「全部、あたしらのためだったのかよ…わざと突き放したりしとか…あたしらを守るためにやってたのかよ」

「嘘だったんだ…姉さんを殺したなんてのは、でもそれをアルさんはずっと抱えてたのか…」

「でも…」

「セレス？どうしたの？」

ヴィータやレキは知らされた事実に反芻しているなかで、セレスはモニターのアルに目を向けたままつぶやくと近くにいたフェイトが首を傾げて聞く

「そんな事があってもアルはどうして管理局に残っているんだろ？
凄く苦しいのにどうして…」

「セレス…」

アルの話を聞いていたセレスは凄く辛そうな顔をしながら言いフ
エイトは落ち着かせるように声をかけようとした瞬間、凄まじい轟
音がモニターに響いた

全員がモニターの方に目を向ける、そこには廃虚ビルの屋上に叩き
つけられ起き上がろうとするアルの姿があった

アルファはそれを見下すように見ながら口を開いた

《貴様は何故戦う?》

「唐突になんだよ?」

「当然の疑問だろ、俺との力の差は歴然…俺はユニゾンを使ってい
ないのに貴様は膝についている、明白な事実だろ」

「はつきりと言ってくれな…」

「リミッター、非殺傷設定、管理局が定めたくだらん枷がついてる、
籠の中にいる鳥のようにな…だから聞くんだ、そんな状況でなお戦
うとするのはどうしてかとな
俺ならしないな、そんな事」

膝をつき肩で息をするアルは顔だけアルファに向けて聞き返すとア
ルフアは鼻で笑い説明をしていく

わかつてはいたが事実の述べられてアルは苦笑を浮かべていた、アルファはそれを無視して言葉を続けた

アルファがいい終えた時辺りを静寂が支配した、数分であったそれはアルの笑い声によって無くなった

「ふははっ…戦う理由ね…簡単なものだ、夢を守るためだよ」

「夢、だと？」

「ああ、お前の言う通り管理局は鳥籠みたいところさ、自由に飛べない窮屈な場所…レナが死んでから俺は抜けようとも考えた、だけどその窮屈な鳥籠の中でちっちゃい雛を見つけたんだよ」

アルの戦う理由を聞いたアルファは怪訝な表情を浮かべる、それを視界にいれながらアルはそのまま語り出す

「そいつは昔に大きな罪を犯して、管理局の世話になったそうだし、そしてそいつは言ったのさ、自分の力を誰かの為に役立てたいってよ、程度の違いはあるけど、なんか俺と似てると思ってな、そのちっちゃい雛が作り出す明日がみたいから俺は戦ってたんだよ」

「誰かの作り出す明日か…ふん、くだらん…」

「ならお前何のために戦う？アルファ」

「俺は俺を確立するために戦う、誰かのコピーではない、俺という存在をこの世に刻むために戦っている！」

アルの戦う理由を語り終えると聞いていたアルファは馬鹿にするように言う

それに対してアルは逆にアルファの戦う理由を問いかける、自分の手を見つめながらアルファは答えると握り拳を作り天、高々と振り上げる

「ならなおさら決着をつけないとな、てめえのためと他人のためどちらが強いかな」

「話しにならない勝負だな…本気で勝てるとも思っている気か？」

「奥の手があるんでな、イーグル！」

「了解、シリンダーを排出します」

イーグルの銃口をアルファに向けながらアルは言っとそんな事無理だと笑い飛ばす

しかしアルの表情から自信の色は消えずイーグルを銃口を上に向け、すると短い空気音と共にステーク用のカートリッジシリンダーが排出される

アルは腰に手を伸ばしリロード用カートリッジを取りステークに装填する

「コイツは俺が今できる最高の攻撃だ…ステーク六連発…食らったら風穴が空くかもな」

「当たればな…そんな単調な攻撃かわせばすむことだ」

「なら試してみろ…回避できるならな」

アルはイーグルを構えながら今からする攻撃を説明する
自分の手の内をさらすアルに怪訝な表情を浮かべながらアルファは
回避できるように身構える

回避するといったアルファに不敵な笑みを浮かべてアルは足元に魔法陣を展開する

「行くぜ…ソニック、バースト!!」

「ソニックムーブより早い!!ごはっ!?!」

足に力を入れて一気に魔法陣を蹴ったアルの姿は一瞬だけアルファの視界から消える、そして次にアルファの前に現れた時にはその体にステークを打ち込んだ後だった

ソニックバースト、それはソニックムーブのように自在に高速で動けるものでは無く、一つの方向に高速移動するものである
しかし自在に動けない分、加速するスピードはソニックムーブの二倍となる

「ただし身体にかかる負担もデカイがな…さあてお待ちかねの、受けてもらうか!ワンシリンダーロード、カートリッジ!!
フルシリンダーステーク!!!」

身体が軋む音を耳にしながらアルはイーグルのトリガーを引く
一発、また一発と凄まじい轟音をたてながらアルファの身体にステークが打ち込まれていく、アルファの身体が衝撃で吹き飛ばされてもソニックバーストの効果で直ぐに次のステークが放たれる
そして最後の六発目が打ち込まれた瞬間、アルファの身体は廃虚ビ

ルに叩きつけられた

アルはそのビルのかいかに降り立つと膝をつく、イーグルも本体のいたる所からスパークがはなたれていた

術者とデバイスの耐久力を無視するフルシリンドーステーク、アルの言葉通り一回しか使えない切り札であった

（これで倒れれば御の字…）「倒れないなら…死があるのみだな」
なに！？ぐあ！！」

アルファが落ちたビルに目を向けながらゆっくりと立ち上がり眺めてつぶやく、その瞬間自分じゃない誰かの声が聞こえそちらを向こうとするがアルの腹部から鈍い音が響く

そこにはビルに叩きつけたはずのアルファの姿があった、先ほどの衝撃はアルファの蹴りがアルの腹部に入った衝撃だった

「がは、げほげほ！なんで、いつの間にユニゾンを…」

「最初からだ、バレないように変身魔法を使つてな…」

ライナがない事に気づくべきだったな、アルフィリオス

さて景気のよい一撃のお返しをしないといけないか…見せてやるよ、アサルトホークの真の姿を！！」

目の前にいるアルファはライナとユニゾンした時と同じ外見をしており、先ほどの戦闘ではユニゾンなんて一度もしていなかったのを思い出しながらアルは言葉を吐き出す

アルファは引つかかったと言わんばかりにアルに説明をしていきステークの礼をすると自分の右手の盾を構える

魔力が込められ赤く光る盾はまるで鋏形虫の顎の形に形状を変えた
「ビークシザーズクラッシャー…アサルトホークの嘴だ

その威力は身を持って知るが良い！！

ボルトバニッシャー！！！！」

「しまつ、ぐあああつ！！！！」

右腕の鋏を見せびらかしながら言うところアルファはクラッシャーを引きアルの腹部、目掛けてボディブローをはなつがそれだけではなかった

鋏がアルの身体をきつく固定をすると鋏から凄まじい電流が放たれアルの身体を駆け巡る

「どうだ？ライナの電撃は

このクラッシャーとは相性が良くてな、こんな風に電流を流し続けられるのさ」

「おおあああつ！！ぐううあああ！！！！」

アルファは嬉々として説明をしていき再びアルの身体に電流を流していく

最初は引き剥がそうとしていたアルであつたが幾度となく繰り返される電流に抵抗する力を奪われていく

そしてクラッシャーから解放された時には自分の足で立てないほど消耗していた、アルファは倒れているアルの頭を踏みつけて勝ち誇った表情を浮かべた

「ステーキには驚いた、ライナがフィールドの出力と重ねがけをしなければ危なかったな、賞賛に値する…だがお前にユニゾンを使わされたのは同時にそれが一番腹立たしい事だ！」

「あぐう…くう…」

「悲鳴も上げなくなっただか…このまま殺しても良いが、それじゃ気がすまない」

「そうだ、面白い方法がある」

アルファは笑みを浮かべながら話すが急に目の色を変えてアルの頭を踏みにする

アルは電撃のダメージでただ呻く事しか出来ずにいた、アルの反応がつかまらなかったのかアルファはロングブレードを引き抜くが何かを思いついたのか空中に飛び上がったいく

そしてビルを見下ろせる位置まで上昇したアルファはロングブレードを空にむける

夜空を覆っていた雨雲は一齐に雷を落とした、そして落ちる先はすべてアルファのブレードだった、まるで雷を吸いとるかのように落雷が落ちる度にブレードは帯電をしていく

「ライナとセレスは天候を味方につけてその威力を増す…ああいまから死ぬ貴様には関係ないな、さあ…受ける！天雷狂刃！！！」

帯電しているブレードを見ながらアルファは説明するとわざとらしく思い出してから言い、そしてアル目掛けてブレードに蓄積された雷を撃ち放った

いくつもの雷が収束された砲撃は蒼白い閃光となってアルのいるビルを飲み込み爆発を巻き起こした

EP17：過去の真相（後書き）

どうもえのきです…ようやく終わりました

仕事の関係でこんな時間帯で申し訳ないでしたが楽しんで貰えたら嬉しいです

ようやくアルのシリアス編も残すとこあと一つです、先にネタばらしですがアルはちゃんと生きてます

主人公ですから更に言えば次回はこの小説はじめての無双でやります、今回の敗けを無くすくらいにしたいと考えますよ

それでは楽しみにしててください

次回は早く上げるように頑張ります

EP18：すべてを吹き飛ばす風（前書き）

シリアス編、ラストでございます！

ここでもBGMの推奨があります

アルとセレスのユニゾンの際に「トライアル」（仮面ライダーW、オリジナルサウンドトラックから）

アルとアルファの戦闘で

「Cyclone Effect」（仮面ライダーW、挿入歌）

を推奨します

EP18：すべてを吹き飛ばす風

SIDE：セレス

アルの滅多に聞かない口調で放たれた言葉が私の耳に届いた

夢を守りたい、無くす痛みを知っているからもう誰にも味わってほしく無いからアルは戦っている

でも私は思う、皆を守るアルは誰が守るの？

傷ついても嫌われても気付いてくれなきゃ誰もわからない、アルはそのまま痛みを受け続けるの？

アルが今までみんなに励ましてきた言葉は全部、自分が出来てない事ばかりだよ…それって自分の様になって欲しくないから？

私の中にはいろんな感情が渦巻いていた

そして突然聞こえた音に慌ててモニターに目を向けた

「アルさん、凄い…あんな攻撃をするなんて」

「これならアルファって奴は倒せたはずだね！」

モニターを見続けていたティアナさんとスバルさんの言葉が耳に入る、膝について辛そうにしているアルは少しだけ緊張を解いた顔をしていた

だけど私はこの戦闘が始まってからお姉ちゃんの姿を見てないことに気付いた、お姉ちゃんとは私と違いマスターの側を離れる事は滅多

にないだから姿が無いことは異常だった

マスターの指示かそれとも…っ！！

「アル！ダメ、逃げて！！」

私は皆が喜ぶ中で叫んだ、その瞬間モニターから鈍い音とアルの悲鳴が聞こえた

それはユニゾンをしたアルファが魔力で強化した足でアルのお腹を蹴り飛ばした音だった

「ユニゾン！？いつの間に…」

「最初っからだよ、お姉ちゃんの魔力が全然感じなかったのはアルファの中で休眠していたからだっただ」

なのはさんの疑問に私は自分を叱りつけるように言う、再びモニターに目を向けた時にはアルはアルファの攻撃を受けていた

まるで鉄のように展開したアルファの盾はアルの身体を締め付けるように固定をするとアルファはアル自分の頭上に持ち上げる

ユニゾンして筋力が上がっているからかアルの身体は簡単に持ち上がる、抵抗するアルを見ながらまるで楽しみがあるかのような笑みをアルファは浮かべていた

《威力をその身を持って知るが良い！！》

ボルトバニツシャー！！！！》

《ぐあああああ！！》

アルの身体を固定した鉄は蒼白い稲妻をちらつかせると電撃となつてアルの身体を駆け巡る

その威力は響き渡るアルの悲鳴が物語っていた
発生していた電流が突然止みアルは息絶え絶えになりながらも電撃から解放される

《ふ、この程度で根を上げて貰つては困るな、そら！！》

《おおああああつ！！ぐううう！！》

息を荒げているアルを見ながら、アルファは期待外れのような表情をしてから再び電流を発生させる

モニターからは再びアルの悲痛な声が聞こえだすスバルやティアナは目を背け、キャロはレキにしがみつく

なのはとフェイト達は何も出来ない悔しさをただ噛み締めるしかなかった

《あつ…ぐ…ハア、ハア…》

《まだ抵抗を続けるか…それでこそ面白い！！》

《おおああああつ！！ああ、あああああつ！！》

鉄を引き剥がそうと抵抗をするアルに、アルファは愉快そうに笑いアルの身体に電撃を走らせる

度重なる電撃によってアルの腕はとうとう力を失い垂れ下がる
アルファは鼻で笑いビルの屋上に叩きつけアルの頭を踏みつける
アルは電撃のダメージで抵抗することは出来ず呻くだけだった

アルファはつまらなそうに吐き捨てるように踏みながら、腰の鞘にあるロングブレードを抜き放つと上空に飛び上がる
そしてロングブレードを空に向けると雨雲が唸りだし次々と落雷がロングブレードに落ちていく

（あの技は！アルに逃げて！！）

セレスは祈るように手を合わせるがアルは起き上がる事が出来ずにいた

このままではアルが死ぬ

（そんなのは嫌だ、誰か助けて！）

しかし誰も動けずにいた、今からでは間に合わないとわかっているから

（何か方法があるはず、アルを助ける方法があるはず！！）

しかし考えるよりも先にアルファのロングブレードはチャージを終えた

そして稲妻がほとばしるロングブレードをゆっくりと振り上げる

その光景を目にした時、セレスはアルの言葉を思い出した

【絶対に譲れないものがあるなら俺は反対しない、融合騎としてではなくセレスとして考えてくれ】

自分にとって譲れないものとは何か…姉を探す事？

(…違う…)

姉と戦うのから逃げる事？

(…違う！)

何が譲れないのかセレスは考えた、そしてその答えは直ぐに出た…

(私の譲れない事…マスターに仕える融合騎としてではなく、アルと一緒にいるパートナーとして譲れない事！それは！！)「アルは死なせない！！ウィンド、ジャンプ！！！」

ロングブレードが降り下ろされようとした時、指令室にセレスの声が響き渡る

皆が一斉にセレスに視線を向ける、そこには騎士甲冑を纏い決意を決めた表情のセレスがいた

そしてセレスの身体が緑色の光に包まれ一瞬にしていなくなった

SIDE：アルフィリオス

「さあ…受ける！！天雷狂刃！！！」

そう言つてアルファは俺に向けて蒼白い稲妻が付加された砲撃を撃ち放つ

マズイな…あんなの受ければひとたまりもない…ここで終わりか？

「…なんて甘い事を考えてる場合じゃねえっ！なんとかする、死ぬ時は全部やってからだ！！」

しびれている身体に力を入れる、ふらつきながらも立ち上がる事に出来たが砲撃は目の前に迫っていた

俺は反射的に腕を盾代わりする、凄まじい轟音が耳に入るが砲撃はいつまで経つても俺の身体を貫く事はなかった

「…っな！？これは…」

恐る恐る目を開けると目の前には巨大な風の壁があった

その風のおかげで砲撃は俺の身体に当たることはなかった

風の壁はだんだんと薄くなっていくと俺の目の前に騎士甲冑を纏ったセレスが現れる

防御魔法をしようするように右手を突き出していたセレスはゆっくりと手を下げると俺の方に顔をむける

「ごめん、遅れちゃった…大丈夫だった？アル」

「ああ、お前の防御魔法のおかげだよ…」

「アレは転移地点を固定するためのエネルギー領域だよ、まあ防御魔法も混ぜたから間違っていないかな」

申し訳なさそうに笑うセレスに俺は思わず顔が緩みながらも返事をする

セレスは指を立てて詳細を説明してくる…数日間だけだが顔も全く見てないのに、普通に会話のやりとりを出来ることに驚きながら俺はセレスの頭をゆっくりと撫でる

「何はともあれ、ありがとうな
正直危なかった…」

「っ！…アル、私…決めたよ…お姉ちゃんを止める、本当は戦いたくないけどアルが死んじゃうのは嫌だから…」

言ったよね？譲れない事があれば反対はしないって…私はアルと一緒に戦ってお姉ちゃんを止める！

それが私の譲れない戦う理由だよ！！」

俺が礼を言つとセレスは俺の身体に抱きついてくる、そして涙を堪えるように言葉を紡いでいき俺を見上げながらいい放つ

見上げるセレスの目は本気で、迷いはなかった…

それを見て俺は思わず笑みを浮かべた

（全部、俺が守る気でいたけどソイツはいらん節介だったか…こい

つはもういつちょ前に考えてんだからな」「にしてもなんで俺が戦っていることがわかったんだ？」

「アルが出撃した時にイーグルから映像通信がきたの、皆もアルの話し全部聞いてたよ」

「イーグル…お前…」

「すみません、しかしアルの事を皆にわかってもらうためです、貴方は言葉をかける事はしないですから」

「…わかった、すまん…気を使わせたか、っ!？」

セレスの決意に関心をしていたら俺は一つの疑問が浮かんだ俺が出てきた時にはセレスはいなかった、なのにどうしてセレスがここに来たのかという事だった

セレスから返ってきた答えは意外なもので俺は手にあるイーグルに恨めしそうな声をかけるとイーグルは素直に謝った

イーグルの言い分を聞いて怒る気力もなくなった時、上から雷撃が降り注いできた

セレスを抱えて俺はバックステップをとる、雷撃は俺達がいた場所に落ちてビルの屋上に穴をあけた

上を見上げるとロングブレードを俺達に向けているアルファの姿があり、その表情は怒りで満ちていた

「本当にしぶとい奴だな、貴様は!!」

>セレス、どうして私の邪魔をするの!? 貴方まで私を傷つける気なの? <

「ご期待に添えなくて悪かったな、しぶといのが売りだからな」

「お姉ちゃん、私はお姉ちゃんと倒す戦うんじゃない、お姉ちゃんを止める為に戦うの!」

向かい合う二人の魔導士と二つの融合騎…その想いは決して交わる事なく今、決戦の火蓋が切られようとしていた

「ユニゾンが出来ようが関係ない! 貴様を殺し破壊し尽くしてやる!!」

>立ちはだかるのならセレス、その機能を停止させてでも連れて帰るわ! <

「お姉ちゃんの言ってる事が過激になっている」

「確かに精神が安定してない…セレス、いけるか?」

聞こえてくるアルファとライナの言葉にセレスは怪訝そうになるとアルも同じようにうなずきセレスに問いかける

「もちろん、私もやるよ! ユニゾンをね!」

「わかってるか、セレス…行くぞ!!」

セレスはアルから離れると快く頷き精神を集中させるために目を閉じると自分の身体を包むように魔力を発生させる

アルも同じように目を閉じてセレスと同じように自身の周りに魔力を纏わせていく、すると二人の放出した魔力がだんだんと結びついていく

(なんだろ…前のユニゾンをする時と感覚が違う…)

(力の際限が無くて何処までも飛べそうな気がする…)

「ユニゾン、イン!!!」

二人は何時もと違う違和感に戸惑いつつもどこか確信があるように飛び上がり閃光となる、そして掛け声とともに閃光は一つとなると爆発的な魔力が溢れだした

「ぐううつ!?なんだ、この魔力値は?」

>アグスタの時とは比べられないくらい魔力反応!まさかあの子!
<

空中にいたアルファは巻き上がった魔力の衝撃波に耐えながら叫ぶライナは異常とも言える上昇に驚いていると一つ思いあたる事が頭に浮かぶと魔力の発生源である二人を睨み付ける

爆風の如く広がる魔力の衝撃波は空を包んでいた重たい雲を吹き飛ばす、そして払われた空からは月の光が差し込んでいた

「なんだ、あれは…あれがアイツのユニゾンなのか」

月の光を浴びるように空中に佇むアルの姿がアルファの目に写りこむ

アルの漆黒のコートは真紅に赤い髪は鮮やかなエメラルドグリーンに変わっていた

腰に収納されたイーグルレイダーはひび割れが全くなく新品のように復元されていた

そして閉じていた目を開ける、その瞳は茶色と緑のオッドアイに変化していた

「奴のユニゾンはあのようなものではない！一体何が起きている！」

フルシンクロ
> 完全同調…壁を越えたって言うの？<

「完全同調？なんだそれは」

> 私達はマスターとの心のシンクロによって強さが変化します、しかし扱いを間違えればそれは自滅の力ともなりうる

だからマイスターは私達にリミッターをつけた、それが壁です
マスターと融合騎の心が深く重なった時のみ発動できるユニゾン…
それが完全同調です<

アルファはアル達のユニゾンに驚愕の声を上げる
そしてライナはアル達の状態について説明をしていく

アルは最初は呆けていたがだんだんと意識を取り戻したのか、自分の手を開いたり閉じたりを二、三回繰り返す

「完全同調…凄い力だな、感覚の強化までされてるなんてな」

>私の場合は聴覚の強化だけだよ、音が聞こえるのは空気の振動が耳に届くから私は風を使ってその振動を導いているの…魔法の威力や身体も強化されてるみたいく

「なるほどな…力に吞まれたらたじやすまなそうだよな…
セレス頼む、俺はお前を信じて戦う」

>うん、わかった私もアルを信じて戦う
だから一緒に頑張ろう！！く

先ほどのライナの説明が聞こえていたのかアルは完全同調の凄さを噛み締めているとセレスの声が響く

いつもより澄んだ声でセレスは補足をしていくアルは自分の力の上がり具合に背筋が冷たくなり確認するようにセレスに呼びかける
アルの言葉を聞いたセレスは声を弾ませて返答をする

「さあ、ケリをつけるか…アルファー！！」

「うぐ…アルフィリオス！！」

セレスの声にアルは笑みを浮かべるとアルファに目を向けてからいい放つ

アルの感情と共に荒れる魔力の波にアルファは吞まれるのを振り払うように叫ぶと、ロングブレードを振りかぶりアルに向かってソニ

ツクムーブで迫る

「でえりあああつ!!」

「っ！イーグル!!」「ソニックムーブ！」

迫りくるアルファの一撃をアルはソニックムーブで山なりの軌道を描くように移動すると無防備なアルファの背中に回り込む

「はあああつ!!」

「ぐあつ!!？貴様!!」

魔力で強化した足でアルの背中を蹴り飛ばすしかしアルの攻撃はまだ終わりではなかった、蹴り飛ばしたアルファを追いつくように移動して今度は近くにあるビルの屋上に叩きつける様に殴り飛ばす

休む事なく浴びせられる連撃にアルファは動く事が出来ずにビルに叩きつけられる

「ぐはっ!!…うう、アルフィリオス…アルフィリオス!!」

「んな呼ばなくても聞こえてる！セレス！
決めるぞ!!」

>わかった!!…大気に散らばる、数多の風よ
我が手の内に集まれ…<

叩きつけられたアルファをロングブレードを杖がわりして立ち上がり、アルの名前を叫び散らす

アルも怒鳴るように言い返すとセレスに呼びかける

魔力制御を行っていたセレスは頷くと右手は空に掲げて詠唱を始める

セレスの詠唱とともにアルも右手を掲げると手の平の上に風が集中していき野球ボールのような大きさに玉状に形作っていく

「受ける！エアリアル、スフィア！！」

形成が完了した風の玉をアルはビルの屋上にいるアルファ目掛けて勢い良く投げ飛ばす

最初は野球ボールの大きさだった風の玉は放たれて移動するたびに大気を吸収しだんだんとその面積を広げていきアルファの元に辿りついた時には鉄球程の大きさになっていた

>マスター！回避を！！<

「この程度で回避などするか！…だあああつ！！」

迫りくる風の玉にライナは回避を提案するかまアルファはそれを聞き入れずにロングブレードに電撃を纏わせると風の玉を待ち構えるそして自分の射程範囲に入った瞬間、躊躇う事なく刃を降り下ろす、風の玉は呆気なく両断されると中に圧縮されていた空気が舞い上がり砂埃を巻き上げる

「ハハハっ！この程度か！？貴様の技も大したものではないな！」

アルファは勝ち誇った様に笑いだすが笑いを直ぐに止めて辺りを見回した

> どうしました？ マスター？ <

「風がおかしい…爆風の影響で向かい風だったのが今は追い風だと…っ！まさか、しまった！！」

周囲を確認しているアルファにライナは質問を投げ掛けると、アルファは自分の周りに吹いている風について怪訝な顔をするとかかに気付き上を見上げる、そこにはリップパーの刃を掲げたアルの姿があった

アルファが追い風と感じていたのはリップパーの刃に集まっていく風だった、エネルギーを刀身に集める砲撃魔法それはアルファが先程した事であった

「風の玉はソイツを作る為の布石だったんだな！？」

「そう、お前なら必ず切り裂くと思ったからな…お前が俺の思考パターンを読んだのと同じさ」

> 風の子らよ、我が声を聞け…我が魔力を導として刃に集え
暗く閉ざされた闇を払う力を我々に与えよ！、アル！！<

アルファは自分が嵌められた事を言うとアルは微笑を浮かべてから答える

その間にもセレスは詠唱をしていき、アルに呼びかける

「ああ、アルファ…これが俺達の切り札だ！！^{ジョーカー}シルフィ！」

> ソード！！！！<

「>ブレイカー！！！！<」

セレスの呼びかけにアルは頷くとリッパを横に振りかぶってからアルファを睨み付けていい放つ

アルとセレスの声と共にリッパが纏う風は勢いを増していく、そして魔法名とともにその刃は振り抜かれた

螺旋軌道を描いた砲撃は当たるもの全てを抉り取るように放たれ、アルファ目掛けて一直線に進んでいた

「アルフィリオス！…貴様をかなら、うぐああああっ！！」

>マスター！！、っ！<

砲撃に呑みこまれたアルファをみながらアルは一息をつく目の前にあったビルはまるで大きな獣が食べたかのように一部分だけ消失していた

「…どう思う？セレス」

>多分、転移したと思う…一瞬だけ魔力反応があったから<

「そうか…なら良いさ…さてとどうするかな」

ビルの上に降り立つアルはアルファの姿を探したがビルの屋上にアルファ姿はなかった

セレスに意見を求めると少し考えてから返答を貰う、アルは腰に手

を当ててこれからの事を考える

> そんなの六課に帰るんじゃないの？<

「あれだけの事をしたから今さらながら帰るのが…ちょっと、な」
> もう…「だったらはじめからしなきゃ良いでしょ！みんな知っているんだから早く帰ろうよ！」

「いやどんな顔していいかわからなくてな…まあもうちょっと時間を……わかった、帰るよ」

「よろしい、ほら行こ」

アルは皆に合わせる顔が無いなと苦笑して言う、セレスがユニゾンを解除してから腰に手を当ててむくれつつ怒鳴る

それでもアルはいまいち乗り気にはならずにもう少し時間を潰そうと提案を持ちかけようとするが、目を細めて殺気に近い視線を送っているセレスに降参し六課に帰る事にした

六課のヘリポートに降り立ったアルはバリアジャケットを解除するそれと同時にドアの開閉音と共に足音が聞こえてきた
凄く気まずそうにアルは振り返ると案の定はやて達だった

（どうする？ここはスタンダードでいくか？変化をつけるか？…普通に挨拶にしとくか）「た、ただいま」

向かい合って気まずい空気が辺りを包み込むアルは試行錯誤した結果、笑顔で挨拶すると言う結果に辿り着き実行する

しかし誰も一言も喋らずに微妙な空気がながれアルは笑顔のまま硬直した

「「アル、さーん!!」「」」

「んあ?ぐほおっ!?!」

顔をひくつかせているアルに大声で呼びかけながら向かってくる影が見えた、その次の瞬間アルの顔と腹に衝撃が走った

「身体は大丈夫何ですか?」

「凄く心配しましたよ!」

「です、ですゝ!!」

アルの腹に飛び付いてきたのはエリオ、キャロだった、その後リインが勢いをつけてアルの顔に激突してくる

「お前らの突撃の方が何倍もいてえよ…大丈夫だから離れろって」

三人が言葉を投げ掛ける中アルはそれどころではなかった
主に顔面にとりついたリインが痛かったらしく引き剥がしながらつぶやくと三人に落ち着かせる

「アルさん…おかえりなさい」

「レキか…おう、煮るか焼くか決まったか？」

「そんな事はしません、大体アルさんは姉さんを殺していなかったじゃないですか…そんなことは出来ません」

「いやどういう事情であれ俺はレナを死なせる原因を作った、殺したも同じだ…ちゃんと話せなくてごめんな
後、これも渡しとく」

三人を落ち着かせた時に今度はスバルとティアナ、そしてレキの三人がアルの元に歩いてくる

レキに声をかけられるとアルは少しからかうような口調で言う、レキは少しイラついた口調で返してからアルに謝ろうとする

しかしアルはレキが謝罪する前に少し沈んだ口調で話し、懷から待機状態のヴァイスファルケンを取り出してレキの手に乗せる

「アルさん！これは…」

「元々はお前に渡すように言われてたんだ、けど事情を説明するのを躊躇ってな…遅れたけどお前が受けとるべきだ」

「はい、わかりました…ありがとうございます…」

渡されたヴァイスファルケンを包むように握ってレキは答えるとアルは頭を軽く叩いてからなのは達の元に歩きだす

「よお…怒ってるか？」

「当然」

「当たり前だよ」

「無論だ…」

「怒らない訳がねえ」

苦笑を浮かべながら聞くなのは、フェイト、シグナム、ヴィータの順できつぱり言われていきアルは肩を落とす

「私達に謝るより先に行かなきゃいけない人がいるよ？」

「ほら早く行ってあげないとね」

「安心しろ、骨は拾ってやる」

「とつとと逝ってこい」

笑顔を浮かべながらなのはとフェイトはアルの背中を押してはやての所に行かせようとするなか、シグナムとヴィータの言葉にアルの背筋は冷たくなった

「……………」

「は、はやてさん？なんで黙ってるの？お願いだから反応してくれない？」

はやての前まで連れて来られたアルは恐る恐るはやてに呼びかける、

しかしはやては腕組みをしたまま黙っておりアルは乾いた笑みを浮かべるしかなかった

何か考えていたのかはやては一回頷いてから腕組みを解くと目を細めてアルを睨み付ける

「今回、私は出撃の命令は出してないんよ…だから今回アルフィリオス・ラーゼンハルグ一等陸尉の無断出撃ということやけど間違いないんか？」

「ああ、それで構わない…処罰の方は？」

「今後、アルフィリオス・ラーゼンハルグ一等陸尉には…一人で抱え込む事を禁止します」

丁寧な口調で話していくはやてにアルは肩身を狭くなるような感覚に支配される

動揺を抑えて出来る限り平静を装いはやてに聞く

はやては処罰を言うときに黙り込む、皆が固唾を飲むなかで言い渡された処罰に全員が首を傾げた

「ちょっと待て、どういう事だ？」

「言った通りや、先輩はこれからなんでも一人で抱え込む事をせずに私らに話して欲しいってゆうことや、断るなら私は先輩を許さへんからな？」

「はは…わかったよ、アルフィリオス・ラーゼンハルグ…これから一人で抱え込まないでお前らに話すよ」

呆気に取られたアルははやてに聞くとムスツとした表情のままは
ては説明をしていく

アルは他の皆もそれで良いのかと振り返ると皆も同じようなのか、
ゆっくりと頷いて返す

軽く微笑を浮かべるとアルは敬礼をしてから復唱をする、その途端
はやてはアルに抱きついてきた

「了解や…それと無事でホンマに良かった…」

「わりいな…もう大丈夫だ…だから泣くのは勘弁な？」

本当に心配をしていたらしくはやては肩を震わせながらつぶやく、
アルは優しくはやての頭を撫でてあやす

そんな時、アルは後ろから放たれる殺気に気付いた

「主はやてを泣かすとはいい度胸だ…」

「さすがにこれは見逃せないよな…」

「あの…今日は勘弁してください…俺、立ってるのが精一杯なんだ
からさ…！ねえ！？」

「「問答無用！！」」

チャキリと何かを構える音ともにカートリッジの排出音がアルの耳
に届く

アルははやてを庇う様に振り返るとそこには騎士甲冑を纏ったシグナムとヴィータの姿があり慌てて言い訳をして自分の状態を説明する

だが怒りがMAXな夜天の守護騎士にそれが通じる訳なく綺麗な満月が浮かぶ夜空の元、機動六課にいつも通りの断末魔が響き渡った

EP18：すべてを吹き飛ばす風（後書き）

どうもえのきです！いかがでしたか？

シリアス編のラストはアルらしさが出したいと考えたらやっぱり最後は断末魔かと思い、最後はギャグをいれてみました

気に入ってくれると嬉しいです

次回からはA・EPとS・EPをメインにするので本編の更新はそれが終わってからにします

A・EPとS・EPも全力でやるので是非見てください

では本編の次回予告をして終了します

セレス「あの事件から一週間、六課には笑顔が戻り皆が楽しくやっています

そんな中ではじめての休暇が訪れました、私？私はお留守番だよ、アルもレキもデートみたいだからね

別に怒ってないよ、やだな〜：とりあえず次回、魔法少女リリカルなのはStrikerS〜夜天に舞い踊る荒鷲〜EP19：リア充は爆発しろ！！byセレスにテイクオフ！
だから怒ってないってやだな〜アハハ〜」

それでは！

A・EP：少し先の未来の約束　一番近くで、もっとも遠い場所（前書き）

拓也〓どえんジョーカーさんからのリクエストです！

5万S・EP後半、ヴィータ&イーグルバージョンです

A・E・P：少し先の未来の約束　一番近くで、もっとも遠い場所

そのノックは小さかったが確かに耳に届く音だった

「誰だ？まあ出てみればわかるか」

明日の事を考えていたアルは立ち上がり扉に近寄るとゆっくりと扉を開けた

「よ、よう…今大丈夫か？」

「ヴィータ、大丈夫だぞ…何かあったか？」

扉の前にはヴィータが立っていた、風呂上がりだからかいつもねみつまみではなくストレートに下ろしていた

アルが出てきた事にヴィータは言葉をつまらせながら挨拶をする
意外な訪問にアルは首を傾げつつヴィータに聞く

「あ、えっと…急ぎじねえよ…用事があるのは確かだけど」

「なら立ち話もなんだし、あがれよ」

「う…わかった…そうする」

何故か途切れ途切れに話すヴィータにアルは不思議そうにしながら部屋に招きいれる
部屋に入ったヴィータだったがどこか落ち着きが無く挙動不審であった

「それで何か用なのか？」

「えっと、な…今日は一人でいたのか？」

「ん？まあな、あちこちで話はしたが一人だったな」

用件を問いかけると逆にヴィータに質問を受けるアル

とりあえず今日の事を思い出して答える、ヴィータは小さく「よし」と言いアルに目を向ける

「なら、明日…誰かと一緒にいるのか？」

「いや…特に予定はねえけど一緒にいたいのか？」

「なっ！？／＼／＼そんなわけねえだろ！お前が一人でいんのか聞いて笑っただけだ！／＼／＼」

…まあ、どうしても言うのなら一緒にいてやらねえ事はねえけどな…」

少し不安そうに聞いてくるヴィータに考え込むようにしながらアルは答えてから、質問を投げ掛ける

ヴィータは噛みつかんばかりの迫力でアルに怒鳴りつけるが、人差し指同士を付き合わせながら照れくさそうに呟きだす

わかりやすいごまかし方にアルは笑いをもらすのにこやかに笑いつつヴィータを見る

「ならどうしても一緒にいてほしいな」

「し、仕方ねえ奴だな／＼…なら明日の飯が済んでから浜に来いよ？」

ドタキャンしたらぶっ飛ばすからな？」

嬉しさを隠すため、わざとらしくヴィータは言つと指をアルにむけて集合場所を指定すると部屋を出るために扉に近づくが、何かを思い出しアルの方をもう一度だけ向き少し不機嫌そうに忠告して部屋を出ていく

まるで嵐が去ったかのように静まり返った部屋で、アルは一息つく
と明日のために早く寝ようと横になる

「アル、少し良いですか？」

「ん？起きたのか？イーグル」

突然、首元のイーグルが光りだし話しかけてきた、アルは閉じかけていた目を開けてから答える

「ええ…少々聞いておきたい事がありました」

「珍しいな、なんだよ言ってくれ」

「…今日一日私がいなくてどうでしたか？」

「はい？」

いつも通りの単調な口調のイーグルだけど話しの内容は違って

アルは不思議そうにしながらも頷く

どんな質問かと楽しみにしながら返すと聞かれた内容に首を傾げた、どうしてイーグルがそんな事を聞くのか？そもそも聞く利点はあるのか？

アルの頭はそう考えていたが余り黙っていると余計にわからなくなりそうに思い答える事にした

「そうだな、違和感があったな…イーグルに話しかけても反応ないし、いつも通りじゃなかったな」

「そうですか…」

「なんでまた、そんな事を？今日は休日だから休ませたつもりなんだがな」

「機械的に言えば動作しない事は休みになります、が私としては嫌でした…」

今日の事を思い出して苦笑を浮かべてアルは言うとそのけなく返答をするイーグル

アルは不満があつたんじゃないかと思い質問を投げ掛ける、すると返ってきた答えはあまりにも意外だった

「むう、言葉にしにくいのですが寂しかったというのでしょうか、そんな感じでした…」

「なんていうか意外すぎる回答だな、デバイスでも思考はあるがそ

んなに豊かになつてゐるなんてな」

「マスターたるアルが感情の変化が激しいから影響されたのかと……つまり貴方のせいです」

「ずいぶん言いぐさだな……もう少し戸惑つても良いだろ？ 弄りがいがないやつだ」

イーグルは言葉を選びながら話していくがそれはどこか不安気だった横になつていたアルは身体を起こしイーグルに話しかけるその言葉は驚いていたが表情は喜んでいた

アルに言葉をかけられたイーグルは別に嬉しくないといった感じに返答をする

喜んでいないイーグルにアルはつまらなさそうに言つてからため息をつく

「ではアルは……わかつてる事、わざわざ言わないでよ、バカバカ……」とでも言えば良かったですか？」

「すまん……」

「賢明です、というか私も若干虫酸が走りました」

弄りがいがないと言われたイーグルは少し考えてから猫なで声で返答をしてから普通の口調に戻して質問をする

長年一緒にいた分、イーグルの猫なで声を聞いたアルは鳥肌をたて

て謝る

イーグルも同じなのか声を低くして同意した

「アル…私は人間らしい感情はありますが人間ではありません」

「ああ、そうだな」

「ですが私にも願望があります…いつか自由に動ける身体を手に入れる事です、そしてアルに…」

「俺に…なんだよ？早く言ってくれ」

同意したイーグルはまた唐突に喋りはじめる、明らかにおかしいとアルは思ったが真剣に話すイーグルに何も聞けず、ただ相づちを打つしかなかった

そんなアルに気にも止めないイーグルは話を続けていく、そして夢を話した辺りで言葉を止めた

言葉の続きが気になるアルは少し焦れながら催促をする

「…アルに…思いっきりツッコミを入れたいです」

「なんでだよ!？」

イーグルの言葉を溜めに溜めいざ言われた言葉にアルは全力でツッコミを入れた

「何故ですか？喜んでくれると思ったんですが…」

「やめろよ！その超意外みたいな発言！！
俺はMじゃないからな！？」

「なら今からでも開花したら良いのでは？」

「しない！！てか自分のマスターがMになってお前は良いのかよ！！」

全力のツツコミにイーグルは驚いたように言ってから声を沈める

アルは額に手を当てて自分かけられてる疑いを晴らす為に否定を
すると、イーグルは声を弾ませて提案をしてくる

提案を却下すると逆に提案をしてきた本人に聞き返す

「まあ、アルですからね」

「俺の事、ぞんざいに扱ってないか！？」

「まあ、アルですし」

「それで全部済ますな！！」

自分の扱いが酷い事に腹を立てたアルはイーグルを枕元に置くと眠
る為に横になる

イーグルに抱いていた疑問は苛立ちからか聞く気が失せていた

「アル、眠る前に一つ良いですか？」

「今度はなんだよ…」

「私がもし人型になったら…どう、思いますか？」

「どうもしねえよ…お前が何の形になろうが俺の大事な相棒だからな」

目を閉じたアルにイーグルは再び話しかけてくる

今度は面倒臭そうに返す、しかし投げ掛けられた質問に目を開けたそしてため息をつくといつも通りの口調だがはつきりと宣言をする

「わかりました」

「おう…わかれば「アルが凄い見境が無いことがわかりました」ちよい待て！！なんでそうなる！？」

「わからないなんて天然つもりですか？ならなおさら質が悪い…」

「理不尽だ…凄い理不尽な発言だぞ！！」

イーグルは言葉を無くしていたが短くつぶやく、アルはにこやかに笑っていると予想外の言葉がイーグルから発せられた

アルは慌てて聞き返すと失望したような口調でイーグルは喋っている、デバイスの暴言にアルは肩を落として落ち込む

「まあアルを弄るのもこの辺にしておきますか…明日は何やら予定があるみたいですし」

「本当にお前は何がしたいんだよ」

「寂しかったといったでしょ？故に八つ当たりです」

「はぁ…もう疲れた…」

落ち込んでいるアルをしり目にイーグルはわざとらしく言えばアルは恨めしそうに聞く

イーグルはすっぱりと言い切る、もはやツツコミきれなくなったのかアルは欠伸をしてから寝始める

寝付きが良いのか直ぐに寝息が聞こえてきた

「アル…先ほどの言葉は嬉しかったです…私の夢、出来れば叶わな
いで欲しい気がします、だってデバイスであるから気持ちを片付け
やすい…」

そうで無いならこの気持ちを抑えきれませんか…一番近くでもつ
とも遠い場所…

この場所にいることに感謝します…アル」

寝ているアルにイーグルは優しく語りかけていくとまるで祈るよう
な言い方をしてからスリープモードに移行した

翌朝

「おはよう…さん」

「ずいぶんと眠そうだな…」

大きな欠伸をしながら挨拶をしてくるアルに目を細めながら返事をするヴィータ

「昨日はアレからいろいろあつてな…」

「そんなに大丈夫なのかよ？」

「心配すんな、ちゃあんと一緒にいてやるからよ」

「そつか…って逆だろ！？あたしがいてやるんだよ！間違えんな！
！／／／」

欠伸をしながら寝不足の理由を大雑把に話す、ヴィータは少し不安そうな口調で聞く

アルは微笑を浮かべて頭を撫でるとヴィータは安堵の息をもらすが直ぐ様、強気な口調で訂正をしてくる

ヴィータの表情の変わり具合を楽しみながらアルは浜にやってくる
と人だかりが出来てる事に気づく

「なあ、ちょっと見てかないか？

何かやってるみたいだからよ」

「えっ…まあ良いか、なら行くぞ」

人だかりを指でさしながらアルはヴィータに聞くと、少し不満な表

情をヴィータは浮かべるがため息まじり了承すると人だかりにむけて歩きだし

S I D E : ヴィータ

「さあさあ、みてらっしゃい！寄ってらっしゃい！我こそと思うものは名乗りでな――！」

あたし達がりだかりに近づくとデカイ声が耳に入る、人混みをかきわけてみるとそこには日傘の下で声を張り上げるオッサンとスイカが一つ置いてあった

「このスイカはとてつもなく堅いスイカ！しかしその中身は高級食材にも劣らない味――！もしも割れたのならスイカ丸ごとと金一封をあげちゃうよ――！」

「その話し本当だな！？なら俺様が試してやるぜ――！」

オッサンの口上を聞いていた奴らは歓声を上げた、そして筋肉質の身体を見せつけるような水着をきたオッサンが人混みをかきわけて名乗りでる

「おつ！旦那、良い身体してますな！ではこんなから割るのに使うもんを選んでくれ、あちなみに前料金があるから払ってくれるかい？」

「フン、そんなちやちなもんより俺様の剛腕で十分だ！どっせえい

「!!」

筋肉質のオッサンは前料金を払うと指を鳴らしながら瓦を割るような姿勢をとり、勢い良くスイカを殴った

誰もが割れたと思った瞬間、衝撃的な事が起きた

「うぐおおおっ！俺様の腕がつー！」

「残念…コイツは人を選ぶみたいだね
アンタは嫌われたみたいだよ」

「ちくしょーっ！！」

筋肉質のオッサンは自分の腕を押さえながら喚いた

スイカのオッサンは大げさなりアクションをして笑いながら言うと
筋肉質のオッサンは何処かに走り出した

こんときあたしは違和感を覚えた、筋肉質のオッサンが殴った時に
スイカに薄い膜が出来ていた
スイカが防御魔法を使う訳がない、かといってオッサンが何かした
わけじゃない…なら

「多分ロストロギアだな…ありや、海鳴市で相手した奴と似たようなもんだろっ」

「でもまだ確証は無いんじゃないか？」

「大丈夫だ…イーグル」

「全くデバイス使いが荒い人です… スキャニングは完了しました
間違いなくロストログアです」

あたしが言おうとした事をアルが先に言ってきた、あたしはまだ早
いと答えるとアルは首元のイーグルレイダーを軽く小突く

不満気に言葉を発してからいつの間にか行っていた解析の結果を報
告する、それを聞いたアルはまるで獲物を仕留めたかのような勝ち
誇った顔をしていた、それは事件を担当して解決の糸口が掴めた時
に見せる表情…

絶対的な自信があるその表情はアルが見せる表情の中で一番好きだ
つたりする

「さてとセコい商売は幕引きをしてもらうか」

「さて次に挑戦する奴はいるかい!？」

「はい! 挑戦します!」

スイカのオッサンは人混みに声をかけていくとアルがふざけたよう
な口調で返事をして人混みを出ていく、あたしもそれについていく
様に移動をする

「お、兄さんみたいな腕じゃ無理じゃないか? ハッハッハ」

「確かに無理だよな…ロストロギアの防御壁を木の棒で壊すなんてな？」

「何が言いたいんだい？ロストロギアってなんの事だ？」

「簡単に言えばあんたのセコい商売はもう終わりって事だよ…ロストロギアの違法所持でな」

アルを見たオッサンは笑いながら言う「アルは特に気にせずにスイカに目を向けながらいい放つ」

笑っていたオッサンの表情が止まると睨みを飛ばしながらアルに返す、アルは視線をオッサンにむけると指をさしながらきっぱりと宣言をする

アルの突然の行動に周りは騒然としていた、そんな中でオッサンは余裕を見せていた

「冗談はよしなよ？ロストロギアってのが何処にあるんだい？目の前にはスイカしかないじゃ、ないか？」

「そんなだよな？わざわざ下を切り抜いて中に仕込んだ、違うか？」

「そ、そこまで言うなら証拠を見せな！話しはそれからだ」

あくまで白を切るようにオッサンは言っていくとアルの射殺するような視線に言葉が止まる

アルは視線をオッサンにむけたまま淡々と追い詰める様に言っていく、それに対してオッサンは強引に話を変えだした

「証拠ならそんなにあるさ…
叩き割ればいい」

「ハッ！そこまでいうならやってみろ、どうせ割れやしないんだからな」

「だそうだ…行くぜ？ヴィータ」

オッサンに問い詰められたアルは特に難しくもなく返す、簡単にいい放つアルにオッサンは挑発のような言い方をしてきた、そしてアルはあたしの方を向いてしてやったりといった顔で向く

自分からじゃなくあくまで相手がけしかけさせるようなやり方をする、本当に管理局員なのかよ…お前は

だけどそれに同感をするあたしも人の事は言えないよな、あたしは苦笑をすると待機状態のアイゼンに手をかける

「ああわかったよ、アル！アイゼン！！」

「やれるもんならやってみるか…良いぜ、やってやるよイーグル！」

「「セットアップ！！」」

あたしとアルは自分の愛機を掲げるようにすると待機状態からデバイス状態に変形させた

まばゆい光のあとスイカの男の目には、バリアジャケットを纏ったアルとヴィータの姿が映った

「ほんじゃ、いつちよ行くぜ!!」

デバイスを構えたアルはスイカを思いっきり真上に蹴り飛ばす、自身が危険に迫った事によりスイカは自身より二周りほど大きな防御を張った

「リボルビング、ビークストライカー!!」

アルは重力に従って落下してくるスイカを狙い撃つようにステーキを発射する、衝撃音と共にスイカは再び真上に高々と打ち上げられるステーキが直撃したスイカの防御壁はヒビが入りだし、あと一撃を入れれば砕けそうだった

「こりゃ俺のアシストはいらんかったかもな…」

「全くだ、あたしを誰だと思ってんだよ

破壊と突破はあたしの十八番なの忘れたか、よ!!」

ヒビが入った防御壁を見てアルはわざとらしく言うと、隣にいたヴィータは肩に担いだグラーファイゼンを構えて楽しそうに言いながらグラーファイゼンを思いっきり振り抜く

豪快な音ともにスイカの防御壁が砕け散りアイゼンはそのままスイカも打ち砕く

砕かれたスイカの中から黄色の菱形の宝石が姿を見せるとアルはそれをキャッチして男に見せつける

「あいよ、確かに割ってやったぜ？」

「何もんだ！？あんたら！」

「時空管理局の魔導士だ… ロストログア違法所持で逮捕させてもらうぜ」

「あ…が…」

ロストログアを見せつけるアルに男は焦りながら問いかけるとアルはきっぱりといい放った後、バリアジャケットを解除する

「く…なめんじゃねえぞ…！」

「っ！てめえ…！」

「おうらああああっ…！」

男は急に立ち上がると懷からナイフを取り出して構えるとアル達にむけて走り出す、男の狙いはアルではなくヴィータにむけられていたバリアジャケットを解いて油断していたヴィータは不意をつかれ避ける事は出来ずに目を閉じた、だがヴィータにナイフが襲うことはなかった、恐る恐る目を開けたヴィータは驚いた

「まったく…セコい商売の上に悪あがきの仕方もセコいとはな…」

「アル！！お前……」

「怪我はねえな？ひとの大事なお嬢様になにしてやがんだ！このドサンピン！！」

男とヴィータの間にアルが割って入り突き出されたナイフを素手で握りしめていた

滴り落ちる鮮血を気にも止めずにアルは、男を睨み付けるとその腹部に思いっきり膝蹴りを打ち込み昏倒させた

SIDE：アルフィリオス

まあその後はイーグルが招集したはやて達にロストログアの封印とオッサンを任せ俺は傷の治療を始めた

オッサンの事情聴衆はフェイトとシグナムが担当していたが、休みを邪魔されて相当ご立腹の様子だった

正直触らぬなんとかだろう、ロストログア発見ともあり俺達は六課に戻る事になり休みは一日半で終了した

俺はというと皆が帰りの準備をするなか一人入り江でスイカを食べていた

サボりではない、荷物が少ないし怪我しているから作業はいいとの

事だった

「ここにいたのか、アル」

自分のしている事を正当化している時に後ろから声を掛けられた、振り返るとそこには私服に着替えたヴィータが立っていた

「おう、なんかやることなくてな」

「わりい…それはあたしのせいだ…」

「ああ、気にすんなって！
んでなんかあったか？」

「えっと…休み、終わったよな」

苦笑しながら俺はヴィータに返答をすると申し訳なさそうな声をヴィータは出した

アホか、俺は…

大げさに笑いながらヴィータに質問をするとどこか恥ずかしそうに確認してきた

「まあな…また何処かに行けたら良いんだけどな」

「…だったら、これ！…一緒にいかないか？」

「『スノーフェスタ、ペアご招待チケット』これ…昨日海の家でやってたやつだよな？」

「ああ昨日優勝したから貰ったんだ…良かったらで良いんだ…あたしと行かないか？」

軽く冗談のつもりで話したらヴィータは一枚のチケットを見せてきた内容を見てから昨日の事を思い出して確認をするとヴィータは小さく頷き、少し自信無さげに聞いてくる

もちろんイエスと答えたかったが俺は一つおかしな点を見つけた

「ヴィータ…これさ…使えるのクリスマスなんだけど」

「はあ！？んな訳…本当だ…」

俺の投げ掛けた事実にはヴィータはチケットを手にとって見直すと落胆をした

「まあ少し早いけどクリスマスの予定が決まったな…忘れんなよ？」

「アル…お前こそ忘れんなよ？」

ヴィータの手からチケットを取ってからにこやかにいう、するとヴィータも俺に釘を刺してから笑顔を浮かべた

「なあ手、本当に大丈夫か？」

「ん？なら叩いてみるか？…なんて「おらっ！！」イタァーっ！本当にするか！？」

笑っていたヴィータは俺の手に巻いている包帯を見ながら聞いてくる、俺は心配させないように手を出してからいったらヴィータは本当に叩いてきやがった

ヒドイです…

「ったく…やっぱり痩せ我慢じゃねえか…早く治せよ？…それと…これは、助けてくれた礼だ…」

俺は手を押さえながら痛がっているとヴィータはわかっていたかのように言ってくるその瞬間、自分の頬に柔らかいモノが当たる感じがした

慌てて振り返ると耳まで真っ赤にしたヴィータがそっぽを向いていた

「あくまで礼だからな？／＼／

勘違いしたらぶっ飛ばすから／＼／

はやく来いよ？…はやて達が待つてるから」

「…ワッツ？」

顔が赤いままのヴィータは早口で言っていくと走ってその場を後にした

ちよい待て…今のは？お礼？アイツが顔を赤くするくらいって…ええっ！？

未だ事情が把握出来てない俺はスイカを片手に硬直していた

おまけ

「ヴィータ、どないしたん？顔が真っ赤やで？」

「はやて…悪いあたしはフェイト達と帰るから／＼」

「？それはええけどホンマに大丈夫なん？」

「うん大丈夫…／＼」（自分のしたことが今さらになって後悔してアルと顔が合わせられないなんて言えない…）

A・EP：少し先の未来の約束　一番近くで、もっとも遠い場所（後書き）

どうもえのきです！

今日から三回の更新はヴィータメインのヴィータ祭でやりたいと思います！

楽しんでくれたら嬉しいです…まあ今回はもげろという声が多そうですがね（笑）

ちなみにこのA・EPは続編となります、クリスマスのネタとイーグル擬人化のネタにつながる予定です

見てみたいという人はリクエストしてくれたら嬉しいです

さてさて次回はいよいよ10万PV記念小説です！

楽しみしてください、では

S・E・P：不良少年とハンマー娘（前書き）

ヴィータ祭&10万PV記念小説でございます!!

楽しんで貰えたら嬉しいです

S・EP：不良少年とハンマー娘

ミッドチルダにある学園、『リリカル学園』そこでは今現代では珍しいヤンキーが我が物顔ではびこっていた

「オラオラーっ！」

「ヒヤッホーイ！最高だぜ！！」

「どけどけー！！」

学生達の声が賑わう通学路にけたたましいエンジン音が響き、三人乗りのバイクが猛スピードで駆け抜けていく、通学路を歩いていた生徒達は目を合わせないようにしながら歩いていた

「兄弟！今朝のバイクは調子が良いな！」

「おうよ！チューンは完璧だからな！
このまま校門まで最速で行くぜ！！」

「いけいけー！！」

三人はバイクを飛ばしながら校門へと移動していた、校門が見えだすと不良の一人が目をこらした

「おい、校門の前にガキが立ってんぞ」

「ああ？構つかよ、オラオラお嬢ちゃん、どかねえとひいちまうぞ
！」

「まうぞ〜!!」

校門の前にいた少女は不良を視界に入れると面倒臭そうにため息をついてからポケットに手を入れハンマーの形をしたキーホルダーを取り出す

不良達は少女に構うことなくバイクのアクセルを上げて突っ込むその瞬間、凄まじい轟音が辺りを包み何かが落ちる音が辺りに響いた

「副委員長！お怪我はありませんか？」

「グリフィスか？そんなのねえよ…だいたいこんな奴らにどう間違えれば怪我すんだよ」

腕章をつけ眼鏡をかけた学生が土煙を確認し走り寄りながら呼びかけると土煙の中から不機嫌そうな声が聞こえ土煙が晴れると校門の前に立っていた少女が肩にハンマーを担いでいた

少女の前には地面に転がる不良とひしゃげたバイクがあった、先程の轟音と落下音はこれであった

「あんな止め方すれば心配をするに決まっているでしょ、学園の秩序を守る風紀委員にしか副委員長である貴方になにかあれば「周りの不良が調子に乗る、だろ？」…そうです」

「わかってる、けどあの手のバカにはこれしか方法がねえんだよ…なんかあつたら呼べ」

眼鏡をかけ直しながらグリフィスは少女に説明をしていくと少女は

面倒そうに返してからハンマーを担ぎ直して学校へと向かった

増大する不良に対抗するため一つの組織が結成された、その名は『風紀委員』…学園の秩序を守るために日夜、不良達と戦うために選ばれた者達だ

少女の名前はヴィータ、リリカル学園の風紀副委員長

手に持たれたハンマーで不良を倒す様から『紅の鉄姫』との異名で恐れられていた

「これで朝の登校者は終わり、後は全員遅刻扱いだな？」

「はい、現在学園の生徒の九割は登校しています」

「中々、遅刻者は減らないもんだな…」

「こればかりはどうしようもないですからね残りは不良たちですか」

登校時間が過ぎてヴィータは風紀委員と共に今朝の結果報告を聞いていた

グリフィスから聞かされる報告にヴィータは頭を抱えるようにため息をつく、グリフィスも疲れた様に話す

「まあ良い…後はあたしが委員長に報告を渡しとくからお前ら戻って良いぞ」

「はいお疲れ様でした」

「「お疲れ様でした」」

「おっつゝ」

ヴィータは肩を自分で揉みながら委員に伝えたとグリフィスを始めに委員から挨拶が聞こえる中で明らかに違う声が混じっていた

ヴィータや委員が目を向けるとそこには制服をだらしなく着て髪がボッサボサの生徒が片手を上げていた

ヴィータはその生徒が目に入ると憤怒のオーラを噴出させると愛鎚『グラーファイゼン』を取り出してボッサボサ頭にむける

「なんででめえがここにいんだよ！？アルフィリオス！！」

「いやあ…おばあちゃんが重そうな荷物持ってたもんでさ」

ヴィータはグラーファイゼンを突きつけてアルフィリオスと呼ばれたボッサボサ頭に怒鳴りつけると、アルフィリオスはヘラヘラ笑いながら答える

その瞬間、ブチツと言う音が委員達の耳に聞こえた

「この前は出産直前の妊婦さん、更に前は車に引かれそうな子供…」

そして今日はばあちゃん…お前の家の近くにはそんなのしかいねえのかよ!!」

「後はリストラされたサラリーマンとか老人ホームから迷い出たじいちゃんもあ「死ねや——っ!!」おうわ!あぶねえっ!?!」

「今日という今日は許さねえ…いい加減にしやがれ!」

「やばっ!秘技、戦略的撤退!」

手をワナワナと震わせながら、ヴィータは今までアルフィリオスがしてきた言い訳を並べると我慢の限界がきたのか、思いつきり怒鳴る

対してアルフィリオスは特に焦る事なく他の理由候補をあげると彼の額、目掛けてグラーフアイゼンが降り下ろされた

間一髪で避けるがグラーフアイゼンが当たったアスファルトは砕け散り、その威力の高さを物語っていた

そしてヴィータはグラーフアイゼンを掲げると再びアルフィリオスを狙いだす、命の危険を感じて学園に向けて全力で逃走を開始した

「まちやがれ!、この万年遅刻男!!」

「待てと言われて待つわけないだろ?チビスケ」

「誰がチビスケだ!クオラッ!!」

逃走したアルフィリオスを追いかけるようにヴィータは走り出す、逃走しながらアルフィリオスは挑発するような言い方をするとヴィ

ータは更に怒りを燃やして速度を上げた

アルフィリオス、本名はアルフィリオス・ラーゼンハルグ…リリカル学園の三年一組に所属

授業は寝るかサボり、早退欠席は日常茶飯事の不良生徒しかし他の不良とは違い傷害を起こさない不思議な不良
ヴィータとの追いかっこが日課

「んでいつも通り取り逃がした訳やな？」

「ごめん…はやて」

「奴にこだわるなどは言わんがあまり熱くなるな」

「わかつてる…でもアイツはあたしが取締りたいんだよ、シグナム」

風紀委員に割り振られた部屋にてヴィータは肩を落としていた、彼女の前にいる栗色の髪で関西弁の少女、はやては微笑をしながら言う

ヴィータは更に肩を落として謝ると関西弁の少女の隣にいるピンクのポニーテールの女性、シグナムがため息まじりに話す

はやて…本名は八神はやて、風紀委員長

穏和な人柄だが風紀委員をまとめあげる器がある

ヴィータが心を許す数少ない人

シグナム：風紀副委員長

風紀委員であると同時に剣道部主将、ヴィータと共に不良達からは恐れられている

「何故そこまでアルフィリオスにこだわる？ 奴は確かに不良の類には入るが他の奴らと違って実害を出してる訳じゃない」

「なんか理由があるんか？」

「似てるから…」

「「似てる？」」

いつもは不良を取り逃がしたら悔しがった後は普通にしているヴィータがここまでこだわる事に疑問を抱いたシグナムはヴィータに問いかける

はやてもそれは知りたいらしく便乗して聞くとヴィータは一言だけ呟いた

「変な事言つてごめんな…」

考えてみりゃあんな奴にこだわんのがおかしいよな、不良はまだまだぶっ飛ばさなきゃならないんだ！

構うだけ時間の無駄無駄、あたし見回りに行ってくる！」

何かを話そうとしたヴィータであつたが一瞬だけ躊躇い話題を強引

に終わらせ廊下のほうにそそくさと出ていく

残されたはやてとシグナムは顔を見合わせた後ヴィータの出ていった扉を見る

「昔の事になるとあの調子やな…」

「アイツは昔、自分のしてきた事を今でも後悔していると思います、出来ればそつとしてあげて下さい
私も一部は知ってますがアイツのため話しはしません」

「うん、私も無理矢理は聞きとうない
だからヴィータが話してくれるまで待つつもりや」

「ありがとうございます、八神委員長」

話しをごまかしたヴィータにはやては心配するように呟くと、隣にいたシグナムがすまなそうに頭を下げてから頼みこむ

はやては優しく笑いかけながら答えるとシグナムは自分の事のように礼を言った

部屋から出たヴィータは廊下をフラフラと歩いていた
見回りという名義ではあったけどそんな気にもならず、ヴィータは深くため息をついた

「あら？ヴィータちゃん、どうしたの？元気なさそうだけど」

「シャルカ…ちよつとな…」

ふと後ろから声をかけられて振り返ると白衣を纏った女性、シャルカが立っていた

シャルカ…三年二組に所属しているシグナムのクラスメートで保健委員

その笑顔で養護教諭、顔負けの人気があるが料理が殺人クラス、あの意味人を生かすも殺すも出来る人

話し掛けられたヴィータは罰の悪そうな表情をする、それを見たシャルカはあまり深く追求しないようにし、ポンと手を叩く

「そういえば、ヴィータちゃんはやてちゃん達に報告することがあったんだっわ」

「報告？なんだよ」

「最近、怪我をしてくる生徒が増えるの
他校でも風紀委員が怪我をしたりとかあるみたいだから気をつけて欲しいの」

「そうか…はやて達に報告しといてくれないか？
あたしは見回りあるからさ」

シャルカから伝えられた情報を聞いたヴィータは難しい表情をする

とシャルマルに報告を頼むとそのまま歩いていく

（生徒が怪我か…なんとかしねえとな…）

歩きながらヴィータは思考を巡らせたがいい案が浮かぶ事はなかった

――昼休み――

「いやあ…大量、大量！」

両手に大量のパンを抱えたアルフィリオスは意気揚々と食堂にきていた

リリカル学園は食堂と購買があり財布状況が厳しい人には購買がオススメらしい

「にしても、混んでんな…慣れてない奴等はこれに戸惑うだろうな」

アルフィリオスの目に混雑する人混みが映っていた、リリカル学園の生徒数はかなりのものでいわゆるマンモス校である、なので食堂の込み具合は半端なものではない

たまに慣れていない生徒がいれば何をしていいかわからずワタワタしている事がある

「まあ絵に書いたようにオロオロしている奴はそうそう…いた」

近くにある自販機から飲み物を買いながらアルフィリオスは呟いて

いると、一人の生徒がまるで迷子のように辺りをしきりに見回して歩いていた

明らかに慣れてませんといった感じの生徒にアルフィリオスはため息をついてからその生徒に近づいた

近づいていくとその後ろ姿がはつきりしていきアルフィリオスは思わず苦笑をした

「よお、副委員長…今日は学食か？」

「アルフィリオス！？なんでお前がここに！」

「まあ待て身構えんなよ、俺は見ての通り購買でパンを買ってきたんだよ、いつも見ないけどどうした、弁当でも忘れたか？」

オロオロしていた生徒もといヴィータにアルフィリオスは気さくに話しかけると、ヴィータは一目でわかるくらいに敵意を向ける

さすがに飯時まで追いかけてこはしたくないアルフィリオスは手を動かして少し冗談まじりでヴィータに問いかける

「う…」

「おいおい…マジかよ」

「うるせえ！わすれちまったんだから仕方ないだろ！！」

アルフィリオスの問いかけにヴィータは気まずそうに視線をずらす、乾いた笑みを浮かべながらアルフィリオスはヴィータを見るとヴィ

「タは当たり散らすように言い

「逆ギレすんなよ…んじゃいるか？
俺のパン余ってるからよ」

「えっ！？良いのかよ？」

「ああ、いらないうってなら話しは別だけど」

アルフィリオスからの提案に驚くヴィータ、思わず聞き返すけどアルフィリオスの答えは変わらなかった

顎に手を当ててヴィータは悩むが空腹には勝てなかった

「わかった、お前のパン…分けてくれ」

「おう、なら屋上にでも行くか
多分人いないし」

腹の虫がなる音を聞きながらヴィータはアルフィリオスの提案を受ける

アルフィリオスはパンを持って上をさすと先導するように歩き出す

「にしても意外だな」

「何がだよ……」

屋上のベンチに座ったアルフィリオスは若干隙間を開けて座るヴィータにパンを渡すと少し楽しげに話す

いきなりの話題に目を細めながらヴィータは返答をする

「いやな、お前は俺の事を目の敵にしてるからよ
あつさり聞き入れたのが驚いてな」

「自覚あんなら、遅刻とかすんな
その、目の敵にしたのは悪かった、あれはあたしの個人的なもんだからさ」

アルフィリオスは苦笑をしながら言うと、呆れたような声を出してから気まずそうに謝るヴィータ

「個人的なもん？良かったら聞かせてくれないか？なんか気になつてな」

「……わかった、お前になら話してもいいかもな」

ヴィータの言葉を聞いて不躰ながらも問いかけるとヴィータは少し考えてからアルフィリオスに話す事にした

SIDE：ヴィータ

この学園に入るまであたしは不良だったんだ、今は更生したけど昔は自分で言うのもなんだけど、最悪な奴だった

とにかく手当たり次第に暴れまくって、理由なんてムシヤクシヤしたからとか凄く勝手だったんだ

そんなあたしには誰も近寄らず来るのは名を上げようとする不良のみだった、そんな時にあたしはその人と出会ったんだ

あたしはいつも通りのケンカをしてたんだ、そしたら不良の一人に不意打ちを食らってなしかも打ち所が悪かったのか気絶しちまったんだ

だんだん見えなくなる視界に不良達がいてあたしはここまでなんだって思った

次に気がついた時には不良達はいなくて代わりにオールバックのヘヤースタイルの赤髪がいたんだ

「お前…あいつらの仲間か？」

「いや、ただの通りすがりだ」

「はあ！？通りすがりがなんで赤の他人を助けたんだよ」

「通りすがりが人を助けちゃいけないなんていつ決まったんだ？」

意識を取り戻したあたしは目の前の赤髪を睨み付ける、それに対して赤髪はすっぱりと答えた

想定していた答えとは違うことにあたしは赤髪の言うことが信じられず反論すると、赤髪は不思議そうな声を出して聞いてきた

あまりにも不可思議な奴にあたしは何も言えずに黙っていたら、赤髪の方から話しかけてきたんだ

「お前さ、なんでそんなにつまない顔してんだ？」

「いきなりなんだよ？ケンカ売ってんのか？」

「いやいや、ケンカしてる時も気絶してる時もなんかつまんなそうにしてるからさ、どうすれば満足するかなって思ってたよ」

「んなのわかんねえよ！あたしだって何がしたいのか、何が楽しいのか、わかんねえんだよ！！」

いきなりの言い方にムカついたあたしは赤髪に怒鳴り付けると赤髪の奴は思い返すような声で言い出す

昔の事だから覚えてねえんだけど、確かにあたしは何かがつまらなくてケンカに明け暮れてたんだ

やりたい事も見つからない、そんなどうしようもない思いをケンカで発散してたんだ

赤髪に指摘されたあたしはそんなときはじめて自分の気持ちを他人にぶつけたんだ、赤髪なら答えを出してくれるそんな気がしたから

「ならさ、今度は人のために動いたらどうだ？」

「人の…ため…？」

「他人を助ける、自分に出来る範囲でな

お前は今迷路にいるみたいなものだ、だから抜け出すために少しだけ違う角度から見てみるんだよ、そしたら出口が見つかるかもしれないだろ？」

「そんなの無理に決まってる…あたしがどんだけ暴れたか知らないだろ？誰もあたしを見ない、できっこない」

赤髪のいう提案を聞いたあたしは即座に否定した、人を助けただけでなにかが変わるわけじゃない

それ以前にあたしはみんなに知られる程の悪党だ

簡単にいくわけない、そう思ってあたしは赤髪の提案を否定した

「最初からあきらめてりゃなんもできねえぞ？

確かに不良が人助けなんざおかしいし、訳がわからねえな…だけどそっから変わるかもしれないだろ？

俺が信じてやるよ、お前が変わるってよ」

「…なんで、そこまでするんだよ…」

赤髪の言葉はとても力強くあたしの不安は吹き飛ばされいく、けどまだ信じきれないあたしは赤髪に質問を投げ掛けた

「もしお前が変わる事が出来てもう一度会えたら教えてやるよ」

それだけ言つと赤髪はどこかへと走りさった、後から聞いた話しだけどあいつは『荒鷲』って異名で通る程の有名人みたいだよ

不良から誰かを守る為にケンカするっていう変わり者、でもあたしをはじめて励ましてくれた人なんだ

それからはやて達と会って今はこの学園で風紀委員をやってんだ

「それでな、お前も赤髪だからさ…その」

「初恋の人に似てる奴ががちゃらんぽらんなのが嫌で目の敵になって訳か…」

「初恋とかじゃねえ！！／＼／

荒鷲には憧れてるけどそんなじゃないからな！？」

まあちゃらんぽらんが嫌なのは確かだけどよ」

話を終えたヴィータは少し気まずそうに言っていくとアルフィリオスが代わりに答えるが、その答えに顔を真っ赤にしながらヴィータは訂正をする

「なるほどねえ…なあ副委員長？明日からさ遅刻しないって嬉しいか？」

「？なんだよ…いきなり、そりゃ面倒事が無くなるのは嬉しいけどよ」

「なら一つ条件を呑んでもらえるか？」

「条件？…変な事じゃないだろうな」

話を聞いていたアルフィリオスはヴィータの方に視線を移すといきなり質問を投げ掛けてきた

突然の事にヴィータは怪訝そうに目を細める、アルフィリオスはそれに気にする言葉が続けるとヴィータは殺意に近い視線を送る

「変な事じゃねえよ、んで条件つてのは…」

「そんな事で本当に遅刻しないで来んのかよ？信用ならないな」

「まあそれは明日になってからのお楽しみだな…ああそれと俺の事はアルで良いぞ？長いだろ、名前」

「考えとく…」

アルフィリオスから出された条件にヴィータは驚愕すると本当に大丈夫かと疑いだす

アルフィリオスは軽く笑いながら言うと自分の愛称を教えるからいつの間にか食べた昼飯の空をゴミ箱に入れる

ヴィータは呟くように答えるとアルは振り返ってから笑いかける

「いい答えを待ってるぜ、ヴィータ
んじゃな」

「勝手に名前を呼ぶんじゃねえ！！……まったく変な奴…」

ヴィータにそれだけ言つとアルは屋上を後にする
アルの背中に向けてヴィータは怒鳴りつけるとポソッと呟くがその
表情はどこか嬉しそうであつた

――放課後――

風紀委員の仕事を終えたヴィータは自宅に向けて一人で歩いてい

「明日か…あたしははやて達以外にしたことないからな
呼びに行けば良いのか？てかあたし、アイツのクラス知らないし」

昼間に出されたアルの条件を考えていた
時に恥ずかしそうに時に怒りながら歩くヴィータは後ろから近寄る
影に気付いていなかった

「まあ明日、校門で待ち伏せてから聞いてみるか…っ!？」

確実な方法を決めた時に背後に人の気配を感じたヴィータは振り返
る、しかしその時には既に遅く夜道に鈍い音が響き、ドサツと倒れ
る音が辺りに伝わった

――翌朝――

「ふわぁ…ねみい…」

学園の生徒が歩く通学路でだらしない制服姿の生徒、アルが欠伸をした

彼は約束通り、遅刻をせずに学園に向かって歩いてきた
緩やかな坂道になっている通学路を上りきると校門に人だかりが出来ていた

「なんだ？…っ！！」

人だかりをかきわけた先には、落書きされた壁があった

そして落書きは赤いペンキでこう書かれていた

《紅の鉄姫は預かった返してほしければ俺達を探してみな！早くしないとリンチしちまうぞ！》

誘拐文の前には風紀委員が勢ぞろいしていた

「副委員長が誘拐されるなんて…」

「探しましょう！」

「だが探すと言っても我々では手は足りんぞ」

「副委員長は敵を作る人だからな、どこの奴等に狙われてもおかし
くはない」

風紀委員がそれぞれに意見を言うなか、一人の少女がそれを落ちつける

「皆、聞いて！風紀委員は2班にわけて行動するんや！

1班はシグナム副委員長と共に市内を搜索、1班はグリフィス君を中心に学園内を搜索、私は先生に報告してから他の学校の風紀委員にも応援を要請する

落ち着いて行動するように、以上！」

「了解！！！！」

（ヴィータ、待ってな
必ず助けるから！！）

はやてから出された指示に全員は声を揃えて応えると即座に行動を開始した

それを見ていたアルは面倒そうに欠伸をしてから頭を軽くかき

「さてと、行きますか」

一息ついてから学園では無く街の方に足を向けて歩き出した

「…ん、ここは？」

身体に走る痛みからヴィータは目を覚ました、そこは工場らしく下は砂利で上に見える天井には所々、穴があいていた
身体を起こそうとしてヴィータは自分がロープで縛られている事に気がつく

「なんだよ！？これ…っ！っ…とれねえ」

「目が覚めたかい？おチビちゃん」

「っ！てめえらは昨日の！」

ヴィータがロープをほどこうしていると妙に苛立ちを覚えるような声が耳に入る

それは昨日ヴィータが捕まえた三人組の一人であつた、リーゼント頭の男はヴィータの前までいくと髪の毛を思いっきり掴む

突然の行動にヴィータは顔を歪めながらも不良を睨み付ける

「おゝ、こわ…こいつ大人しくなるところか更に凶暴になってんじやないか？」

「そりやそうっスよ、なんせ元不良なんスからね」

「てめえ、なんでそれを！？」

睨み付けるヴィータを見て髪を掴んでる不良はわざとらしく言つと、取り巻きの一人がケタケタ笑いながら話す

話してもいないことを知られていた事にヴィータは驚愕しながら怒鳴る

「俺らの情報網を甘く見ない方が良いぜ？その気なりや簡単なのよ」

「つく…」

「にしても天下の風紀委員も落ちぶれたな、元不良を自分の懐に入れてんだからな
しかもやってる事は不良と変わらないんだからな」

「あんだとっ!？」

髪を掴んでいた不良は乱暴に離すとてを広げて自慢するように言い出す

そしてヴィータを見ながらやれやれと言った感じに首を振りながら言う、ヴィータはそれに対して感情のままに怒鳴る

「そうだろ? どんだけ秩序とか言ってもお前のしてることはケンカなんだよ

人のためだとか言っても結局お前は俺ら不良と何一つ変わっちゃいないんだよ!」

「あたしが変わってない…」

不良の一人に言われた時にヴィータはある事を思った、荒鷲は自分が変わればそんな時に助けた理由を教えると、しかしヴィータはあれから一度も荒鷲に会っていない

つまり自分は何一つ変わっていないから荒鷲と会えないのでは無いか? 違うと思いたいのに先ほどの不良の言葉が頭から離れずにいた

「なんだあ? 放心かよ?」

「兄弟、早いとここいつリンチしようぜ？」

「しようぜ！しようぜ！」

「ハッ、血の気の多い奴等だぜ！
なら派手にやるとすつか！！」

シヨックにより黙ってしまったヴィータを見てつまらなさそうに不良は言うとり巻きの一人が近くにあった鉄パイプを手にして呼びかける

口では迷惑そうに言う不良だが同じ様に鉄パイプを持つと素振りをしてからヴィータに向けてゆっくりと歩き出す

すると微かにだがエンジン音が聞こえた、不良達は辺りを見回すと工場の入り口からこちらに向けて走る一台のバイクが見えた

「なんだ？何もんだお前は！！そのメットをとりやがれ！」

「ただの通りすがりだよ……」

バイクから降りたライダーは不良達と向き合う

リーゼント頭の不良がライダーに指をさして言うライダーはかぶっていたヘルメットを取る

ライダーの素顔が露になると不良達は怯えるかのような声を上げる、その声を聞いたヴィータは顔を上げる

そこにはいつもリリカル学園の制服をだらしなく着ているアルだった

「お前…なんで…」

「お前を探しに来たに決まってるだろ？ ヴィータ、さてとそいつを離してもらえるか？」

「いくらアンタの頼みでもそいつは出来ないな…風紀委員だぜ？ こいつは」

「そうっすよ！許されるわけないですぜ！！」

戸惑っているヴィータに対してアルはいつも通りの口調で言うと不良達に話しかける、それに対して不良達は若干怯えながらもアルに返答をする

「そいつは俺のダチ公だ…それで納得しとけ」

「そんなんで納得出来るかよ！！」

アルの言葉に納得のいかない不良の一人が鉄パイプを振り上げて飛びかかる、アルはため息をついてから身体の軸をずらして鉄パイプを避けると勢いのついた不良の顔面にむけて拳を放つ

鈍い音と共に不良は地面に倒れたアルはそれを気にもせずに跨ぐとヴィータにむけて歩き出す

リーゼント頭の不良とその取り巻きの横を素通りしてヴィータの元まで行くとロープをほどき始める

「お前…どうして」

「約束したろ？昼飯、一緒に食べるって」

「ばっ、バカか！？そんなのほっとけばいいだろ、それだけでお前はケンカすんのかよ！！」

「ああ、ダチ公の為だからな
ほれ帰んぞ、皆心配してたからよ」

ロープをほどいているアルに何故ここに来たか問いかけようとする
とアルは当然のように答える

それは昨日の昼、アルはヴィータに明日も昼飯を食べるという条件を出していた

それを果たそうとしている事に驚いたヴィータは自棄になったような口調でアルに問いかける

アルは何も悩む事なく答えるとヴィータはうつむきだした

「あたし…風紀委員になれば変わるかもって考えた、でもあたしは全然変わってなくて…もうアイツラに合わす顔がねえよ」

「そいつはちげえな…何も変わってないならお前はまだ不良でいて誰の事も考えないだろ？今は風紀委員を思ってる、変わってるさちやんとな」

「…ア、ル…あたし、あたし…」

「いつまでもイチャつくんじゃないやねえ！！いくら人質を解放しよう」と

手負いのガキと丸腰のアンタじゃ勝目はねえ大人しくボコられるや
！！」

座りこんだヴィータは先ほどの事を説明するとアルは優しくヴィータの頭を撫でると励ますように言ってから笑いかける

その言葉でヴィータは何故か荒鷲の事を思い出す、しかしそれを引き裂くように残ったリーゼント頭の不良と取り巻きが二人に向けて殴りかかってくる

「ほら、立てるか？さっさと帰るぞ」

「…ああ！わかった！！」

不良を目に入れながらアルが呼びかけるとヴィータは目元を拭うと力強く返事をする

そして次の瞬間、工場に鈍い音と金属音が鳴り金属が落ちる音が響いた、それはアルが蹴りで鉄パイプを跳ね上げた音とヴィータのグラーファイゼンが鉄パイプを殴り飛ばした音だった

「ちっ、ちくしょう！？荒鷲の強さは何一つ変わってねえじゃないか！！」

「荒鷲っ！？アルが？」

「そのあだ名好きじゃないんだけどな、とりあえず寝とけ！！」

鉄パイプを弾かれたリーゼント頭は泣き言を言いながら逃げようとするが、アルがそれを許さず取り巻きもろとも壁に叩きつけられて

気絶をした

「なあアル…お前が荒鷺なのか？」

不良達をロープで縛り上げた時にヴィータはアルに質問をした

背を向けていたアルであつたが仕方ないといった感じにため息をつくと立ち上がり、ヴィータの方を向く

「ああ、昔はそう呼ばれた…今はケンカなんざしなくなつたからそう言われてるか不思議だけどな」

「ならなんであん時に言わなかつたんだよ！あたしはずっとお前が助けてくれた理由を知りたかつたんだ」

自分の事を認めたアルにヴィータは問い詰めるとアルは苦笑をした

「理由か…簡単だ、お前を助けたかつたからさ、お前は俺と似てたからな」

「あたしがお前と似てる？」

「そう、俺も最初から人助けしたわけじゃない、最初はお前と一緒にただ暴れてたんだ

それを助けて貰つたんだ、ただ俺の場合はそいつは死んじまつたけどな…それからは人を助ける為にケンカしてたんだ、そんな時に」

「あたしに会ったのか？」

ヴィータに問いかけられたアルは理由を説明しはじめた、そしてヴィータの言葉にゆつくりと頷いた

「理由を説明しなかったのはその方が頑張れるかなって思ったんだが失敗だったみたいだな、余計な不安を与えてたみたいだ」

「いや、理由はわかった…アル…いや荒鷲、あたしに声を掛けてくれてありがとうな…」

あたし、変わったよな？」

「ああ…前とはえらい違いだな…」

「そうか…さあ行くかはやて達も心配してるし、約束守らないとな、ほら行くぞ！」

アルは先ほどのヴィータを思い出すと申し訳なさそうに言うとヴィータは首を振ってからアルに質問をした

アルはゆつくりと頷くとヴィータは一言呟いてから工場入り口に身体を向けて言うと言歩き出す、そしてヴィータについていく様にアルも歩き出した、学園に戻る為に…

おまけ：とある風紀委員日誌

副委員長誘拐事件は一人の生徒の活躍により終了した

この事件から副委員長は少しだけ角が取れたような態度をするようになり、昼になればいつも屋上に上がっているらしい

誰と食事をしているかはわからないがスキップのような軽い足取りからとても親しい方らしい

覗きにいった生徒がボコボコにされて保健室送りにされたのは言うまでもない事だ…

S・EP：不良少年とハンマー娘（後書き）

どうもえのきです！

ようやく更新が完了しました、一話完結はまとめるのに苦労しました
支離滅裂と感じた方がいれば申し訳ないと思います

今回は恋愛では無く友情をメインしたのですがイカンどうも恋愛要素
素が出てしまいます

少しでも良い話をします、つい最近お気に入りが入りが90人を越え
てる事に気づきました

最近は減る一方ですけど…（泣）

とりあえずもしも100人越えるとするなら何かやった方がいいか
なと考えてます

それでもし100人越えるなら人気投票やってみたいと思います

まあまだ越えてない話しをしても仕方ないと言われますが、とりあ
えず企画しているなと軽く覚えて置いてください

その前に次回の更新を頑張らないとな…

それではまた

EP・V…うねうねうね…どこのね？（前書き）

注意事項

セレス「この小説は皆、キャラ崩壊しています

それと作者はノリで書いているのであまり深く考えずに楽しんで下さい…後、私の出番が無いです、作者滅殺！」

では楽しんで下さい

EP・V: じゃねーじゃん、どこのねー？

SIDE: アルフィリオス

一体どうしてこうなった？

「先輩！どこや！？何処に行ったんや！！」

何処で間違えたんだ？

「テストロッサ、邪魔をするなら斬る！！」

「シグナム、それは此方のセリフだよ！邪魔するなら倒すから！！」

何故にこうなる！全ては一人いや一匹の猫の仕業というかなんというかとりあえず、まあ：俺が死にそうなのは間違いないな

「にゃ？」

本当にどうしてこうなったんだろう

俺は人の胸の中で吞気そうな顔をしている奴を見ながらため息をついた

それは約二時間くらい前まで遡る

俺とヴィータは本局の要請でとある次元世界に来ていた、内容はロストロギアの移送らしい

特に危険度は高くはないがロストロギアである以上、用心したらしい
ちなみに何故、機動六課に依頼がきたかと言うとまあ単純に人手が足りないからだそうだ

「マジで面倒臭いな…」

「文句を言つなよ、仕方ないだろ？クロノ提督からの頼みなんだからな」

「それを聞いて余計にやる気無くした…」

「おい… ったく真面目やれよ、休みが邪魔されたからってよ」

俺の隣にはバリアジャケットを纏ったヴィータがいてその手にはキースに入ったロストロギアが握られていた

駄々をこねる俺にヴィータはため息まじりに言ってくる

そう本来なら非番ではあったが皆が忙しいため俺とヴィータは駆り出される事になった
迷惑な話だよ、全く…

「まあさつさと終わらせるに限るよな…？どした、ヴィータ」

「なんか変な音しなかった？……」

「ん？別にしな…ちよつ、お前何で開けようとしてんだよ！！」
話をしているとヴィータが突然立ち止まっており何かあったかと聞いたら、ヴィータは辺りを見回しながら質問をしてきた

試しに俺も耳をすましてみるが何かが聞こえる事はなく、不思議そうに振り返るとヴィータはロストログアのケースを開けようとしていた

慌てて止めようとするがケースはカチャリと軽い音を立てて開いた、その瞬間眩い程の光が辺りを包みこんだ

光が晴れるとヴィータはその場に倒れていた、俺は慌てて駆け寄り抱き上げる

「ヴィータ！しっかりしろ、おい！返事をしてくれ！！」

「……ん…」

俺の呼び掛けに応える様にヴィータは目を開けると辺りを仕切りに見回してから俺に目を向けた

ホッとしたのも束の間ヴィータは俺を見ながら予想外の言葉を投げ掛けた

「にゃー」

「はい？」

「にー、にー」

「はいいいっ!？」

普段のキリツとした表情とは違ってかわり見た目と何らかわりない目つきをして、ヴィータは俺に猫のように鳴いてきた

こんなの聞いたなら叫ぶしかないでしょ？

「んで、原因はわかったんか？先輩」

機動六課に戻ってきた俺とヴィータはサンルームに来ていたちなみにここにはなのはやフェイトの隊長陣とフォードメンバーがいた

目の前にいるはやては俺の膝の上で寝ているヴィータを注視しながら聞いてきた

まあ目がいつてしまうのは仕方ない、普段は可愛げすらないヴィータが本当に安らかな寝顔をして寝ているのだから

なのはやフェイトもそんなヴィータに骨抜きにされたのか子猫を見るような表情をしていた

「ああ…一応な、問題のロストログアには猫の思念が入ってたそう
だ」

「猫の思念？」

「人や動物、思考を持つものの思いを記憶するらしいとよマリーが言ってたから間違いないだろ

クリスタル状の形をしていた思念が何故かヴィータに入り込んで、この猫ヴィータになってるわけだ」

「それで戻る方法は？」

「さあ？」

俺はとりあえずヴィータに起こっていることとロストロギアについて説明をしていく

シグナムが俺に問いかけてくる、しかしながら俺は自分でいうのもなんだが淡白な言い方だと思う

レキは目を細めながら俺を睨み付けてくる

「わからないってどういいうつもりなんですか？」

「睨むな、解析してたマリーが突然止めたんだよ、なんでも血が足りないとかで」

「血ですか？」

「解析に血っていりましたっけ？」

睨み付けるレキを納得させる為に俺は起こった事を説明すると、キヤロとエリオが不思議そうに首を傾げていた

それは俺も聞きたい事だよ、本当に…だけど事実だから仕方ない

「ねえ、アルなんでヴィータさんはアルにベツタリな訳？」

「そうだよ、うらやま…コホン、普通ならはやての所に行くはずだよね？」

「そりや多分、俺を最初に見たからだな
今のヴィータは生まれて間もない子猫みたいなもんだ、はじめて見た奴を親だと思う…すりこみだな、完全に」

寝ている猫ヴィータを見ていたセレスが俺に問いかけてきた

それに便乗するようにフェイトも聞いてくるが今、本音が出てなかったか？後息が荒いぞフェイト…

俺はマリーから聞かされた情報を皆に教えるが納得の出来ない奴がいた

「いくらすりこみやからと言ってもくつつき過ぎや！私もヴィータをナデナデしたいねん！」

「はやてちゃん！私だってヴィータちゃんを撫でたいよ！！」

「それなら私はヴィータを抱きしめたい！」

「お前ら、一辺頭冷やしてこいや…」

真面目な表情のままはやては俺に言ってくる、それに便乗してなのは、フェイトとヴィータを渡すように申し出てる

三隊長が揃いも揃って何を言うのやらしかも目が本気とかいてマジになっていた

しかし波乱はそれだけで済むことはなかった、それはある奴の一言で始まった

「あの、ヴィータさんに何か足りなくないませんか？」

「…スバル、足りないのはお前の頭と空気を読む事だ」

「アルさん、ひどい!？」

ひどくはない、当然の判断だ…

スバルの発言から興奮していた、はやて達はヴィータの身体を凝視しはじめる

「あ、猫なのに耳と尻尾がない」

「ティアナ！余計な事を言うんじゃない!!」

「……それだっ!!!!」

「あゝあ…面倒になってきた…」

スバルの隣にいたティアナが手を叩いて気がつく、そうヴィータは身なりはバリアジャケットのままで猫耳や尻尾は生えていないのであった

正直どうでも良いがな

「話しは聞かせて貰いました！その問題、このシャリオ・フィニー
ノが解決しますー！」

「無駄にテンション高いやつキターーっ！！しかも呼んでねえのに」

「愚問ですよ！アルさん、こんな楽しい事混ざらなきゃ損でしょ！
？」

「誰かヴィータを治すって言うやつはいないのかよ…」

自分の眼鏡を光らせてやってきたのは六課の通信士ことシャーリー、
暇なのか？六課は…

そして俺の眩きには誰も答える事はなかった、この中で冷静を保つ
てるチビーズを見ると一斉に目を反らされたチクショウ…

「ヴィータさんの髪色に似合いそうな猫耳を作ってきましたー！」

「……おおー！！」「……」

「誰がつけんの？…なんで一斉にこっち見んの！？怖いんだけど！
！…仕方ないな…」

シャーリーは何処からかヴィータの髪の毛と同じ色の猫耳を取り出
す、そして歓喜の声を上げるはやて達…

俺は寝ているヴィータを見るとふと疑問に思った事を言うと全員が
俺の方を向くとシャーリーが猫耳を差し出してきた…正直に言おう、
もう帰りたい

だけど下手に逆らえば俺は砲撃の波に吞まれるのだろうな…

背筋が冷たくなるのを感じながら俺は猫耳をヴィータにつけようとするが予想外の出来事がおきた

「ん…にゃ…?」

「あ、起きちまったか…」

周りが騒がしくしたせいか寝ていたヴィータが起きてしまった、まだ猫状態が治っておらず不思議そうになきながら首を傾げていた

「ヴィータ、ちょっと良いか?…大丈夫だからな」

「んにー…」

作業を続行するようという視線を浴びながら俺はヴィータの帽子を取る

さすがにトレードマークはわかるらしく凄く嫌そうな感じに鳴くが2、3回頭を撫でると機嫌を治してくれた

「ほい、さらにほい…よし良いぞ、ヴィータ」

「にゃーっ」

「ぶはあうっ…!!」

手際良くヴィータに猫耳を装着させてから帽子を被せるとヴィータは嬉しそうに笑った、どうやら人間に憑依してるからか、猫でも表

情が変化が出来るみたいだ

そんな事を考えていると妙な奇声が聞こえ前を見るとフェイトが床に膝をついて鼻を押さえていた、しかし押さえた手からは真っ赤な血が滴り落ちていた

「おい！大丈夫か！？なんでそんなに鼻血出してんの！！？」

「先輩はわかってへんやな、今のにゃーにどれだけの破壊力があるか、私も気を確かにせんと鼻血がでそうや…ハア、ハア」

「お前は鼻血より息が荒いよ…」

鼻血を出すフェイトとに声をかけると隣にいたはやては息を荒くしながら説明をしてくる、本当なんで今日はこんなにもおかしいのだろうか…

ため息をつきながら俺はヴィータを見ると呑気そう欠伸をしていた、確かにこれは和むけどな

「アルさん！次は尻尾ですよ、さあ早く！！」

「お前はフェイトを失血死させる気か？このままだとまた吹くぞ」

「大丈夫だよ！私頑張るからだから私に気にせずに尻尾をつけて、アル！！」

「言ってる内容がアレだから全然、緊張感がねえな…」

シャーリーは俺にズズイと尻尾を見せてつける様に頼み出す
しかしながら先ほどの鼻血を見てこれ以上何かつけると次は誰が吹
くかわからん

サンルームが血まみれにならないか？

そんな俺の不安を他所にフェイトは鼻をおさえながら尻尾の装着を
促す

ため息をついてから俺はヴィータの腰に尻尾を近づける

「うっ…うっ…」

「大丈夫だから…んな顔をすんな」

やはり得体の知れないものにヴィータは怖がりだす、俺が呼びかけ
ると我慢をするように目を閉じる

少し可哀想な気もするがとりあえず早く安心させる為にヴィータの
腰に尻尾を取り付ける、尻尾はバリアジャケットとつながるため特
に痛くは無いみたいだ

しかしながらなんでこの尻尾は動いているのだろう…

俺の視線は製作者のシャーリーに向けられた、シャーリーは親指を
立てて笑みを浮かべていた

「グッジョブです！ちなみにその尻尾はヴィータさんの感情に合わ
せて動くようにしています、さながら本物の尻尾のようになります
！！」

「凄いと思うが素直に喜べないのはなんでだろうな」

恐らくそれは尻尾がついた辺りから顔に手を当ててる人間が増えたからだろうな

フェイトはもちろんスバルやティアナもノックダウンらしく肩を震わせていた

「さすがや、ここまで可愛くなるなんてヴィータ、恐ろしい娘！」

「この可愛さは犯罪級ですね…」

「それはあたしも同感よ…ハア、お持ち帰りしたい」

「っ！…にーっ！」

尻尾がついて完全に猫になったヴィータを見ながらはやては真剣な表情で話す

スバル、ティアナはそれに同意しながら息を荒くしていた、つつかティアナ…持ち帰るなよ

殺気じみた視線を感じとったヴィータは俺に隠れるようにすりよる、しかしそれが悪かった…

「アル！いつまでヴィータの側にいるの！？」

「そうだよ、ヴィータちゃんは皆のヴィータちゃんなの…！」

「我欲に走りかけてるお前らに言う資格はないだろ！」

「ならばこのヴィータを見て何も思わないのか！？お前は」

フェイトとなのはがヴィータを離すように要求をしてくる

しかしながら今こいつらにヴィータを明け渡せばもしかしたらヴィータは無事ではすまないだろう

しかし追撃をかけるようにシグナムが俺に問いかけてくる

「まあ確かに和みはするがな」

「和む所かヴィータがいれば戦争が集結するくらいの可愛さや！！」

「どんだけ！！」

「そんだけや！！」

つつか改めて思うがこいつらには話しが通じない気がする、だってまず会話が噛み合わないのだから、キャッチボールでスライダーやフォーク使うみたいなものだ…正直、俺も何を言ってるかわからなくなってきた

ちなみにチビーズは気がつくと思わなくなっただけで、喋らないと思っただけで寝たかな？

そんな事を知らない奴等は更にヒートアップしていく

「猫耳に尻尾、なら最後は首輪でもつけませんか？」

「おい、それ完全にペットだろうが」

「スバル…それ採用!!」

「待てや!夜天の主!!」

「グイータは人!ペットじゃないぞ!!」

スバルのアホな発言にその場の空気が静まりかえる、さすがに目が覚めたかと思つた

しかし次のはやての言葉に俺は全力でツツコミをいれた

「そんなんわかつとるで?先輩

せやけど、こんな可愛い子猫がおつたら首輪をつけるしかないやろ!!」

「知らんわ!!」

「八神部隊長!鈴つき首輪の準備完了です!!」

「アホか?アホなんだよな!?お前ら!!」

優しくするにはやては微笑みを浮かべると真剣な表情でとんでもないものをいい放ってきた

しかもシャーリーの奴はきつちり首輪を用意しやがった、俺は頭を抱えながら叫ぶが見事に無視をしやがった…てめえら…

「ほならさつそくこの首輪に装着せな、いかんとな
ムフフ、私がご主人様や」

「ちょっと待って、グイータのご主人様は私がなりたい

だって私はアルフの世話をしたことがあるから！」

「それなら私はヴィータちゃんの上司だよ！私の方が適任なの！！」

「二人共、ヴィータは私の家族やその方程式は覆る事はあらへんで！！」

はやてが薄気味悪い笑いをしながら首輪を手にした時に鼻血を止めたフェイトが割り込んできた

更になのはも便乗してくる、はやては一步も引かずに反論をする

なんか雲行きが怪しくなってきたか？一触即発みたいな感じになってきた…

「ならこうしよか…最初に先輩からヴィータを取り返した人が首輪をつけ、更にはご主人様って事で…」

「うん、それなら公平だね」

「問題ないよ、それじゃあ始めようか」

「あれ…ちょい待て…お前らマジか!？」

真剣な表情のはやてが部屋の中にいる奴等に首輪をつける条件を述べる

だが明らかに俺は関係ない気がする…しかし気にせずに皆が頷く、そして一斉にこちらを向いた

俺が言葉を発した時には既に遅く金色の魔力刃が俺目掛けて降り下るされる

「危ねえっ！？フェイト、落ち着け！」

「私は落ち着いてるよ？アル…ヴィータを渡してくれないと…飛ぶよ？」

「何が！？ってうおっ！！なのは！はやて！！」

間一髪でヴィータを抱えて回避をするとバリジャケットを纏ったフェイトの舌打ちが聞こえた

なんとか説得しようとするがフェイトは聞く耳を持たずに物騒な発言をしてくる

発言と同時に顔にかする様に魔力弾が通り過ぎた、横を見ると完全戦闘状態のなのははやてがいた

「アルさん、私に味方してくれるよね」

「先輩、敵対する言うなら地獄を味わう事になるで？」

「ハハッ…お断りだっつーの！！イーグル！！」

「ようやく出番ですか、ソニックムーブ！」

言葉は丁寧だが明らかに殺意があるのはと殺意を隠す気すらないはやてに、俺は乾いた笑みを浮かべるとソニックムーブで廊下に飛び出した

「逃がさへんで!!」

後ろの方で聞こえたはやての怒号に俺は背筋が震えた

とりあえず廊下に出た俺は空き部屋に隠れる事にした

ともかく奴等の頭が冷えないと何も出来ない他に方法があるとするば、ヴィータの治療だがこの状況では不可能に近かった

なら最初に考える事は対応策だ…恐らくあのメンバーで最初に仕掛けてくるのは…

「にゃー?」

「ヴィータ、鳴くのは勘弁だ…っ!来る!!」

俺が考え込んでいるとヴィータはてしてしと頬を叩いてくる、苦笑を浮かべながら頭を撫でると、気配を感じて前にヴィータを抱えて駆け出すと先ほどまで俺の頭があった辺りを打ち砕いてスバルが飛び込んでくる…てか

「六課を破壊するな!スバル!!」

「八神部隊長よりヴィータさんを手に入れるなら多少の損害は気にしないと出てます!」

「ああそうかよ、ならこっちも遠慮はしねえ!ステーキ!!」

「うえっ！？わあああつ！！」

壁を破壊してきたスバルに怒鳴り付けるとスバルは許可は取つてあると答えた

俺はため息をついてから思考を戦闘モードに切り替え、瞬時にイーグルを起動させるとスバルの腹部にステーキを押し付けて勢い良くステーキを撃ち放つ

油断をしていたスバルはステーキの直撃をくらい自分の開けた穴を通って壁に叩きつけられた

「目標を目の前にして話し込む奴がいるか、行くぞヴィータ！」

「にゃ！」

気絶してるスバルに警告をすると隣にいたヴィータに呼びかけると、ヴィータは言葉がわかってるのか元気良く返事をした

ヴィータを脇に抱えて玄関から出た俺は訓練スペースに向けて歩を進めた

いくら損害を気にしないとしても出来るだけ控えたいとは思ったからだ、それと次に来る奴等を予想すると屋内より屋外の方が安全だと思っただけだからだ

「スバルに続いて来るのは恐らく…」

「にゃ！にゃ！」

「っ！上か！！」

「やっぱりお前か！シグナム！！」

訓練スペースに向けて走っているとヴィータが上を見上げて何かを示す様に鳴き出す

俺は示された方を向くと夜空の月をバックにして一人の剣士がいた、まあ六課に剣を使うのは一人しかないけどこうも予測が的中すると嫌になる

シグナムは俺の言葉と同時に斬りかかってくる、リッパを展開しトンファアの様にイーグルを持ち直した俺はシグナムの一撃を受け止める

激しい金属音と衝撃が辺りに響く、俺の足はシグナムの一撃により少しだけ地面にめり込む

「気づいていたか！アル！！」

「出来れば当たりたくはなかったがな！！」

自分の一撃を受け止めた上に来ることまでわかつといた事にシグナムは嬉しそうに言うと、俺は振り払う様にイーグルを振るい距離を取る

身を翻して着地したシグナムはレヴァンティンを鞘に入れて構える

（下手に突っ込めば斬られる、か…）

「アル…ヴィータを渡せ出なければ斬る！」

「いつの間にか、俺を倒す事になってないか？」

お前はそっちの方が目的だろ！俺とやり合う事は今までなかったからな」

「フ…そうだな…」

俺が様子を伺っているとシグナムが俺に警告をしてくる、しかしその表情は戦いを避ける顔では無くむしろ断って戦えと言っているようにも見えた

だからバトルマニアの相手は嫌なんだ…それに

「渡すくらいなら始めから逃げたりするかよ！！」

「それで良い…なら行くぞ！！」

要求を呑むなら武器なんて構えるかよ

シグナムは俺の答えに満足したのか、レヴァンティンの柄を握りしめて魔力を高める

まともにやり合えば確実にとられる…なら受けると見せかけてかわすしかない

「ダアアアアっ！！」

「ハアアアッ！！」

俺とシグナムは同時に地面を蹴ると相手に向けて突撃した

シグナムの居合いの速度は早いならそれより早く動くしかない、言
っていて不可能に近いがな……だけど、やる！！

「貰ったぞ！アル！！」

「んなくそ！！」

しかし予想より早く抜かれた刃は俺の首、目掛けて迫ってくる

やられた！そう思ったが刃は当たらず代わりに金属音が聞こえた

シグナムをすり抜けて振り返るとそこにはシグナムの刃を黒い刃で
押さえるフェイトの姿があった

「テストロッサ！貴様！！」

「間に合ったみたいだね、シグナムにアルはやらせない……アルは私
が討つ！」

助かった事を喜ぶべきか、敵が増えた事を悲しむべきか正直迷うけ
ど今はありがたかった

「テストロッサ！邪魔をするなら斬る！！」

「それはこっちのセリフだよ！邪魔するなら倒す！！」

シグナムとフェイトがぶつかりあいだした時に俺はコソツと抜けて訓練スペースに向けて走り出す

「あの二人が潰しあいをするなら助かるな…次は、はやてかなのはだな」

「にゃ…にゃ!?」

まだ来る襲撃に俺とヴィータはため息をつく、ヴィータが辺りを見回しだす

本当勘弁して欲しい…

がそれも無理な話だった、上空から白い魔力弾が飛来してくる一つまた一つとかわせばかわす程、魔力弾の数は増えていく

「やっぱり、はやてが来やがったな、あんだだけ遠くから攻撃出来るのははやてくらいだもんな」

雲の切れ間から白い魔力光を確認すると射ってきた人物を特定すると、雲を取り払う為に俺はイーグルを向けるしかし俺が射つより先にピンク色の砲撃が雲を吹き飛ばした

今まで優位に立っていたははやては突然の事に驚きを隠せずにいたが、直ぐ様自分に砲撃を射ったものを探し始める

「見つけたで！なのはちゃん!!」

「やっぱり見つかったちゃうか…悪いけどはやてちゃんには先にリタイヤしてもらうから!」

「かまへんよ、やれるもんやらな！」

人の事を無視して隊長とエースの戦いが始まった

流れ弾には当たりたくないので俺は来た道に戻る様に移動を開始した

「残りはティアナか…アイツの場合は待ち伏せ、だろっな…っ！」

残っている奴を確認してからスピードを早めると魔力弾が足元に直撃する

俺はヴィータを下ろしてイーグルを構える、幸いティアナは近くにいないためヴィータがさらわれる心配はないけどそれは一方的な狙撃をされるということでもあった

現に魔力弾が四方八方から飛来する、一発撃ち落としても時間差で迫るこれは肉体的にも精神的にも辛い

「ってか…たかが猫を奪う為にここまでするか!？」

そんなツツコミを入れた時に俺の顔面に向けて魔力弾が迫っていた、ツツコミを入れた事により反応が遅れたようだ

凄く他人事の様に言っているが魔力弾は俺に狙いを定めていた、殺られる!そう思った時だった

「にゃー!!..」

「ヴィータ!？」

「うー、にゃー!!..」

地面に下ろしていたヴィータが突如鳴くとその手には愛機であるグラーフアイゼンが握られていた

いつの間に展開したのかわからないがヴィータは俺の前に立つとまるでバッターののようにグラーフアイゼンを振りかぶると魔力弾を勢い良く打ち返した

「嘘ーっ!？」

打ち返された魔力弾は射った本人の元に飛ばされたらしくティアナの悲鳴が聞こえてきた、わからんでもないがな…

「にゃ〜」

「…良くやったな」

嬉しそうに鳴くヴィータに俺はとりあえず褒めると再びヴィータを抱えて走り出す

六課に戻ってきた俺は再びサンルームに来ていた、灯台もと暗し…
出発点に戻るはずがないと思いを逆手にとった作戦だった

「しかしどうするかな…このまま聖王教会まで行くか？
いやカリムもはやて達と同じく暴走するかもしれんやめとこ…」

逃げ場無しつてのはこの事だな…とってた時、抱えていたヴィータが何かを見つけたのか突然降りて駆け出し何かをくわえるとこちらに持ってきた

「首輪？」

「にゃ」

「つけると？」

「にゃ！」

やばい、凄いキラキラしてる…つか普通に会話してるし、こいつ元に戻ってんじゃないか？

でも相変わらず猫だしな…どうするよ…

「わかったよ…つけてやる…これ、ピッタリだよな…シャーリーの奴どうやってサイズを調べたんだ？」

首輪を持つと仕方なくため息をついてから俺はヴィータの首に首輪を当てる、そこで気がついたのだが首輪のサイズがジャストフィットしていたのであった

そんなどうでも良い事に俺は驚きながら首輪を留めた

「ほれ、満足したか？」

「にゃー」

首輪をつけ終えてから呼びかけるとヴィータの首輪についてる鈴が

チリンとなった

その瞬間、ヴィータの背中からクリスタルが一つ抜け出したそれは原因となった思念を溜めるロストロギアであった

《にゃーん♪》

嬉しそうな猫の声と共にクリスタルは消失した

「そうか、あの中に入ってた猫は飼い主がいなかったんだだから首輪をつけた事で満足できたんだな…」

そこで俺は一つ気がついた

今までのヴィータは猫が取りついていた、しかし今は猫はいないということは？

「あの…ヴィータ、さん？」

「…あんだよ」

（やばい、ブチキレ間近だ…）「つかぬことを聞くがどこまで覚えて、ぼくはあつ…！」

恐る恐る話しかけると返ってきたのはいつも声…話しかける内容間違えれば確実に撲殺であろう

まあ軽く冗談の様に話しかけると返ってきたのはアイゼンによる一撃、床に激しく転がりようやく止まったところで俺はヴィータに視線を向けた

鬼がいた…頭に猫耳をつけて逆立った尻尾の鬼がいた

「どこまで？全部覚えてんだよ！！お前らが猫耳つけたり可愛い可愛い言いまくってた事もな…後、首輪を…忘れるーっ！／＼／」

「おぶうー！！」

「見たこと全部忘れろ！聞いた事も忘れろ！！
ていうか光になりやがれっ！！ギガント、シュラーク！！！」

「おうわあああつ！！！！」

ヴィータは全てを吐き出すように叫んでいくと首輪の所で言葉がつまり思いっきり俺を殴り飛ばす

しかし半狂乱の猫はそれだけではすまなかった

人の頭をアイゼンで必要以上に殴っていき拳げ句の果てにはギガントフォルムで止めを差しにきた

凄まじい衝撃の中で俺は顔を真っ赤にしている猫耳ヴィータを見て意識を無くした

その後目が覚めた時には医務室だった、周りを見るとやたら幸せそうな寝顔のはやて達が寝ていた事に驚いた『猫事件』と呼ばれた騒動から一週間くらい、俺はヴィータから敵意の視線が向けられていた
良く良く考えると俺は何のためにボコボコになったんだろうと少しだけ悲しくなった

余談ではあるがヴィータはたまに猫事件の首輪を嬉しに眺めている

ると、とある空曹長から教えられたのは秘密にしておこうと思う

EP・V:うねうねうねうねのうね? (後書き)

どうもえのきです！

いかがでしたか？ ヴィータ祭最後の作品は…

まさかここまで長くなるとはおもいませんでした

ちなみにタイトルにあるどこのねこはアルの猫と思って下さい

キャラ崩壊をめざしたのですがどうでしたか？ 一番崩せたのはフェイトだと思います

次回は本編を書いていくので楽しみにしてください！

EP19：リア充は爆発しろ！！byセレス（前書き）

休日編でございます！

まずはセレス編からお楽しみ下さい

最後にお知らせがあるので良ければ見てください

EP19：リア充は爆発しろ！！byセレス

SIDE：セレス

アルの事件から一週間が過ぎようとしていた、ギスギスした空気も無くなって機動六課にはまたいつも通りの日常に戻っていった

あ、でも一つだけ変わった事があったかな

私ことセレスが管理局の所属になりました…と言ってもアルと1セツトみたいな扱いだけだね

正式に配属することにはなるのは陸士108番隊に戻ってからってアルは教えてくれた、それまではいつもと変わらず勉強の毎日なんだよね

まあはやてさんのお下がりから陸士制服に変わったから少しは嬉しいけど

今日は朝方の訓練を見るためにアルと一緒に訓練スペースに来ていた、でも…

「なんで早く起きてくれないかな!？」

「ふわぁ…悪い悪い、やる気が出なくてな」

私の隣で大欠伸をしている赤い髪の人、アルことアルフィリオス・ラーゼンハルグに私は怒鳴り付けるとアルは面倒そうに返してくる

むう、一週間ずっとこうなんだよね

元々やる気が無かったけど普段しない真面目モードでいた事による反動なのかアルは前よりだらけている…それに

「アル、ちょっと悩んでいるでしょ？」

「あれ？わかつちまう？」

やっぱり…アルは悩みだすところか遠くを見るような表情をしている、出会ってからそれほど経ってない私でも気づけるんだから多分皆気づいてる

「抱え込まないって約束したんじゃないの？」

「おいおい、全部さらけ出してたらプライベートがねえだろ？…噓、冗談だよ

まだ整理がつかないんだ、だからもうちょい待ってくれ
どうしようもないなら相談するから」

「うん…ちょっと納得いかないけど信じてるからね？」

私は目を細めながらアルに問いかけると苦笑をしながらアルは返答をしてきた、そして難しそうな表情をしながら言つと私の頭を軽く撫でる

アルがそう言うなら納得するしかない本当に納得がいかないけど…

「おつ、訓練が終わったみたいだな
いくぞ、セレス」

「あ、うん！いいこ」

アルがなのはさん達の方を見ながら言うと確かに訓練は終了していた私は歩き出したアルの後についていくように歩きなのはさん達所向かった

「はい、それじゃあ今朝の訓練はここまで、皆お疲れ様」

「はあゝ…疲れたゝ…」

「今日の訓練は一段とキツかったですね…」

「おゝおゝ、バテてんな皆」

なのはの号令でスバル達は地面に膝をついて息を整えといた、情けない声を出すスバルとエリオをみながらアルはなのは達の隣に並ぶ

「アルさん、見てた感じでどうだった？」

「おう、あれだけ動けば大丈夫だと思うぞ？」

「あの…なんの話ですか？」

アルとなのはの会話を聞いていたティアナは手を上げて質問を投げ掛けた

「ん？お前らも訓練に慣れた頃合いだからリミッターを外すか、ど

うか今日の訓練でチェックしたんだよ」

「……ええっ!!?」「……」

アルが唐突に言い出した事に今までへばっていた、スバル達は声を揃えて驚いた

それを見たアルは意地悪く笑ういながら言葉を続ける

「んじゃ先ずはフェイトから発表とい「合格」早くない?」

「だって、あんまり待たせるのは悪いと思ったから」

「まあこれだけやって成果が出ない方がマズイからな、よくやったなお前ら」

「おっ? ヴィータが珍しく誉めてんな

明日は槍でも降んのかね?」

教えていたフェイト達にアルは視線を向けて話すと、いい終える前にフェイトが答えた

面白くなさそうに言うアルにフェイトは少し戸惑いながら答える

それを無視しながらヴィータはややぶつきらばうに言つと珍しそうな顔をしながらアルはからかう様に言う

「血の雨なら今すぐにでも降らせてやろうか?」

「ヴィータ…目が怖い、それに足踏んでる」

アルの足を踏みつけながらヴィータは怒気の込めた視線をぶつけると、アルは目をそらしながら答える

「にやはは…それじゃあこの後でも良いからシャーリーの所に持っていくってリミッターを解除して貰ってね

セカンドについては明日からにするから」

「……………はい!!」「……………」

「えっ、明日?」

苦笑してからなのはがこれからの事を説明する

スバル達が返事をした後、キャロがなのはの言葉の中で疑問に思った事を呟く

「今日までずっと訓練だったから、今日は皆にお休みあげるんだよ」

「出かけるなりなんなりして溜まった疲れを癒してこいよ」

「……………やった〜っ!!」「……………」

フェイトとヴィータの言葉にようやく理解したスバル達は嬉しそうにはしゃぎだした

「あ、エリオ！少しいいかな？」

「？どうしたの、セレス」

通路を歩いていたエリオはセレスに声をかけられて止まり、振り返ると私服姿のセレスがそこにいた

「今から出かけるんだけど一緒に行かない？」

「えっ！？僕と？アルさんとかは？」

「頼めるのがエリオだけなんだよね、アルとレキはダメでさ…本当、腹立たしいくらいにね…」

「えっ？…いま、なんて？」

私服姿のセレスはエリオに外出しないかと誘う、いきなりの誘いにエリオは戸惑いながら返すとセレスは苦笑をしながら答える

答えた後にセレスはボソリと恨みのこもった言葉を呟き、偶然聞こえたエリオは恐る恐る聞いて見ることにした

「えっ？何か聞こえた、それじゃあ出来るだけ目立たない服で来てね？」

「あの、えと…はい…」

エリオの質問に対してセレスはとぼけると早く着替えてくるようにと言いその場を後にする、何故はぐらかしたか、なんで目立たない服なのかエリオは聞こうとしたがセレスの背後に黒いオーラが見え、

ただ頷くしかなかった

「それじゃあ、キャラオをつけてね？」

「はい、フェイトさん！」

「レキ、キャラオの事お願いね」

「はい、わかりましたフェイトさん」

機動六課の玄関先でフェイトは心配そうに私服に着替えたキャラオに言うときゃロは笑顔で答える、隣にいたレキもまた笑顔で答えた

「よし、行こうかキャラオ」

「うん！レキ君」

レキはキャラオに目を向けてから呼びかけ、一緒に街に向けて歩き出した

「気をつけてね…大丈夫かな？…」

「フェイトちゃんは心配しすぎだよ？」

「だってデート、だよね私…経験無いから、余計に心配で」話しは聞かせて貰いました！」「…誰！？」

不安そうに二人を見送るフェイトに、同じく外出したスバル達を見送ったなのはがため息をつきながら話しかける

注意を受けても心配が隠せないフェイトの後ろから声をかけられ二人は振り返るとそこには白いブラウスに緑のスカートを身に纏いサングラスをかけたアンバランスな少女が立っていた

「天が呼ぶ！地が呼ぶ！！人が呼ぶ！！」
写真を取れと私をよぶ！私はパパラッチセレス！！通りすがりのカメラガールです！！」

「セレスじゃないの！？」

「いいえ、パパラッチセレスです」

「パパラッチも名前なんだ…」

サングラスの少女は大げさな身振り手振りで自己紹介をするとなのはが戸惑いながらも問いかける

しかしパパラッチセレスは自分は別人だと返し、なのはのその名前のおかしさに肩を落とした

「そしてこっちが助手のエリオンです！」

「…ども」

「その金髪のお姉さん！娘さんが初デートなんですよね？
なら写真というメモリアル欲しいと思いますか？」

「ほ、欲しいです!!」

パパラッチセレスは自分の後ろにいるニット帽を被り同じくサングラスをかけた少年を紹介する

パパラッチセレスがフェイトに説明をする中で、なのはは助手のエリオンにそつと耳打ちをした

「何してるの？エリオ…」

「実はセレスにこれをつけろと言われただけで僕もまさかこんな事になるなんて」

「そうだね…なにがしたいのかな、セレス…後フェイトちゃんがまったく疑ってないなあ…」

「大丈夫ですよ、フェイトさんならわかると思いますから…多分」
なのはが不思議そうに聞くとエリオはサングラスを少し外して答える

苦笑を浮かべながらなのはは言いセレス達の方に目を向ける

目の前のアンバランスな格好をしているセレスにまったく疑いをかけてない親友にため息をついた

エリオは親代わりのフェイトをフォローしようとするがセレスの話しを聞き入ってるフェイトに自信がなくなりかけていた

「それじゃあお姉さんの依頼、このパパラッチセレスが請け負いました!エリオン!行くよ!!」

「イ、イエス！パパラッチ！！」

「待ってまだ代金の方を聞いてないよ？」

「そんなのいりません、貴女の親心それだけで十分です！プライスレス！！」

話しを終えたセレスはフェイトの背を向けて歩き出し、なのはと話しているエリオに声をかける

エリオは慌ててセレスに妙な掛け声で答えると急ぎ足で後を追いかける

行こうとするセレスにフェイトが代金について話すとセレスはこやかに笑いながら断った

「ねえ、なのは…」

「どうしたの？フェイトちゃん」

「世の中にはあんな良い人がいるんだね」

（フェイトちゃん…過保護過ぎだよ、早くなんとかしないと…）

二人を見送った後フェイトは凄く晴れやかな表情で言い切った、まったく疑う事をしない親友になのはは若干呆れながら思い、もし自分に子供が出来たら優しくするのはほどにしようと思った

「あのさ、セレスどうしてレキ達を尾行すること名乗り出たの？」

「その方が合法的だから…それにさデレッテレなレキを写真に納めてから弄るのも面白くない？」

レキ達を追いかけクラナガンまで来たセレス達はモノレールに乗っていた

しかしセレス達は座席に座る事なく乗り口にいた、理由は対象にあまり近づき過ぎると気づかれるからである

キヤロならなんとかなるが警戒心の高いレキには気づかれてしまう、だから中に入らずに外から様子を伺っていた

そんな中、エリオがセレスに質問を投げ掛けてきた
レキ達を尾行することをわざわざフェイトに知らせる必要はなかったんじゃないかと思ったからだ

セレスは特に隠す事なく理由を説明すると意地悪い笑みを浮かべながら言う、エリオはおそらくこっちが本音だと思った

「セレス、さすがにそれはマズイよ」

「私だつてそんな事をする気はなかったの、だけどレキの一言が私を変えた」

あまりにも悪趣味だと考えたエリオはセレスに中止するように呼び

かける

しかしセレスは聞く耳を持たず逆にする気はなかったと言うと遠い目をして語りだした

SIDE：セレス

あれは…訓練が終わった後だった

アルはヴァイスさんに用事があるって言っていなくなり、通路でレキと会った時だったの

「あっ！レキ、今日の休みさ、スバルさん達と出かけない？」

「ごめん、キャラと出かけるんだ」

せつかくの休みだから皆で行こうかなって誘ったらレキは申し訳なさそうにしていた、でもそこで私は一つの疑問が浮かんのだの

「いつ誘ったの？私が見た限りじゃそんな暇なかったよね？」

「これから誘うんだよ、キャラならOKしてくれるから、それじゃあね」

私の質問をレキはにこやかに笑って当然のように答えてから手を軽く上げて歩いていったの…

「え？それだけ？」

「それだけ？十分過ぎだよ！！」

なに！なに！なんですか！？そのOKが前提で話しが進んでる感じは、キャラも普通にOKしてるし、どんだけ相思相愛なの！」

話を聞いていたエリオは不思議そうに質問をすると、セレスはまるで今までの鬱憤を晴らすかのように叫び出す

「だから私は決めたの！そんなリア充しまくりのレキに一泡吹かせるんだって！！」

「セレス、落ち着いて！レキに聞こえちゃうから」

「はっ！？危ない危ない…つい正気を忘れてた、大丈夫だよね？」

握り拳を作りながらセレスは宣言をする、エリオは慌てて注意をする

セレスははたと気づいて口を押さえてから、扉の影から覗いてみる
がレキとキャラは振り返る事なく談笑をしていた

セレスはホッとした後フェイトからの依頼をこなすためにデジカメのシャッターを切った

「ねえセレス、これって二人が六課に帰るまでなの？」

「当たり前な事を聞かないで欲しいよ、帰るまでに《…二人とも》
っ!？」

一息ついたエリオはセレスに気まずそうに言うと、セレスは冷や汗をたらしながらも答えた時に不意にレキから念話が入られた

《キャラがまだ気づいて無いから良いけどこれ以上煩くするなら…
撃ち抜くよ?》

「っ!?!?」

《わかったら次の降り場でついてこないでね?…わかった?》

「は、はい…」

口調は丁寧ではあるがその内容かなりご立腹な様子で、セレスは軽く覗いて見ると話しに夢中なキャラに笑顔を向けながら細目でセレス達を睨み付けるレキがいた

それはいつになく真剣な目で邪魔をするなら本当に排除されそうであつた

その後、モノレールから降りたレキ達をセレスとエリオは見送り次の駅でモノレールから降りた

そして行くあても無くとりあえず近くにあつた公園で休む事にした

「怖かったね…レキ」

「あの目は殺る気満々だったよ…しかしこれからどうしようかな…」

ベンチに座るセレスとエリオはそれぞれに言葉を発してから深くため息をついた

「写真も結局ほとんど撮ってないから、フェイトさんになんて言おう…」

「それならファフニールとケリユケイオンに任せたら大丈夫だよ」

「いつの間に…でも良くOKしたね」

ここまで早くレキにバレるとは思わなかったエリオはため息をつく、隣にいたセレスは思い出したかのように言う

エリオは用意周到の良さに驚くが一つ疑問が浮かび質問を投げ掛ける

「メンテの時に間違えてバラすかもって言ったら快くOKしてくれだよ」

「それは脅迫だよね!？」

「まあ良いじゃん、ちょっと喉が乾いたから何か買ってくるね、動いたらダメだよ？」

セレスは軽く笑いながら言う、交渉の内容にエリオは思わずツツコミをいれた

セレスはツツコミを適当に流すと辺りを見回してから自販機を探す

と言って歩き出した

「はあ…セレス、遅いなあ…」

動くなど言われたエリオは辺りを見回しながら呟く、何かあったんじゃないかと思いエリオは探しに行く事にした

「セレス、何処に行つたのかな？…あれ？あの子…」

セレスを探しに来たエリオはアイスクリーム屋の前で一人の少女を見つけた

その子は薄い紫色のストレートヘヤーで黒い服を身につけていた、それだけじゃ目には止まらなかったが少女の纏う雰囲気は何処か儚げで触れれば壊れてしまいそうだった

「あの？買わないの？」

エリオはセレスを探さなきゃと思いつつも少女を見入ってしまい、つい声をかけてしまった

「…別に、いらない…」

「でもさっきから見てたよね？もしかしてお金ない？」

「……関係ない…」

エリオに話しかけられて少女は少しだけ振り返る、しかし直ぐに視線を反らしてから小さな声で短く答えた

それでもエリオは少女に問いかけると凶星だったのか、少しだけ間を空けて少女は返答をした

「すみません、これ二つくれませんか？」

「かしこまりました……お待たせしました」

「はい、これ」

「…なんのつもり？」

エリオは少女の横を通り過ぎると少女が見ていたアイスを頼む、フエイトから貰った小遣いで支払いを済ませるとエリオは少女にアイスを差し出す

エリオの突然の行動に少女は訳がわからずに思わず疑問を投げ掛けた

「友達の分まで買ったんだけど、はぐれてたの忘れてたからこのままだともつたいないから良かったら、貰ってくれないかな？」

「嘘が下手……」

「う……」

「…良いよ、いらなら貰うから……」

エリオはその場で思いついた言葉を並べていくと少女はすっぱりと
言い切る

言葉を無くしたエリオであったが少女はアイスを手にとると小さく
笑った、少女の笑みにエリオは不覚にも頬を赤らめた

二人は近くのベンチに座ってからアイスに口をつけて食べだす、そ
の時にエリオは一つの事実に気づく

「そつえば名前いつてなかったね、僕はエリオ・モンディアル
良かったら、教えてくれるかな？名前…」

「…ルーテシア…アルピーノ…」

「ルーテシア、良い名前だね…ところで、っ!？」

エリオは申し訳なさそうに言うつと自己紹介をし少女に名前を聞いた
ルーテシアと名乗った少女はアイスを食べるのを中断し、自己紹介
をすると再びアイスを食べだす

一人であったルーテシアに連れはいないのかとエリオが聞こうとし
た時に突如、後ろから殺気を感じ振り返る

「エーリッオッ、ずいぶん楽しそうだね」

「セ、セレス…どうして怒ってるの？」

「やだな〜怒ってないよ？…ただ私の周りにはリア充しかいないの
かって、呆れてただけだよ！ふんっ！！」

「十分怒ってる、ってか何を投げて、ぶふおっ！？」

そこには笑顔のセレスが立っていた、しかしその背後からは黒いオ
ーラが出ていて一歩また一歩と近づく度にエリオは冷や汗を流した
恐る恐る質問を投げ掛けるととても楽しげな口調で返答をするが、
最後になると自分の本音をもらすと手に持った缶ジュースを野球選
手のレーザービーム並のスピードでエリオの顔面、目掛けて投げた
鈍い音と共にエリオの顔面に缶ジュースは激突した

「なあんだ、アイスをおごって貰ってただけか、早く言えば良かったのに」

「…言う前に貴女が投げていた」

「酷いよ…セレス」

エリオの顔面に缶をぶつけた後、セレスはルーテシアから事情を聞き苦笑をしながら早とちりをしていた事を認めた

顔をさするエリオを見ながらルーテシアは冷ややかな視線をセレスに向けていた

「それで一人でいたけどルーちゃんはお母さんと一緒じゃなかったの？」

「…お母さんって人は眠ってる…」

「眠ってる？」

「ドクターはお母さんの目が覚めるには必要なものがあるって言うてた、だから私はそれを探してるの」

唐突にだされたセレスの質問にルーテシアは顔をうつむかせてから小さく答える、その内容にエリオとセレスは首を傾げた

そんな二人を気にせずにルーテシアはポソポソと呟いていく、探し物と聞いたセレスは少し腕組みをしながら考えると小さく頷くとルーテシアの方に視線を向ける

「ならその探し物、私も手伝うよ！」

「必要ない…貴女には関係ないから…」

セレスは手をあげながらにこやかに言うと、ルーテシアはきっぱりと断りを入れる

「確かに関係無いね、でもルーちゃんと私は友達だよ！なら助けるのが当然でしょ！！」

「…知らない、それになった覚えは無い…」

セレスは断られてもめげる事なく言葉を続ける、しかしルーテシア

は頑なに拒み続ける

「ほらエリオも何か言う！自分が引っかけたんでしょ？」

「人聞きの悪い言い方しないでよ！

僕も手伝いたい、探し物の事くわしく教えてくれないかな？」

「…エリオ達には関係の無いこと…もう行くから」

中々折れてくれないルーテシアにセレスはエリオに援護を頼む

セレスの言い方にツツコミを入れながらもエリオはルーテシアに頼むがルーテシアは立ち上がりそのまま走り去ってしまう

「行っちゃった…もうエリオは後でMAXサイダーを一気飲みね」

「なにその罰ゲーム！というかMAXサイダーってなに！？」

「レキがよく飲んでる、激！炭酸シリーズの一つでその刺激で嫌な事を全部忘れさせてくれるんだって」

「そんなの一気飲みしたくないよ！」

走り去ったルーテシアを見てセレスは肩を落としながら言う「エリオに指を向けながら言い出す」

聞いた事の名前にエリオは冷や汗を流しながら聞く、そして聞かされた説明に思いつきりツツコミを入れた

そんなセレスとのやりとりの中でもエリオはルーテシアの事を考え

ていた

もしもまた会えたらもう一度、頼んでみよう… エリオはそう考えていた

しかし、ルーテシアとは直ぐに会えることになるとはこの時、セレスとエリオは思ってもいなかった

EP19：リア充は爆発しろ！！byセレス（後書き）

どうも、えのきです！

いかがでしたか？休日セレス編は

作中でセレスのキャラが違ってるのは作者の本音が混じってるだけで本当はいい子なんです（笑）

さて今回はアル編となります、お楽しみ

さてお知らせですがこの小説のお気に入りが100件になりました！

そこで調子に乗ったえのきは人気投票なるものを作りたいと思います

ルールは簡単です

読者様が夜天に舞い踊る荒鷲と原作キャラで1位から3位までキャラを選んで教えてください

作者がそれを集計し改めてランキングとして表します

活動報告、メッセージ、感想のどれでも構いませんが作者はツイッターはしてないのでその三つのどれか一つでお願いします

言う必要は無いとは思いますが投票は一回だけです

作者の気まぐれに付き合ってくれる方をお待ちしてます

常連でも新規でも通りすがりでも構いません、気軽に参加して下さい

ではお待ちしております、ちなみに期限は明日の21時までとします
それ以降は無効となるのでお忘れ無いうちに

EP20：変わる関係、深まる想い（前書き）

アルとはやてのデートでございます

今回も楽しんで貰えると嬉しいです

EP20：変わる関係、深まる想い

セレスが色々、画策するなかアルはガレージに来ていた

「ヴァイス、アルト…少し相談にのってくれないか？」

その瞬間、カランと物が落ちる音が響いたそれはティアナからバイクの整備を頼まれたヴァイスのスパナが地面に落ちる音だった

ヴァイスと整備を見学していたアルト・クラエツタはまるでオイルの足りない人形のように後ろにいるアルの方に顔を向けた

「今の、本気か？」

「アルさんが、相談？」

「よしお前らが俺をどう見てるかよくわかったよ…」

あり得ないものを見たような表情をしながらヴァイスとアルトはアルの方を向く

アルは一度ため息をついてから少し苛立ちを見せてから目を細めて言う

「冗談だつて、んで何を相談すんだ？」

また新しいサボリ場所か？」

「ヴァイス陸曹そんな事を教えてたんですか？」

先ほどは失礼しました、力になりますよアルさん」

「悪いな…実ははやてについてなんだ
お前から見てあいつ怒っているようにみえるか？」

アルから放たれた怒気と言葉にヴァイスとアルトは慌てて手を振り
答え、アルは二人に相談事を話した

アルの言い出した内容にヴァイスとアルトは互いの顔を見てから首
を傾げた

「部隊長はいつも通りだと思いますよ？」

「この前の事は気にしてる様子はなかったけどな」

「そうか…実は最近、妙に避けられてるんだよな…」

二人の情報をきいたアルは少し難しい顔をした後、最近の事を話し
だす

それを聞いた二人は意外そうな顔をして驚いていた

「部隊長がアルに対してそんな態度を取るなんてな…普段からだと
ありえないな」

「交際しているのかと思うくらいお二人共、仲が良いですね？」

「別に付き合ってないぞ？」

はやては気の合う後輩にしか見てねえよ…」

ヴァイスはアルの話を聞いてはやての性格と自分の視点で話し、
アルトは日頃の二人のやりとりを思い出しながら話す

交際という言葉に対してアルは少し投げやりな口調で返答をする

「まあなにせよ、俺達は部隊長じゃない

だから本人に聞いてくるしかないんじゃないか？」

「そうだな…ああそうする事にすつか、わりいな」

話しが止まった時、ヴァイスがお手上げだという動作をすると、アルは少しため息をついてからガレージを後にした

「ヴァイス陸曹…いいんですか？

アルさん悩んでましたよ」

「良いんだよ…つか贅沢過ぎるから少し悩めってんだ」

「それ嫉妬ですよね、明らかに…」

居なくなったアルに対してアルトは少しだけ非難するように言うが、ヴァイスは目を細めながら答える

呆れてたようにため息をついてからアルトはヴァイスを見ながらツッコミを入れた

はやてを探しに隊舎に戻ったアルはまず、部隊長室を目指した

一番はやてがいる可能性があるとしたらそこだからだ

（いなかったらリンか誰かに聞くとするか…誰がいるだろうかな）「おっ？」

「えっ？」

部隊長室前の角を曲がった時に俺は丁度良くはやてと出くわした、俺もはやても意外だったのか最初は戸惑いを感じていたがそれは直ぐに解けた

「先輩、なんか用なんか？」

悪いんやけど私はちょい用事があるねんだから後にしてくれへんかな？」

「…後回しにしてたら次はいつになりそうかわからないな…わりいけど少しだけ話をさせてくれないか？」

はやては口調はいつもと変わらないがアルと目を合わす事なく言う
と横を通り抜けるようにして進もうとする

しかし立ち去ろうとするはやての手をアルが掴み引き止める、最初は振り払おうとしたはやてであったがアルとの力の差は明らかであり抵抗は無意味と判断し少し非難するような視線をアルに向けた

「ずいぶん、強引なやり方だな…先輩」

「自分でもそう思うな…しかしながらお前に逃げられ続けたんだ、

ちょっとくらい強引でないと無理だと思ってな」

アルに不機嫌そうな声ではやてが呟くと苦笑を浮かべてアルは返答をする

「それで何を聞きたいん？」

「言わなくてもわかるだろ？なんであんな避け方をするんだ…」

「……そんな事…」

仕方なくため息をつくはやてはアルに短く返答するが投げ掛けられた質問に言葉を詰まらせる

「わからないとも思っただか？」

あんなあからさまなやり方で…」

「……………」

アルから投げ掛けられていく言葉にはやてはただ押し黙っていた

一つため息をついたアルははやてを見ながら言葉を続けた

「はやて…俺が何かして避けてんなら謝る…だからなんで避けてんのか教えて欲しい」

「…それは…その…」

真剣な眼差しではやてに語りかけていくアルに対して、はやては戸惑うばかりだった

「俺はお前にだけは嫌われていたくない…頼む…」

「先輩…違うんや、先輩が嫌いになって避けてた訳やない
少し考え事があったてな…出来れば一人で解決したかったんや
だけど先輩と話したらうつかり言ってしまいそうで、だから…」

「だから自然と避けてたと？」

アルの言葉にはやては頬を赤らめると俯いてしまいがゆつくりとだ
がはやてはアルに説明をしていく
そしてその言葉に繋げるようにアルが言えば首を縦に動かしてはや
ては答えた

「ごめんな…ちゃんと言えれば良かったやけど、でも安心してな
私は先輩の事は呆れる事はあっても嫌いにはならへんよ」

「呆れるはいらないだろ…」

「なら良いけど…はやて、少し外に出ないか？」

「なんで外なん？」

深く頭を下げてからはやては謝ると微笑をしながらアルに言えば、
アルは肩を落として落ち込む

少し考えこんでからアルは唐突にはやてに外出を提案をする、脈絡
のない事にはやては聞き返す事しか出来ずにいた

「はやてが自分で解決するなら俺は意見は出さない、だから別な方
面で手を貸そうかと思ってな

外出たら少しは考えがすつきりするかと思っただけどダメか？」

「ええとは思っけど…それ、普通に聞いたら…デートのお誘いやと思っんやけど…」

不思議そうにしているはやてにアルは言い出した説明をすると微笑しながら質問をする

はやても良好な感じに答えるが少し言いくいのか人差し指同士を付き合わせながら、アルに問いかける

「ああ…確かに…なら気分転換にデートしないか？はやて」

「！？！…！！？／／／」

はやてから投げ掛けられた問いにアルは少し考え込むと言葉を言い直してから、改めてはやてに提案をする

あまりにもすがすがしい言い方にはやては顔を赤くし言葉を無くした

「んでご返答は？」

「……ええよ…準備するから先に待つとてな…」

「ああ、玄関先にいるからな？」

言葉を無くしてるはやてにアルは優しく語りかけると少しだけ言葉を詰まらせたあと了承するはやて

返答をすると直ぐに後ろを向いてアルの手を払ったはやては顔を見せないまま、言い部隊長室に戻っていった

はやてが部隊長室に入る前にはつきりとした口調でアルが言うと、
はやては背を向けたまま頷いた

S I D E : はやて

部屋に戻った私は力が抜けたかのように壁に寄りかかった…

頭がとても熱く思考が上手くまとまらない理由はわかってる、先輩
のせいや…あんな事を真顔で言うからや…

原因を作ったのが自分やからあまり強くは言えないけど…でもその
理由かて先輩の事やからやっぱり先輩のせいかもしれへん

先輩の事が好きだとわかった次の日から私は先輩を見ると、心臓が
張り裂けそうなくらい緊張するようになった

近くに入れば聞こえそうなくらいに、高鳴る鼓動を聞かせないよう
に私は距離をとったのだけどそれがまずかった…だけど

（私にだけは嫌われたくないとか…そないな事言われたら余計に意
識してしまうやろ！…まったくあの鈍感は…）

頬に手を当てながら先輩に悪態をつくと同時に、それだけ私を見て
くれてる先輩の事が好きになった…

矛盾している気持ちの変化に私はため息をつきながら、私服に着替える事にした… けど問題が起きた

「何を着たらええんやろ… いつもやとなんかな… デートなんやしそれらしい格好、って初めてなんやからそんなんあるかい!!」

私服についてだった、いつもの格好では只の買い物でしかない… だから違う服を探すのが初デートの私には皆目検討がつかなかった

セレス達が出かけた後の入り口前で私服に着替えたアルフィリオスが大型のバイクに寄りかかってはやてを待っていた

退屈そうに欠伸をしていた時、扉の開く音が聞こえ視線を向けると私服に着替えたはやてが辺りを見渡しながら出てきた

「はやて、こっちだ」

自分を探しているはずのはやてにアルは声をかけるとはやてはビクッとしてからアルに目を向け、駆け足で近寄った

「えっと、待たせてもうたかな？」

「ん？ いや全然、それとほれ… 今日のコイツだからな」

先に待っていたアルにはやては少し不安気に聞くと首を振ってからアルは答え、バイクに乗せてあったヘルメットをはやてに渡す

受け取ったはやては不思議そうに首を傾げてからアルの方に目を向けた

「いつもは車なのにどないしたん？」

「都合悪く車検でな、返ってくるのは明日だ…どうするやめるか？」

はやての質問にアルはバツの悪い顔をしてから答えると車が戻ってからに出かけるという意味ではやてに問いかける

「えっ！？珍しいな、思っただけやから…ほないこか」

「そうか、ならしつかり捕まってるよ？」

アルの問いかけに慌てながら返答をするはやて、微笑を浮かべてからバイクに乗ったアルははやてに座るように言うと言つとエンジンに火を入れる

軽快な音と共にエンジンが始動するとはやては言われた通りにしっかりとアルの腰に抱きつく

はやてが捕まったのを確認してからアクセルを入れアル達はクラナガンに向けて出発をした

>先輩、ちよつとええか？<

クラナガンに向かう道路を走行中にはやてが念話で話しかけてきた、おそらく普通に喋るより伝わりやすいからだ

> どうした？ はやて、忘れもんか？ <

> いやいや、子供やないんやから…行きたい場所があるんやけどええかな？ <

アルも念話で返答をしながら運転を続けた、アルの言い方にツツコミを入れてから場所を要望するはやて

> お前の気分転換だ、構わないぞ
何処に行くんだ？ <

> ありがとな、そこは行つてからの楽しみや♪ <

遠慮がちに話すはやてにアルは好きにしていると答えると声を弾ませながらはやては答え、バイクはクラナガンに入った

> あっ先輩！ここでストップや！！ <

「ここは…ゲーセン？」

はやてに言われてバイクを止めると様々な音が耳に入りだし上にあ
る看板には色とりどりの蛍光ランプでゲームセンターとかかかっていた

「前から行ってみたかったんや！ほな、さっそく入ろうか」

「ああ、んじゃ行くか」

期待に目を輝かせているはやてに苦笑を浮かべながら答えるアル

そしてはやてが先導するように二人はゲーセンの中に入っていった

「へえ…中はこんななんやな…」

「もしかしてお前、ゲーセン初めてなのか？」

「うん、学生時代は管理局の出勤がほとんどやったから遊びなんて全然いかへんかったや…我ながら枯れた青春時代やった」

物珍しそうに中を見渡すはやてにアルは質問を投げ掛けると苦笑を浮かべつつ答え最後には少し落ち込みながら言うはやて

「…そこまで卑下しなくても…なら楽しまないとな」

「せやな、ほな手始めにあっちからや！
全部制覇する気で行くで！！」

アルは苦笑をしながらフォローを做的是はやてに微笑し言う
はやてもそれに答える様に意気込むと手近な台に向かいだす

アルとはやては最初にガンシューティング、次にレースゲームとゲーセンにある様々なゲームをプレイしていった、そしてゲーセンに入って数時間が経過しほとんど遊び抜いた二人は近くにある海が見える公園に移動していた

「いやあ、こんなに遊んだのは初めてや！ありがとうな、先輩」

「気にすんな…どうやら気分転換になったみたいだな」

ベンチに座ったはやては大きく伸びをしながら言うとしり笑って答えるアル

嬉しそうに話すはやてに安堵の息をもらしながらアルは言う

「せやな、確かに良い気分転換にはなったで…あんな…先輩に聞きたい事があんな」

「なんだよ、改まって何が聞きたいんだ？」

「レナって人の事や…先輩はどう思ってたん？」

はやては思い返してから頷くと少しだけ言いづらそうにした後、アルに言う

不思議そうにしながらもアルは承諾をするがはやての口から出された問いかけに言葉を詰まらせた

最初は誤魔化そうとしたアルであつたがはやての真剣な眼差しに一息ついてから、ゆっくりと話し始めた

「アイツをどう思ってるか…はつきり言えばただのパートナーにか見てない」

「でも、レナは…」

「アイツの気持ちは伝わつた…だけどそれ以上に護れなかつたつてのが大きくてな…」

アルの言葉に驚き戸惑いながら聞き返すはやて、補足するかのよう
にアルは言つと小さく苦笑をした

その苦笑を見てはやては思った、この人は本当にレナを大切にしていたんだと…

だけど自分のミスで死なせてしまつた事を未だに後悔している…

そんな彼に何が出来るか考えた、どうすれば良いかと…そしてはやては一つの決断をした

「…先輩、もう一つ言いたい事があるんや…私は…先輩に頼る事を止める…」

「いきなりどうしたんだ？」

「今回の件で私は先輩の事をまつたくわかつてなかつた事を思いしつた…そして先輩に依存しすぎたのもわかつたんや…」

先輩が抱え込まない事を約束してくれたように私は先輩を助ける事を約束したいんや…」

いきなり言われた事にアルは動揺をしながらも聞く

目を閉じて前回の事をはやては思い返ししながら言つと自分がアルをどう見てたか言い、自分に言い聞かせるように宣言をした

「お前がそう決めたのなら俺は何も言わねえよ…ちょっと残念だけどな

でもこれは忘れんなよ？

何かあれば俺は直ぐに駆けつけるってな」

「それやと意味がない気がする…」

「そんなときにはお前が俺を護れ、そうすりゃ万事解決だろ…」

「はは…なんやそれ」

少しおどけた事を言いながらアルは人差し指を立ててはやてに言う
聞いていたはやては少し納得のいかない表情をしているがアルはそれに対して自分とはやてに指を向けながら説明するとはやては微笑を浮かべた

「あつ、それと呼び方なんやけど先輩って言つたら今までとおんなじやから…ア、アルって呼んでええかな？／＼／」

「…良いと思うぞ？ちよつと飲み物買ってくる、いない間詰まらなように練習してるよ？」

笑っていたはやては思い出したかの様に手を叩いてから言つと少し

恥ずかしそうにアルと呼ぶ

言われてから少し固まっていた、アルはやけにあっさりした口調で言ってから立ち上がりはやての頭を軽く叩いてからその場を離れた

「アル、か…ふふ」

アルがその場から居なくなっただけ、はやてはアルの名前を呟くと嬉しそうに笑った

「予想外の攻撃力の高さに驚いたぜ…」

自販機の前に立ったアルはジュースを買いながら片手を顔に当てた、指の隙間から見える頬はうつすらと赤くなっていた

「本当は嬉しいんだから素直に喜んだらどうなんですか？」

「いきなり話しかけるなよ、イーグル…」

「空気読んで黙ってたのにずいぶん言い種ですね…まあこの笑顔ならそれだけの反応を見せてもおかしくはないでしょうが」

顔を押さえていた時にイーグルが話しかけてきた、アルはムツとした表情を浮かべて返す

イーグルはため息をついた後アルの目の前に先ほど笑っていたはや

ての画像を展開する

「いつ撮ったんだよ!？」

「何を寝ぼけた事を言うんですか？」

私にかかれはこの程度の撮影など簡単なですよ」

「威張るな…おっ…」

画像を展開するイーグルに目を細めて睨み付けると、イーグルはしれっとした言い方をしてから自慢するように言う

アルはため息をついてから何かを見つけそちらに向かった

「あれ？ずいぶんと遅かったみたいやけど、どないしたん？」

「ちよつとな…ほいっと」

「ありがとな」

ベンチに戻ってきたアルにはやては不思議そうに言うたアルは軽く笑いながら答えはやてにジューズの缶を渡した

はやては受け取って礼と共に笑顔を浮かべる、先ほどの事を思い出したアルは気恥ずかしそうに視線を反らした

はやてはその態度を不思議に思い聞こうとした時、急に首元のイーグルからけたたましい音が鳴り響いた

「これは!？」

「緊急通信です!発信者はライトニング5からです!！」

《こちらライトニング5!緊急用件により全体通信をしています、サードアベニューにて少女を発見!衰弱している模様、指示をお願いします》

「はやて!！」

レキから入った通信にアルとはやての表情が変わる

通信を受け取った後アルははやてに呼びかけるとはやては力強く頷くと二人は発信地点に向かうために走り出した

EP20：変わる関係、深まる想い（後書き）

どうもえのきです！

いかがでしたか？今回のお話は…

次回はレキ達のお話になります

楽しみにしてください

EP21：休息と事件（前書き）

ようやく、仕上がりました！

今回、アル達が下水で戦うシーンがあります、その時には『疾風のアクセル』（仮面ライダーW オリジナルサウンドトラックより）がイメージBGMとなります

EP 21：休息と事件

モノレールから降りたレキとキャラロは街を歩きながら今日の行き先を話していた

「実はシャーリーさんから今日のスケジュールを作って貰ったんだよ」

「シャーリーさんが？どんな日程が見せてくれないかな？」

隣を歩くキャラロがレキを見ながら告げると、レキは小首を傾げてキャラロにスケジュールについて質問をする

「ちょっと待つてね、はい、これが今日のプランだよ」

「えっと…」（これは…また）

（レキ…俺がいう必要はねえとは思うが、こいつはキャラロには早すぎるだろ…）

（やっぱりそう思う？ファフニール…）嬉しそうにケリユケイオンからスケジュールを展開する、レキは一通り見てから言葉を詰まらせた

そして普段あまり喋らないファフニールから呆れたような言葉をレキは受けた

シャーリーが組み立てたのは一般の恋人達が行くようなデートコースで、間違っても10代しかもあまり出かけた事がないキャラロには

少し無理があるプランだった

レキはキャロに違うプランが良いんじゃないかと提案しようとするが、あまりにも楽しみにしているキャロの横顔に決心が鈍ってしまう

「キャロ、今日はシャーリーさんのプランじゃなくて自由に歩いてみない？」

外を出歩く事が少ないから少し見て歩きたいんだ」

「そうだったんだ…良いよ

レキ君がしたいなら私も付き合うから」

レキは若干焦りつつキャロに言う、レキの言葉を快く了承するキャロ
シャーリーのプランを回避出来たレキはホッと一息ついた

「それじゃあ、まずはこの辺を一回りしてみようか」

「うん、あつ…あのね、レキ君」

「どうしたの？キャロ」

レキは辺りを見回してからキャロに提案をする、元氣良く頷いたキャロだったが何かを思いついたのか、少し恥ずかしそうにしながらレキに問いかける

「どうせだったら手を繋いでみたいな…なんて思ったから、あの良
いかな？」

「えっ…手を…うん、良いよ」

キャラは手遊びをしながら不安気に提案をする、レキも最初は戸惑ったが自分に言い聞かせるようにうなずくと右手を差し出した

差し出された手をキャラは掴んでからレキに笑いかけるとレキも同じように笑い返した

それからレキとキャラはクラナガン市街の探索を始めた

最初は小物店に行きレキはキャラに似合いそうなリボンをチョイスした

「これなんか似合うと思うんだけど、どうかな？」

「似合うかな？私はレキの方が似合うと思うよ？」

「それは無いとおもう……」

レキは手にとった青色のリボンをキャラに見せる

リボンを見てからレキの方が似合うと判断するキャラ、さすがに女モノを似合うのどうだろうとレキは肩を落とす

その後も二人は様々な場所を歩き回った、そして一通り回り終えた時にキャラは少し立ち止まった

「どうかしたの？ キャロ」

「やっぱりフェイトさん達にお土産を買って行った方が良かったかなって思ってた」

「うん、でも遠慮してたしな… そうだ！ プレゼントなら受け取って貰えるんじゃないかな？」

「あ、うん！ それならお土産じゃないもんね、それいいかも」

急に立ち止まったキャロにレキは近づいて肩を叩く、キャロは顔を上げると考えをまとめながら言葉を出していく

出かける時にお土産はいらないと話した事をレキは思い出し同じように考え込むと一つの案を閃き、キャロに提案する

お土産ではなくプレゼントまるでとんちをきかせたかの様な解答にキャロは目をきらめかせて頷いた

二人はプレゼントを探す為に来た道を引き返そうとしたがいきなりファフニールから警告音が響いた

「レキ、強い魔力反応だ！

しかもコイツはレリックの反応だ」

「場所は？」

「地下を移動してるみたいだ… 反応が強い地上に近づいてる」

レリックという言葉に二人の顔つきが陰しくなる

ファフニールの警告のすぐ後に路地の方から何かが動く音が聞こえた

レキは直ぐ様、路地にむけて走り出す

キャロも同じ様に走り出す路地に到着するとそこには開けられたマ
ンホールの蓋と側にはボロボロの布を巻いた少女が倒れていた

「キャロ、ヒーリングをかなり衰弱してる

僕は全体通信で連絡を入れるから」

「うん、わかった」

側に駆け寄ったレキは少女の状態を確かめると直ぐにキャロに処置
を頼むとファフニールに全体通信の準備をさせる、その時にレキは
気がついた

少女の腕には手枷のような鎖があり近くにはレリックのケースとお
ぼしき物があった、しかしケースを巻くように巻かれた鎖の結び目
は二つあった

レキは全体通信をしながら辺りを探索したがレリックケースは見当
たらなかった

（ケースは二つあった…今は一つ…考えられるのはケースはガジェ
ットに回収されたか…地下に落ちたか…）

おそらく存在したであろう二つ目のケースの行方を思案しながらレ
キは六課メンバーの到着を待った

「この辺りだよな？レキが通信してきたのは」

「はい、間違いないかと」

「レリックと一緒にいた少女、アルはどう思うん？」

バイクで通信のあったエリアに来たアル達はレキ達を探した

その際にはやてがアルに質問を投げ掛ける、アルは顎に手を当てながら考える

「人造魔導士だな…間違はなく、なんでレリックと一緒にまでかはわかんないが無関係って事はねえだろうな」

はやての質問にアルは自分の見解を言っていると面倒そうに呟く

イーグルのナビによって通信の発信された場所につくとそこにはフオワードメンバーにセレス、なのは、フェイトにシャルが来ていた

「もしかして、一番最後か？」

「そうみたいやな」

集まっているメンバーを見てアルは苦笑しながら言うとはやても同じように苦笑した

「アルさん、はやてちゃん、間に合ったみたいだね

今からスバル達に指示を出すところだったんだ」

「そっか、んでその子がレリックを引きずってきた子なんだな？」

「うん、衰弱はしてるけどもう大丈夫だって、キャロのヒーリングのおかげだね」

アル達に気づいたなのはとフェイトが二人の側に行くとなのはが決まった事を教え、フェイトがキャロの活躍を自分の事の様に喜んでいた

「それじゃあ、アルさんは皆と一緒に調査をしてもらえるかな？」

「ああ、了解だ」

《ガジェットがきました、地下に数機編成、数は25！
海上方面に12機編成が6グループ！》

なのはから指示を受けたアルは片手をあげて答える、するとシャーリーが焦った口調でメンバーに通信を入れてきた

《スターズ2からロングアーチへ

海上訓練中だったけどナカジマ三佐から許可貰ってそっちにいつてる、それと》

《陸士108番隊のギンガ・ナカジマです

別件で捜査していたんですがそちらで起きてる事と関係してるかもしれません、合流してもいいですか？》

「こちら八神はやて、もちろん、手があるのにこした事はあらへん、

合流を許可します」

シャーリーの通信のすぐ後にヴィータから急行しているという通信が入ると続いて、ギンガからも通信が入る

ギンガは合流の許可をはやてに求めると快く了承をするはやて

「ギンガが合流か、コイツは地下の方は手早く済みそうだな」

「そうですね、あの指揮は誰が担当しますか？アルさん」

「そりゃもちろんお前だよ、ティアナ

センターガードなんだしな…サポートはすっから思いつきりやれよ？」

「はい！皆、集まって」

通信を聞いていたアルは笑いながら言うとティアナが隣まで来て質問をする

アルは当然の様に返すとティアナの頭を軽く撫でてから言い、マンホールの上に移動する

なんとなく答えがわかっていたティアナは微笑をするとフォワードメンバーに呼びかける

「短い休暇だったけどしっかり休めた？」

「……はい！」「」

「うん」

「まあまあかな」

「それじゃあ仕事に頭を切り替えて行くわよ！」

「……「おお……」……」

ティアナの言葉にそれぞれが返答しティアナが最後に声をかける
それに答えるようにメンバーは力強く返答をするとそれぞれがデバ
イスを構える

「……「セットアップ……」……」

六色の光が辺りを照らすと全員はバリアジャケットを身に纏う
スバルから順に地下に降りる中アルはセレスとはやてに近づく

「セレス、ヘリで待っていてくれないか？」

「うん、地下でユニゾンは動きにくくするだけだもんね」

「セレスの事は任しといてな
アル、気をつけてな？」

アルの提案にセレスは頷いて答える、密閉された空間では動きが早
くなるセレスのユニゾンは自分の首を絞めるだけだったのであつた
一緒にヘリに乗り込むはやては笑みを浮かべてアルに言ってから少
し心配そうにする

「ああわかってる、俺を誰だと思いつてんだよ？」

苦笑をしながらアルははやての頭を撫でるとからかうように言えば
地下水道に降りていく

「アルさん！前後からガジェットが六機接近してきます、注意してください」

「ガジェット、1ダースお待ちどうつてか？ティアナ、どうするよ」

地下水道に降りた途端にティアナから報告が入り、アルはイーグルを構えてからティアナに指示を仰ぐ

「前方はスバル、エリオ、私が迎撃します
アルさんはレキ、キャロと共に後方をお願いします！」

「あいさ、レキキャロ、準備は良いか？」

「問題ないです！」

「同じく」「キュクッ！」

ティアナからの指示を聞いた、アルは反対方向に身体を向けると後ろにいるレキとキャロに声をかける

二人も準備は出来たらしく答えるとガジェットを待った

不気味な静けさが辺りを満たし天井から水滴が落ちた途端、水の中からガジェットが飛び出してきた

「イーグル！」

「了解！ブレードオン、刀身固定します！」

飛び出したガジェットに怯まずにアルはイーグルに指示を出すと、イーグルはブレードを展開する

相手が攻撃を放つ前にアルはソニックムーブでガジェットの懷に移動をすると一閃によって斬り捨てる

「ガトリングバレット！！」

「フリード、ブラストフレア！！」

アルが動いた瞬間、レキとキャラも行動を開始していた

レキは双銃形態にし二機のガジェットを魔力弾の連射で仕留める、キャラもフリードの火炎弾によりガジェットを一機仕留める

「イーグル、カートリッジロード！ブレイズバスターだ！！」

「了解、1カートリッジロード、ブレイズバスター！」

イーグルの銃身からカートリッジが一つ排出されるとアルはイーグルの銃口を残り二機に向け赤い魔力砲を撃ち放つ

なすすべもなく呑み込まれたガジェットは爆散した

「下水にガラクタ捨てても大丈夫だったか？」

「なら木端微塵にして下さいよ、アルさん」

「アハハ… ティアナさんそっちはどうですか？」

下水に落ちていくガジェットの破片を見ながらアルは呟くとレキはため息をつきながら言葉を投げ掛ける

二人のやりとりにキヤロは苦笑をしながらティアナ達の方に目を向けた

ティアナ達も同じように片付けたらしくアル達の方に走りよってくる

「結構数で向かってきますね、早くギンガさんに合流しましょう、アルさん」

「どんな編成でいく？さっきみた後方からも来るみたいだからよ」

「そうですね、先頭にアルさん、次にスバル、エリオ、あたしにキヤロ、最後にレキで行こうと思います」

襲撃してきたガジェットの数を把握しながらティアナはレリックを優先しながらもギンガとの合流をすると判断する

アルはイーグルの銃身を肩に当てながらティアナに道中の隊列について聞くと、名前を呼びながら隊列を決めていくティアナ

「やれやれ、上司使いが荒いもんだな」

「いけませんか？」

「いんや、上出来だ…んじゃ先行すつからついてこいよ？」

「……了解！」「……」

ティアナの編成にアルは苦笑をしながら言つとティアナは少し意地の悪い言い方をする

微笑をしながら答え皆に声をかけてから先行するアル

ティアナ達もそれに答えると編成順にアルの後についていく

「GINGAさん、お久しぶりです」

「うん、ティアナ現場のリーダーは貴女なのよね？」

指示に従うから合流ポイントを教えてくれる？」

「はい！今、クロスミラーージュからGINGAさんのブリッツキャリバーに送りますね」

移動をしながらGINGAに連絡を入れるティアナ

GINGAも地下水道に入ったのか周りは薄暗くコンクリートの壁があった

合流ポイントについて聞かれたティアナはあらかじめ決めておいたポイントのデータをギンガのデバイスブリッツキャリバーに転送する

《受け取ったわ…それと、アルさんそこにいる？さつきから連絡入れてるんだけど繋がらなくて》

「えっ？ちゃんといいます…何してんですか？アルさん」

「私は何も知らないよ、説教魔神のギンガから連絡きたなんて知らないよ、圏外じゃないのかな？」

「違いますよ、意図的に無視してるだけですから」

データを受け取った報告をしたギンガはティアナにアルの所在を質問する

不思議な質問にティアナは目の前を走ってるアルを見るとそこにはイーグルを腰のホルダーにしまいわざとらしく耳を塞いでるアルの姿があつた

耳を塞ぎながら何も知らないと言うアルに呆れたような口調で真相を話すイーグル、そしてアルが切っていた通信を繋げアルの目の前にこめかみをひくつかせるギンガが映し出された

《アルさん！！》

「なんだよ、うつせえな！？」

《なんだよ、じゃありません！連絡入れたんですから応えて下さい

！』

「はぁ！？嫌に決まってるんだろ！！お前は直ぐに説教すつからな！」
ギンガの怒号にレキを除いたフォワードメンバーは驚き足を止めそうになる

それに構う事なくギンガはアルに文句を言っていくが、アルも負けじと言い訳をしていくだがその内容は明らかに情けないものだった

《アルさんが毎回真面目にやれば私は説教なんてしません！！》

「今回は真面目にやっただろうが！！」

「普段からして下さい！！」

普段は見ないギンガの姿にスバルは唖然としいきなりケンカをした事によりエリオとキャロはおろおろしていた

レキとティアナに至っては呆れつつも周りを警戒していた

「お前の説教なんざ聞いてたら日がくれるっての、どうしても言いたいなら俺らと合流してから言っんだな

その前にレリックを回収して帰るからよ」

《追い付けば、少しは話を聞いてくれるんですか？》

「ああ！いくらでも説教しても構わないぜ？
やれんもんならな、プップー！」

ギンガを小馬鹿にするような言い方でアルは挑発をしていくとギンガは意外そうな顔をした

まだ追い付けないと思い込んでいたアルは高笑いをしながら答える、その瞬間アルの前方にあった壁が粉碎されバリジャケットを着たギンガが現れた

「これで話を聞いてくれますよね？」

「い、イエスマム……」

まるで聖母のような笑みを浮かべているギンガだったがその背後には怒気が満ち溢れていた

乾いた笑みを浮かべながらアルは受け答えをする

「とりあえず先ほどの任務中なのに馬鹿にするような発言と態度についてしかるべき処置が必要だと思っんですよ、ね？」

「いや、本当にすみませんでした！」

「問答無用！！」

「グベハア！？」

ローラーでゆつくりと近寄ってくるギンガにアルは引き気味になり、処置のあたりで自分の運命を悟り直ぐ様土下座しようとするがその前にギンガの拳がアルの顔面にめり込んだ

リボルバーナックルでなかったのが唯一の優しさなのかと思いますが
ラルは地面に叩きつけられた

EP21：休息と事件（後書き）

どうもえのきです！

このお話しを書いてて思ったんですがギンガとティアナの態度がはやてとヴィータのようになってるなと思いました

ハーレムをする気は無いんですがどうにもなってしまいます

でもこの小説のヒロインははやてです！断言します！！

次回はいよいよルーテシアとの戦い

さらにアルファの意外な一面を書こうと思います

それでは

A・E・P：ハロウィンそれはやり過ぎ注意！（前書き）

本編やらずに投稿します

何がやり過ぎなのかは読者様が判断して下さい

A・E・P：ハロウィンそれはやり過ぎ注意！

それは機動六課にて起こった…

アルフィリオス・ラーゼンハルグが珍しく私室で仕事をしていた時の事であった

ピン、ポーン…ピン、ポーン

「誰だ？」

《私だよ、アル！》

《リインもいます！！》

部屋で書類の整理をしていた時にセレスとリインがインターホンを押した、普段なら許可なく入ってくるのになと思いながらアルは返答をする

しかし、いつまで経ってもリイン達は部屋に入って来なかった

「どうした？入らないのか、鍵なら空いてるぞ？」

《ちょっと開けて欲しいんだよね》

《お願いしますです、アルさん》

アルがセレス達に質問をすると二人とも扉を開けて欲しいと言った、手でも塞がってるのかと思いつながらアルは部屋の扉の前に立ちドアを開けた

「トリックオアトリート!!」

「間に合ってます」

扉を開けた先には奇妙なカボチャのマスクを被りマントをつけたセレスとリインがいた

アルは一ミリも笑わずに無表情のまま扉を再び閉めて目元に手を当てながら今見たことを忘れようとした

《ちょっとー！なんで閉めんのさー!!》

《ひどいですー！アルさん!!》

「うるさいわ！おかしな恰好している子は中に入れません！ーてか何してんの君たちは!？」

扉越して文句をいう二人にアルははつきりとした口調で答えて二人に問いかける

《今日はハロウィンって行事なんだよ!》

《それでお菓子をくれなきゃイタズラするぞって言ってお菓子を貰うんです!ー!》

「なにその、新手のものごい…っつかお菓子やれば良いんだな？少し待ってるよ…」

扉越して説明をしていく二人に、アルはため息まじりにツツコミを

入れてから部屋にあった小袋いりのクッキーを二つ手に持つと扉を開けた

「ほら、これで良いよな？てかなんでそんな恰好してんだよ」

「ハロウインの時にはお化けに仮装するんだよ」

「私達はカボチャのお化けなんですよ！」

リイン達にクッキーを渡しながらアルは二人の奇抜な恰好に苦い顔をする

セレスとリインは胸を張りながら自慢をしていく、だがアルにとってさほど怖いものではなかった

リイン達が違う所にお菓子を貰いに行くと言い、アルは部屋に戻ると再び書類の処理に入る

リインやセレスがやってるならキャロ達もしているのかと苦笑をしつつ作業を続けた

ピン、ポーン…ピン、ポーン

「噂をしたらなんとやらだな…一応聞いておくか、誰だ？」

「アルさんですか？ティアナです」

中に入ってもいいですか？」

「ティアナ？珍しいな良いぞ、入っても」

再び鳴ったインターホンにアルは一息つくと訪ねてきた相手に問いかけると意外な人物から返答が返ってきて首を傾げた

普段、ティアナはアルの私室まで来ることはない…何か相談したい事があるのかと思いながら入室を許可する

「…トリックオアトリート!!」「…」

「帰れやあああ!!」

ドアが開いた瞬間、仮装をしたスバル、ティアナ、ギンガがお決まりのセリフを言いながら入ってくる

まさかの来訪者にアルは思わず声を上げてツツコミをいれた

「セレスやリインなら笑って過ごせたけどお前らは無理だ！何してんの！？仕事はどうした!!」

「ありませんよ」

「はい？」

「今日はハロウィンだから最低限の仕事済ませたら終わりって八神部隊長が言っていました」

長時間のデスクワークのストレスを発散するかのようにアルは文句

を言っていくが、ギンガの言葉で勢いを削がれた

更に畳み掛けるようにスバルが今日の事をアルに説明をしていく

「俺、普通に仕事を押しつけられたんだけど…なんで？」

「多分アルさんがサボり過ぎてるからだと思いま」そんな事よりお菓子下さい！！」

自分が受けてる事に疑問を抱いたアルは呟くように言うとティアナが訂正を入れるが途中でスバルが割り込んでくる

ため息を一つ吐いてからアルはスバルの頭をがっしり掴むと徐々に力を入れていく

「いただただっ！？」

「にしてもお前らの仮装も変わってんな
ティアナは吸血鬼か？」

「はい、何故かタキシードまで着てますけど…」

「ギンガは…犬か？」

「狐ですよ、八神部隊長の故郷に妖狐つてのがいるそうなので」

スバルの頭を絞めながらアルはティアナとギンガに目を向けた
ティアナはフェイトのようなマントを羽織っており中にはタキシードを着ていた、しかしティアナのスタイルの良さのせいか男性型の吸血鬼には見えなかった

ギンガは藍色の和服に大きな九本の尻尾に獣耳をつけていた、また
どういう仕組みで動かしているか分からないが尻尾と耳が時折動い
ていた

「あの、そろそろ離してくれませんか!？」

「えっ? ああ悪い気がつかなかった」

「気づいてましたよねというかなんで力が上がってんですか!？」

ギンガやティアナの仮装を見ているアルにスバルは抗議するように
言うが、アルは白々しく答え指にさらに力を込める

少し経ってからスバルを解放すると相当痛かったのか頭を抱えてス
バルは黙っていた

「んでスバルの仮装は…犬だな」

「これは狼です!！」

「はっ…」

頭を抱えているスバルを見ながらアルは仮装の元を予想すると、全
然検討外れな答えにスバルは訂正をするがアルはそれを鼻で笑った

「なんで笑うんですか!？」

「犬科には変わんないだろ、あとお前のイメージじゃ犬にしか見え
ない!！」

「ひどい!!」

鼻で笑うアルにスバルは情けない声を出しながら言うとアルはビシと指をさしていい放つ

スバルはショックを受けて肩を落としてへこんでいた

「とりあえず、お前らに菓子を渡せばいいんだな？ほらよ」

「ありがとうございます、アルさん」

「頂きます」

「…どうもです」

スバルをいじり終えたアルはお菓子を三人の手に渡す、ギンガ、ティアナ、スバルのそれぞれに礼を言う

「礼を言うくらいなら仕事を手伝ってくれ…っていねえし!!」

礼を貰ったアルは言葉より人手が欲しいと言ったら三人はいつの間にか部屋からきえていた

「イーグル…後どのくらいあんだよ?」

「よろしいのですか?言っても」

「ごめん、やっぱ無しで…」

ギンガ達がいなくなった後アルは再び書類の処理をしていたがまるつきり終わらない書類の山に嫌気が差し出す

残りを確認しようとイーグルに問いかけると聞いちゃならならいよ
うな言い方で返された

ピン、ポーン…ピン、ポーン…

「またかよ…開いてんぞ…」

また部屋のインターホンが押され、また菓子をつたかりに来たかとアルは思いながら返答するが誰も入って来なかった

「ん？なんで入って来ないんだ…

出てみるか…」っておうわあああつ！！」

疑問に思ったアルは部屋の外に出ることにした、アルが部屋の扉を開けると目の前に頭に斧が刺さったエリオとエリオと同じくらいの大きさの布切れをかぶった何かがいた
突然の自体にアルは思わず声を上げた

「トリックオアトリートです！アルさん」

「キャラなのか？ってかお前ら二人の違いが怖い
エリオのはガチだろ、それ…キャラなんか布切れをかぶってるだけ
じゃないか」

「えと、ダメですか？」

布切れからキャラの声が聞こえアルは胸を撫で下ろすと、二人の仮装について意見を述べる、エリオのはメイクも完璧に行い演技も上手いのだがキャラのは布切れをかぶっただけというお粗末なものだった

布から顔を出したキャラは不安そうにアルに質問をした

（多分キャラなら許されると思ったんだろうな…まあ良いか）「いや大丈夫だ、ほらお菓子やるぞ
エリオも演技はもう良いぞ」

「エリオ君は演技してませんよ、気絶してますから」

「えっ！？なんで？」

お菓子をあげようと未だに死体のフリをしているエリオにアルは話しかけるがエリオが反応することはなかった

隣にいたキャラがにこやかな笑顔で説明してきた、アルは恐る恐るキャラに問いかける事にした

「最初は演技って事だったんですけどエリオ君の演技が凄く下手だったから、ギンガさんに頼んで気絶させました」

元氣よく頷いたキャラはアルに説明していくがその内容は笑顔で語るにはいかなものだった

（キャラ、いつからそんなアグレッシブな考え方に？…）「ならエリオが目を見ましたら渡して置くんぞぞ？」

「はい！それじゃあフリード、エリオ君を部屋まで運んで置いてね？」

「キユク」

苦笑いをしながらお菓子をキャロに渡すアル

キャロは頷いた後布切れの中にいたフリードに指示をだす、まるで了解と言いたげなフリードはエリオをくわえると足が地面に引きずらせながら移動していった

アルはとりあえずため息をついてから自室に帰っていった、自分は何も見えてないと言い聞かせながら

「ようやく三分の二か…なんとか今日中に終わりそうだな」

「ですがまだ来てない人たちがいますよ、相手をしてたら遅れませんか？」

少なくなった書類の山を見ながらアルは一息をついた

しかしイーグルの呟きによって表情が強ばった、そうエリオ達以降誰も来てない…レキに連絡を取るとなのは、フェイト、シャマル、シグナムは仕事で手が離せないとの事だ

（なら残りはヴィータとはやてか…先にどっちが来るんだ？）

ピン、ポーン…ピン、ポーン

「来たっ！？…誰だ？」

《あたしだ…入ってもいいか？》

噂をすればなんとやらと言ったのは本当だと思いながら、アルはこれまでと同じように呼びかける

部屋を尋ねたのはヴィータであつた、しかし聞こえてきた声はいつもより沈んでいてヴィータらしくなかった

「ああ構わないぞ、遠慮なく入ってこいよ」

《なら入るぞ…》「えっと…トリックオア…トリート…なんか寄越しやがれ…／＼／」

ヴィータに入室を許可するとアルはお菓子がなかったか探しだす、ドアの開閉音と共にヴィータがハロウインの挨拶をしてくるが、声はどうにも弱々しいものだった

アルは探す手を止めて振り返るとそこにはかつて猫の思念が憑依した時にしていた恰好、通称…猫ヴィータがそこにいた

どことなく落ち着きがないヴィータは視線をあちらこちらに泳がせながら、恥ずかしそうにしていた

「猫娘つてところか…はやてからか？」

「……／＼／（こくこく）」

ヴィータが進んでこの恰好をするはずがないならばそんな事を命令する誰か、一人しかいなかった

ヴィータは何も言わずに頷いていたがアルには十分過ぎるくらいだった

（なら手っ取り早くお菓子を渡してやってもいいが…あんなしおらしいヴィータを見ると少しいじめたくなるな…）

「な、なんだよ…何見てんだよ／＼早く渡しやがれ…バカアル／＼」

「いやあ、それなんだがな…菓子は今切れてて無いんだ」

アルはヴィータをかわいそうと思いながらも意地の悪い考えをしていた

その間にも羞恥心により爆発しそうなくらい、顔の赤いヴィータはアルを急かすように悪態をつく

そんなヴィータにアルのイタズラ心が目を覚ました、本当はお菓子を持っているのだが無いと言い張りヴィータのリアクションを期待した

「はあ！？ねえってどういう事だよ／＼
嘘つくならぶっ飛ばすぞ！？／＼」

「いやいや、本当なんだよ
やあこりやイタズラ確定だな…」

「う…／／えっと、イタズラ…イタズラ…えう！？／／／」

いつものセリフを言うヴィータであつたが猫耳のせいか大して怖くはなかった

アルは無いことをアピールしながらやってしまったという演技をすると、ヴィータはポケットからメモを取り出してすっとんきょうな声を出した

「どした？ヴィータ」

「な、なな何でもない、だから向こうを向いてやがれ！！／／／」

不思議そうにメモを覗こうとしたアルに、ヴィータは先ほどより赤みをました顔でアルに指示を出す

（イタズラは後ろを向いてないと出来ないみたいだな、さてさてはやてはどんなお題を出したんだろうな）

ヴィータに指令を出したであろう元凶を思い浮かべながら後ろを向いていたが、ヴィータはまだ何もしてこなかった

「…ヴィータ？」

「ちょっと待ってる、心の準備が必要なんだよ！！／／／それで…こうして…」

不思議そうにアルはヴィータに呼びかけると焦りながらヴィータは返答をした

そんなに恥ずかしいならやらなきゃ良いのにといいながらアルはヴィータの準備を待った、ヴィータはその間もブツブツと言っていた

「そして…最後に…さい…ふ、ふ」

「ふ？」

「ふにゃーっ!!」

打ち合わせをしていたヴィータであつたが途中で言葉をつまらせてしまう

チュドーン!!という効果音がしてもいいくらいの叫び声と共にヴィータは床に倒れた

「ヴィータ!?大丈夫か？」

「ふにゃ〜……」

慌ててアルはヴィータを抱き起こすと目を回しながらヴィータは気絶していた、どうやら羞恥心に耐えきれずに爆発したようだった

「ん?これがイタズラか……爆発してもおかしくないな、これは」

ヴィータの手から落ちたメモをアルは拾い上げて、目を通すと乾いた笑みを浮かべてアルは呟いた、そこには…

『イタズラする人の後ろから抱きついて最高に可愛い声で「にゃー」と鳴く。byはやて』

と書かれていた、猫姿だけで爆発しそうなヴィータにはあまりにも残酷な仕打ちだと思いながらアルは、シグナムに連絡を取り気絶したヴィータを運んで貰うように頼んだ

その際に気絶してるヴィータの手にお菓子を乗せておくアル、せめてお菓子くらいは持たせないとかわいそうだなと思ったからである

「ハア…ようやく終わった…」

「お疲れさまです」

作業を終えたアルは椅子に持たれかかる

それを労うようにイーグルは言葉をかける、無機質ではあるが言葉をかけてくれるのは今のアルには嬉しい事だった

ピン、ポーン…ピン、ポーン

「今頃かよ…はいはい、今行きますよと…」

達成感を満喫していた時にまたも部屋のインターホンが鳴らされた、時間を見ればもう少しで日が変わるそんな中で来るのは一人しかない。アルは考え扉に向かい開けた

「お疲れさまや」アル

「最後の最後で来たな、諸悪の根源」

開けた先には六課の部隊長で今回の書類を押しつけた、八神 はやてが立っていた

アルはやれやれと言いながらはやてに悪態をつく

「酷い言い方やな、大体アルが悪いんやで？書類をぎょうさん溜め込んだのは」

「だからって一日で終わらせるなんざ無茶ぶりもいいところ
しかも断れば今月の給料カットはねえって」

「それぐらいせえへんとやる気は出ないやろ？んで終わったんか？」

「見ての通りだ、必死こいて終わらせた」

アルの悪態に不機嫌そうな感じにはやては返すと鼻先に指をむけながらいい放つ

アルは指を避けると今日の仕事の内容について文句をつける

仕方ないと頷きながら人差し指を立ててアルに言うはやて、そして仕事の結果を問かけるとアルは指を後ろに向けて書類の山を指でさす

「やれば出来るやないか、ほな次はお楽しみのメインイベントやで！トリックオアトリート！！お菓子、ちょうだいな」

「人から労力搾つというさらにとる気か！？…ったく、少し部屋の

中で待つてろ…菓子を探すから」

「はい」

アルの仕事が終わった事を意外そうにしながら言うはやて、そしてニンマリ笑いながら騎士甲冑に着替える

普段なら騎士甲冑には黒い羽がついているが今回ののは上着と羽がなく、代わりに悪魔の様な羽と尻尾が生えた甲冑になってアルに両手を広げてお決まりの挨拶を言う

ニンマリするはやてに対してアルは苦虫を噛み潰したような顔をしてから指で動作をすると部屋に戻っていく

はやてもアルの後についていく様に歩いて部屋に入るとアルのベッドに腰かける

「んでお前の仮装は悪魔か？」

「ちっ、ちっち！小悪魔や

私並なら当然やろ？」

「子じゃなくて大だろ？」「あんやと！？」「何でもない、ほれ！ご所望の品だよ」

「むぐ！？」

菓子を探しながらアルははやてに質問をすると、指を動かし口で擬音をつけながら訂正をするはやて

その言葉にため息まじりに呟くアル、聞こえていたのかベッドの上からアルに怒鳴るはやて

アルは適当に流すと小袋に入ったクッキーを手につつと、はやての口に押しつける

いきなりの事にはやてはすつとんきょうな声を上げつつクッキーを食べていき飲み込むと不機嫌そうにする

「食べさせへんでも食えるちゅうに」

「いやいや、こうしねえと次に移れないんだよ」

「ほえ？」

「トリックオアトリート、何か菓子を寄越しやがれ」

アルに文句を言いながらはやてはクッキーを食べ終わると首を振りながらアルは言う

意味がわからないと首を傾げるはやてにアルは今日、もっとも言われている挨拶をする

「えっ！？そんないきなり」

「ちなみにこの部屋に菓子は無いお前が食ったのが最後だ」

「でも私も持っていないで？」

「ならイタズラしかないよな」

突然の事に驚き戸惑うはやて、しかしそれを気にする事なく話を続けていくアル

はやては手ぶらだということをアピールするとアルはにこやかな笑みを浮かべた、ちなみにこの時のアルの笑みはとても悪い顔だったらしい

次にはやての視界に入ったのは天井だった、はやてはアルが自分を押し倒したということを気づくにはあまりにも展開が早すぎて思考についていけず抵抗が出来なかった

「えっ！？何がどうなって」

「今からイタズラするんだ、大人のな…もしかしたらえらくエロい事になるかもな」

「上手い事を言ったような言い方しとるけど内容は最低や！／＼／＼展開に追い付いていないはやてはただアルに聞くだけであつた

そんなはやてにアルはさわやかな笑みを浮かべながら説明をしていく
エロいと言う単語でようやく事態を理解した、はやては顔を赤くしながらツツコミをいれるが時は既に遅くはやては完全にホールドされていった

「まあイタズラよりかお仕置きだな、こんな時間に押し掛けてきた悪い子の、な…」

「ひう！？／＼アル…ホンマにやめて、アカンよこんな事に…／

／／

「なら抵抗しろよ、無抵抗だとOKみたいだろ？
それとも期待してんのか？」

「そ、そんな事…／／／」

押し倒した状態のままアルははやての耳元で囁くといきなりの事にはやては短い悲鳴を上げる

それでも思いとどまる様にアルを説得するがまるで効果が無く逆にはやてが誘発しているんじゃないかと言われてしまう

アルの言葉にはやては言葉を濁す、確かに夜中に異性の部屋に行くことはそういう事もある

はやても期待はしなかったと言えば嘘だがまさか本当になるとは思ってもいなかった

（でもするんならせめて両想いでしたかったな…それに雰囲気もう少し考えて欲しかったわ…でも）「アル／／…せめて優しくしてな？／／／」

「えっ…はやて？」（オールOKかよ！？このままはマズイ！だけど据え膳食わぬは男の恥とか言わないか！？）

《とりあえず最低だと言っのははっきりしてますね》

《イーグル！？言葉がいつもよりキツい！》

はやてはいろいろと不満な点はあったしかし、好きな人との体験が出来るといふ事実により覚悟を決めると不安そうにしながらもアルに頼み込む

一方、少しは警戒心を持つて欲しいため寸止めにしたアルであつたがはやてが全面的に了承したため困惑した

その中で傍観をしていたデスクの上にあるイーグルから無機質ながらも非難の声が聞こえた

《まあアルがどのような接し方をしても構いませんが、女性としては最低だと断言します》

《う…そうだよな》

《ならどうします？今からネタバラしをすれば間違い無くはやてさんから嫌われますね》

《そうはさせないさ…何とかする》「はやて…」

第三者視点でイーグルは話していくが明らかに口調には怒りが滲み出ていた

アルは申し開きすることなく同意をするとイーグルは結果をアルに突きつける

それでもアルは打開しようとはやてに言葉をかけた

「ん？なんや？アル／＼／」

「俺はお前にもう少し自分を大事にして欲しいんだ…好きでもない奴とこういうのはマズイだろ」

「つまり、何が言いたいんや？」

「やっぱ、無しでお願いします！」

はやてから熱を帯びた声が聞こえ危つく理性が飛びそうになるがアルは何とか耐えて言葉を続ける

アルの言葉を聞き少しだけ冷静になったはやては声を落として聞いた
アルは自分が持てる精一杯の笑顔ではやてに言う、その場の空気が冷たくなるのをアルは肌で感じた

「っ…！」

「…ほお！？」

はやては何も言わずにアルの腹部を蹴り飛ばす、突然の事にアルはなすすべもなく床に転がった

「人の…覚悟を…乙女の覚悟を無駄にしよったなあーっ…！」

「イーグル…」

「はい、なんですか？」

「やり過ぎは禁物だな、これは今日の教訓だな」

「身を持って知るようですね」

はやては消える様な声で呟く、すると騎士甲冑が戦闘形態に移行しはやての手にはシュベルトクロイツと夜天の書がそれぞれ握られ魔力が集中しはじめた…

「響け、終焉の笛」

「支払い金、高くな」「足りないくらいかと」…そうか」

「ラグナロクっ！！！」

はやてが詠唱をしてるなかアルはイーグルに問いかけるがイーグルはそれをバツサリ斬り捨てる

そしてはやての全力の砲撃が放たれた

後に惨劇のハロウィンと称されたこの出来事はミッドチルダ、また機動六課に深く刻まれた

また全力で砲撃を撃ち込まれた局員に対してはどうでも良いと言われた

後日談ではあるがアルははやてに渾身の土下座によりなんとか許されるが二週間は口を聞いて貰えなかったそうだ

A・E・P：ハロウィンそれはやり過ぎ注意！（後書き）

どうもえのきです

いかななものでしたか？大半の人の声が予測出来そうですがどれがやり過ぎか教えて下さると嬉しいです

あと誰の仮装が良かったかも教えて下されば後日発表したいと思います

ちなみに今回仮装したのは

セレス、リイン：ジャックオーランタン

エリオ：ゾンビ

キヤロ：幽霊

スバル：狼女

ティアナ：吸血鬼

ギンガ：九尾の狐

ヴィータ：猫娘

はやて：小悪魔

です

ではでは

EP22：地下水道での再会（前書き）

風邪ダウンから復活し、ようやく投稿出来ました

けどあまり本調子じゃないので短いです…

EP22：地下水道での再会

《レリックの反応を元に追っていたガジェットの反応が消失しました》

薄暗いラボの中で女性の声が響いた、その部屋には白衣の男性が一人佇んでいた、ジェイル・スカリエッティ：広域次元犯罪者にしてガジェットの製作者

スカリエッティは女性の報告を聞くと「ほう」と呟いた

「破壊したのは管理局かい？それとも『当たり』の方かな？」

《確定は出来ませんが、後者かと思われます》

「素晴らしい！ではウーノ、早速追跡をかけるとしようか」

スカリエッティは女性、ウーノからの報告に喜びを隠さずに言つと直ぐに指示を出す

ウーノは短く了承をした時に入り口から赤いショートカットにボデイスーツを纏った少女が入ってくる

「ねえドクター『当たり』が見つかったんだって？」

「耳が早いね、ノーヴェ
確かにその通りだよ」

「あたしも出たいんだけど本当に本物が確かめたいんだ」

《ダメよノーヴェ、貴女の武装はまだ調整中なのだから》

ノーヴェと呼ばれた少女はスカリエッティに尋ねた用件を話す、しかしスカリエッティが答える前にウーノが提案を却下する

もつともな理由なのだろうが納得のいかないノーヴェは不満そうにしていた

「ノーヴェ、焦らずともアレはいずれ私達の元に来る、だから今はいい子にして待っていてくれないか？」

「ドクターがそう言うなら…」

不満そうにしているノーヴェにスカリエッティは説明をするがノーヴェ、納得がいかないという空気を出しながらも答えると来た道を戻りだした

その後ろ姿にスカリエッティとウーノは仕方ないと言った感じに一息ついた

「っち！納得がいかねえ！」

ノーヴェスカリエッティの研究室から出ると不満を口に出しながら歩く

「ノーヴェ、どうかしたのか？」

「あぁん？…アルファ、わりい少し納得がいけない事があつたんだよ…それで」

「そうか、何があつたか話してくれないか？少しくらいなら聞けるから」

「ならちよつとだけ…聞いてくれるか？」

ノーヴェが道が交差している所についた時に不意に声をかけられる、不機嫌そうに返すとそこには白地の病人服のようなものを着たアルファがいた

ノーヴェは一度睨むが相手がアルファがだとわかるとバツの悪そうにする

何かあつたと思ったアルファは話を聞いてみる事にした

ノーヴェは少しだけ口ごもるとアルファに話すことにした

「なるほどな…確かにウーノの言葉もわからないでもないな」

「だけで局の奴らなんざ武装が無くても問題ねえよ！アルファはあたしらの事を良くわかってんだろ！？」

「ノーヴェの言い分はわかる、だけど戦いに絶対はない…一つの油断が死を招く、分からないノーヴェじゃないだろ？」

「う……だけど…」

話を聞いたアルファは腕組みをしてから頷く、しかしノーヴェは大丈夫だと言い張るがアルファは人差し指を立てながら言い聞かせるように言う

気まずそうに口ごもるノーヴェ

その様子にアルファは微笑をすると優しくノーヴェの頭を撫でる

「心配なのは必要とされてるからなんだ、だからそう気にするなな… 万全の状態になってからアイツラを叩こう、な？」

「わかった… ところでアルファは何か用事があったのか？」

「ん？ いやアサルトホークとシュバルツファルケンの強化プランとライナとレナの様子を見てきたんだ」

まるで手のかかる妹をなだめるようにアルファは言くとノーヴェは仕方なく頷く、そして今さらな質問をアルファに投げ掛ける

用事について聞かれ手に握っていた端末をノーヴェに見せながら答える、アルファ

更にライナとレナについて述べるとノーヴェ、小さく声を出してから口を閉ざした

前回の戦闘でライナは魔力ダメージの大半を引き受けて昏睡、レナは中途半端な記憶の復元により精神が不安定となり、二人とも数日前から調整槽に入っていた

レナは最近だがライナはノーヴェが産まれてからの付き合いで他の姉妹達も気にしていた

「あの二人、大丈夫なのか？」

「今のところはな、今クアットロが出ているから目覚めるのは当分先だな」

「そっか…」

ノーヴェがアルファに問いかけると簡潔に答えてから状況を説明するアルファ

「さて、スカリエッティ達はまだ忙しいようだから出直すとするか、そういえばノーヴェはまだこの前の戦術応用のレポートをまだ出してなかったな」

「うあ、忘れてた…」

「やれやれ、さあて出撃したいっていう気があるならレポートを終らすのに回そうか」

「それとこれとじゃ全然、違っつてアルファ！！」

アルファは思い出したように言うとノーヴェに問いかけると視線をずらしながらノーヴェは答える

大きくため息をついたアルファはノーヴェの腕を掴んで来た道を戻りだす、やりたくないと呼ぶ声が通路に響いた

下水道

「首が痛いです…」

「それはアルさんが悪いと思いますよ？人をバカにするから」

「だからって殴る事はねえだろ！？」

「こうでもしないとわからないでしょ！アルさんは！！」

下水道を複数の足音が響いていく、ギンガと合流したアル達はレリツク搜索のために走っていた

その途中でアルはいきなり首を抑えながら呟く、隣にいたギンガは少しむくれてからアルに当然のように答えるとアルは殴られた右頬をさしながら言う

そんなアルにギンガはふざけた事を言えば殴れるようにするために握り拳を作って言い返す

「お前、もう少し優しくくれよ！冷たくされたら凹んで落ち込んで膝抱えるぞ！！」

「……真面目にしてくれたら少し優しくする事を考えます…」

（（（（（…考えはするんだ）））））

アルはギンガに対して文句を言うとしてもこの中で、最年長が言うようなセリフではない事を言う。ギンガは悩んだあと考慮すると答え、非情にならないギンガにスバル達はため息をついた

「ていうか壁破壊なんて荒業、誰に教わったんだよ！？はた迷惑だ文句言わないと」「アルさんですよ」「えっ？」

「壁破壊を教えたのはアルさんです
近道するなら時には強引にいくのも重要だ、壁の一つや二つ気にすんなとか言つて」

「確かに言っていましたね」

「あれえゝ…」

アルは先ほどギンガがやった壁破壊について抗議をしブツブツと文句を言うがギンガの言葉でマヌケな声をだす、さらに追い討ちをかけるようにイーグルも言う。と背後から冷たい視線が飛んでくる

それがスバル達のものだとわかってるアルは顔を背けながらとぼける

「全く、ギンガさんをここまで自分色に染めといて良くもぬけぬけとしてられますね」

「人聞き悪い言い方をすんな!？」

「べ、別に染められてないです／＼…多分」

「お願いだからそこは自信をもって答えてギンガ!」

イーグルの茶化すような言い方のせいで後ろから刺さる冷たい視線の鋭さが増すのを感じつつ、アルは否定するがギンガは頬を染めて俯いて呟く

面倒そうにツツコミを入れるアル

その瞬間、ビームの発射音が聞こえると四本のビームがアル達に向けて迫って来ていた

「っ！ギンガ！」

「了解！トライ、シールド！」

「この密閉空間じゃ動きづらい、俺とギンガに任せてくれ」

「わかりました、お願いします」

アルはギンガに指示を出してから下がるとギンガが防御壁を作りビームを防ぐ、後ろに移動したアルはティアナに戦法を説明するとティアナは頷いて了承する

許可を貰ったアルはイーグルレイダーを構えてガジェットに向けて走り出す

アル達が下水道に突入した時と同時刻、エリオとセレスが出会った少女ルーテシア・アルピーノはビルの上上にいた目を閉じて風に身を任せながら何かを感じていたルーテシア

《ルーテシアお嬢様、へりに回収されたマテリアルとケースは妹達が回収します

地下水道の方を任せてもよろしいですか？》

「ん…」

《騎士ゼストとアギト様は？》

「…別行動」

ルーテシアの前にモニターが展開するとウーノの顔が映し出され頼み事をしていくとルーテシアは単調な口調で答える

《ならお一人ですか？》

「一人じゃないよ…私には…ガリユーがいるから」

《失礼しました、何かあれば遠慮なく申し付けて下さい
ご協力しますから》

「……わかった…」

ウーノは確認をするように聞くとルーテシアは小さく首を振ると彼女の手にはめられたグローブの宝石が淡く光り、漆黒の玉のようなものが現れる

ルーテシアは大事そうに触りながら呟くとウーノは丁寧な頭を下げてから言う

その時、ルーテシアの脳裏には少し前に出会った二人の事が浮かんだ
(同じ言葉なのに…どうしてこんなにも違うのかな?)

ウーノからの協力という言葉は何も感じなかったがエリオやセレスの言葉には何処か温かみがあった
しかしルーテシアにははつきりとした違いがわからなかった

「行こうか…ガリユー…探し物を見つけに…」

ルーテシアは考えた事を無理矢理に振り払うと自分に言い聞かせるように言っと、足元に紫色の魔法陣を展開してその場からいなくな
った

「うっし、一先ずはよしだな」

「そうですね、アルさん」

ガシャッとイーグルを肩に担いでアルは周りを確認するとリボルバーナックルのスピナーを止めてギンガは同意する

スバル達は自分達より遥かに多いガジェットを二人で相手にしたのにも関わらず、まだまだ余裕がある二人に啞然とするしかなかった
アルの一点突破力の高さはわかってはいたが、そこに同等の突破力のあるギンガを足せばどうなるか、その答えは目の前のガジェット

達が表していた

一体は真つ二つに両断され、一体は拳大の穴をあけられ、最後に一番大きい三型に至ってはステーキとナックルの同じ攻撃により爆散した

「ほれ、呆けてないで先に行くぞ？」

「っ！アルさん、後ろ！？」

スバル達がアルとギンガの戦いを思い出している際に、アルはレリツク搜索に戻ると言う

その時残骸の中からガジェット一型がゆらゆらと浮き上がりアルの背後にビームを放とうとしていた

「ちっ！どいてろ！ギンガ！！」

「きゃう！？」

レキの忠告にアルは素早く反応をすると近くにいたギンガをスバル達の方に突き飛ばしビームをかわして、ガジェットに向けてソニックムーブで接近しブレードで両断する

「ふう…面倒悪あがきをしやがって、皆大丈夫…あん？」

ガジェットが爆散した事を確認したアルはブレードをしまいスバル達の方に顔をむける、しかしそこにはスバル達ではなく壁があった、間違えたかと辺りを見回しても誰もいなかった

「おーい！何処にいったんだ！？」

アルさん！聞こえますか！？

「ティアナ！？… 聞こえるぞ、何がどうなってるんだ？」

アルさん、どうやらガジェットの攻撃で非常用の隔壁が作動した
みたいなんです
なんとか回り込めませんか？

嫌な予感しかない中でアルは叫ぶとティアナから念話が入る

念話がつながった事により安堵の息をもらしアルはティアナから詳しい事情を聞く

ティアナ、お前達はレリックを搜索の続ける

地下水道はかなりの範囲だからそのうち合流できるはずだ、ガジェットも幸い全部倒してるし危険はない

わかりました、アルさん… お気をつけて

「さてと一人つきりだけどがんばるかな」

ティアナに指示を出してからアルは念話を切ると現在地を確認してからレリック搜索を再開した

「アルさんは大丈夫だったから私達も行動再開よ」

「でもアルさん…一人で大丈夫なのかな？」

「大丈夫よ、キャラちゃん

アルさんは殺したって死なないくらいしぶといから」

「ギン姉、それはどうかと」

ティアナは心配そうにしているスバル達に指示を出すと、キャラは
呟く様に言う

先ほど突き飛ばされたギンガは埃を払いつつ笑顔で言えばスバルは
困った様な表情で言う

「まあ実際にアルさんがしぶといのは皆さん、わかっているでしょう
なら今しなきゃいけないのはレリックの確保です」

「そういうこと皆、良いわね？」

「『『『了解!!』『』『』」

レキはギンガの意見に同意をしながら、自分達の目的を言つとティ
アナが全員に号令をかけた

「ここがレリックのあるかもしれないポイントなんですか？」

レリックが流れ着いたと思われるポイントにたどり着いた、スバル達そこは下水道の合流地点でとても広い空間だった、辺りを見渡しながらエリオはティアナに問いかける

「そうよ、それじゃあ各自散開して搜索して、何かあるかわからないから注意するように」

「……了解!!」「……」

ティアナは問いかけに頷いてから指示を出し、同時に注意を呼びかける

レリックは魔力に反応するため魔法での搜索は出来ない、そのため自らの足を使つて搜索するしかなかった
長期になるかと思われたがそれは直ぐに覆った

「あ、ありましたー!!」

広い空間にキャラの声が響いた、全員が振り返るとキャラの手にレリックのケースが持たれていた

「……っ!?キャラ、後ろ!!」

キャラに歩き寄ろうとしたレキであつたが急に足を止めた

それはキャラの背後、ちょうどレキ達と反対の位置が奇妙に歪んでいたからだ、それはまるで人の形をしておりゆっくりとであつたが近づいていた

アレはマズイ、レキは直感的に悟るとキャロに向かって叫んでから走り出す

「えっ？えっ？」

いきなりのレキの行動にキャロは戸惑うだけで動けずにいたレキの声とともに歪みは走り出すように移動をしますと空中に飛び上がり漆黒の魔力弾を四つ生成する

「きゃああああっ！？」

「キャロー！！」

歪みは生成した魔力弾をキャロに向けて発射する、魔力弾はキャロの足元に着弾すると床が爆発しキャロはその衝撃で吹き飛ばされたレキはソニックムーブでキャロを抱き止める、しかし爆発の衝撃でレリックのケースは床に転がった

「でえいやああああっ！！」

魔力弾を放った歪みにむけてエリオは即座にストラーダを振るう

確かな手応えを感じたエリオをもう一度振るおうとしたが歪みから反撃の一撃をもらい、後方に弾き飛ばされてしまう

「大丈夫っ！？エリオ」

「なんとか…あれが攻撃を仕掛けてきた正体…っ！君は…」

遠くにいるレキの問いかけにエリオは頷くが頬からは血がながれていた

受け答えをし歪みに向き合うエリオは現れたものを見て驚く
歪みは先ほどのストライダーの一撃によって正体を表した

それは人の姿をしてはいたが鎧の様な外甲に長い尻尾、兜の様な頭部そして四つある紫色の目、それによって人では無いことがわかる、だがエリオがおどろいたのはそれだけではなかった

歪みから現れたものの側に一人の少女が立っていたからだ、その少女はエリオが公園で話したルーテシアだったのだから

EP22：地下水道での再会（後書き）

どうも、えのきです

風邪を引いてすこし時間がかかりましたがようやく仕上がりました
地下水道での戦いです、本当ならヴィータ乱入まで書きたかったんですが調子がまいちなので無理でした（泣）

更に今回はアルファの意外な一面といいましたがどういうことかなと補足します、アルファはアルを嫌ってますが本質は一緒なんです、だからスカリエッティ側のお兄ちゃんを目指してます
次回からそういう一面が増えるようにしたいです

次回からはルーテシア&ガリユーコンビとの対戦です
エリオがどういう動きをするかを楽しみにしてください

EP23：近道をするなら壁壊せ（前書き）

タイトルと雰囲気合わない気がします。が後半戦です

エリオが頑張ります…たぶん

EP23：近道をするなら壁壊せ

エリオは我が目を疑った、目の前にいる少女を知っているから

その少女は大人しい娘だけと何処か儚げで手を差しのべないと消えてしまいそうだった

でもなんでそんな娘が今、自分の目の前にいるのか何故キャロを攻撃したものの側にいるのかわからなかった

「……………」

「あっ！」

「待って！ルーテシア！」

ルーテシアは何も言わずにキャロの手から離れたレリックのケースを掴むと大事に抱える

我に返ったエリオはルーテシアを呼び止める、エリオの声にルーテシアは声のしたほうを向くと少しだけ悲しそうな表情をしてからまた無表情になる

「聞きたい事があるんだ、君が探していたのはレリック？」

「うん」

「…隣にいるのは誰なの？」

「ガリユー…私の召喚獣」

エリオの質問にルーテシアは淡々と答えていく、エリオは最後の質問をしようとする

もしこれにルーテシアがエリオの予想のする回答をするならエリオは覚悟を決めなくてはならない…

（それだけはしたくない…ただ言わなくちゃルーテシアはいなくなる…それだけは確実だ）「なら最後の質問…レリックを僕たちに渡す気はある？」

「……ない」

「……！」

「っ！はああああ！！」

エリオは固唾を飲んでからルーテシアに問いかけると少し間を開けてからルーテシアは答える

その瞬間、隣にいたガリユーはエリオ目掛けて飛び掛かる

まるでルーテシアの拒絶を表すようにしかしそれを阻む様にギンガがリボルバーナックルでガリユーの一撃を迎撃する

互いの魔力がぶつかりあいスパークを巻き起こす、だが互いの力が均衡しているのをチャンスにスバルがギンガの背後から飛び上がる、左手に魔力球を作っていた

スバルの必殺の砲撃、ディバインバスターであつた

絶妙なタイミングでギンガは下がるとガリユーの体勢が若干崩れる

「ディー、バイン、バスター！！」

勢いの良い掛け声と共に放たれる砲撃、しかしガリューは常人ではあり得ない程の反射速度のバックステップで回避をする、だがスバル達の攻撃はまだ終わりではなかった

「アスタニツシュ、グリッツ！！」

ガリューが地面に着地しようした時に再び砲撃が放たれるそれはファフニールをシフトAにしたレキの砲撃であった

ガリューはなんとか砲撃を腕ガードするがあまりの衝撃に地面を削ってようやく止まった

「エリオ、アレは僕たちで抑える！」

「知り合いならしつかり話し合わないかね」

「エリオなら出来るって信じてるから」

レキ、ギンガ、スバルはそれぞれにエリオに声をかけるとガリューに向かって走り出した

そんな彼等の背中を見てエリオは覚悟を決めた、必ずルーテシアを説得するという覚悟である

「ルーテシア、それは危険なものなんだ！どうしても渡して欲しいんだ！！」

「…お母さんになってくれる人が目覚めるには必要なの…だから邪魔しないで」

「ロストロギアは医学に使うものじゃないよ、ルーテシアは騙されているんだ！」

「違う…ドクターは目覚めるって言ってくれた
そしたら一人ぼっちじゃない…」

決心を固めたエリオは再びルーテシアを説得しようとする、しかしルーテシアは意見を変える事なく言う「エリオに向けて手をかざすと魔力を集中させた」

これ以上言うなら撃つ、無言ではあるがそれはルーテシアからの警告であつた

「ルーテシアのお母さんが目覚めるように僕たちも協力する、だから…うるさい！」っ!？」

「エリオ君！危ない!!」

「プロテクション」

ルーテシアの忠告を気にせずにエリオは言葉を続けるとルーテシアはエリオの言葉を遮るように、波のような魔力波をエリオにむけて放つ

魔力波に吞まれそうになったエリオを庇うように、キャロはプロテクションを張り魔力波に備える

「っ、きゃあああ!？」

「キャロ!？うぐあっ!！」

予想以上の威力にキャロの小さな身体は吹き飛ばされ柱に叩きつけられてしまう

キャロに一瞬だけ注意が向いたレキにガリユーは重い一撃を放つ、ファフニールでガードしたがレキは衝撃に耐えきれずに、吹き飛ばされ地面に叩きつけられる

ルーテシアは続けざまにエリオに魔力波を放とうとするが途中で動きが止まった、それと同時にルーテシアの喉元にオレンジ色の魔力刃が現れた

「エリオ、悪いけど話はそれまでにしてくれろ?…この子達力量は正直に言えばあたしより上みたいだから」

「ティアナさん、だったら尚更話し合わない!」「あたし達の任務はレリックの確保、それを果たして無いのに勝手な事は出来るわけないでしょ?」わかりました…」

ルーテシアとガリユーの動きが止まった所で、ティアナがオプティックハインドを解除して姿を見せる

ティアナの言い分がわからない訳じゃなかったがエリオはどうしても納得出来ずに反論するが、ティアナはきっぱりといい放つと納得のいかない顔をしながら答えるエリオ

「レキ、キャロ動ける?」

「なんとか大丈夫です」

「こちらも問題ないです」

「ならキャロ、レリックのケースを回収してくれる？この子に仲間がいる可能性がある以上、長居は出来ないから」

ルーテシアに魔力刃を突きつけたままティアナはレキとキャロの安否を確認すると直ぐに指示をだす、キャロは自分の手から離れたケースを抱える

スバルとギンガはルーテシアが捕まった事で大人しくしているガリユーに警戒をしながらティアナの指示を待った

「それじゃ、撤収するわ「スターレンゲホイル！！」っえ！？」

納得のいかないエリオを見てティアナはため息をついてから、撤収の指示を出す

しかしその声をかき消すかのような大声が聞こえたかと思うとまばゆい閃光と爆音がティアナ達を襲った

不運な事によりはぐれたアルは一人、地下水道を移動していた

「上じゃはやてまで出勤してんのか？」

《そうみたいなんです、実機と幻術を混ぜた戦術のおかげ、なのは
さん達が苦戦してるからはやてちゃんがなんとかすると》

「ちょい待て、はやては落としてSランク魔導士だろ？戦闘なんて
…まさか許可を申請したのか？」

《はいです、ちょうどクロノ提督と騎士カリムと一緒に居たみたい
でしたので》

外にいるラインに連絡をとり状況を聞いたアルは一つの疑問を抱き
ラインに聞いた

はやては高ランクの広域殲滅型の魔導士、無許可じゃ戦闘は出来ない

ラインから返ってきた答えはアルの予想通りだった

Aランクオーバーの魔導士は後見人のクロノかカリムにリミットの
解除許可を貰わなくてはならない

さらに行使できるのは一人に一回のみ…つまりはやては貴重なもの
を使つて戦っているという事だった

（それだけの相手つてことか…）「まあはやてがリミット解除した
なら心配はいらないな、あいつの遠距離砲撃は天下無双だからな」

《それ、はやてちゃんに聞こえたら怒られますよ？「女の子にかけ
る誉め言葉じゃないやろ！」って》

相手の面倒さにアルは嫌な顔をするが直ぐに微笑を浮かべてから軽
口を叩く

リインは呆れたような顔をするとはやての口調を真似て言う

しかしその瞬間、地下水道に轟音と振動が伝わる

《なっ、なんですか！？》

「わからん、だがあまりいい感じには見えんな…リイン通信切るかな？」

《わかりました、リインもヴィータちゃんと早くそちらに向かうです》

画面の向こうのリインにも聞こえた轟音にアルは眉をひそめてから言つと、リインは一緒にいるヴィータを見ながら答えると通信を切る

「さてとのんびりしてらんないな…イーグル…発信原はこっちだよな？」

「そうですね、アル…貴方はギンガさんに文句をいう資格が無いのでは？」

「まあ緊急事態だ…気にすんな、なんとかなるっしょ」

アルは衝撃した方向に手を当てるそこには分厚い壁があった
アルの考えを理解したイーグルはわざとらしいため息をついてから
答える

理解をしてもらえた事にアルは声を弾ませるとイーグルのステークを壁に押し付けた

ティアナ達は突然の閃光に何も対処が出来ずに目がくらんでしまった

その隙を逃さないものがいた、ガリユーであつた

スバルとギンガのマークが無くなるとガリユーは主ルーテシアの元に向かつて走り出すと、彼女を捕まえているティアナを蹴り飛ばして引き離す

「きゃあっ!?!」

そしてルーテシアを抱えるとティアナ達から一旦距離を置くように移動をする

「ったくもー、勝手に出掛けたりするからだぞ? ルールーもガリユーも!」

「…アギト」

「ホントに心配したんだからな?」

「ごめん…」

距離を置いたルーテシアとガリユーの頭の上から声がしたかと思うとリインと同じくらいの大きさの少女が空中に浮かんでいた

アギトと呼ばれた少女は腰に手を当てながら言つとルーテシアは素直に謝つた

「あれって…」

「リイン曹長やセレスとおんなじユニゾンデバイス？」

ルーテシアと話している少女をようやく回復した視力でスバル達は確認をするとアギトもそれに気づいてスバル達に目を向ける

「まあいいか、この烈火の剣精、アギト様が来たからにはもう安心だ！

さあどつからでもかかってきやがれ！！」

「ティア、どうする？」

「まともにやりあつたらこつちがもたないわ…あの融合騎の力量はわからないけど手が増えるのはマズイわ…
皆：引き付けながら撤収するわよ

レリックを確保した以上、下手な交戦をすれば奪われる」

「なら後から合流するアルさんと一緒に迎撃すると？」

アギトは自身の周りにきらびやかな花火を出しながら言う両手に炎を灯して、スバル達を攻撃出来るようにする

スバルはティアナに小声で問いかけるとティアナは全員に状況説明をすると指示をだす

ティアナの言葉に続く様にレキが言うとティアナは黙って頷いた

よし中々いい判断をするな、ティアナ

「ヴィータ副隊長!？」

私もいるですよ！

ついでに俺も忘れんな

突如頭に響いたヴィータの声にティアナはつい辺りを探すがその姿はなかった

更にリインとアルの声も響く、スバル達にも聞こえたのかティアナと同じように辺りを見まわした

「なんだ！？魔力反応?…どこからだ?…」

「「うおりゃああああっ!！」」

アギトとルーテシアはヴィータとアルの魔力反応を感じると警戒した、その瞬間広場の天井と右側の壁が勢い良く砕かれギガントフォルムのヴィータとステーキを構えたアルが飛び出した

「さつき、どつからでも来いとか言ってな?チビスケ!!」

望み通り来てやったぜ?ただし真横と」

「真上からだけどな!アル!!」

「ああ!いくぜ、ヴィータ、連撃!」

「爆砕!」

「デュアル、インパクト!!」

アルはアギトに向かって悪どい笑みを浮かべながら言う。ヴィータも便乗するという、そして互いに呼びかけるとステークとハンマーを同時にガリユーに撃ち込む。

凄まじい轟音と衝撃とともにガリユーは壁に叩きつけられた。アギトは慌てて寄ろうとしたがその瞬間、ルーテシア達の足元に白い魔法陣が展開する。

「凍てつけ氷の枷！フリーレンフェッセルン!!」

ヴィータと共に入ってきたリインは右手をルーテシア達にむけて氷雪系の捕縛魔法を発動させるとルーテシア達よりふたまわり大きな氷の塊が完成した。

「良いタイミングだな、ヴィータ」

「お前の考えなんざお見通しだよ、近道するために壁抜きしてくつて事くらいな」

「さいですか…」

腕同士を軽く合わせてからアルはヴィータに言うと、ギガントフォームから通常形態にアイゼンを戻して肩に担ぎながらヴィータは答える。

アルは苦笑をしながらガリユーの方に目をむけた。

（一撃で倒せなくても少しは動けないよな？）「ってあれ？いねえ

…」

「あ？んな訳…リイン！そっちは！？」

「…ダメです、逃げられました…」

アルはガリユーの状態を見て予測を立てたが吹き飛ばした地点にガリユーの姿はなかった、ヴィータにその事を伝えるとヴィータも自分の目で確かめてからリインに呼びかける

リインはフリーレンフェッセルンを解除するがそこにはルーテシア達の姿はなかった、地面には大きな穴が空いていてそこから逃げたようだった

「っ？なんか揺れてませんか？」

搜索に入ろうとした時にキャロが皆に問いかける、するとキャロの言葉通り辺りが振動しはじめる
その勢いはだんだんと強まっていく

「まさか、壁を壊してきたからなんじゃ…」

「…ぎくっ！？」「」

レキの言葉に壁を壊してた経験のある三人は同時に反応した

「あたしは天井の一枚しか壊してないから大丈夫だ、問題ない！」

「私だってアルさん達と合流するときの壁だけだし、ちゃんと考えて壊しましたよ！」

「「となると？」」

ヴィータは自分のあけた穴をさしながら言うとギンガも同じ様に慌てながらも答えると、まだ言葉を出してないアルに目をむけた

「アル？お前は何枚壊したんだ？」

「怒らない？」

「早く言ってください、枚数によります」

「えつと存外に離れた位置から来たから…八枚くらい、かな」

目を細めてヴィータは問いかけるとアルはバツの悪い顔をしながら、言うつとギンガも同じ様に目を細めている

そしてアルは指折りでかぞえていくと指で数を示して笑う

「「「「「「壊しすぎだー！ー！ーっ！！（ですー！ーっ！！）」」」」」」

「ともかく脱出しようか！ギンガ、スバルよろしく」

「全くもう！スバル！」

「おう！」「ウイングロード！」「」

気まずそうにしながらアルはスバルとギンガに指示を出すと、ギン

ガは文句を言いながらもウイングロードを出す

何故ギンガとスバルの二人で作ったのか、それは地下に突入した人数が多いためウイングロードを二本つくり二手にわかれて脱出するためだ

「あたしとアルは最後に出るお前らは先にいけ！ギンガ、スバルお前らが先行しろ！」

「了解！！！！」

「俺も最初に出た「埋めるぞ」「ごめんなさい」」

ヴィータが指示を出す、とギンガとスバルはローラーを使いかけあがっていく、その後ろをレキ、エリオと続き最後に何か打ち合わせをしていたティアナとキャロが続いた

アルは面倒そうに呟くとヴィータが黙らせる様に言う、その目はハイライトが消えていて確実に殺られると思ったアルは素直に頭を下げた

そしてヴィータとアルは飛翔をして崩壊しかけている地下水道から脱出した

EP23：近道をするなら壁壊せ（後書き）

どうもえのきです

いかなものでしたか？

決めてた事なんですが何度かルーテシアがエリオに説得されそうになってしまいそうになりましたが何とか拒絶出来ました

エリオ×ルーテシアが活躍するのはVividからという展開なんですよね…というかこの小説はVividまで続けるのかという自ツッコミをすなぐらまずには本編を終わらせるように頑張ります

それでは次回の小説をお待ちください
では

EP24: Four Limit Release (前書き)

タイトル名はフォーリミットリリースと読みます

リミット解除ってことですね

このお話でアルがヘリを庇う場面がありますその時から砲撃を放つまでイメージ挿入歌として『W-B-X』W Boiled Extreme (仮面ライダーW OP)を推奨します

更にお知らせがあるので最後まで見てください

EP24: Four Limit Release

アル達が地下で掛け合いをしている時に脱出したルーテシアとアギトは廃虚のビルの上にいた

ルーテシアは右手を前に出してから足元に召喚陣を展開するとアル達がいるであろう広場の真上に、巨大なカブトムシのような召喚獣が現れる

「地雷王…お願い」

ルーテシアが短く呟くと地雷王と呼ばれた召喚獣は身体からバチバチと放電を始める、それと同時に足元のコンクリートに亀裂が入りだした

「これはダメだってマズイよ！ルールー！！」

ルーテシアの近くにいたアギトは慌ててルーテシアに中断を要求する今、地雷王がしているのは地下の広場を押し潰すための作業だもしこれが成功すれば地下にいるアル達は死んでしまう

殺人を望んでいないアギトはなんとか止めてもらおうと説得を続けた

「今、地雷王で地下を埋めたらケースはどうやって探すんだよ大体、あいつらだって死んじゃうかもしないだろ？だから止めようよ、ルールー！」

「…大丈夫だよ、エリオ達はあの程度じゃ死なないし…ケースはゼインやクアットロに任せる」

アギトの説得にルーテシアは一瞬だけエリオを思い浮かべるが直ぐに短く答える

「それこそ余計にダメだつて！あんな変態科学者と訳わかんないナンバーズに任せたら！ゼストの旦那も気をつけろって言つてたし

一緒にいるアルファはそんなじゃないけどあいつらルーラーやあたしらをただの実験動物にしか見てないんだ…ぞ…あゝあゝ…やっちゃったか…」

アギトは先ほどより焦った口調で話していくとアルファの名前だけは口調を落ち着けて言う

アギトはライナと面識があり一緒にいりアルファにも世話になったりしているため、そこまで邪険にはしていなかった

しかしアギトが言っている間に何かが崩れる音がすると下にいた地雷王が先ほどより沈んでいた

それは広場を完全に押し潰したということを示していた

肩を落として落ち込んでますという動作をしながらアギトは崩落した広場を眺めていた

ルーテシアは広場に目を向ける事なく自分の左側に目を向ける

そこにはガリユーが立っていたが彼の身体はヴィータとアルの連撃によって傷ついていた

「ガリユー…戻って良いよ、アギトが居てくれるから私は大丈夫だから」

ルーテシアは目を悲しそうにしてからガリューに言うとガリューは軽く頭を下げてからその姿を消した

「地雷王も……戻って良いよ……？」ルーテシアは地雷王にも呼びかけるが違和感を覚えて首を傾げた

その瞬間、地雷王の真下に桃色の魔法陣が展開するといくつもの鎖が地雷王に絡み付きその動きを止めた

「何だ!？」

「召喚……」

アギトが驚愕の声を上げるとルーテシアは冷静に分析をする、そしてルーテシアの目にビルの上で魔法を発動させたキャロの姿が映りさらにその後ろからはヴィータに二本のウイングロードを駆ける、スバルとギンガがルーテシア達に向けて迫っていた

ルーテシア虚空からダガーを出しアギトは炎にて迎撃しようとするが、アギト達とキャロ達の間にあるビルからオレンジ色の魔力弾と水色の魔力弾が放たれた

それはオプティックハイドにて姿を隠していたレキとティアナによる奇襲攻撃だった

このまま迎撃をすれば迫るヴィータ達に捕まると考えたルーテシアとアギトは迎撃を中断してビルから飛んで、近くにある道路に着地する

「いらっしやいませ、つつかチェックメイトだな」

ルーテシアが着地した時にソニックムーブにより現れたアルがイーグルのブレードを喉元に突きつける

「ルールー！のやるっ！！」

「そこまです」

アギトが応戦しようとしたが周りにリインのフリジットダガーが展開され、身動きが出来なくなる

「エリオ、後はよろしくな」

「わかりました…ルーテシア…」

アルが二人にバインドをかけた所でエリオが二人を見張る為に側に構えるが、その表情は何処か乗り気ではなかった

アルは仕方なさそうにため息をつきながらレリックを回収するためにヘリを要請した

「子供を虐めるみたいで嫌だが市街地での危険魔法行使、公務執行妨害で逮捕すんぞ」

「ヴィータ…お前が子供言うのはおか「ふん！」おうあああっ！！足、足がああああっ！！」

肩にグラーファイゼンを担ぎながらヴィータは気の乗らない言い方をしつっ言っ

アルはヴィータに耳打ちするように言う最中でヴィータはグラフ
アイゼンでアルの脛を思いっきり叩く

突然の衝撃にアルは悶えながら地面に膝をついた、やられるとわか
つててなんでやるんだろう

スバル達は悶えるアルを見ながらそう思った

アル達がルーテシア達を拘束した時の事だ
廃虚都市群にあるビルの屋上

アルの要請を受けて移動するへりを眺める二人組がいた

一人はケープのようなマントにメガネをかけている女性でもう一人
は髪を後ろに束ねて身の丈と同じくらいの何かを抱える女性だった
二人共、同じようなボディースーツを身にまとい首もとははそれぞれ
違うナンバーが刻印してあった

「デイエチちゃん、ちゃんと見えてる？」

「ああ、遮蔽物もないし空気も澄んでるからよく見える」

メガネをかけた女性は少しおどけたような態度を取りながら隣にい
る女性、デイエチに呼びかける

デイエチは自分達から遥かに遠いへりを視界に捉えながら答えた

「でもクアットロ、本当に撃つていいのか？ ケースはともかくアレにはマテリアルも乗っているんだろ？」

「ええ構わないわ、アレが本当に『聖王の器』なら死ぬはずがないとドクターとウーノお姉さまから聞いているから遠慮なくやつちゃっていいわ」

「ふうん…」

へりを視界に捉えながらディエチはメガネの女性、クアットロに言う。クアットロはまるで道具のような言い方をすると、ディエチに指示を出す

クアットロの言葉を特に気にする事なくディエチは着けていたマントを取り、手に持っていた何かの布を取り払う、そこからは巨大な砲身が姿を見せた

「それじゃあ派手に『クアットロ』：ウーノお姉さま、何かご用ですか？」

《ルーテシアお嬢様とアギト様が捕まったわ》

「ああ、そういえばあのチビ騎士に捕まってましたね」

クアットロが嬉しそうに指示を出そうとした時、突然モニターが開きウーノが顔を見せた

クアットロは楽しみを取られた事により、つまらなさそうに拗ねながらウーノに問いかける

ウーノは淡々とした口調で事態を説明していくがクアットロはわざとらしい口調で返し、楽しんでいた

《今、セインが近くで待機をしているわ》

「フォローしますう〜?」

《ええ、お願い》

「了解ですわ、ウーノお姉さま」

ウーノが現在の状況を説明するなかでクアットロは小馬鹿にするような口調で返すがその瞳には狂気が混じっていた

ルーテシアを捕まえたアル達であつたがその後が難航していた、ルーテシアとアギトは口を閉ざし全く喋ろうとしなかった

「誰がレリックを集めさせてんだ?
あれがわかっててやったのか?」

「……………」

ヴィータは強い口調でルーテシアに問いかけるがルーテシアは喋る事なく黙祷するように目を閉じていた

> ハア〜イ、ルーお嬢様<

>…クアットロ？<

黙っていたルーテシアの頭の中にクアットロが念話を繋げてきた

>何やらピンチの様ですね

良ければこのクアットロがお助けしますよ？<

>わかった<

>ハア、イ、ではお嬢様？お手数をかけますが目の前の赤い騎士にクアットロの言う言葉を言ってくださるかしら<

>うん<

クアットロは楽しげな口調でルーテシアに提案をすると即答して返すルーテシア

わざとらしい口調で話すクアットロはルーテシアに自分の言葉を言うように頼んだ

「全然、口を割りやしねえな…こいつ」

「落ち着け、ヴィータヘリを呼んだから続きは六課に返ってからにしる」

「わかったよ…んじゃヘリを待つ《大変です！》どうした！？シャーリー！」

ルーテシアを見ながらヴィータは面倒そうにため息をつくと近くに

いた、アルは肩を軽く叩いてから言う

仕方なく納得をした所にシャーリーが悲鳴にも聞こえるような声で通信してきた

「たった今、砲撃チャージを確認！推定魔力ランク、Sです！！」

「っつな！？」

「逮捕もいいけど…」

シャーリーの報告を聞いたアルとヴィータは絶句した、更に追い討ちをかけるかのようにルーテシアが言葉を発した

「IS発動、ヘヴィバレル…」

ビルの上にてディエチは巨大なカノンをセットして魔力をチャージした、目標はシャルマル達に乗っている六課のヘリであった

それを自分の目で確認しながらクアットロはルーテシアに言葉を言わせていく

「>逮捕もいいけど<」

まるでヴィータ達を嘲笑うかのような口調でクアットロは続けた

「> 大事なヘリを守らなくてもいいの？<」

「発射」

その言葉をいい終えたのと同時にディエチはカノンのトリガーを引いて砲撃を放った

「てめえ！今すぐ止めさせろ！きいてんのか！？」

言葉をいい終えたルーテシアにヴィータは掴みかかると砲撃を中断するように迫る、しかしルーテシアに言っても無駄であった彼女はただクアットロの言葉を言っているだけに過ぎないのだから

「貴女は…」

「…あんだよ？」

「また守れないかもね」

「っ！！！？」

その瞬間、ヴィータの背後で凄まじい爆発音が聞こえた

振り返ると今までヘリが飛んでいたであろう場所に爆風が漂っていた、それからわかる事は一つしかなかった

ヴィータの頭にルーテシアの言葉がリピートされる

「貴女はまた守れないかもね」「っ！言え！！てめえの仲間は何処だ！何処にいやがる！？」

「ヴィータ副隊長！落ち着いて下さい！！」

「うるせえ！！これが落ち着いてられるか！！」

ルーテシアを締め上げようとするヴィータをスバルとギンガが抑える
しかし、一度キレたヴィータは止まる事はなく暴れた、しかし

「大丈夫ですよ」

不意に放たれた言葉にヴィータは手を止めた、そこには爆風を見て
いるレキがいた

「どういう事だよ、レキ」

「直撃する前にあの人任せろって言っていました
だから大丈夫です」

レキの言葉を理解出来ないヴィータは問いかけるとレキは淡々とした口調で言い切った、ヴィータはそこで初めて一人この場からいなくなっていることに気づいた

「ディエチちゃん、どう？ちゃんと撃墜できた？」

「…多分ね、でも破片が落ちてこないし…大気が変だ
まるでそこに集まっているかのよう…」

クアットロは満足気な顔をしながらディエチに問いかけるとディエチは少し納得のいかない顔をしていた、そしてその答えは直ぐにでた

「アレは…ふう、やっぱりあの男ね
アルフィリオス・ラーゼンハルグ…」

爆風の動きが徐々に変わっていきまるで小型の台風があるかのように動いていた

クアットロはその正体を感じくと舌打ちをしながら恨めしげに名前を呟やくと爆風が一気に弾け飛び、晴れた先にはアルと騎士甲冑を纏ったセレスの姿があった

「やれやれ、なんとか間に合ったな」

「アル…せめてウィンドジャンプを強制発動させる前には一言、
言つてよ…心臓に悪いなあ」

アルはウィンドジャンプを自分から強制的に発動させてエネルギーの障壁をつくり、更に防御魔法を使いディエチの砲撃を防いだので

あつた

しかし強制的に発動したのがセレスは嫌だったらしく、目を細めながら文句を言う

「悪い悪い、なんせ他に何かする時間が無くてな」

目を細めるセレスにアルは苦笑をしながら答えるとなのはとフェイトがこちらに向かつて飛んできていた

「アルさん！大丈夫？」

「おう一応な…しかしまあ面倒な奴らがきたもんだな」

「Sランクの砲撃なんて今の私達でなんとか出来るのかな」

「やるしかないだろ？あんなの何発も撃ち込まれてたまるかよ《ならアル、なのは、フェイト、君達のリミッターを外すしかないな》っ！クロスケ！？いきなりなんだよ」

心配そうに話しかけるなのはにアルはため息まじりに砲撃の放たれた方向を見ていた

フェイトは放たれた砲撃の威力に不安気に言うがアルはそれを一喝してから言う

その時通信モニターが開くと一人の男が映し出された

クロノ・ハラオウン…フェイトの義兄で六課の後見人だ、そしてアルの一番苦手とする人物であった

《クロスケと言うな、今現在を開けるにはリミッター解除しない》

「なのはとフェイトはわかるが、俺まで解除をする必要あるのか？はやてまで解除したんだろ、上にグチグチいわれないか？」

《あれだけの高出力の魔力砲を放てる相手には足りないくらいだ、それを阻止するためなら容易いくらいだ》

クロノはアルの言葉にツツコミをいれてから断言をするとアルはなのは達の中に自分が入っている事を問いかける

更に解除した後の動きについて指摘をするがクロノはそれも仕方ない事だと答える

あまりの思いっきりの良さにアルは顔を伏せて微笑を浮かべる

「ハッ！お前も言うようになったな、堅物ならさっさと決めようぜ！！」

《お前も一言多い！

高町なのは、フェイト・テストロッサ・ハラオウン、アルフィリオス・ラーゼンハルグリミットを解除を許可する》

「了解！！」

言葉は乱暴ではあったがアルは楽しそうに答えるとクロノに許可を催促する

クロノが許可をするとイーグル達に「Limit Release」と表示される

「エクセリオンドライブ!!」

「ユニゾン、イン!!」

なのははレイジングハートを掲げ、アルとセレスは身体を魔力光に包ませる

なのははビスチェ型のインナーにと白いロングスカートのバリアジヤケットに変わり、槍のような形になったレイジングハートを手に持つ

アルはフルシンクロの姿ではなく通常のユニゾンである深緑色ロングコート、橙色の髪に黄緑色の瞳となった

「私が先回りする、二人はついてきてバルディッシュ!!」

「ソニックムーブ!」

「ついてくつてお前についてける奴いんのかよ…」

「ニヤハハ…私達も急ごうアルさん!」

二人の準備が終えるとフェイトはクアットロ達の元へ飛翔したリミット解除により普段より格段に違う速度で飛ぶフェイトにアルはツッコミを入れる、苦笑を浮かべつつもフェイトの後を追おうというなのは

「マズイわね…こっちに向かって来てる
ディエチちゃん、早く引き上げましょ」

「わかった」

高速移動してくるフェイトにクアットロはため息をつくと早々に撤退を始めた

クアットロは情報戦特化の後方型、ディエチは狙撃、砲撃で戦う後方型

フェイトやアルとは相性が悪いためまとまり合わない事に決めたのであった

しかし、リミット解除したフェイトには十分に追撃できる位置だった

>フェイト、あんまり近くにいくと面倒だ

散開した上で狙撃で決める<

>アル…わかった、なのはも大丈夫だよね？<

>問題無いよ、フェイトちゃん<

先の戦いで推定Sランクというのが頭に残るためアルは攻撃を狙撃にすると提案すると二人は快く了承した、三人は同時に頷くと各方向に散った

「クアットロ、追ってこないみたいだ」

「なら砲撃でしとめる気みたいね、ならこのまま移動したほうが狙い撃ちにされなくてすみそう」

後ろを軽く見てからデイエチは呟くとクアットロは戦術を考えてからこのままが良いと判断し移動を続けた

「アル、目標は予定通りのポイントに向かってます」

「ならよし、セレス、イーグル行くぞ！」

「わかりました」

>了解！…風よ吹き荒んで我が刃に留まれ！<

クアットロ達を補足したイーグルはアルに知らせるとアルはブレードを展開して二人に呼びかける

セレスは頷いてから詠唱を始めるとイーグルのブレードに風が集まり刀身がエメラルドグリーンに輝く

>なのは、フェイト！<「穿て！ウィンドスラッシュ…」

>わかったよ、アルさん<「エクセリオン…」

>うん、了解だよ<「トライデント…」

「ブラスター！！」

「バスター！！」

「スマツシャー!!」

アルは念話で二人と打ち合わせをすると息を揃えて砲撃を放った赤、桃色、黄色の三色の砲撃がクアット口達を捉え飲み込んだ

「やったか!？」

「いえ、まだ仲間がいたようです

直撃の瞬間に高速移動で逃げられました! けれど近くはいます」

「ここであくればか…骨が折れそうだな《それなら私にお任せや!!》はやて?」

砲撃の着弾を確認したアルはイーグルに問いかけるが結果は外れであつた

しかしまだ近くにはいるとイーグルは答える、しかし広い廃虚都市群を細かく探すのは困難な作業であつた

アルが深いため息をついた時にはやてから通信が入る、視線を上に向けると夜天の書を片手にシュベルトクロイツを掲げるはやての姿があつた

「どうやるんだよ、任せると言つたつて相手はかなり早いぞ!」

《ちょこまか飛び回るいうならその範囲をまるごと吹き飛ばしたらええねん!

いくで! 遠き地にて、闇に沈め》

「ちよつ、待て!!」

はやてに策があるならかけたいと思いつつ、はやては単純明快な答えを出すと詠唱を開始した

だがアルはここで一つの疑問が頭に浮かんだ

今からこちら辺を吹き飛ばすはやての魔法の範囲はどのくらいだろうか？とか、少なくともこの場に居ては巻き込まれるのは明白だな、とか

なら彼が出来るのはどんな事か…それは

「ディアボリックエミッション!!」

「イーグル、上方にむけてソニックムーブ!!」

「ソニックムーブ」

全力での回避であった

はやてが空間攻撃により辺り一帯を巻き込んだがクアットロ達の姿はなかった

更に言えばアルがディエチの砲撃を受け止めたのと同時にルーシアとレリックケースは地中から現れた仲間によって奪取されてしまったらしい

しかしティアナやキャロのおかげでレリックのみだが確保は出来ていた、こうして機動六課の初休日は謎の少女と新たな敵によって終わりを告げた

機動六課 アル私室

「やっぱりこのアングルじゃないとダメだよ」

「そうですね、こちらはとうですか？お二人の笑顔が写ってます、こちらも候補にいれるべきかと」

「うん、それも良いかも！」

「お前ら、何をしてんだ？」

シャワーから戻ってきたアルはベッドの上で話し合うデバイス達に話しかける

彼女達は様々な映像や写真のデータを展開して何かを選んでいるようだった

「アル今ね、フェイトさんに渡すレキとキャロの写真データの選出してるの！」

「なにぶん長期作業なので今は話しかけないでください」

「あいよ…（いつの間に俺のデバイス達は写真に興味を持ち出したんだろうな…」

ああ、弄る材料のために撮らせたからか…納得…）あれ…メールだ、はやてから？」

青いパジャマ姿のセレスは写真を手に取りながら説明をするがイーグルは真剣そのものらしく冷たく返されてしまった

アルは自分のデスクに座るとパソコンにはやてからのメールが有ることに気づき開いた、そこにはこう書かれていた

『今日は楽しかったで、ありがとうな、アル　はやてより』

短いが感謝の気持ちがこもったメールにアルは嬉しそうに笑うと早速、返事を書くことにした

機動六課　はやて私室

「ん？メールか…ってアルから返信やん、返してくれるとは思わへんかったな…どれどれ」

メールを出して一息ついていたはやての所にアルから返信のメールが届いた

はやてははやる気持ちを抑えながらメールを開いた

『俺も楽しかった…良かった、また今度一緒にいこうな？』

アルフィリオスより』

先ほど自分が書いた文と同じくらいの長さの文であったがはやてにはとても嬉しいものだった、そして何より一緒に行きたいといってくれたのが一番嬉しかった

「よつと！アルとまた一緒にか…エへへ…楽しみやな」

ベッドに勢い良く飛び込んだはやては近くにあった枕を抱きしめると反芻するように言うど頬を染めてから枕に顔を埋めた
そしてそのまま眠りについた、アルとのデートを夢に見ながら…

EP24: Four Limit Release (後書き)

どうもえのきです！

勢いで書いてたらかなり早く終わりました、今日この頃！いかなものでしたか？

自分としては今回は今まで以上だと思っています！
楽しんでもらえたら嬉しいです

では次にお知らせです

最近TPPなるものが世間の話題です、私も一次に移すべきかと考えました…という戯言はしません！！

この小説は二次であるからこそ真価がある、わざわざ一次にする気はありません！！

というわけでいつ決まるかもわからないものに怯えるよりそれよりも早くに、この小説を終わらせれば良いと考えました

もちろん手抜きや妥協なくです！

無茶や無謀な感じですがねじ曲げるよりましかと思います

更に更にお知らせです

とうとう、20万PVを達成しました！！

でも実際はあと少しなんですけどね、でも投稿すれば達成は出来ます

というわけで記念小説を書こうと思います、リクエストに答えてくれるように待ってます

今回は指定は無いので皆さんが見てみたいカップリングとシチュエーションをお待ちしてます

では！

EP25：オペレーションHND（前書き）

いよいよ、物語もターニングポイント！

頑張っていくので、今回の話を楽しんで読んで貰えると嬉しいです

EP25：オペレーションHND

機動六課 部隊長室

「査察〜？」

「せやで、私達は実験部隊やから問題がないかチェックするんやと」

「いや、それは間違いなく建前だろ、あのオッサンの仕業に違いない」

「アル…いくらなんでも言い過ぎだよ…」

休日の事件から一夜が過ぎた機動六課

その部隊長の部屋からアルの声が上がった

その部屋にはアルとはやて、フェイトの三人がいた
なのはは保護した少女の様子を見るために病院に行っていていなかった

アルは悪態をつきながら答えるとフェイトはそれをなだめる

「んで、査察の方はどうすんだ？」

「大丈夫や何処から来ても抜かりなしや」

「そっか…ならよしだな」

「二人ともそろそろ出ないといけないよ
流石に遅れたらマズイからね」

アルは面倒そうにはやてに問いかけると親指を立ててはやては答える
話しの区切りがついた所でフェイトが時間を見て二人に話しかける
今日は聖王教会から三隊長とアル、セレスは呼び出しを受けていた、
理由はまだ語られていなかったが三隊長を呼び出すくらいだからよ
ほどの事だとアルは考えていた

「あれ、セレスは今何処にいるの？アル」

「アイツはスバル達とデスクワーク中だ」

「そうなんだ、レキとセレスには感謝してるよ、デスクワーク慣れ
てないキャラとエリオを教えてくれてるから」

フェイトは思い出したようにアルに聞くとアルは自分がここに来る
前に話していた事をフェイトに伝える

デスクワークという言葉でフェイトは嬉しそうに話す
まだ入って間もないから作業になれてないエリオとキャラであった
が、エリオはセレスがキャラにはレキと個別でつきデスクワークを
教えていた

「レキがキャラにべったりなのはわかるけど、セレスがエリオにつ
いてるんは意外やな」

「なんだかんだでアイツらは仲が良いんだよ、共通の話題もあるみ

「ただだからな」

「ルーテシアって娘の事だね、アルはどうしたら良いと思う？」

「は yet は報告から推測したが少し小首を傾げて言つとアルは手を軽く動かしながら言う」

それを聞いたフェイトは辛そうな顔をしてアルに問いかけた

「話をしたい相手、戦いたくない相手は彼女も経験した事があるからだ、なら自分は何が出来るのかその答えをみつきたいからアルに質問を投げ掛けた」

アルならヒントをくれる、フェイトはそう思ったからだ

「…知らん、俺に聞くな」

「えっ？そんな…」

「大体、俺らが決めてどうすんだよ
ルーテシアとは全く接点が無いんだぞ？」

「でも私達の方が決めておけばエリオの助けになれると思わない？」

しかしアルから返ってきた返答は冷たいものだった

「あまり予想外の事にフェイトは言葉を詰まらせるがアルは構うことなく続けた」

「あまりにも薄情だと思ったフェイトは焦りながら反論をする」

「確かに、俺達が選んだ答えならエリオは助けられるだろうな
だけど、それじゃあダメだ

エリオ自身が決めた事じゃないといけない戦場にいるんだ、自分の
判断が出来なきゃ生き残れない例え未熟な子供でもな」

「それはそうだけど…」

「何もアドバイス無しとは言っていない…相談に来たらちゃんと乗る
って」

「わかった…その時にはよろしくねアル」

アルの言葉にフェイトは反論を出来ずに俯いてしまふ、しかしアル
がエリオから頼ったら力になると返せば、顔を上げて喜ぶフェイト
「二人とも？エリオの事もええけど私達にはやることがあるのは忘
れてへんよな？」

「も、もちろんだよはやて」

「にしてもなのはやつ、遅いな…もう来てもいいだろうに」

はやては笑顔を浮かべて二人に注意をするがその背後にはどす黒い
オーラが滲み出ている

はやてのオーラに押されながらフェイトは苦笑をして答えるなか、
アルは特に気にする事なく、なのはが来ない事に疑問を抱いていた

「ほなら、見てみよか…えつとなのはちゃんの部屋はつと…あつ、

あつたあつた…いざ『やあああああつ！！いつちゃ、やだあああ
あ！！！！』なつ、なんや！？」

「おいおい、なのははいつから駄々を捏ねるようになったんだ？」

「それは違つてしょ…」

はやてが手元の操作パネルでなのはの部屋を映し出すといきなり割
れんばかりの音がはやて達の耳に入る

耳を抑えながらアルはモニターを睨んでいうとフェイトは苦笑をし
ながらツツコミを入れた

SIDE：なのは

どうしてこうなつたんだろ…昨日、保護した女の子の様子を見に病
院に行った女の子が目を覚ましていなくなつて、なんとか見つけ
て話し合つて名前を教えて貰つたんだよね

女の子、ヴィヴィオはママはどこ？って言つてたけど多分ヴィヴィ
オは人造魔導士…親はいない

けどどうしてもほつておけなくて六課に連れて来たは良かったけ
ど、私は聖王教会に行かないといけなかったからスバル達にお願い
したのは良かったんだけど、いざヴィヴィオに言つたら…

「やあだああああっ！！いつちゃ、やだああああっ！！！」

って事になっちゃったんだよね…どうしよう

結局アルさんやはやてちゃん達も来ちゃってヴィヴィオは私の服を掴んだまま離れないでいた

「さてとどうする？下手に近づけば爆発すんぞ？」

「せやな…なんとか納得してもらえるとええんやけど…難しいなあ」

アルさんはヴィヴィオを見ながら困ったような顔をしていた、でもアルさん？

爆発ってヴィヴィオは危険物じゃないよ、あんまり失礼事を言つてるとはやてちゃん程じゃないけど私も砲撃を撃っちゃうよ？

私が不満そうに見るなかではやてちゃんも同じような意見なのか困り顔で言っていた

確かにそれはマズイ事だから…どうしようかな

「仕方ない、イーグル！オペレーションHNDを発動するぞ！」

「了解しました」

「オペレーション…」

「HND…」

「なんですか？それ…」

額に指を当ててからアルさんはまるで作戦指揮官のような感じでいい放つ、イーグルレイダーもおんなじ様に答える

スバルとティアナが真剣な表情で答える中でレキ君だけは凄く疑ったような視線をアルさんに向けていた

そこで私は気づいた、あつ…ロクな事じゃないんだって…はやてちゃんより短い付き合いだけど、アルさんがする事が大体ふざけてるんだとわかるようになってきた

「レキ、疑うのはわかるがお前はこの状況を打開できるか？下手すれば爆発するんだぞ…盛大に、な」

「わかりましたよ…そこまで言うなら成功させてくださいね？」

「ふっ…任せろ…」

アルさんはわざとらしい口調でレキ君に問いかける、なんだろ…アルさんはレキ君の返答がわかってるみたい…すっごいドヤ顔をしていた

レキ君もその言葉に返答できずに負け惜しみのように言うとアルさんは親指を立てて笑顔で答えた

ヴィヴィオはアルさんに警戒してか私のスカートをギュツと掴んでいた、そしてアルさんはおもむろに床に落ちていたウサギのぬいぐるみを拾い上げる

「ウサ美です」

ウサギのぬいぐるみがしゃべったというのを信じたヴィヴィオはなのはから離れてウサギのぬいぐるみに近づく、すると今度はイーグルがアルの代わりに喋るとその言葉に合わせてアルがウサギのぬいぐるみを動かす

さつきとは違う声にヴィヴィオは更に驚き泣くことを止めていた

まずは第一段階が完了した事によってアルは次の行動に移った

ヴィヴィオが泣いてる原因を本人から聞く作業である
慰めたりするのはそれからであつた

「…一緒にいてほしいの、だけど…いつちゃうから…」

「そうか…でもな、ヴィヴィオ
それはやらなきゃいけない事なんだ、お仕事つてのが正しいかなのはだつて本当は行きたくないんだよ」

「……………うう」

「わかつてはいるんだな…ならヴィヴィオにお仕事をあげようか」

途切れ途切れではあるがヴィヴィオはアルに事情を話すとアルは優しく頭を撫でながら諭すと、意味が理解出来ているのかヴィヴィオは黙ってしまった

そこでアルは一つの仕事をヴィヴィオにあげることにした

「お仕事？」

「そう見送りとお出迎えのお仕事だ
それをすれば早く帰ってきてくれるぞ」

「本当？」

「ああ、本当だ」

不思議そうな顔をしてヴィヴィオは聞き返すと、アルは仕事の内容を説明する

すると今まで浮かない顔だったヴィヴィオは初めて笑顔を浮かべて聞いてきた

アルもそれに答えるように返す

「じゃあヴィヴィオ、頑張って待つ」

「よいい返事だ！さっそくやり方を教えようか
まずは相手を見る、そして笑顔でいつてらっしゃいだ、わかるか？」

「えっと……いつてらっしゃい」

「うん、いつてきます」

ヴィヴィオは意気込むように返すとアルはヴィヴィオを抱き上げてから仕事のやり方を教えると、さっそくなのはに向けて笑顔で言う
ヴィヴィオ

なのはも同じ様に笑顔を浮かべると返事をした

「良くできました、んで帰ってきた時にはおかえりなさいだ、いいか？」

「うん、わかった」

「んじゃウサ美と一緒に待っててな？ちゃんと早く帰ってくるからな」

「よろしくね、ヴィヴィオ」

ちゃんと出来たヴィヴィオを誉めてからアルは帰ってきたやり方を教えるとヴィヴィオは元氣良く答えた

ヴィヴィオを降ろしてからウサギのぬいぐるみことウサ美を取り出してから言つとヴィヴィオに渡した

「うん、わかった！…えつと…」

「アルフィリオス、アルで良いぞ？」

「うん、アルも行つてらっしゃい！」

「おう、いつてきます…ほれ教会いく奴らは準備しろ、ヴィヴィオが待ちくたびれるだろ？」

ウサ美を受け取ったヴィヴィオはアルの方を見て見送りをしようとしたが名前がわからず言葉が詰まってしまふ

それをさつしたアルは自分の名前を教えればヴィヴィオはなのはに

したのと同じ様にアルに見送りをする

見送りを受けたアルは軽く頭を撫でてから返すとスバル達に後を任せてから、はやて達に言葉をかけて部屋を後にした

「でも意外やったな…」

「何がだ？」

聖王教会に向かうためにははやて達は車検が終わって戻ってきたアルの車で聖王教会に向かっていた

その最中でははやてはアルに思い返すように言う、アルは運転をしなからそれに答えた

「アルが子供の面倒見が良いことがや」

「本当だよな、面倒くさいとか言って放置しそうなのにさ」

「お前ら、ここでドリフトすんぞ…苦手なんだよ、子供でもなんでも泣かれんのはな」

アルの問いかけにははやては指を立てて答えると後ろにいた、セレスが便乗するように言うとなのはとフェイトが納得するように頷く

アルは若干アクセルを上げながらハンドルを握りしめてから少し思

い返すように答えた

「ところでオペレーションHNDってなんの略なの？」

「H（腹話術で）ND（^{じっし}大作戦）の略だ」

「実は案外単純なものなんやな……」

話をすり替えるようにセレスが質問をするとアルは指を立てながら説明をしていく

大げさな名前の割には大した事がなくはやては思わず肩を落とした

「ほい、到着つと……」

「カリムとクロノ君が待つとるはずや、はよ行こうか」

「なんか緊張してきた……」

「大丈夫？セレス」

車を止めたアルがはやて達に言うとはやては先に降りて道案内をするように待っていた

聖王教会の雰囲気にはセレスはガチガチに固まっていた、それをなのはやフェイトは心配して声をかけた

「セレス、そんなに固まるな

カリムは悪い奴じゃないしここの雰囲気にもそのうち慣れる」

「うん、わかったよ…アル」

「それじゃあ行こうか」

緊張しているセレスにアルは声をかけて落ち着かせると車の外にでていく

セレスは一息ついてから頷くとなのは達と共に降りてはやての後を追った

はやては特に迷う事なくカリムの私室までたどり着くと部屋の扉をノックした

「カリム、はやてです入ってもええかな？」

《ええ構わずに入ってきていいわ、はやて》

扉を叩いて返ってきた答えにはやては頷くと私室のドアをあけた

はやて達が中に入るとそはまるで書斎のような部屋だった

そして窓際のテーブルには金髪に黒いドレスのような服をきた女性とクロノ・ハラオウンの姿があった

「二人共に待たせてしまったかな？」

「問題ないわ、はやて…えっとそちらの人たちが」

「うん、なのはちゃんにフェイトちゃん、更にはアルの融合騎のセレスや」

はやては申し訳なさそうに言えばカリムは手を前にだして気にする
なとジェスチャーをする

そしてカリムはなのは達に視線を向けるとはやてに問いかけた
聞かれた事にははやては嬉しそうに答えていく

「高町なのはです、よろしくお願いします」

「フェイト・テストロッサ・ハラオウンです、今日は面会出来て嬉しい
です」

「セレスと申します、よろしく、です」

紹介を受けた三人はそれぞれにカリム自己紹介をしていく

「カリム・グラシアです、あまり堅苦しいのは抜きにして友人のよ
うに接して貰えますか？」

「「「は、はい」「」」

「直接会うのは久しぶりだな、お前達…今回は立場など気にせずに
楽にすると良い」

「うん、わかったよお兄ちゃん」

カリムの丁寧な対応に三人は緊張しながら答えると、座っていたク

口ノが苦笑をしながら言えば、三人はようやく一息つく
それからフェイトが柔らかな表情で返事を言った途端クロノは思わ
ず咳き込んだ

「立場を気にするなどは言ったがお互いに良い歳だその呼び方はや
めるんだ、フェイト」

「あゝれゝ？止めていいのかい、クウウロオオノオオくゝん」

「ア、アルフィリオスしまった…こいつの存在を忘れてた」

「冷たいなあ…クロノ君はさあ酔った時には「妹がなあ…」とか自
慢してたのになあ」

クロノは咳払いをしながら答えるが狙いを済ましたかの様にアルの
声がフェイト達の後ろから聞こえた

クロノは苦虫を噛み潰したよう顔をして声の方を見ると意地の悪い
笑みを浮かべたアルの姿が映った

アルはまるで首根っこを取ったかのようにクロノに畳み掛けていく、
なのはとはやては興味深そうに聞き耳を立て、カリムとセレスはア
ルの悪行にため息をつき、フェイトは恥ずかしそうに俯いていた

「あ、他には…」

「まだ何か言うのか!？」

「いや、止めとく」

あんま言い過ぎると弱味の意味が無くなるからな

それよかカリム、今日はなんで呼び出したんだよ」

顎に手を当てながらアルは考え込む、クロノは冷や汗を流しながら聞くがアルは言つのを止めるとボソリと呟いてからカリムに問いかけた

「えっ！？あ…こほん実は皆さんを呼び出したのは機動六課設立に關しての理由なのです」

いきなり話を振られたカリムは少し慌てるが一回咳払いをしてから真剣な表情で話し出した

そこでなのは達は知ることになる、機動六課を作るきっかけをそして来るべき未来についてを…

EP25：オペレーションHND（後書き）

どうもえのきです！

ヴィヴィオがようやく登場しましたが口調がすんごい不安です…

後はクロノとアルの絡みは個人的には好きなんですよね

なんというかいつも以上にアルが暴れてる感じが好きなんです

では次回の更新を楽しみにしててください

20万PVのアンケートの募集はまだしています

全く来てないのでだしてくれたら嬉しいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5118u/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS～夜天に舞い踊る荒鷲～

2011年11月16日21時16分発行